

G—MoMo～銀曆少女モモ～

凰太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遠い近未来〈銀暦〉——即ち〈銀河連邦暦〉！

ほんわか天然少女“陽ノ咲モモカ”は、親友“天条リン”&天才美女“マリー・ハウゼン”と共に今日も次元宇宙〈フラクタルブレーン〉を駆け巡る！

星空の海を泳ぐのは、オーバーテクノロジーのイルカにシャチにクジラ？

次元宇宙はワクワクの宝庫！

まだ見ぬ冒険に出発だ！

Fuzzy Science Fiction 第二弾！

ほんわか癒し系スペースオペラが幕を開ける！

※この作品は以下のサイトにて展開しています。

小説投稿サイト：

〈NOVELDAYS〉〈アルファポリス〉〈ツギクル〉

〈ノベルアップ+〉〈ノベルピア〉

〈ハーメルン〉〈カクヨム〉〈小説家になろう〉

SNS：

〈note〉〈pixiv〉

# 目次

ウチの銀暦事情

ウチの銀暦事情 Fractal. 1

ウチの銀暦事情 Fractal. 2

ウチの銀暦事情 Fractal. 3

ウチの銀暦事情 Fractal. 4

ウチの銀暦事情 Fractal. 5

ウチの銀暦事情 Fractal. 6

ウチの銀暦事情 Fractal. 7

ウチの銀暦事情 Fractal. 8

ウチと惑星テネンス

ウチと惑星テネンス Fractal. 1

ウチと惑星テネンス Fractal. 2

ウチと惑星テネンス Fractal. 3

ウチと惑星テネンス Fractal. 4

ウチと惑星テネンス Fractal. 5

ウチと惑星テネンス Fractal. 6

ウチと惑星テネンス Fractal. 7

ウチと惑星テネンス Fractal. 8

リンちゃん惑星レトロナ

リンちゃん惑星レトロナ Fractal. 1

リンちゃん惑星レトロナ Fractal. 2

リンちゃん惑星レトロナ Fractal. 3

リンちゃん惑星レトロナ Fractal. 4

リンちゃん惑星レトロナ Fractal. 5

172 161 150 141 134 123 113 103 96 86 76 69 61 51 41 34 27 20 14 7 1

マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	8	336
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	7	325
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	6	315
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	5	308
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	4	300
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	3	291
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	2	286
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	1	278
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	8	271
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	7	264
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	6	255
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	5	246
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	4	239
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	3	231
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	2	223
マリ―と惑星ウイズエル	Fractal.	1	214
クルちゃん惑星ジェルダ	Fractal.	8	203
クルちゃん惑星ジェルダ	Fractal.	7	194
クルちゃん惑星ジェルダ	Fractal.	6	185

## ウチの銀暦事情

## ウチの銀暦事情

Fractal. 1

「遠い近未来——地球人類は太陽系銀河の開拓計画を実践に移し、それに伴って〈銀河連邦政府〉が樹立された。

これは近い将来に訪れるであろう物語……。

永遠に未来から近付かない物語……。

眩く渦巻いた光のトンネルを抜けると——そこも宇宙やった。

それは、先刻までいた空間と何ら変わりなく……っていうか、ぶつちやけ宇宙空間の違いなんか肉眼認識で解るはずもあらへん。星々の細い息吹きが、深い漆黒の中で白い点と瞬いているだけなんやから。

宇宙船の空間転移先が何処であろうと、ウチ——陽ノ咲モモカ——には同じ情景にしか見えへんよ？

『ツエレーク、空間転移完了——量子波動安定化——現フラクタルブ  
レーン座標照合、6 f \ 3 b 次元、マイナスコンマ0003誤  
差修正——滞在可能推定時間、二時間三〇分リミット——』

次空転移結果を報告する艦内放送が響く。

宇宙を悠然と回遊する巨大なシロナガスクジラ——それが、ウチの  
搭乗する大型宇宙船〈ツエレーク〉やった。

比喩やないよ？

文字通り「クジラ」やねん。

うん、正確には「鉄のクジラ」や。

そのまま「鋼鉄製のクジラ」を想像してもらえばええ。

こう見えても銀邦政府が建造した最新鋭艦やねん。

全長三〇〇メートルにも及ぶ巨体は、滑らかな流曲線を描くフォル

ムながらも威圧感に満ちとつた。黒い艶<sup>ツヤ</sup>を照り輝かせるボディは、広域吸収型ソーラーセイル合金——つまり太陽や恒星の光を吸収蓄積して、推進力へと転換するものやねん。基本は広域吸収型ソーラーセイルで得た光量子エネルギーによる推進航行で、ブースト時にはそれを量子衝突させて大出力へと転化するのやつて。

内部には長期間宇宙航行に準じた設備だけやなく、日常生活を営む<sup>いとな</sup>都市機能も等しく建造されとる。早い話、宇宙居住地としての側面もあんなな。

で、ウチはへツエレークから宇宙空間を眺め……とるワケやない。

愛機である宇宙航行艇へイザーナの操縦席から見とってん。

サブモニターに共有投影された映像を見とつたんよ？

つまり、格納庫で待機状態いうワケやね。

この銀暦<sup>ぎんれき</sup>——つまり銀河連邦暦——に於いて、宇宙船は機体規模に応じて公式にカテゴライズされとる。

一般にへ宇宙船<sup>スペースシップ</sup>と呼ばれる形式は数十人の乗組員から構成される物で、全長も最小で五〇メートル級から——標準でも二〇〇メートル級艦がザラに存在する。そのコスト面から一般層が個人所有できるような代物<sup>シロモノ</sup>でもない。概ね、軍や企業が運用する法外な機体や。

対してへ宇宙航行艇<sup>コスモクルーザー</sup>いうんがある。

これは、広く一般普及しとる小型宇宙艇の事。

少人数程度——若しくは単身——で運用可能な宇宙船が、このカテゴリーへと分類されとる。全長的には、だいたい一〇〇〜三〇〇メートル級が平均やね。

ウチの愛機へイザーナも、当然この分類。

全長八メートルとやや小型で、一人乗り使用。

このへイザーナの特異性は、その機体フォルムにも滲み出とつた。独自性の強い特徴的なデザインは、通常のへ宇宙航行艇<sup>コスモクルーザー</sup>とは特に一線を画する。

だって、宇宙を泳ぐイルカ<sup>そら</sup>そのものなんやもん。

要はへツエレークの設計ノウハウを活かした小型版や。

もつともへイザーナは、様々な点でへ宇宙船<sup>スペースシップ</sup>と同等以上の性能

を有しとつた。

この機体が〈超宇宙航行艇〉とも呼ばれる由縁やねん。

一人乗り仕様とあつて〈イザーナ〉の操縦席は狭い。

完全密封された暗さの中では、電子計器が点す明かりだけが光源やつた。とりわけモニターディスプレイの恩恵は大きい。

サブモニターを改めて眺める。

「……キレイやね？ イザーナ？」

『キュー♪ キュー♪』

イルカが鳴きよつた。

肯定の同調が嬉なつて、ウチはにっこり笑う。

光子ワームホールまほゆの眩い光の潮流から抜け出た直後とあつて、その静寂なる深淵は息を呑むほど深く沈む虚無的絶景にも思えた。映し出される宇宙の闇は、視野一面に下ろされた暗幕のようや。

その中で瞬く星々の細い蛍灯に見惚れて、ウチは眩く。

「軽く手を伸ばせば届きそうやんね？」

『キュー♪』

「せやけど実際には、遙か光年先の歴史なんよね……コレ」

『キュー？』

「せやねえ？ ウチらが住む次元宇宙での歴史ではないねえ？」

ほわつと笑うウチ。

暫し沈黙——ウチは間が堪えられなくなって別の話題を振つた。

「……あんな？ イザーナ？」

『キュー？』

自分の肢体に目を落とすと、密着フィットしたワインレッドの全身スーツがテヤテヤした光沢に艶かしい反射を生んだ。

コレは〈ポータブル・ハプビタル・ウエア〉——通称〈PHW〉——

——いう凡庸多機能宇宙服や。

「ウチ、コレ改善してほしい……慣れへんわ」

『キュキュキュウキュウ！』

「うん、知つとるよ？ スゴい代物やねん。耐圧・耐熱・耐寒の三拍子を基礎性能として備えとるし、極小ヘリウムバーニアを要所要所に内

蔵しとるから無重力空間での姿勢制御もお茶の子さいさい——オプシヨンのバイザーメットさえ被れば、それだけで真空状況下でも活動可能な代物シロモンや。そりやスゴいよ？　せやけど……」

『キユウ？』

何が不服か訊かれた。

「……ボディライン浮き彫りやもん。肌露出が皆無なのに妙に艶めかしいんわ、この生々しいシルエットのせいやで？　うう……やっぱりウチ、ちよつと恥ずかしいよう」

『キユウ？』

「ちちち違うよ？　胸のせいやないよ？　それに、Aカップ違うで？

ウチ、Bあるもん！」

『キユウキユウ……キユウ』

「励はげまさんといてえ！　余計、惨みじめなるわあ！」

その時、もうひとつのサブモニターに、インディブルーの〈PHW〉を着た美少女が映り込んだ。

『いつまでもイルカと戯たわむれてんなツツーの！　ボチボチ出撃だかんね？』

気丈にじさが滲くちようむ口調で注意されたわ。

綺麗に毛先を切り揃えた髪は背中まで伸びていて、それを大きな赤いリボンでロングポニーテールに纏まとめた美少女や。

スラリとした肢体はスマートさを維持しながらも、付くべきトコには肉感みのが実みつとる。年頃の少女達にとって、まさに羨望せんぼうものやね。

彼女の名前は「天条てんじようリン」——。

隣で待機しとる同型宇宙航行艇コスモクルーザー〈ミヴィーク〉のパイロットや。

ちなみに〈ミヴィーク〉の外見は「シャチ」やった。

うん、ウチの〈エイザーナ〉は「イルカ」で、リンちゃんの〈ミヴィーク〉は「シャチ」やねん。

『滞在可能推定時間、把握してるわね？』

「二時間三〇分リミット……やね？」

『そう、それまでに〈ツエレーク〉へと帰還する！』

「知つとるよう？　ウチ、初めてやないよ？」



『……初心者じゃないのに初心者級にヌケてるから心配だツツの、アンタは』

ジト目で指摘されたわ。

リンちゃん、ヒドイ言い種ぐせやんね？

と、今度は、さつきまでへツエレーク〜と映像共有シェアしていた方のサブモニターに金髪美女が映った。

知的印象の強いオシャレな眼鏡をかけた美女や。

冷静さを内包した憂うれいある眼差まなざしは、せやけどインテリ特有の斜に構えた嫌味などは全く感じさせへん。むしろ人好きのする柔らかなオーラが、全身から醸うめしだされとる。腰まで伸びるロングヘアは息を呑むほど艶やかで、スツと通った鼻筋と薄い唇が織り成す美貌は芸術の域にも思えた。

黒のフォーマルスーツをシックに着こなし、くつきりと浮かび上がるボディラインもウチらとは断然格違いの優美にある。さすがに大人の女性や。あまりにもグラマラスなわりに、見事なスレンダーさでもあった。完璧なプロポーションは異性でなくとも見惚みとれてまう。

とりわけ目を引くのは豊満な胸！

そのスゴさといったら……スイカやん！

まるで『歩く豊穰祭り』やん！

もしも叶う事なら、可哀想な成長に足踏むウチへと少し分けてほしい……。

彼女こそ、銀暦ぎんれき屈指の天才『マリー・ハウゼン』女史や。

若干二〇歳にして、いくつかの博士号を拾得してるんやから、とんでもない天才には間違いないあらへん。

このへツエレーク艦長にして、ウチらの保護者でもある。

『二人共、準備はいい？』

『いつでも』

「うん、ええよ ♪」

『目的はへ宇宙クラゲの捕捉、及び、データ収集。そのリアルタイム情報を即時へツエレークへ転送して頂戴。それを基もとに迎えに行くから』

『場合によっては交戦しても、いいのよね?』

リンちゃんの勝ち気ぶりに、マリーは包容的に苦笑う。

『あまり勧めたくはないわね……自衛レベルでは仕方ないけど』

『心配ないツツーの。アタシとへミヴィークは殺られはしないんだから』

『ケルルル……!』

気丈な自信に同調して、シヤチが猛り鳴いた。

『出来るだけ離脱を試みて頂戴? 無理や危険を冒さないように……』

柔らかに釘を刺す。

『……つたく、心配要らないツツーのに』

リンちゃん、少々不服そうやね?

ブツブツ言うとするねえ?

「あんな? マリー?」

『何? モモカ?』

「友達になんのは、ええ?」

ウチの発言にリンちゃんは苦虫顔を浮かべ、マリーは慈しむかのよう<sup>ほほえ</sup>に微笑んだ。

『いいけど……無茶はダメよ? 接触<sup>コンタクト</sup>してみても意思<sup>いしそつう</sup>疏通が不可能と

思ったら、諦めるのよ?』

「はーい ♪」

ウチ、につこりや ♪

ケンカするより、仲良しなっただ方がええ ♪

ややあって、正面の格納庫扉<sup>ハッチ</sup>がゴウンゴウンと鈍重に開いていく。

星空の大海が歓待に漂う。

『……へミヴィーク、出る!』

「ハイザーナ」行ってきまゝす ♪」

カタパルト射出!

鋼鉄のイルカとシヤチが、大宇宙<sup>うみ</sup>へと飛び込んだ!

## ウチの銀暦事情 Fractal. 2

仲良う並んで航行するイルカとシャチ——。

『滞在可能推定時間は、二時間三〇分リミット——って事は、あまり遠くへは行けないわね。せいぜい近域惑星ひとつってトコか』

リンちゃんが、今後の指針を呟いた。

「あ、せや！」ウチは不意に思い立った。「リンちゃん？ ちよつとええ？」

『何だツツーの？ 何かアイディアでも出たの？』

コンソール操作の片手間に応えるリンちゃん。

「あんな？ さつき『6 f / 3 b 次元』って言うてたやん？」

『うん』

「だいたい、どの辺りなん？」

——ズガシツ！

リンちゃん、ド派手に突っ伏したねえ？

勢いよくサブモニターからフレームアウトしたねえ？

ややあつて、ゴゴゴ……と怒気を孕んだリンちゃんの睨め付け顔が浮上した。

「リンちゃん、額が赤く腫れてるよ？」

『ア……アアア……アンタツ！ いままで、どれだけ次空航行をしてきたと思ってるツツーの！』

『ケルルルル！』

リンちゃんとシャチ、両方からツツコまれたわ……。

「せやかて、正直言つてへフラクタルブレインの概念すら、よく解つてないモン。ねえ？ イザーナ？」

『キュー？ キュー？』

『そこから……ツツ？』

『ケルル……ツツ？』

リンちゃん&ミヴィーク、反響してウルサイよ？

先刻、艦内放送が『空間転移』と読みあげた通り、此処はウチらがいた次元宇宙やない。

フラクタル分岐によるブレーン宇宙——平たく言えばへパラレルワールド」というヤツやねん。

ただし、通称へフラクタルブレーン」と呼ばれるこの次空構造は、従来のパラレルワールド理論よりも些か難解な概念やった。

だから正直いって、ウチも未だによく理解できてへんのや。当然ながら。

『モモカ、やっぱり理解していなかったのね……』

リンクモニターに、こめかみ押さえのマリーが映った。

暫し思案気に耽っていたマリーは「よし」と決心めいた一言を洩らすと、徐に『モモカでもわかるフラクタルブレーン講座』を特別講義してくれはった。

うん、『モモカでも——って、どゆ意味？』

『モモカ、いい？ まず、線を一本引いて……』

マリーに言われるまま、ウチはフリーディスプレイへと光線を一本引く。

「うん、引いたよ？」

『それが私達のいた宇宙。平面は、いくつある？』

「そりや、ひとつやん？」

『そうね。で、次はその中央を摘まんで、ひとつの三角形を作って？』

「三角形っていうか、摘まんで作ったら底辺無いよ？」

『……いいからやる』

「は〜い」

マリーの態度が静かに威圧的だったので、ウチは素直に従った。

こういう時のマリーは、実は意外に沸点が低いから怖いねん。

『モモカ、今度は平面がいくつ？』

「底なし山の斜面として分断されて計二つやね」

『……じゃないでしょ』と、リンちゃん。

違うの？

う〜ん……と？

あ！　せや！

「中央に山作ったから、左右には地面が残つとる！　計四面や！」

『そうね。で、平面をひとつの宇宙と考えたら、これで宇宙が四つに分岐した事になるわね？』

「なるん？」

『『なるの！』』

リンちゃんとマリーの同時口撃こうげき！

そんなユニゾンで怒らんでもええやん……。

『じゃあ今度は、その上に同様の図形を描いて……コピペでもいいけれど』

ウチは言われるままにタッチして、底なし三角形をコピペする。

それを見計みはからつて、マリーの次なる指示。

『それもさつきと同じ手順で、三角形の平面に同型の三角形を作つてみて？　平面、今度はいくつある？』

「単純に二倍やから計八面やん」

『じゃあ、その上に同じ図形をトレースして、また同じ行程を繰り返す……今度はいくつになった？』

「何かコンペイトウの出来損ないみたなってきたで……えっと、計十六面！」

『最初の手付かずも含めて、ここまでの平面合計は？』

「えっとね……え……つと……」

目算ではややこしいので、ウチは指折り数えた。

「……ひいふうみい」

『『計二十九面！』』

またもマリーとジュンの同時口撃こうげき！

ふぐう……数え終わる少しの間くらい待ってくれてもええやん？

『現在で分岐宇宙は合計二十九個存在するという結論になるわね？  
これが延々と続くのがフラクタル分岐の宇宙理論よ』と、マリー。

「ふええ？　延々なん？」

『つまりね？　このように平面への角構成が延々と続いていく増幅論は、カオスの演算のフラクタル理論を強引に図的解釈したものなの――』

—旧暦時代から使われている古典的解説表現ね。これにブレーン宇宙論を適応させて考えると、一次から一〇次までの上層ブレーン宇宙は決して下層次元と完全な分離セパレートをされたものではなく、基もととなる次元宇宙から派生増殖したものと解釈できるの』

「？」

『ただし、この図形からは示唆できない要素として、各面——この面は異なる派生次元宇宙を現しているわけだけれど——は、全く同一の物ではなく、何かしらの差異要素を内包している。でなければ、カオス演算的観念としては成立しないでしょう？』

「???’

『そういうことは、基もととなった次元宇宙——つまり起因次元を基準に考えて、それに連なる次元は、そのヴァリエーションと化しているという結論になるわね？　これがへフラクタルブレーン理論の基礎理念なの』

「???’

『けれど誤解してはいけないのは、そのどれもがへオリジナルであり、また同時にへヴァリエーションでもあるという観念解釈。要するに、どれがへオリジナルかという定義は、結局、どの次元を自身の基準とするかで変わってくる——それこそへ一般相対論の応用解釈ではあるけれど……』

「???’

『そして、その他次元に元来発生してなかったはずの存在——現在の〈私達〉がそうね——は、次元宇宙そのものが〈特異点〉と認識して別次元へと排斥しようとする——解り易くいうと〈異物〉を吐き出して正常な状態へと戻ろうとするわけね。その現象が発生する猶予時間が“私達の滞在可能時間”——これを、私は『特異点排斥の法則』と学会には提唱しているけれど』

「……………」

『では、吐き出された〈異物〉——つまり〈特異点〉は、何処へ飛ばされるのか？　実は突飛もなく離れた次元座標じゃなくて、起因次元へと向けたベクトルに沿って一次元分の層だけ戻されるのよ。そして、

そこもへ私達〉の次元じゃない場合、また『特異点排斥の法則』によって同過程が繰り返される。最終的には時間を掛けながらも起因次元へと帰される法則になっていくけれど、それが数時間か数百年かは誰にも解らない。だから、私達のへツエレーク〉のような単独次元航行を自在とする存在は、銀邦政府ぎんぽうせいふでも一目置く唯一無二のスペシヤルなの』

『そして、フラクタル分岐による派生宇宙の危険性としては、どんな世界と化しているか解らない』つていう差異特性が挙げられるわ。それこそ猿や恐竜が知性的進化を遂げて支配するような、まったく異質な別世界と化している可能性すらもある——極端な例だけだね。起因次元から次元層が離れれば離れるほど、そうした非共通項が増えていく。何よりも他次元には必ずへもうひとりの自分〉——即ちへダブル〉が存在し——』

『ちよ……ちよつと、マリー？ ストップ！ ストローツプ！』突然、講義中断を訴えるリンちゃん。『モモが煙噴いてる！ 噴いてるツツーの！』

『キューツ！ キューツ！ キューツ！』

『ケルツ！ ケルツ！ ケルツ！』

『——それが自分自身と接触すればへ自己存在対消滅〉を起こしてしまう危険性も——え？』

リンちゃんの必死な直訴を受けたマリーは、怪訝けげんそうにウチを窺うかがい見て絶句。

そう、リンちゃんの言う通り……。

その時、ウチは濛々もうちょうと煙を噴いてギブアップ硬直フリーズ。

ただでさえ勉強嫌いな思考回路がショートしよった。

現場は右往左往の大騒ぎや——イルカとシャチも巻き込んで。

結論として得たのは『モモカでも解るゝ』でも『モモカには解らない』という再認識だけやった。

うう、我われながら情けないわあ……。

数分後――。

「うううう……まだノーミソがジンコラするわあうう」

ウチは操縦シートをリクライニングモードにして寝そべり、スツキリしない不調感を呻いた。

顔に当たったアイスパックが、ヒンヤリと癒してくれてはいたけど。

『キユー？ キユー？』

心配したイザーナが声を掛けてくる。

「えへへ……大丈夫やよおく？ もう少ししたら起きるね？」

ありがとねえ、イザーナ？

この子、優しいねん。

そんなウチを呆れた視線で眺めて、サブモニター越しのリンちゃんが皮肉を投げてきよった。

『……アンタ、脳味噌あるの？』

「あるよッ？」

あまりに失礼な一言に、ガバツと半身起こしたわ！

休憩中断や！

『そりゃ失礼』とか言いながらも、リンちゃんはコンソール操作をテキパキと再開。

まったく悪びれた様子もない。

リンちゃん、意地悪や。

『ま、マリーの講釈はアンタには難しいかもね』

『そういうリンちゃんは、どうなん？ 理解してんの？』

『アタシ？ もちろん、しているわよ』

余裕しやくしやくに、根拠に満ちた自信を示しはった。

と、リンちゃんはジツとウチを見つめる。

そして、暫しの黙視後、実情把握を兼ねて訊ねてきた。

『ねえ、モモ？ アンタ、さすがに今回の目的と経緯は理解しているわよね？』

「今回の目的？ もちろんやん！」

自信満々にウチは返した。



事の起<sup>き</sup>こりは、三日前に遡<sup>さかのぼ</sup>る。

## ウチの銀暦事情 Fractal. 3

太陽系第四惑星へ火星へラグランジュポイント生存可能宙域——そこには銀邦政府太陽系支部が在る。

直径は凡そ5平方キロメートル。

円盆型の人工地盤の上に築かれた都市が機能し、それを透明半球体がすっぽりと覆った形状や。底部から火星へと伸びとる竜骨のような機械塔は、地表に建設された移民都市へライマンへと繋がつとるへ超電磁軌道エレベーターやねん。

要するにへ宇宙ステーションへとへ衛星コロニーへの両性質を兼ね備えてんな？

名をへマルスクラウン言う。

そこに呼び出されたウチとリンちゃんは、長官室へと通された。

呼び出し主である「レスリー長官」が、後ろ手を組んで眼下の赤い惑星を眺めとる。

要するに貫禄感の自己演出やんね？ 長官？

やがて沈黙の頃合いを見定めた長官は、重々しく会話を切り出した。

「陽ノ咲モモカくん、天条リンくん、どうして呼ばれたか……分かってるかね？」

「いいえ？ 今回は、さっぱり？」と、リンちゃん。

「そりやそうだろうね。まだ用件を言っていない」

「帰っていいわよね？ 貴重なプライベートタイムを無駄にしたくないし」

リンちゃん、温顔につこりで怒ってはるねえ？

「まあまあまあ！ 待ち給え！ 軽いジョークだよ！ ウエットに富んだジョークだよ！」

アメリカンスマイルで振り向くも、実は慌ててはるね？

尋常じゃない早さやったもん。

振り向く速度がシユバツて。

ともあれ平静を無理矢理取り繕った長官は、椅子を引いて腰掛けた。

「実はだね。先日、ハウゼン博士にも話したんだが……」

「そう言えば、マリーはどうしたん？ 呼んどらへんの？」

「ハウゼン博士には本件の解析を引き続きしてもらい、場合によってはへツエレークの出撃準備を……って、うん？」

ウチの返しに、怪訝そうな表情で詰まる。

「何？ 長官？」

「いや、いま『マリー』って……」

ああ、そこやったんか。引つ掛かったのは。

「ウチら、マリーと呼び捨てにしあえる仲やもん ♪」

「いつの間に、そこまでツ？」

何か知らへんけど、露骨に動揺してはるし。

「キミ達がチームになって数カ月だよツ？ たった数カ月で、そこまで親密になったというのかいツ？」

「ウチ、友達作り得意なんよ ♪」

ウチは「にへら ♪」と得意気に笑た。

「う……羨ましい！ 羨ましい限りだ！」

「は？」

「長官、羨ましいん？」

「あまり大声では言えないが、こう見えても前々から狙っていてねえ……ハウゼン博士を」

ホントに『大声では言えない話』を言い出しはった。

仮にも『銀邦トップ』が、神妙な面持ちで何をカミングアウトしてんのん？

「だって、こう……ねえ？ スラッキユツボンツだし」

何やエライ事口走ってはる。

しかも、スタイル表現のジュエスチャー添えて。

「……もう帰ってええの？」

ウチは無垢に小首コクン。

「待ち給え待ち給え！ まだ話は終わっていないぞ？」

「つていうか、始まつてもいないわよね？」

「思いつきり美人だし、性格も控え目でたおやかだ。世の男性なら憧れを抱いて当然……スラツキキュツボンツだし」

「まだ続ける気ツ？ このマリィ煩惱！」

「長官？ そのジエスチャーやめた方がええよ？」

「あわよくばキミ達をダシにして親密になろうと考えていたんだが、よもや先を越されるとは！」

「どういう了見だー！ ツーッ！」

間髪入れずへパーソナルモバイルカード——通称へパモカ——を、顔面へと投げつけるリンちゃん！

宛ら「怪盗予告カード」のようにサクツと長官の額に突き刺さる！

「リンちゃん！ 暴力はアカン！ 長官相手に暴力振るったら、下手したら反逆者扱いなつてまう！」

「はーなーせー！ ツーッ！ モモーッ！」

「ダクメくやあああ〜！ ウチ、リンちゃん逮捕されたない〜！」

慌てて羽交い締めにしたけど、リンちゃんはジタバタジタバタ！

アカン！ リンちゃん、興奮しとる！

「ぎぎぎ銀邦長官に対して何をするんだね！」

濁々と流血塗れの長官が、瀕死から這い上がりつつ抗議してきおつた。

「わざわざ年頃女子を呼び出して、しみじみとセクハラ妄想を語る官僚なんて聞いた事ないツツーの！」

「ああ、そうか……そうだな。些か本題から脱線してしまったよ。ハハハハハ！」

「空笑いで誤魔化すな！」

何や会うたびに敬意とか尊敬とかが薄れていくわあ……この長官。

「ま、それはさて措き」

「さて措くな！」

「実は、このようなものが銀邦の観測システムに確認されてね」

長官のパーソナルタブレットから、ウチらのパモカへ映像データが添付されてきた。

このへパモカ言うんは、超薄型多機能電子端末やねん。

見た目はホビーカードそのものやけど、実質は超科学の結晶や。

うくん？

みんなに分かり易う表現するなら、スマホの超進化版やろか？

イラストスペースにも見えるんは、ディスプレイ画面や。

ディスプレイフレーム四隅のアイコンをタッチすると、様々な多機能アプリが立ち上がる仕様。

もちろんディスプレイ自体もタッチパネルやけどね。

パモカ間の通信・通話に於いてはへネオニュートリノ・ブロードバンドを採用しとつて、太陽系圏内程度ならタイムラグ皆無で連絡が取れんねんよ？

「まずは見たまえ、貴重な資料映像だよ」

言われたウチとリンちゃんは、各々パモカのディスプレイ画面を開く。

「うん、確かに貴重ね」

「せやね」

「そうだろう。まだ一般に流通させていない極秘映像だから、普通なら御目に掛かる事もない」

「流通していたら大事やんね？」

「さすがにそうか……いや、然もあらん！」

長官としては真面目な資料映像を添付してきたつもりやろうけど、ウチらのパモカには『薄着マリーのブラウス透け透け動画』が添付されてきよった。しかも、要所を拡大トリミングしたヤツ。それがユサユサ揺れとるよ？

「初めて見た時は、あまりの衝撃に啞然としたよ。まさに未知との遭遇だった」

「でしようね」

「私の人生に於いても、こんな凄まじい光景は見た事も無い。だが、己を震い立たせたよ。『尻込みしてなるか！ 絶対に全貌を解明し

てみせる!』ってね」

「解明する気は満々なん?」

「とは言うが易し。実際は、全力で挑んでも持て余す事は明白だろう」  
「ま、持て余すかもね。これだけ大きいと」

「だが! 私とて男だ! こればかりは退けん! 己が魂を灰と燃やし尽くしてでも挑む所存だ!」

「……エラく本意気の覚悟やね? 長官?」

「男ってバカよね」

「コホン、そこで……だね? 是非、キミ達にも助力を願いたいのだよ。どうだね? 私と一緒に臨んではくれまいか?」

「鬼畜変態」

「そう、実に鬼畜変態——んん?」

奇跡的に噛み合っていた会話に、ようやく違和感を抱いたようや。

水戸黄門の印籠宜しく、パモカを翳すリンちゃん。

顔面蒼白となった長官が「ははあーッ!」とばかりに土下座した。

「ど……どうか内密に」

「それはドコに? 銀邦委員会? それとも、マリー?」

「どっちも! とりわけ『マリー』には!」

「……いま、どさくさ紛れで呼び捨てにしたでしょ。アタシらに乗っかって」

へこへこと謝罪に頭下げまくる長官を流し、ウチは改めて動画再生して観た。

「それにしても、よくこんなベストアングルで撮らはりおったねえ?

長官?」

「分かるかね? いやあ、苦労したんだよ。気付かれずにカメラ設置するのは」

何かドエライ事を口にしはったねえ?

「顔と胸とを鮮明な解像度に抑え、障害物も少なく、尚且つ視認されない位置を探る! 実に半月は計画を練り込んだよ、キミ」

「何を揚々とセクハラ犯罪行為のカミングアウトしてんだ、長官……」  
リンちゃん、心底ドン引きしてはる。

「だが、此処こそが胆だ！ 絶対に妥協してはイカンのだよ！ 陽ノ  
咲くん、キミなら分かるだろう！ この男の浪漫が！」

「ウチは『女の子』や『ハーリーツ！』」

今度はウチがパモカをに投げつけた！

サクツと眉間に刺さった長官が、再度流血に沈む！

「ふえくん！ リンちゃん！ ウチ、胸とほ乏しないもん！ ちゃんと

『B』あるもん！ ふえええくん！」

「ああ、もう……よしよし」

泣きつくウチを、リンちゃんが「イイ子イイ子」と宥なだめてくれた。

クスン……えへへ♪ 何か元気出た♪

「まったく、どいつもこいつも……。で、極秘事項扱いの本題って何な  
ワケ？」

混沌カオス現状の仕切り直しとばかりに、リンちゃんは物臭な態度でソ  
ファへと投げ座る。

ウチも後追いでチョココンと隣に座った。

「ああ、それはだね……コレだ」改めて正式な資料映像が添付されてく  
る。「水星宙域で撮影された映像だよ」

「なツ？」「ふえくん？」

ウチとリンちゃん、揃って驚嘆や！

それは、惑星付近に浮遊する巨大なヘクラゲ<やった！

透明な軟体ボディに、無風空間でそよぐ無数の触手！

頭か胴体か解らへん内部には何やら発光器官があつて、プリズム光  
彩を絶え間なくグラデーションさせとる！

信じられへんのは、その大きさや！

周囲に待機しとる監視衛星と対比しても、おそらく数百メートルは  
ある！

つまりヘツエレーク<とドッコイや！

ウチの銀暦事情 Fractal. 4

「ウチ、こんなん資料で見た事ある！ 確か……えと……えと……えと……せや！ 確かへカツオだべし」とかいうヤツや！」

「……それを言うならへカツオノエボシね」

せやの？

「ようここまで育ったねえ？ 何年生きたら、ここまで大きくなるん？」

「だから、想起させても別物だツツーの！ そもそもへカツオノエボシが宇宙飛ぶか！」

「進化したんちやうの？」

「するか！ ってか、飛ぶか！」

「亀さん、飛ぶよ？ 火イ吐いてグルグル……つて」

「ドコの亀だ！ その節操無い進化論に染まった亀は！」

「……ウチも、よう知らへんよ？」

そんなこんなしてる間に動画が進行した。

何や？ 巨大クラゲが声を発したよ？

喋れんのや？ この子？

『銀河連邦政府ニ告グ。タダチニ宇宙開拓ノ着手ヲ停止セヨ。コレ以上ノ開拓行為ハ、宇宙ノ生態摂理ニトツテ害悪デシカナイトイウ事ヲ心セヨ。然モナクバ、主立ツタ開拓設備ハ片ツ端カラ破壊セザル得ナイ。コレハ脅シデハナイ』

「……コイツ？」

リンちゃん正義感が歯噛みする。

「何や無茶苦茶ワンマンやんなあ？ それじゃ『人類は活動範囲を縮小せよ』って言うてるようなモンやんね？」

「そう言ってるんだツツーの——暗にね」

『繰り返ス、コレハ脅シデハナイ。ソノ証拠トシテ、軽イ挨拶ヲ送ツテオコウ』



そして、巨大クラゲは触手を振った！

そこから眩しい光撃こうげきが放たれる！

ウチ、けたたましい爆発音にビックリしてソファからひっくり返ったよ？ コテンって！

「ひゃうー！」

そして、映像は終わった。

そのままブラックアウトや。

「破壊されたの？ ステーションが？」

「いや、破壊されたのは監視衛星だけだよ。幸か不幸か、水星宙域にはハプピタルポイント生存可能宙域は発見されていない……まだコロニーやステーションも建造されていないからね」

「あ、そうか……そうだったわね」

リンちゃんにしては珍しく失念していたようや。

それだけ焦っていたという事やろね。

せやけど、その表情は微かに安堵を噛み締めとった。

ウチ、せやからリンちゃん好きやねん ♪

口くちは悪いけど優しいねん ♪

「この後、この巨大怪物の反応は消失した。あらゆる観測システムがらね。つまり消え失せたという事だ」

「……コレ、ホントに生物？」

「ほう？ 何故かね？ 天条くん？」

長官が予見していたかのようにニヤリとしはった。

「その場で瞬時に全反応が消え失せたっていうんなら、大方へフラクタルブレイン航行でしようよ。だとしたら、あの光彩機関はへ光速推進力発生コンバータの可能性が高い。つまりは“人工物”と考えるのが妥当だツツの。ま、正体がへロボットかへサイボーグかは知らないけどさ」

「ほう？ さすがだね、天条くん？」

リンちゃんの演繹能力えんえきに、長官は御満悦の様子や。

一方でウチは、よう解らへんかった。

せやから、キョトンと質問してみる。

「……あんな？ リンちゃん？」

「何よ？」

「そのへナンタラコンバータって、何？」

リンちゃん、ズルツとソファを滑り落ちたわ。

「アンタ、ホントに銀暦ぎんれき世代か！」

「せやかて、ウチ難しいのキライ」

「ったく……つまりへ光速推進力発生コンバータってのは『アクティ  
ブジャイロ機構によって、固定座標で距離を稼かせいで光速移動エネル  
ギーを得られるエネルギーユニット』の事——早い話へOTFよ！」  
「……どゆ事？」

「だくかくらッ！ 光速エネルギーを発生させるには、必然的に膨  
大な航行距離と時間を費つやさなきゃならないでしょ！ けど、それ  
じゃヘリッブ・ヴァン・ウインクル現象のせいで実用性が乏とほしい！

そこでアレのジャイロ回転運動によって擬似的な航行距離を無限  
発生させ、その場に停滞しながらも光速エネルギーを得る事を可能と  
したシステムなの！ そうする事でヘリッブ・ヴァン・ウインクル現  
象の影響下に存在するのは、あのユニットパーツだけって事になる  
から、本体は通常空間に滞在しながらも光速エネルギーを抽出供給す  
る事が出来る！ 要するに、本体は滞在空間の時間軸に存在しながら  
も、光速時空軸の影響を受けずに航行が可能となるの！ 解った？」  
「うくん？」ウチは示された難解な理論を噛み砕いてみた。「あ、バス  
の中で足踏みするようなモンやんね？」

「……どうしてそうなった？ 脳ミソふわふわメレンゲ娘？」

リンちゃん、あんまりや。

「で？ 結局、コイツ何なの？」

「うむ、順を追って説明しよう。まず、この巨大怪物が突如として水星  
宙域に出現したのは、約一週間前に遡さかのぼる。さて、では、如何なる怪物  
なのか？ 我々は存在考察の糸口たる情報を模索した。関連しそう  
なデータベースや文献を洗い直したりね。だが、有益な情報は何ひとつ  
得られない。目撃談も研究形跡も。つまり人類史上に於ける  
初遭遇ファーストコンタクトという事だ。そこで、マリー——」馴れ馴れしさをリンちゃ

んがジロリと咎める。「――ハウゼン博士に相談してみたんだよ。すると、快く実態調査を引き請けて――」

すかさず卓上の御茶請け入れを投擲するリンちゃん！

ボウル型容器が長官の顔面をスカーンと直撃！

続け様に床へと撃沈した長官を仁王立ちで威圧する！

「余計な事すんなツツーの！ おかげでマリーの好奇心が触発されちゃったじゃん！ 今回の任務、十中八九コレじゃん！ アタシら大迷惑だツツーの！」

「リンちゃん！ 暴力はアカンて！」

「放せーッ！ モモーッ！ コイツ、簀巻きにして宇宙空間へ放り出すー！」

「拘束イ〜ヤ〜やああ〜！ ふぐう〜！」

ウチ、半泣きでリンちゃん諫めたよ？

必死にソファへ押し戻したよ？

「つつつつまりだねえ――」流血ダラダラの長官が、ゾンビみたいに這い起きよった。「――満を辞して、キミ達のへツエレーク〜に出勤してもらおう……と」

「何が『満を辞して』だーッッ！」

リンちゃんが手近なりモコン取ってスカーン！

「アタシはやるなんて、一言も言っていないツツーの！」

「あ、ウチも言うてないよ？」

一緒なんが嬉しなって、ウチはほわっと笑う。

「それをマリーやアンタが一緒になって、勝手に盛り上がって！」

……無視されたわ。

もう一回 ♪

「なあなあ、リンちゃん？ ウチも言うてないよ？」

「だいたい、何で一介の女子高生が戦わなきゃいけないツツーの！ それも銀邦が持て余すレベルを相手に！」

「なあなあ、リンちゃん？」

「ぎけんなツツーの！ アタシは平穩に日常を過ごしたいだけなんだからね！」

……無視された。

「ふぐう！」

「イタタタタタツ？」

ウチ、寂しなった！

せやから、リンちゃんの腰にギュウって抱きついたよ？

力一杯、抱きついたよ？

「リンちゃん！ 無視イヤやあ！」

「イタタタツ！ モモ、痛いツツーの！ 放せってば！ この！」

「ふぐうくく！」

もつとギュツとしたよ？

いっぱいギュツとしたよ？

「アタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタツ！」

「あ！ リンちゃん、北斗 ● 拳や？」

「キョトンと無垢顔を向けて、何を天然ボケてんだツツー

のおおおーツ！」

「ぎゃん！」

卓袱台返しで放り捨てられたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ ベアハッグか！ ア

タシの方が百倍痛かったわ！」

ウチとリンちゃんが長官から特別視されとる理由が、コレやってん。

つまり銀邦最新鋭大型宇宙船へツエレク——そして、艦載機であるへイザーナとへミヴィークは、マリーが個人所有する私製宇宙船やねん。

どういう事かいうと、その基本設計をしたんはマリーの祖父である「ウィリス・ハウゼン博士」やから。

ウィリス・ハウゼン博士は、とつくに故人なんやけど「銀暦稀代の大天才」と呼ばれる傑物やねん。

そんな大天才が独自設計したへツエレクやへイザーナとへミヴィークは、それこそへOTFの塊や。

銀邦ぎんぽうにしても、そないな危あやない宇宙船ふくねの野放し状態は避さけたいし、あわよくば自分達の最終兵器リーサルウェポンと抱かかえたい思惑もあつてん。

とは言え、遺産相続権はマリー——この状況を好転させるべくマリーに私有権を与えたままにして、有事には協力してもらおう提携で建造を承諾させた。

一方でマリーにしても、祖父の形見なら完成形を見てみたい慕情もある。

いや、それ以上にどんな超科学の結晶かを見てみたい好奇心やろね。

せやけど、これだけの途方もない宇宙船ふくねを個人建造なんて出来へんから、銀曆ぎんれきが資金と実働作業を買って出してくれるなら『渡りに船』やった——宇宙船ふくねだけに。

斯かくして利害は一致。

晴れて、銀曆ぎんれき最大の大型宇宙船スペースシップへツエレークは建造される運びとなつたねん。

そんなへツエレークへの超スペックは、銀曆ぎんれきでも随一や。

それ故ゆえにへ超宇宙船ハイパーシップやへ超宇宙航行艇スーパークルーザーなんて異名も持つとる。

これにマリーの貪欲な知識吸収欲が併さると、今回みたいな銀邦ぎんぽう宇宙時代の驚異に挑む事態になんねん。

んで以て、ウチとリンちゃんはマリーに付き合う形が余儀なく強いられとる。

その辺の理由は追々語るけど……とりあえずマリーはウチらの司令塔であり保護者やねん。

つまりウチらは一蓮托生な関係やつてん。

「さてー」と、徐おもむろに一本締めおもむろの笑顔を繕つくろい、長官が仕切り直しはった。

「話も無事に纏まとまったところで——」

「……纏まとまってないツツーの」

リンちゃん、ジト目や。

恨みがましいジト目や。

「——とりあえずキミ達にはへ宇宙クラゲを追ってもらおう事になりませす」

「ウチら次空を越えてへクラゲを追跡すれば、ええん？」  
「そういう事だね」

「アタシは承諾してないツツの！」

「何や？ ウチらだけ、また貧乏クジやんな？」

「ハツハツハツ……では、一連の事が片付いたら御馳走してあげよう  
じゃないか？」

「だくかくらつツ！」

「え！ 御馳走？」

「うむ。無事任務を遂行したら、みんなを私の御用達であるレストラ  
ンへ連れて行ってあげよう。地球産食材も食べれるような高級レス  
トランだよ？」

「地球産ツ！ 培養繁殖やなくてツ？」魅惑の言葉に、ウチはソワソワ  
浮かれた。「食べたいなあ……ウチ、食べてみたいなあ……」

「……簡単に懐柔されんな。脳ミソふわふわ綿菓子娘」

「ハツハツハツ ♪ 無論、マリ……コホン……ハウゼン博士  
も一緒にね★」

「……どさくさ紛れにセツティングしたわね？ エロ長官？」

「わくい ♪ ウチ、がんばる！」

「ハツハツハツ……頑張ってくれた御褒美だよ ♪ 」

「アタシの話を聞けーツ！」

「リンちゃん ♪ 楽しみやんね？」

満面の笑顔で振り向いた途端——カコカコーン！——二刀流の  
投擲が、ウチと長官をダメージに沈めた！

ウチはリモコン、長官はボウル型菓子容器。

肘折り交差に構えるリンちゃんの事後フォームは、何や「苦無を投  
げ終えたくノ」みたいやった。

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「……黙れ、脳ミソふるふるゼリー」

あれ？ ついに「娘」いう形容詞が消えたねえ？

ウチの銀曆事情 Fractal. 5

斯くして、現状に至る。

『ま、大まかには把握しているか……』

ウチの述懐を聞き終わったリンちゃんは、関心薄く航行手順のコンソール操作を再開した。

「それにしても、あのへカツオであべし〜エライ強そうやったね？」

『……へカツオノエボシ〜ね』

この数時間前、ウチらは目標と接触しとんねん。

3 f / 2 b 次元での出来事や。

ほんでもって、軽く一戦やらかした。

だってへツエレークを捕捉するなり光撃してきはったんやもん、アチラさん。

せやけど、そこはへツエレーク——銀邦の切り札にして、ハウゼン家の私船や。

互角以上の善戦で、逆に痛手を負わせたねん。

あ、出撃したへイザーナ〜&へミヴィーク〜との連携も外せんよ？

うん、ウチとリンちゃんの功績も大きいねん。

それはともかく、結果、巨大クラゲはへフラクタルブレーション航法〜で逃亡。

ウチらも、すかさず追跡——で、この次元宇宙へと辿り着いたというワケや。

と、ここまでの情報を鑑みて、ウチは軽い疑問をふと抱く。

「あれ？ 発見してから一週間、銀邦かて黙ってたワケじゃないやん？ それこそ〈軍属宇宙戦艦〉で……」

『応戦したみたいよ？ けど、手に負えなかった。理由はふたつ。ひとつはへフラクタルブレーション航法〜を応用した神出鬼没ぶり。もうひとつはへ宇宙クラゲ〜自体が脅威的怪物だった事。あの光撃も、おそ

らく高出力レーザーの類たぐいと思われるし』

「銀邦軍ぎんぱうでも歯が立たないって、どんだけスゴイヘクラゲヘクラゲなの？」

『だくかくらく！ 〈OTF〉実装だツツーの！』

「ああ、そやった。そうでした。えへへ♪」

ふえ？

さつきから頻繁に出てくる〈OTF〉ってのは何やって？

うくん、正直ウチにも詳細は説明しづらいんやけど——平たく言えば「宇宙人の超科学技術を疑似再現した応用技術」ってトコやろか？

実は〈宇宙人〉との邂逅コンタクトは、旧暦時代からあるにはあったんや。国家レベルで極秘裏に。

ほら、旧暦時代に物議を醸しとった『ロズウエル事件』とか『フラッツトウツズ事件』とか『エリア51』とかあるやん？

アレって、実は「在る派」が正解だったんよ。

まあ、あの手の人種は万事を〈UFO〉へと結びつけたがるから、ほとんどが眉唾論なんやけど。大概是子供染みたこじつけはなは甚だしい夢想やし。

それでも、ごく少数ながら実在例があったのも事実なんよ。

そうした信憑性に富む事件は、国家プロジェクトチームによって研究解析が為なされてきたんやって。

そやけど、そもそもブラックボックスかたまりの塊かたまりのようなUFOのテクノロジーを、格下科学で得ようなんて土台無理な話やん？

せやから、現行科学技術で擬似的ぎじに再現しよういうコンセプトが〈Over Technology Feedback〉——即ちすなわ〈OTF〉やねん。

ほんでもって、ウチらの〈ツエレーク〉も〈OTF搭載艦〉だったりすんねん。

だから、単機で〈フラクタルブレン航行〉も可能なんねんな？

『ま、それでアタシ達に白羽の矢が立ったってワケ。〈OTF〉には〈OTF〉を……ってトコでしようね。フラクタルブレン航法を単機行使スペースシップできるような〈宇宙船〉は、現在のところ〈ツエレーク〉だけだし。



正直いって適任どころか唯一の対抗手段とも言えるわよね』と、リンちゃんは肩を竦める。

「せやけど、あの〈クラゲ〉は何なんやろね?」

『さてね? それを突き止めるのも、アタシ達の任務。少なくともアタシは〈生物兵器〉と考えてるけどね』

「何で?」

『生態的に〈フラクタルブレイン航法〉を備えている生物なんて聞いた事もないツツーの。おまけに触手から破壊光線なんか出すし……。どんな進化論よ? 生物としては不自然過ぎるツツーの』

「せやけど、何で〈フラクタルブレイン〉って断定できるん?」

『アタシ達の次元宇宙では、人類が宇宙進出してこの方、他の生態系と遭遇した試しは無い。だいたい〈銀河連邦〉って言ったところで、宇宙進出した〃地球人種子〃の連合体——別に〈地球外生命体〉と邂逅したワケでもないんだから』

「現在は無いか、これからあるかもしれへんよ? ねえ? イザーナ?」

『キュー ♪ キュー ♪』

えへへ ♪ この子も同意や ♪

『……『フェルミのパラドックス』? 否定はしないけどさ、確率は天文学的に低いわよ』

「何? その『ハルミのデトックス』って?」

『……『フェルミのパラドックス』だツツーの。誰だ〃ハルミ〃って。要するに〃銀河が果てしなく広い以上、地球と同じ環境の惑星が無いはずない。同等以上の知的生命体も必ず存在する。にも拘わらず、一向に接触が無いのは何故だろう〃って概念——旧暦の物理学者〃エンリコ・フェルミ〃が唱えた一種のジレンマ論よ』

「ああ、せやねえ? ハルミさん、エライトコ気付きなはったねえ?」  
『……だから、誰だ〃ハルミ〃って』

「そやけどな? いろいろぎょうさんおった方が、ウチ楽しい ♪」

『はあ?』

「どの宇宙も、こないに広いねんもん。地球人類だけやったら、きつと寂しいよ?」

『つたく、アンタは……』

何や? リンちゃん?

呆れたんか共感したんか分からんテンションで溜め息ついたねえ?  
?

と——「あ、せや!」——ウチは妙案閃いてペアと明るい笑顔に染まった!

「リンちゃん、さっきのマリーの説明把握してんのやよねえ?」

『へフラクタルブレイン概念? まあね』

細かいコンソール操作に集中しながら、無関心に応えるリンちゃん。  
ん。

「せやったら、リンちゃんが教えて?」

『……は?』

「リンちゃん、頭ええもん ♪ 説明も巧いもん ♪ リン

ちゃんの説明やったら、きつとウチにも解り易い ♪ 」

『え〜 ♪ ヤダア ♪ 』

につこりと笑顔を彩ったリンちゃんは、親友の頼みを快く拒否して  
……つて、アレ?

もしかして、いま「イヤ」言うた?

ウチの聞き間違い?

「あんな? リンちゃんなら、ウチにも解り易……」

『あはははは☆ 無理イ〜 ♪ 』

『……………』

朗らかな笑顔で言いはった。

「何で?」

コクンと訊ねるウチに、リンちゃんは温顔につこりと返す。

『だって、サルに『ハムレット』は書けないしイ〜?』

あ、せやね。

確かにサルに『ハムレット』は……うん?

「誰がサルやの?」

『アンタ ♪ 』

うん、聞き間違いやない。

まるで聖職者のような温和性で毒吐きよった。

まあ、この「見た目の可憐さに反して辛辣な気丈さ」いうのが、リンちゃんらしさ」なんやけど。

「リンちゃん薄情や！ 親友のウチが無知のままでもええの？」

『仮定義した縦軸次元がブレーン構造で、各横軸にはフラクタル構造が発生している。以上。理解できた？』

「うう、えと……えつと……あんな？ もつと簡単に説明して？」

『だから、無理だつて言ってるツツーの。これが理解できないなら、もう打つ手は無いわよ。これ以上の簡単な説明は無いんだから』

ウチの必死さに反して、リンちゃんの物腰はあくまで沈着。まるで幼い妹の駄々を諫めるように、涼しく流しとる。

「ふえくん……リンちゃくん、意地悪せんと教えてよ〜？」

『策に水を注ぎ続けるほど暇じゃないツツーの』

「策？」

『アンタの脳ミソ』

ああ、なるほど。

リンちゃん、ウマイねえ？

つて、違うツ！

「あ！ せやったら、一項目覚える度に白玉抹茶パフェをご褒美に付けたらええよ？ そしたらウチ、やる気出る ♪ 』

『……アンタ、曲芸仕込みの動物か』

「ふぐう！ リンちゃんの意地悪！」

『はいはい』

「性悪！」

『はいはい』

「ウチよりおっぱい大きい！」

『ありがと』

全部涼しく流されたわ……。

「ふぐう〜〜！」

ウチ、膨ぶくれた！

悲かなしなつた！

『め……目に涙溜めてムクれんなツツーの……しよ……小学生じゃあるまいし』

「ふえええ〜ん！ リンちゃん、意地悪やあ〜！ ふえええ〜ん！」

『なな泣く事ないじゃん！』

「イヤやあ〜！ ウチ、リンちゃんがええ〜！ ふえええ〜ん！」

ウチが大号泣した直後——『はいはい、そこまで♪』——突然割って入る気の抜けた美声。

聞き覚えのあるその声音は、先刻まで難儀な講釈をしてくれた女性の声やった。

口調が思い切り変わつとるけれど。

心当たりがありすぎるが故ゆえに、ウチとリンちゃんの喧騒も一時停戦。

そして同時に、恐る恐る声の主へと目を向ける。

ツエレークとの通信モニターには——やはりと言うべきか——マリー・ハウゼン女史が映とつた。

ただし、メガネは掛けていない……つて事は、つまり、もうひとつの人格「裏マリー」や。

その事実を認識し、ウチとリンちゃんの表情が思いつきり強張こわばる！  
ウチの涙も一瞬にして引ひっ込んだわ！

『モモちゃん、リンちゃん、ケンカはメツよ？』

幼児を優しく叱る母親のように、マリーは軽く頬を膨ふらませる。

『あ……あの、マリー？ メ……メガネ……は？』  
恐る恐るに訊たずねるリンちゃん。

『んとね〜、コレ？』

上目遣いにそう言って、マリーは愛用のメガネを取り出した。その仕草はイタズラを見つけられた子供のようで、メチャクチャ可愛らし  
いけれど……。

で、肝心のメガネはというと——フレームがグチャグチャに折れ曲がり、レンズは割れ砕け、見るも哀れな残骸と化しとったよ。

『さつき、うっかり踏んじやった ♪』と、可愛らしいテヘペロに染まるマリー。

『うわあああゝゝゝあああああいつ！』

先程までの展開を忘れたかのように、見事なハーモニーでパニくるウチとリンちゃん！

狭いコックピット内で、頭を抱えて乱れる様がユニゾる！

いま、ウチらの思いはひとつ。

つまり「これまたメンドくさい事になった！」や。

みんなは知らんけど、マリー・ハウゼンは人格をふたつ持つてるねん。

そして、彼女の人格入れ替えとなるスイッチが、メガネの有無や。

このメガネを掛けてないマリーを、ウチらは便宜上へ裏マリーと呼んでるのや。

通常のへ表マリーは、完璧な才色兼備ぶりを宿した大人の女性。豊富な知識量も去る事ながら判断力や決断力も素早く、とにかく頭の回転が早い。

一方でへ裏マリーは、完全に「マイペースな天然癒し系」やねん。おまけに状況把握能力などは著しく欠落しとる。知識や経験は「表マリー」と共有しとるんやけど、それを有効に応用するだけの器量は無い。

で、このへ裏マリーの厄介な点は、自覚無きトラブルメーカーとしての側面が非常に強い事やっつてん。

それは総て天然が為せる業ではあんねんけど……。

ウチの銀暦事情 Fractal. 6

『さて、お話は、だいたい分かりました〜♪』

天真爛漫な笑顔で、マリーは状況把握を自己申告する。

いや、どうせ分かってないやろ？

『要するに、モモちゃんは仲間外れになったみたいでイヤだったんだよね〜？』

違うよ？

当たらずとも遠からずの範疇ではあるけれど、何か違うよ？ 表  
現が。

『じゃあね、わたしがちゃんと説明してあげるね？』

ほんわか担任教師が微笑んどうった。

いや、せやから……そもそも、マリーの説明で理解できなかったん  
やん？

助け船を求めてリンちゃんを見遣ると——あ、そっぽ向いとるし。

さては無関係を決め込んだん？

場の空気など露ほども悟らずに、マリーは説明を始める。

『モモちゃん、まずケーキを想像してみてください？』

「ふえ？ ケーキ？」

『モモちゃんの好きな白玉抹茶のケーキが、丸々あるとするよね？』

とても大きなホールサイズの。でね、一層目が生クリームで、二層目  
がスポンジで、三層目が白玉入り抹茶スフレで、四層目もスポンジな  
の。この各層が重なった造りを、ブレーン構造だと考えてみて？』

ふわあ？ おいしそうやわあ ♪

って、違う！

ん？ つまり——

「——つまり、違う層が重なってる……って単純な解釈で、ええの？」  
『そうそう！ でも、層の性質が違ってても、それをひとつにまとめた解  
釈でへケーキだよね？ このケーキの層と同じで、宇宙も『異なる

宇宙同士が次元層で重なってる』って考えるのがブレイン宇宙構造の基本的解釈なの。違う宇宙が次元層で重なっていても、まとめて〈宇宙〉という括りになるでしょう？ 〈ブレイン〉っていうのは〈膜〉っていう意味だから、要するに『次元宇宙という名の膜が重なってる』って考え方なのね。ただ、ブレイン宇宙層はケーキ層とは違って、現在確実視されている数だけでも十二層になるんだけれど……」

「せやけど、単に重なってるだけなら別次元宇宙への航行なんて、そんなに大変な事でもないんちゃうの？」

『もしもモモチちゃんがケーキの上で蠢く微生物だったとしたら、一番上のクリーム層を抜けてスポンジ層へ到達するだけでも大変でしょう？ 層の間にウエハースなんか敷いてあったら、もう大変！』

……その表現イヤや。

『さて、これで〈ブレイン構造〉は、なんとなく理解できたかな？

じゃ、次は〈フラクタル構造〉の説明ね？』

理解……できたん？

自覚はあらへんけど？

ま、ええか。

『表マリー』の説明よりかは解りやすいし……。

『今度はケーキの層を〈次元〉と考えて、抹茶スフレ層の白玉それぞれを〈宇宙〉と考えてね？ いい？』

『うん、ええけど？』

『じゃあ……食いしん坊のモモチちゃんは、上から指を突っ込んで白玉を摘み取ろうとします』 ♪ 『

「ちよつと待つてーーツ？」

いきなりの誤解を招く例文に、ウチは思わず絶叫訂正！

「そんな意地汚い食べ方、ウチはせえへんもん！」

『だくか〜ら〜、仮定だつてば〜』

いくら仮定やからって……。

あれ？ リンちゃん？

何で顔を背けて、笑いを噛み殺してるん？

『はい、白玉が取れました〜！ でも、アレレ？ その隣に埋まってい

た白玉の方が大きいですね〜？ モモちゃんは悲しくなりました。  
シクシク』

……此処は“ハウゼン幼稚園”やの？

『そこでモモちゃんは、また指を突っ込みます！ 今度は、さつきよりも少し斜めに指を入れてみました』

「……せえへんつてば」

『白玉は無事に取れました〜！ さつきより大きいやつです！ すこし指を入れる角度を変えたただけなのに……不思議ですね〜？ そこでモモちゃんは指を差し込む角度を毎回変えて、他の白玉もほじくり出す事にしました』

「せえへんつてー……ー……ーッ！」

何や、コレ？

何や、この辱め？

ふええ……もうイヤやあ〜〜！

顔から火イ出そうやあ〜〜！

リンちゃんに至っては、コンソールパネルに突っ伏して笑い死にしている……。

『白玉は全部、形も大きさも違いました。指を入れた穴は同じなのに、角度を変えると出てくる白玉は違うのです。不思議ですね〜？』

ウチは不機嫌さを隠しもせず、膨れっ面で答える。

「別に不思議やないよ。入れる穴は同じでも、その先にある白玉は全部別物なんやから」

『そう！ それなの！』

「ふえ？」

『全部“抹茶スフレ層に埋まっている白玉”でも、個々の出来には微妙な違いがあるから同じではないでしょう？ それと同じで、同一の次元層に存在する宇宙でも、それぞれが微妙に違うのよ。だから、次元突入の際に座標方向性を変えるだけで、微妙に異なる宇宙へと到達するの』

「つまり、進入角度と到達座標によって異次元宇宙の性質が決まる……って事なん？」



『抹茶スフレ層全体にある白玉は、それぞれが全然異なるよね？ 大ききや形はまだしも、細かくいえば“粉の生産元”とか“機械の調整具合”とか“白玉粉を作った人のプロフィール”とか“練り上げるタイミングのコンマ秒での差”とか……同じ条件の物は、ふたつと無いでしょ？』

「病的に細かいよ？」

『うん。でも、その細かな差が、宇宙へ置き換えた時には重要なもの。一見同じ宇宙に見えても、実際には微妙な差があつて、全く同じ宇宙は決して存在しない。例えば“モモちゃんがサイボーグの宇宙”もあれば“モモちゃんがサイキツカーの宇宙”もある。そうかと思えば、果ては“モモちゃんが存在しない宇宙”だつてありえるの。これは本当に一例で“モモちゃんを基準に考えた宇宙”だけでも、それこそ無限にあるのよね』

『存在しない』とか言われると、ゾツとするわあ……」

『そうよね。でも、これは“モモちゃん”を基準にした例だけで、基準を他へ移すともっと膨大な数になるの。“銀河連邦が設立されていない宇宙”とか“イザーナが開発されていなかった宇宙”とか。或いは“人類が死滅した宇宙”だつてありえるのよ？』

「し……死滅うーッ？ そ……そんなんアカン！」

ウチ、慄然と硬直したわ！

『例よ、例！ もっと小さな例でいうと“いま地球にいる橘たちばなさんが小石を蹴ったか蹴らないか”なんていう些細な事でも分岐した宇宙が発生する。ね？ 無限大でしょ？』

「せやけど、それつて普通にへパラレルワールド概念と違ちがうの？」

『うん、そうだよ。でもね？ これにへフラクタル構造を適応させると、この差が微妙な宇宙ほど近くに存在してて、差が激しい宇宙ほど遠く離れている形になるの。さっきのケーキの例でいうとね？ モモちゃんが指を入れた辺りは“白玉”だつたけれど——』

「……入れへんつてば」

『——外れたところでは“果物”かもしれぬ。もっと外れた位置なら“ダイヤモンド”や“ウラニウム”かもしれないのよ』

「あ、だから『コンペイトウの出来損ない理論』なワケや?」さつき「表マリー」が何をさせたかったのか——ようやくウチは解ったような気がした。「つまり、そうした微妙な差が次々と際限なく派生していくから、ああした『線のインフレ』みたいな凶形になるワケやね?」

『そうそう! だからね? 縦軸の次元層はケーキの層、横軸の分岐宇宙はたくさんの白玉なのよ。解った?』

「うん ♪ 漠然とやけど……」

『それでいいと思う』マリーは嬉しそうに、満面の笑顔を浮かべた。まるで落ちこぼれ生徒が、ようやく公式を解いた瞬間に立ち会った先生みたいだ。『モモちゃんは、漠然とした感覚でしつくりとくればいいのかよ。解釈の在り方なんて、人それぞれなんだもの』

『楽しい個人授業中、申し訳ないんだけどさ——』不意にリンちゃんが口を挟んできた。その口調はさつきまでと一転して、規律然とした緊張を孕んだ。『——前方からエネルギー反応が接近中! 到達推定距離、およそ20メートル!』

すかさずウチも座り直し、気持ちを操縦体勢へと切り替えた。

「攻撃?」

『違うわね。間違いなく航行物体よ』

ウチの質問を簡潔に否定しつつ、リンちゃんはパネルに輝き浮かぶイルミネートキーを次々とタッチ操作する。

「まさかヘクラゲ?」

『待ち伏せた? なくはないけどさ……』

リンちゃんも完全には否定せえへん。

そんなウチとリンちゃんの緊迫したやりとりにお呼びじゃない方のマリーが加わる。

『まだ、なくんにも準備してないのに……困っちゃうね? ブウ!』

……一氣に場違いな脱力感に満ちたわ。

「可愛く膨れてる場合やあらへん! 艦長、マリーやん!」

『あ、そうだね? うん、そうだ! 頑張んなきゃ、わたし!』

小脇絞めて小さくガッツポーズ！

いや、言われんでも自覚してくれへん？

『で？ モモちゃん、リンちゃん、どうしよつか？』

アカンわ、この人。

きつと『使命感』いう文字が辞書から落丁しとる。

と、リンちゃんが的確な判断力に一喝した！

『狼狽うろたえない！ とりあえず識別が先！』

リンちゃんのパネル操作は素早く、そして、正確やった。

その手慣れた感覚がもたらす指捌ゆびさばきは職人技の域にも映る。

『ニュートリノビーム、出す！』

ミヴィークが前方へと光速素粒子弾を撃った！

いや、もちろん肉眼では見えへんよ？

これは次元航行直前にへ宇宙クラゲへにも使用した物で、本来は追跡などに用いる素粒子マーカーや。

要するにな？

えとお……えつとお……。

「……あんな？ マリー？」

『なあに？ モモちゃん？』

「……へニュートンのベームって、何？」

ウチの質問にマリーは優しく微笑ほほえみ、リンちゃんは『アタシが知りたいツツの』と吐き捨てた。

『つまり、人工ボソン粒子をニュートリノコーディングした素粒子マーカーの事よ？ 光速を帯びるニュートリノコートの性質によって、如何いかなる距離でも初速着弾するし、障害物に関係なく透過貫通する特性があるの。おまけに不可視だから、気付かれにくいメリットもある。指定座標で拡散した後、対象表面に満遍なく付着した人工ボソンはヘイザーナやヘミヴィークが発する対波動ボソンとの相互反応によってレプトン衝突現象を起こすの。その量子反響を電子エロケーション感知システムが受信し、コンピューターが解析した仮想機体像から様々なデータを割り出してくるといふ構成なのよ？』

「ふぐう……解らへん……！」

『うくん？ モモチちゃんに解り易く例えるなら 透明人間に頭から小麦粉を被せ掛けるようなモノ』かな？』

「あ！ そんなら解ったわ ♪」

マリー、にっこり笑た。

リンちゃん、深い溜め息や。

「せやけど、リンちゃん？ そないなモンをブツ掛けて、どないすんの？ 今回、追跡せえへんやん？」

『今回は追尾目的じゃないツツの。さつきマリーが述べた理屈の応用になるけど、ニユートリノビークンは拡散付着した機体データを表層的に解析し、その機体像を仮想映像化する事も可能。それを狙ったのよ』

「…………どゆ事？」

小首傾げるウチを一瞥いちべつだけで無視したリンちゃんは、テキパキとしたキータッチ操作の後に処理報告を読み上げる。

『仮想モデリング完了…………機体映像、出すわよ』

そして、メインモニターへ問題の機体像が映し出された。

その機影は…………！

『なっ？』

同時に驚きの声を上げるウチとリンちゃん！

対照的にマリーは『あらあら〜？』とゆったりしたマイペース口調。

一応は驚いている様子やけど、伝わり辛いわあ…………。

映し出された正体不明機は——宇宙を泳ぐへエイ〜やってん！

いや、比喻表現やなく、読んだ文面そのままの！

ウチの銀曆事情 Fractal. 7

「どう見てもヘイザーナ〈やヘミヴィーク〉と同じじゃん！ ただヘイイ型〉なだけや！ 何なん？ アレ？」

『ちよつとマリー、何なのよ！ アレ！』

『え〜？ わたしに言われてもお〜？』

『このヘミヴィークもヘイザーナも、ハウゼン製でしょ！』

『うん、そうだよ？ ついでに言えばヘツエレークも。ウイリスお爺ちゃんが着想した設計図を基にして、銀邦ぎんぽうに建造してもらったの♪』

あつけらかんとした温顔で言いはった。

『じゃ、やっぱハウゼン製じゃないのよ！』

『違うってば！ あんなの、お爺ちゃんの残した設計図にも無かったし、わたしだって監修してないもん！』

プウと頬つぺた膨らまる二〇歳はたちの天才美女。

アカン！

帰って来て！ 表マリー！

と、その直後！

『ケルルルルツ！』

『キュウーツ！ キュウーツ！』

今度はイルカとシャチが興奮に騒ぎだした！

気性の荒いヘミヴィークは攻撃的な警戒心を現し、おとなしい性格のヘイザーナは脅えながら威嚇いかくしとるようやった！

「よしよし……どないしたん？ 怖ないよ？ イザーナ？」

コンソールを撫なで撫なでして宥なだめたげる。

せやけど、あんまり効果無しや。

「リンちゃん？ この子達、どないしたんやろ？ エライ脅えとるよ？」

『……そりやそうでしょうよ』リーダーモニターへと釘付けのままぞ、

リンちゃんは深刻な表情に染まっとなる。『アイツ、追われてる！

リーダーに追尾機影反応あり——エネルギー測定値が大きいから、こっちはへ大型宇宙船に間違いない！ おまけに時折、高速熱源反応——つまり攻撃されてるって事よ！ ミサイルかビームか知らないけど！』

「分かった！ ウチ、救<sup>たす</sup>けてくるね！ 行くよ、イザーナ！」

『キューツ！』

『どつちにせよ、もうすぐ視認範囲だから——って、モモツ？』

リンちゃんの制止、ちよつと遅かったわ。

ウチとイザーナ、もう飛び出しとったもん。

本意気になったへイザーナへの航行速度は速い！

五分もせんと見えたんは、被弾に喘<sup>あえ</sup>ぐへエイと、その衰弱に容赦無い追撃を加えるイジメっ子！

船首に大きなドクロをあしらった船や！

せやけど、誰であろうと関係あらへん！

弱いものイジメはアカン！

「イザーナ、突撃や！」『キューウ！』

星の大海で縦横無尽な曲を描いた！

わざと目障りになるように、ドクロ船の周囲を纏<sup>まと</sup>わり泳ぐ！程なくして、船首のドクロが目から光線を撃ってきた！

どうやらウチとイザーナに標的を推移したようやね？

うん、それでええ。

相手の関心をウチらへ惹き付ければ、それでええ！

これでへエイは、少しでも射程から離れられる！

「当たらへんもん！」『キューツ！』

ピツタリとした呼吸に、ウチとイザーナは旋回して避ける！

『キサマ！ 何者だ？ 我<sup>わ</sup>が邪魔立てをするなら、誰であろうと容赦はせんぞ！』

いきなり宣戦布告されたわ。

あ、せや！ 自己紹介しとらへん！

「ドクロさん、こんにちは ♪ ウチ “陽ノ咲モモカ” 言うねん

よ？ 宜しゅうね？”」

『あ、こんにちは。こちらこそ……って違うわ！』

怒られたよ？

ウチ、笑顔で挨拶しただけやんな？

明るい挨拶、大事やんな？

『と……ともかく！ この宇宙の帝王……を夢見る帝王を邪魔する  
なら容赦はせぬ！』

何やコメントしづらい複雑な肩書を自己紹介されたわ。

『いくぞー！ ドクロ変形！』

雄々しい叫びに呼応して、ガキョガキョと分割されていく船体！

その内部から、腕が——脚が——頭部が——割れた船内からパーツ  
解放されていった！

徐々に形成されていく人型！

船首が直角に折れて、大きなドクロが胸飾りになる！

頭部もドクロやから二段ドクロや！

その側頭部からは野牛みたいな角が生え伸び、悪魔然とした禍々し  
い威風を演出しとる！

そして、完成したんは、全高八〇メートルはあろうかという巨体！

「ふええ？」『キュキュウ？』

イザーナと二人して驚嘆に見入ったわ！

『ドクロイガアアアーツ！』

……まんまやった。

『フハハハハ……ッ！ ワシは絶対に伝説のネクラナミコンを手に  
入れてみせる！ その邪魔立てをするのであれば、誰であろうと容赦  
はせん！』

「根暗な巫女？」

『ネクラナミコンツツ！』

何や？

お嫁さん探しやったん？





ウチは頭部コックピットから出ると、イザーナの鼻頭へ立った！  
静かに<sup>まぶた</sup>瞼を<sup>と</sup>綴じ、カチューシャ形のヘシंकクロコネクターへ精神を集中させる。

それに呼応してヘシंकクロコネクターへ<sup>は</sup>嵌め込まれた赤いクリスタルへトランスコアへが起動の輝きを息吹<sup>いぶ</sup>きだした！

そして、ウチは叫ぶ！

「G<sup>ギャラクシー</sup> フォルム・メタモルアップ！」

渾身の跳躍にヘリウムブースターの高出力を加味し、眼前のヘオルゴネーションリングへと飛び込んだ！

潜る世界は、まるで<sup>フェアリーテール</sup>御伽世界のようにメルヘンチックや……。

せやけど、ウチに生<sup>しょう</sup>じるんは、超常的变化そのもの！

徐々に巨大化していく肢体！

宇宙量子へオルゴンへを分子レベルで吸収融合し、質量変換しとるからや！

此処は、それを可能とする局地的特異空間やねん。

無論へOTFへや。

続けて、後追いに飛び込んだヘイザーナへが空中分解——各パーツがへプロテクターへとして、ウチの五体に装着されていく！

変身を<sup>いま</sup>終えた現状のウチは、約四〇メートルの大きさをやった。

「Gモモ！」

凜々しくも可愛くポーズを決めて名乗る！

『ズ……ズルい……』

「ふえ？ ズルい？」

ドクロさん、ワナワナ震えだしはったねえ？

『ズルいぞ！ 何だ！ “巨大な萌<sup>も</sup>えっ娘<sup>こ</sup>” って！』

「知らへんよッ！ ビシツと指差して、何を糾弾してんのんツ？」

『こつちなんか “胸にドクロ” だぞ！ 誰が見ても “悪役” だろうが！』

そんならドクロ取って、改名したらええやんな？

『おまけにノリノリで美少女戦士然と決めポーズとは！ そんなに人氣が欲しいのか！』

ノリノリやあらへんねん。

コレせんとプロテクター機能しとるへイザーナ<との感覚伝導率が落ちんねん。

そういう仕様やねん。

裏マリリーの趣味が全開やねん。

本音はウチかてイヤやねん。

恥ずかしいねん。

『もう、いい……こうなったら、正々堂々 “悪役” として生きてやる！』

あ、やっぱ “悪役” なん？

っていうか “正々堂々とした悪役” って、何？

『喰らええい！ イルカ娘！ ドクロバース——』『モモ——ツ！ 無事——ツ？』『——トオオオツ？』

突然、後頭部への猛突進を喰らってつんのめったわ……何かする前に。

つて、アレ〈Gリン〉や！

リンちゃんとミヴィークの〈Gギョラクシー フォルム〉形態や！

「ふええ……リンちゃん！」

「アンタは——ツ！」

「ぎゃん？」

飛びつこう思うたら、グレードアップしたハリセンアプリで叩かれたよ？

巨大なイルカ娘が巨大なシャチ娘にドツかれたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々うるうるしながら『痛いよ？』じゃないツツーの！ アタシに心配掛けんな！」

「リンちゃん、心配してくれたん？」

「うう……うっさい！ 少しは反省しろツツーの！」

「えへへ ♪ リンちゃん、心配してくれた ♪」

『ぬう……仲間か！』

あ、ドクロさんがダメージから復活しはったねえ？

『だが！ 何人来ようとも、このへ宇宙の帝王……を夢見る帝——』  
『ちよつとアンタ！』——……はい』

ハリセンをビシツと突きつけるGリンちゃんの怒気どきに、悄悄しおしおと吞ま  
れはった。

「アンタ、さつきモモに何しようとした？」

『えつ？ え……つと？』

「女の子相手に何しようとしたかって訊きいてんだツつーの！ このセ  
クハラロリコン！ 銀邦倫理協会ぎんほうに訴うったえるわよ！」

『ロ……ロリ？ 倫理……？ ええ……？』

あ、困つてはる。

「あと、その趣味悪いドクロデコも取れ！ ポリシーか何かと勘違い  
してるみたいだけど、傍目に不快なだけだツつーの！」

『えええええ……ツつ？』

リンちゃん、無敵や！

『あの……スミマセン？ 私わたくし、こう見えてもへ宇宙の帝王——を夢見る  
帝王』でして……』

「だから何よッ！」

『その……このドクロとか圧倒的な武力誇示は、ある種のアイデン  
ティティーと申しますか……その、何と言いますか……威厳とか……  
ねえ？』

「四の五の言うなーッ！」

『てんぷくッ？』

あ……顔面ハリセン、スパーンいったわ。

ドクロさん、顔面押さえて苦悶しとる。

ちよつと涙目や。

アレ、鼻頭入ったねえ？

「へ宇宙の帝王……を夢見る帝王』つて事は、アマチュアじゃない！  
実績も無いアマが“威厳”とか言うな！ おこがましい！」

……へ宇宙の帝王』にプロアマあんのん？

『クツ……フフフ……アーハッハッハッ！』

フルフルと震えたドクロさんは、ややあつて吹っ切れたかのように

笑い始めた。

『ウキイイイーツ！ 何だ、このアホ臭い展開は！ もういい！ みんな壊してやる！』

ヒステリックに『帝都 ● 語』みたいなフレーズ叫びはったよ？ 次の瞬間、宣言通りの猛攻が暴走する！

『喰らええい！ ドクロバーストオオoooooooooooooo！』

ドクロビームに、全身砲門の一斉掃射！

星間ミサイルも節操なく打ち上がった！

「危な！ 危ないて！」

「ちよつと！ やめなさいツツーの！ 宇宙塵をバラ撒くな！」

ウチとGリンちゃんは各部バーニアの機動力を活かした体捌きで、無差別攻撃を避けまくる！

『アハハハハハッ！ アハハハハハハハハハハハハッ！』

狂気めいた高笑いに、破壊の権化と化すドクロさん！

っていうか、泣いてへん？

ちよつと涙声なんは気のせい？

『暴走したつていいじゃない！ だつてドクロだもの！』

今度は「相田み ● を」みたいなフレーズ言い出しはった。

活用、間違つとるよツ？

「つたく、環境汚染すんなツツーの！ こうなつたら……モモ、アレやるわよ？」

「うんー！」

提案に乗った！

ウチとリンちゃんは相手の左右から挟み込むと、両手合わせの五指を花と開く！

その掌を標的へ向けると、不可視の枷が自由を奪った！

「エコロケーションホールド！」

『な……何イー！』

足掻く獲物！

せやけど、脱出は不可能や！

コレは「高出力特殊超音波を利用した拘束技」やねん！

イザーナがイルカなんは伊達やない！

同型のミヴィークかて、そうや！

それの高出力による相乗効果やから、拘束威力は半端やない！

『う……動けん！』

足掻くドクロさん！

チャンス  
好機や！

Gリンちゃんが高々と跳び、ウチは腰に構え据えた握り拳へと気合を籠める！

各々の脚と拳にエネルギーが迸った！

「タアアアア……ッ！」

「ヤアアアア……ッ！」

頭上からはGリンちゃんの脚槍が！

正面からはウチの鉄拳が！

ブースター全開のダブル特攻が、同時にドクロ船長を突き抜ける！

「Gクロスファイナル！」

二人の軌跡が十字架と輝いた！

『ヌオオオ……ッ！』

エネルギー臨界の奔流——「乙女の奇跡！」——G少女の決め台詞が起爆コードと作動！

……いや、ウチらかてホントはやりたくないねん。

そういう「裏マリー仕様」やねん。

ともあれ大爆発！

あ、殺生はイヤやから破壊はせんよ？

破壊はせんけども……ドクロさんは噴き飛んだ！

星間の彼方へと！

『おのれえええ……ッ！ 覚えていろオオオ……ッ！』

あ、悪役の「お約束」になる捨て台詞吐いていったわ。

〈帝王〉やなくて〈雑魚〉ランクのやけど。

現場を少し離れた宙域で〈エイ〉は漂流しとった。

どうやら被弾ダメージで力<sup>ちから</sup>尽きたようや。

ウチとリンちゃんはイザーナ達を横付けにすると、その船体へと取り付く。

その外見から予想した通り、構造はウチらの宇宙<sup>コスモ</sup>航行艇<sup>クルーザー</sup>と一緒にやった。

せやからハッチを開けるんも造作無い。

勝手知ったる……や。

そして、操縦席には意識を失った少女が居<sup>お</sup>った。

「生体<sup>バイタル</sup>測定器<sup>センサー</sup>に異状なし……気絶しているだけね」

「良かったあ」

安心するウチを見て、リンちゃんは優しく苦笑した。

「モモ、この娘<sup>こ</sup>お願い」

救出対象をウチに預けたリンちゃんは、コンソール機器を操作し始める。

「何すんのん？」

「マリーに連絡。座標指定してへツエレークに回収しに来てもらう」

「ふくん？」

ウチは膝枕に寝かせた少女を眺めた。

小柄な銀髪美少女やった。

「……………」

「あ、気が付いたん？」

ようやく意識が目覚めた銀髮少女の顔を、ウチはにぱつと覗き込む。

医療用ベッドや。

救出してから一時間強、ずっと意識失っててん。

せやから、ウチとリンちゃんが交互に付き添ってたんよ。

いつ目が覚めても、いいように。

「……………誰？」

感情薄い怪訝けげんで訊たずねられたわ。

「あ、ウチ 〱陽ひノ咲さきモモカ〱 言います。よろしゅうね？」

にぱつと笑顔で自己紹介したウチは、ベッド脇の椅子へと腰掛ける。

半身を起ここした銀髮ちゃんは、周囲を見渡して状況把握つとに努めとつた。

「……………此処は？」

「医療室やよ？」

「……………何処の？」

「ウチらの大型宇宙船スペースシップへツエレークや」

「何故？」

「あんな？ 銀髮ちゃん、気絶してたやん？」

「銀髮ちゃん？」

何やら思索気に首を傾げたねえ？

「誰？」

「何や？ さつき自己紹介したやん？ せやから、ウチは 〱陽ひノ咲さきモ

モカ〱 言うねんよ？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ジツと見つめる銀髪ちゃん。

にへへと笑顔を返すウチ。

「ふむ？」

また首を傾げたねえ？

「過去の経験データを鑑かんみるに、その『銀髪ちゃん』というのは『私

』の仮呼称と解釈していい？」

「せやよ？ だってウチ、名前知らへんもん」

「ふむ？」

また首を傾げたねえ？

ま、ええわ。

それよりも優先したい事があるねん。

ウチは、いそいそと持参した袋を漁あさった。

「銀髪ちゃん、マカロン好き？ ウチな？ 抹茶クリーム味が大好—

—」

「……『グルロリ』」

「——ふえ？」

「私の名前」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

またジツとウチを見つめる銀髪ちゃん——いや『グルロリちゃん

』やね？

ウチもジツと見つめ返し、ややあって「にへへ ♪ 」と碎けた。

「せやったら『グルちゃん』や ♪ 」

「クルちゃん？」

不思議そうにコクンと小首傾げた。

あ、なんか可愛いねえ？



クルちゃんがコクンで、クルコクン”や ♪

「ほんでな？ クルちゃん、何味が好き？」

「話の脈絡が成立しない」

「このマカロン、地球産でな？ 中に老舗和菓子店の餅が入って——」

「友達感覚で脱線すなーッ！」

「ぎゃん？」

ハリセンが後頭部を叩き抜けたよ？

ウチがガサゴソと袋を漁っている最中にスパーンと！

「目を覚ましたなら、さっさと連絡よこしなさいよ！ このノーミソほわほわ娘！」

リンちゃんや！

いつの間にか来てたらしいわ。

ウチ、お菓子選びに夢中になって、オートドアの開閉にも気付かへんかった。

「うう……痛いよ？ リンちゃん？」

「潤々して『痛いよ？』じゃないツツーの！ だいたい敵か味方かも判らないのに、何で女子会感覚だツツーの！」

リンちゃん、スパンスパンと仮想ハリセンを弄んで睨んどるよ？

「ふぐうー！」

「イタタタタタツ？」

ウチ、リンちゃんの腰にギュウって抱きついたわ。  
宥めてみたわ。

「リンちゃん、イライラしたらアカンよ？ ウチ、怒ったリンちゃんイヤヤ！」

「イタタタツ！ モモ、痛いツツーの！ 放せれば、この！」

「ふぐう〜〜！」

もつとギユツとしたよ？

「イタタタタツ！ わかった！ モモ、わかったから！」

「ホント？ えへへ、そんならええわ ♪」

にぱつと笑って解放したった ♪

「ゼエ……ハア……こんの〈脳ミソマカロン娘〉が！」

何か言うとするねえ？

「……ねえ？ モモ？」

深呼吸に落ち着いたリンちゃんは、おもむろ徐にパモカを操作し始めた。

「何？」

にっこり笑うウチ。

「……アンタさあ？」

「うん」

「毎回毎回、ギリギリと締め付けるバカが何処にいんのよ！」

「ぎゃん！」

いきなりハリセンで後頭部殴り抜かれたよ？

ハリセンの質量上げたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「早々と天井すんな！ 無邪気に背骨折られたらレーティング指定やり直さなきゃならんわ！」

そんなウチらのやりとりを眺めていたクルちゃんは、何やら意味不明な独り言を零しとった。

「……既視感」

「マリー・ハウゼン……と仲間たち、まずは救出に感謝する」

クルちゃんは感情乏しい抑揚で切り出した。

現在はウチのお気に入りスポット——つまり〈食堂〉におった♪

だって、お腹減ったんやもん。

数台のドローンが調理に勤しみ、運ばれてくる料理がテーブルを賑やかす。

ウチはそれを堪能しながら、クルちゃんへと返事した。

「ふいふいふえんふえふえーふお？」

「……何語か、それ」

隣の席でサンドウィッチを摘むリンちゃんが、呆れた口調でウチにツッコんできたわ。



それを見たウチとリンちゃんは、思わず啞然とした。

「……マリー？」

「どうしたの？ リンちゃん？」

「何？ ソレ？」

「高圧縮栄養配合サプリメント——自家製よ？」

「いや、そういう事じゃなくて……」

思えばマリーと食卓囲んだんは、今回が初めてやったわ。

いつも私室で済ませとるし……。

っていうか、こんなん食べてたん？

「バナナをベースとして、ヒジキやチーズ、シジミにトマトにケールにハチノコ……その他諸々の有用食材を約四〇種類配合したの。これなら一日辺りの必要栄養価を不備無く簡単に接種できる。効率的でしよう？」

「いや、そういう事でもなくて……」

味とか食感は考えへんの？

それでええの？ マリー？

「それで？ 頼みというのは？」

進めおったよツ？

何事も無かったかのように再開しおったよツ？

「私と協力関係を結んでほしい」

「協力関係？ 何のでしょう？」

「つと、その前に！」疑いもなく人の良さを返すマリーを遮<sup>さへぎ</sup>って、毅然<sup>きぜん</sup>とした警戒心に訊<sup>と</sup>い返すリンちゃん。「アンタ何者だツつーの？ それに、あの宇宙航行艇<sup>コスモクルーザー</sup>は何よ？ アタシ達の宇宙航行艇<sup>コスモクルーザー</sup>にそっくりじゃん！」

「それに関する情報開示許可は得ていない。現状では伏せておく」

「ざけんなツつーの！ そんなんで信用できるか！ 相手<sup>ひと</sup>に物を頼むなら、まず素性を明らかにするのが筋<sup>ぢ</sup>ってモンでしょ！」

クルちゃんは醒めた一瞥<sup>いちべつ</sup>を向け、マリーへと関心を戻す。

「マリー・ハウゼン、私と共にへネクラナミコンを探<sup>た</sup>しだしてほしい」「こ……んの！ 無視すんな！」

「ネクラナミコン？ 何ですか？ それ？」

「そう言えば、ドクロさんも婚活宣誓してたねえ？ 『絶対に根暗な巫女さん』を手に入れてみせる！』って……」

「陽ノ咲モモカ 根暗な巫女」ではない」

「だから、それって何だっつーの！」

「コレ」

クルちゃんはテーブルの上にゴトンと石板を置いた。

手帳程度の大きさやけど厚みはある。

ほんでもって灰かに緑色やつたけど、コレは苔やない。石の素材自体が緑掛かってんねん。

「何よ？ ただの石じゃない」

「ただの石ではない。コレは、ある種のへアカシツクレコード」とも呼ぶべき情報結晶体——その欠片」

「ふええ？ コレ 『明石焼き』なん？ どんな曲が集録されてん？」

「陽ノ咲モモカ、コレは 『明石焼きのレコード』ではない」

淡白に否定されたよ？

と、突然、マリーが驚嘆の叫びにガタンと腰を浮かせた！

「へアカシツクレコード」ですって！」

何や？

一転してテンション上がったねえ？

「何よ？ そのへアカシツクレコード」って？」

「タヌキさん？」

「陽ノ咲モモカ、それは 『信楽焼』……」

またクルちゃんが淡白に否定したよ？

慣れた感じに流したよ？

一方で興奮冷めやらぬマリーは、熱を帯びた口調で教示を始めおつた。

「つまりね？ このへアカシツクレコード」っていうのは 『宇宙創造の真理とも言える膨大な情報を収録した記録物』なの！ それこそ旧暦時代から、まことしやかに実在が囁かれていた物なんだけど、実存証拠は皆無……。それでも多くの知識探求者が追い求めて止まな

かった伝説のアイテムなのよ！」

「ふくん？ コレが？」

訝しげに石板を拾い眺めるリンちゃん。

「あ、旧暦伝説の芸人さん……」

「陽ノ咲モモカ、たぶんそれは『明石家さ ● ま』……」

クルちゃん、よう知つとるねえ？

旧暦情報に詳しいねえ？

「ともかく、この『ネクラナミコン』は『フラクタルブレイン』に散在してしまっている。それを狙う輩は多い」

「ドクロさんも？」

ウチの質問にクルコク。

「先程遭遇した『ドクロイガー』も、そう」

「でも何だつて、そんな血眼になってるんだツツーのよ？ たかだか『データベース』っしょ？」

「もう、リンちゃんつてば！ コレは普通の『データベース』じゃないの！ さつきも言ったけど 『宇宙創造の真理とも言える膨大な情報』が記録されているんだから！」

マリー、小脇絞めてプンプンや。

ホッペタ膨らませてプンプンや。

……確か、二〇歳やんね？

「だからさ？ 仮にそうだとして、具体的に何がどうなのよ？」

「ああ、もう！ 分からないかなあ？」非共感に落胆したマリーは、分かり易い価値観に置き換えてくれはった。「例えるなら『ニュートンとアインシュタインとホーキング博士とスティーブ・ジョブスが共同製作した限定版ゲームソフト』みたいな物なの！ それもサイン入り！」

「要るかッー！」

「ウチ欲しいー！」

「黙ってるツツーの！ この脳ミソファミコン娘！」

リンちゃん、あんまりや……。

「天条リン、コレが邪な者の手に落ちたら大変な事になる」

「はあ?」

「このへネクラナミコンを総て集めた者は〈神の如き力〉を得ると言われている」

「いきなり飛躍したわねツ? ホーキング博士とかアインシュタインとかはドコ行ったワケツ?」

「せやったら、全次元宇宙に『白玉抹茶毎日無料フェア』も起こせるんツ?」

「可能」

「……黙ってる、脳ミソ白玉娘」

リンちゃん、あんまりや。

「そういうワケで……マリー・ハウゼン、協力を願いたい」

「はい、喜んで!」

満面の笑顔に染まるマリーは、居酒屋みたいな元気に快諾した……って、うん?

ウチとリンちゃんは顔を見合わせ——「ちよつと待ってえええーツ?」——慌てて静止したわ!

「何を勝手に快諾してんのよ! そんな面倒事! だいたい、それって次空航行の長旅になるって事じゃない!」

「そやよ! それにクラゲは? クラゲは、どないすんの?」

「大丈夫だよお?」にへらつと朗らかに笑うマリー。「だってへ宇宙クラゲもへネクラナミコンも両方探すから、長旅だって退屈しないよお?」

「『そういう事じゃなくてツ!』」

ウチとリンちゃんの直訴も空しく、二〇歳の子供は退室した。ルン気分笑顔で。

「やっぱり宇宙はワクワクでいっぱいだあ ♪」

オートドア閉じた。

絶句に固まるウチとリンちゃん。

ややあって、クルちゃんが席を立つ。

「陽ノ咲モモカ、天条リン、今後ともヨロシク」  
退室した。

オートドア閉じた。

ウチとリンちゃん、絶句に固まり続ける。

そして——「メガネ屋さんドコー——ッ？」——悲痛な叫びが、  
閑寂とした食堂に木霊したわ……。



ウチと惑星テネンス  
ウチと惑星テネンス Fractal. 1

クラゲ探索……って言うか、クルちゃん救出から二日経った。

ウチは教室の机に突っ伏して、思わず「ふぐう」と半べそや。次の授業を準備しようとして哀しかった。

うん？ セヤよ？

特に任務に当たつたらん時は、学生やねんよ？

つまり「女子高生」いうヤツや。

せやから、ウチもリンちゃんも〈PHW〉やあらへんねん。紺色のブレザー制服やねん。

ほんでもって、此処へコスモウイズ・スクール〉は〈ツエレーク〉内部の都市区画コロニーブロックに在んねん。

前も言うたけど〈ツエレーク〉は全長三〇〇メートルにも及ぶ巨体や。

その内部は都市区画も建造されとって、そこに在んねん。

長期間宇宙航行を前提とした場合、いちいち惑星都市や衛星ステーションへ帰還するんは非効率過ぎて実用的ではあらへん。せやから大型宇宙船自体を小規模な宇宙居住地スペースコロニーとして活用しとるいうワケや。

ともかく新たな指示が入るまで、ウチとリンちゃんは日常生活に戻つとる。簡単に言うたら「待機中」いうヤツやね。

「どうしたのよ？ モモ？」

隣席のリンちゃんが怪訝けげんそうに訊ねてきた。

ブレザー姿やから見た目の清廉さが一層際立つとる。

中身は同じやけど。

「あんな？ 壊れた……」

「頭が？」

「違うよ！　ヘリウム銃ガンや！」

「は？」

「ウンともスンとも言わななつた……」

「次の授業『宇宙塵対策の射撃実習』じゃん？　どーすんのよ？」

「ふぐう……どうしよう？」

「みるみる視界にじが滲にじんだよ？」

このヘコスモウイズ・スクールは、旧暦でいう「学校」とは若干概念が違ちがうねん。

基本的な「学力向上教育を受けるための学習施設」だけやなくて「自身が宇宙生活へと適応するのに必要な知識や技能を拾得する教習施設」でもあんなや。

具体例としては『宇宙船の操縦方法』『エネルギー機器の扱い方』『無重力空間での作業ノウハウ』とかやね。

宇宙環境で生活するとなれば、まず最優先に習得せなアカンのは、そういう実践的スキルやもん。

それが無かつたら「宇宙航行艇コスモクルーザー」で宙域活動も出来へんから、他惑星ステーションへ買い物や外出も行けへんよ？

何よりも宇宙生活は些細な事で大小様々なアクシデントが生じるから、いざという時に身を守る対応も出来へん。

……危険や。

……死と隣り合わせや。

「原因は？」

「知らへんよ」

「じゃ、心当たりは？」

「判らへんねん」

「落としたとかも？」

「落としたよ？」

「何処で？」

「家で。手エ滑すべってツルーンと。そしたら、味噌汁鍋みそ汁鍋に落ちてん」

「……それだわ」

「どれだわ？」

「ドジも大概にしないと、単位不足で進級できないわよっ。」

「ふぐううう……」

「だいたいアンタは、いっつも抜けて——」  
「ふぐううううう……」

何や視界が涙でプールみたいになった。

どうしたらエエか分からへん。

「えつぐ……えつぐ……ふええ……」

「なな泣く事ないじゃん！」

「せやかて……進級出来へんかったら、リンちゃんと離れ離れなつてまうー！」

「はあ？ そっち？」

「ウチ、イヤや！ リンちゃんと一緒にエエ！」

「つたく……見せてみ？」

軽い溜め息がてらに、ウチのヘリウム銃を調べるリンちゃん。

「電磁銃口の調子は撃ってみないと解らないとして……とりあえず変換システムには異状無いみたいね。となると、圧射式撃鉄？ んゝ……でもないみたいだし……」

入念にヘリウム銃を観察してはる。

そしたらな？

——ズドオオオー——

銃、大暴発した。

銃口からクラッカーみたいに、ぎょうさん榎茸が飛び散って、窓ガラス全部木端微塵にした。

直つたみたいや……。

さすがや！ リンちゃん！

「まったく貴女達は、毎回毎回……」

校長室——ウチとリンちゃんを傍らへ立たせたマリーは、こめかみ押さえに溜め息を零した。

これで何度目の光景やろか？

デジャヴしかないわ。

「ア……アタシじゃないもん！　これはモモが——」

「天条さん、言い訳しない」

「うう……」

せやねん。

日常に於けるマリーは、ウチらの校長先生やねん。

このへツエレーク<の艦長にして校長やねん。

ウチらがマリーに逆らえん理由のひとつや。

「あんな？　マリー？」

「陽ノ咲さん、学校では『校長先生』を付けなさい。最低でも『先生』は必須です」

「あんな？　マリー？　校長？　先生？」

「……分けない」

「ウチ、リンちゃんと一緒にエエ」

「……はい？」

「せやから、ウチも進級したいねん」

「だったら、勉強に励み、問題を起こさない」

「イヤや！　ウチ、勉強キライや！」

「アンタ大物か」

隣のリンちゃんが、呆れながら指摘しはった。

マリーは再び溜め息や。

「その救済処置として、貴女達には、私の『探索活動』を手伝わせているのだけどね……」

「いや、その『貴女達』ってのヤメてくんない？　アタシは『モモの

お守り役』だし？　アタシ、成績いいし？」

せやねん。

これがウチら——っていうか、ウチ——が『マリーに逆らえん理由その2』や。

マリーの私的研究の手伝いしたら、多少は単位に下駄履かせてもらえんねん。

簡単に言えば『単位目当てのアルバイト』や。

実際、マリー自身から小遣い程度の報酬も出るけど。

ちなみに分野は『総合宇宙考察学』とかいうヤツで、文字通りに『あらゆる学問分野を総合的に融合考察して宇宙史全体を研究する新鋭分野』らしい。せやけど、それがどういったものなのか……実はウチ、よう解らへん。難しいのキライヤもん。

もちろん教職者としては禁則タブーやよ？

せやから、周りには内緒や。

この事を知ってるんは、レスリー長官と銀邦政府ぎんぼうせいふの一部だけやねん。

まあ、そうした『学生的事情』以外にも、理由はあんねんけどね？  
それは追々おおいおいや。

「……とりあえず、また『個人教授』の申請はしておいたわ」

「は？　って事は、またアタシ達へ探索へに狩り出されるワケ？」

サラリと告げるマリーに、リンちゃんが頓狂とんきやうな抑揚よくやうで訊ね返す。

ウチとリンちゃんが出動になる時は、マリーが『個人教授』として学校へ休暇申請すんねん。

便宜の名目は『現地実習』や。

そうでもない、長期不登校扱いになつてまうからやねんね？

もちろん、そうそうしよつちゆう罷り通る理由まかとおでもあらへんのやけど、それを可能としているんは『マリーが銀曆学会ぎんれきアカデミーきつての天才やから』と『校長権限の職権乱用』……それから『レスリー長官の御墨付

き』という三重の威光が効いとるからや。

「って事は、クルちゃんから何か情報の進展があつてん？」

「ええ、どうやら次なるへネクラナミコンを察知したみたいね」

「クラゲは？　どないしたん？」

「現状、行動が沈黙化しているから手の打ちようがないわ。当面はへネクラナミコンへ優先ね」

「ったく、どつちもこつちもメンドクサイわね」と、リンちゃんは吐き捨てた。心底辟易へきえきしてはる。「で？　いつからだツツのよ？」

「いまからよ？」

「……………はい？」

『ツエレーク、空間転移完了——量子波動安定化——現フラクタルブ  
レーン座標照合、3 f フラクタル \ 4 b プレーンデイメンション  
差修正——滞在可能推定時間、二時間二〇分リミット——』  
次空転移が終わった。

また別のへフラクタルブレーンや。

ウチらはツエレークの操縦室<sup>ブリッチ</sup>——とは言っても艦橋型やなく頭部  
内の大型コックピットやけど——から、新たな探査舞台となる宇宙空  
間を眺めとった。

「んで？ そのへネクラナミコンとやらは、何処に有るワケ？」

リンちゃんがクルちゃんに訊ねる。

そこはかと無く不機嫌やね？

あ……たぶん、まだクルちゃんに心を許してないん？

「天条リン、訂正しておく。正確にはへネクラナミコンの欠片……」  
「どっちでもいいツツーの！ アタシはさっさと片付けて、面倒事を  
軽減したいんだから！」

「……了承した」

クルちゃんは感情の機微も見せず、徐<sup>おもむろ</sup>に手近なコンソールを操作  
し始めた。

それによって、室内中央に身の丈以上の大きな仮想<sup>ヴァーチャル</sup>ディスプレイ  
が電子板と立つ。

そこに投影されたんは、この周域を纏<sup>まと</sup>めた宇宙海図や。  
無論、事前にデータがあったワケやないよ？

時空転移直後、ツエレークは周囲にへニュートリノビーコンを散  
布照射して、その反響を即時キャッチ——そのデータを基にリアルタ  
イム構成したものや。

つまりへクルちゃんのエイを仮想モデリング識別した方法の広域  
版や……って、事前にリンちゃんから叩き込まれたわ。

事前にスパルタや！

ウチ、勉強キライやのに……ふぐう！

「このまま進行すればへ惑星テネンスに遭遇する。そこに有るはず」  
<sup>ヴァーチャル</sup>仮想宇宙海図を指して、今後の指針を示唆するクルちゃん。

「惑星テネンス……どんな惑星なの？」と、表マリー。

「樹林や草花に恵まれた惑星。原生生物は、その恩恵によって自然共存サイクルへと帰属している」

「ふ〜ん？ で、何でアンタはヘネクラナミコンの在処ありかを断定できるワケ？」

露骨な値踏みを向けるリンちゃん。

クルちゃんは一瞥いちべつを向けて種明かし。

「理屈は簡単。このヘネクラナミコンは、引かれ合う性質だから。私は、その意思を伝達しているに過ぎない」

「へえ〜？ アンタ、石と話せるの？ 人間相手にはコミュ障なの？」

「別に『石』と話せるわけではない。単にヘネクラナミコンの意思に關しては感受でできるだけ」

「つまり『選ばれし巫女』って？ 御大層な身分じゃん？」

リンちゃん、ちよつと攻撃的や。

コレ、良くないねえ？

クルちゃん、さすがに可哀想やんな？

「だったら、いっそ石コロと友達に——」

「ふぐう！」

「——なったらタタタタターツ！」

えへへ ♪ ギュツとしたった ♪

ハグしたら、みんな仲良しなるよ？

「コラ！ モモ！ 放せ！ このベアハツグ娘！」

「仲良うしてえ！ ウチ、リンちゃんとクルちゃんに仲良うしてもらいたい！」

「放せツツーの！」

「イ〜ヤ〜やあ〜！ 仲良うしてえ！ ウチ、どつちも友達やもん！」

「……うっ！」

涙汲んだウチの顔を正視して、リンちゃんは少し息を呑んだ。

そして——「ハア……分かったツツーの」——承諾してくれた ♪

「ほんま?」

ウチはコクンと小首傾げて確認する。

「仲良くするかどうかはソイツ次第として、とりあえずへネクラナミコ  
ン探索には素直に準じるわよ」

「天条リン、決断に感謝する」

「言っておくけど! もしも『アンタが信用できない』と判断したら、  
即座に〈敵〉として認識するからね! それに——」リンちゃん、ウ  
チの頭を撫で撫でしてくれた。「——この子を危険な目に遇わせたら  
承知しないんだから……」

何やエライ小声やねえ?

眩き、聞き取れんかったわ。

「……了承した」

クルちゃん、聞き取れたん?

耳いいねえ?

でも、これでみんな仲良しや ♪

せやからウチ、リンちゃん好きやねん ♪

ツンツンしとるけど、ホンマは優しいねん ♪

「リンちゃん大好きや ♪ ふぐう ♪」

「イタタタタタツツ?」

嬉しなつてギユツとしたつた ♪

「承諾したのに、何で更に絞めつけてんだツツのオオオーツツ!」

「ぎゃん!」

ハリセンや!

「うう……痛いよ? リンちゃん?」

「潤々して『痛いよ?』じゃないツツの! 毎回毎回、何でこの流れ  
だ! 少しは学習しろ! この脳ミソ新喜劇娘!」

リンちゃん、あんまりや……。

そんなこんなの姦しきかしまの中で、目的の惑星は接近しとつた。

もうすぐ出動や。



ウチと惑星テネンス    F r a c t a l . 2

地平線から青の天幕と緑の絨毯じゅうたんが広がってくる。

「クルちゃんの言うた通り、自然がいっぱいやね?」

『キュキユーウ ♪ 』

イザーナも喜んぞる。

うん、ウチとリンちゃんはへイザーナとへミヴィークで惑星へと降下した。ついでに言えば、今回はクルちゃんもへエイで同行や。せやねん。

この子達、大気圏内でも運用可能やねん。

ほんでも、さすがにへツエレークは無理や。

そこがへ大型宇宙船スペースシップとへ宇宙航行艇コスモクルーザーとの差異でもあんねんな。

『大気濃度は……正常値か。バイザーメット無しで降りても問題無さそうね』

地表データの計測結果を把握するリンちゃん。

『天条リン、陽ノ咲モモカ、このまま座標IP1600/EP800へと向かう』

クルちゃんからの通信指示や。

『そこにへネクラナミコンが有るんでしようね?』

『間違いなく、その辺りに存在する』

『その辺りですって? あやふやな情報で私達を動かすなツツの!』

『私は所有するへネクラナミコンの意思を感受し、それを伝えているだけ。位置詳細までは特定できない』

うくん、相変わらず『水と油』やんね?

ウチ、仲良うしてほしいのに……。

あ、せや!

「あんな? クルちゃん?」

『何? 陽ノ咲モモカ?』

「その子、何て名前なん？」

『その子？』

「うん、そのへエイさん」

『名前は、まだ無い』

文学猫みたいな返答されたわ。

「名無しの権兵衛はアカンよ？ 可哀想やん？」

『じゃあへゴンベエでいい』

クルちゃん、短絡過ぎや。

『どーでもいいツツーの！ 名前なんて！』

「アカン！ ちゃんと考えてあげな可哀想やん！」

『名前の使用目的は個体識別。それならへゴンベエでも問題無いはず』

『うくん……だけでもないのよね』

優しい苦笑いで通信を挟んできたのは、表マリーやった。

一方でクルちゃんは腑に落ちない様子や。

『マリー・ハウゼン、他にも用途があるの？』

『そうね。とりわけ共感性を意識したコミュニケーションでは名前つけて大事よ？』

「なら、マリー・ハウゼン……アナタに一任する』

『え？ 私？』

「せや！ マリーなら名付け親に適任やん？ この子達やへツエレクは、マリーが名付けたんやし？」

『私……って言うか、お爺ちゃんだけどね？』

ウチらにしてみれば大差ないよ？ マリー？

『うくん？ そうねえ？ へツエレクやへイザーナ達はへハウゼン語なのよね……』と、顎線あごせんを指でトントンしながら思案。

っていうか、いま聞き捨てならへん単語聞いたよ？

『……マリー？』

『何かしら？ リン？』

『いや、そのへハウゼン語って……何？』

『ああ、私のお爺ちゃんが作り出した新言語よ？』

来るべききた宇宙時代

を見据えて〈宇宙共有語〉を作っていたの……個人趣味で』

『ヤバい人じゃん！ 単なる『イタい人』じゃん！ ウイリス・ハウゼン！』

……道理で聞き覚えのあらへん響きやったワケや。

『まあ、浸透しないで消えちゃったから、ハウゼン家にしか通じないけどね？』と、淡い苦笑に肩を竦める。

『いや、でしょうね！ 意図的に流行らそうと思って流行るモンでもないもんね！ 言語って！』

『で、確かヘイザーナが『博愛』でヘミヴィークが『勇敢』……このヘツエレークは『叡智』だったかしら』

どんだけ浸透しなかつたか分かる気もしたわ。

だって、孫娘のマリーがウロ覚えやし。

『あと覚えているのは……えつと……そうそうヘドフィオン〈辺りは、どうかしら？』

いや『どうかしら？』言われても分からへんよ？ そもそも？

ハウゼン家だけに伝わる暗号みたいなモンやんか？

『んで、意味は？』

半ば呆れて投げ捨てやね？ リンちゃん？

『意味は『不思議』よ？』

何で此処に来て、その意味を選びはったん？ マリー？

『はいはい、それでいいツツーの！』

リンちゃん、ついに丸投げや。

『了承した。では今後、本機を〈ドフィオン〉とする』

……受け入れはったねえ？

何の躊躇も無く、クルちゃん受け入れはったねえ？

何や分かん展開に軽く困惑を覚えたウチは、眼下の大自然へと関心を逃がした。

延々と敷き広がる深緑の樹海。

と、変な物を見つけた。

「……あんな？ リンちゃん？」

『は？ 何だツツーのよ？』

「アレ、何？」

ウチからの示唆に、リンちゃんは対象を視認した。

『……異常なし』

リンちゃん、視認物体を無視しよったわ。

何や繁る樹々に紛れて、大きい脚が生えとったよ？

ドデーンと逆立ちに生えとるよ？

鋼鉄製の脚が……。

まるで『犬●さん家の一族』の名シーンみたいに、上半身を地面に埋もれた状態で……。

「リンちゃん、アレってドクロ——」

『異常なし！』

無下に遮って断定しはった。

「天条リン、アレはドクロイ——」

『異常なしッ！』

クルちゃんからの指摘も無下に遮りはった。

語気強く。

どうあっても「見なかった事」にする気やね？

ウチの釈然としない思いを残したまま、イザーナとミヴィークとドフィオンは茫洋とした青空を泳ぎ去って行く。

ゴメンね？

ドクロさん？

「ほんなら、此処で待つとってね？」

『キュウキュウ ♪ 』

『ケルル！ ケルル！』

『クルルル……』

イザーナとミヴィーク——そして、ドフィオン——を森の中で待機させて、ウチらは惑星探索に降りた。

「とは言うものの、こっからどーしたモンかしら？」

パモカナビと周囲を見比べて、リンちゃんが零す。

「街で聞き込みする？」

森の中を並び歩き、ウチは顔を覗き込んで提案した。

ウチの半歩後ろには、トテトテと無表情でついてくるクルちゃん。ちなみにクルちゃんの P H W は紫色や。

「そもそも街が在るかも分からないツツ一の」

「リンちゃん、ナビ見とるやん?」

「初遭遇の惑星で地図なんか有るか。これは単に磁極を確かめてるのよ。方角だけは把握しておくように」

「ふくん?」

「だいたい在ったら在ったで、どう訊ねるっていうのよ?」

「素直に訊いたらええやん?」 「根暗な巫女さん」 知りませんか――

――って?」

「……見知らぬ女がゾロゾロ集まって、マニアックなミスコン状態になるわ」

と、不意にクルちゃんが口を挟んだ。

「陽ノ咲モモカ、再度訂正しておく。我々が探しているのはヘネクラナミコンであって、根暗な巫女」ではない」

「……えへへ」

「何? 陽ノ咲モモカ?」

「クルちゃん、やっと会話に参加したねえ?」

「……それが?」

「ウチ、何や嬉しい」

「……そう」

「うん」

「どーでもいいツツ一の」

リンちゃん、物臭そうに憎まれ口を叩いとった。

けど、ウチ見てたよ?

肩越しに盗み見て、クスツと優しく苦笑してたの……。

せやからウチ、リンちゃん大好きやねん」

テコテコと三人揃って歩き続けていると、ややあって正面に白い光が射し込んだ。樹木のトンネルや。

どうやら出口みたいやね?

ようやくにして繁る緑を抜けると、拓けた草原が燦々と明るい日射しに出迎える。

そこで一旦、ウチらは足を休めた。  
作戦会議や。

「地図も手掛かりも無し……はてさて、どうしたモンかしら？ 座標IP1600／EP800には間違いないけど、人間縮尺にすれば結構な広範囲だし……」

立ち尽くしながら思索に耽入るリンちゃん。

「ねえ、アンタ？ 何か知らないの？ そのヘネクラナミコンとやらの在処？」

「さて？」

振られたクルちゃんは、クルコクンで返しはった。

可愛いねえ？

ウチより小柄やから、何や妹みたいや ♪

「眠たそうな顔して『さて？』じゃないツツーの！ アンタ、その石コロと話せるんでしょ！」

「天条リン、未だに誤認しているようなので訂正しておく。私は所有するヘネクラナミコンの意思を感受し、それを伝えているだけ。位置詳細までは特定できない」

「……使えねー」

リンちゃん、ゲンナリ顔や。

ウチは傍の岩に座って、おとなしくリンちゃんとクルちゃんの方針決定を待つ事にした。

と、正面の樹林から女の人が出てきはった。

何や鎧装束を着た美人さんや。

うん、昆虫みたいな鎧やった。

ヘルメットの頭頂には大きな複眼が据えられとって、長い触覚が生えとる。

そういえば旧暦には『仮面ナンタラ』いう変身ヒーローものがあったらしいけど、あんな感じやろか？

せやけどフルフェイスやなくてオープンヘルム形状やから、可愛ら

や。  
しい美少女顔は露出してはった。繊細な線で纏まとまったべっぴんさん

零れる銀色のロングヘアが揺れると、まるで光のカーテンを思わせる綺麗さが演出された。

見た感じ、ウチより若干じやっかん年齢上しうえやろか？

妙に大人っぽくて、穏やかな雰囲気ふんいきのわりには凛々しく引き締まったカッコよさも印象付ける。

あ、目が合った。

アツチもウチを見つけたねえ？

予測外の遭遇に戸惑っているようやから、ウチはニコニコ笑顔で手を振った。

何や？ 怪訝けげんそうな表情を浮かべとるよ？

「磁力的には、あっちが北だから……」

リンちゃん、まだ考えとるねえ？

あ、せや！

あの人、何か知ってへんやろか？

教えてもらうたら、リンちゃんの手間も省けるやんな？

ウチ、相手の所までトテテテツと駆け寄った。

「こんにちは ♪」

「え？ な……何です？」

「こんにちは ♪」

「あ、はい……こんにちは」

改めて間近に見れば、やっぱり結構な美人さんやった。  
スラツと目鼻が通った顔立ちに、穏やかそうな眼差し。

微々と靡く銀髪はサラリと長くて、朝陽の射光みたいや。  
ウチ、ほわつと笑顔で話し掛けてみた。

「あんな？ ウチ “陽ノ咲モモカ” 言うねんよ？」

「え？ あ、はい……」

「ほんでな？ 根暗な巫女さん、知らへん？」

「え？」

「ウチ、搜してんねん」

「いえ、そういう知り合いはいませんけど……」

「そうなんや？」

「はい」

ウチはニコニコと笑顔を向ける。

「……………」

あちらさん、黙って見つめ返しとった。

「……………」

ニコニコ ♪

「街どこ？」

「え？」

「ウチ、街へ行きたいねん」

「えつと……ゴメンなさい。私も、この辺りは知りません」

「せやの？」

「はい」



「……………」

「……………」

ニコニコ ♪

「此処どこ？」

「え？」

「せやから、此処どの辺？」

「ですから、私も初めての場所なので知りません」

「せやの？」

「はい」

「……………」

「……………」

ニコニコ ♪      ニコニコ ♪

「何歳？」

「え？」

「せやから、何歳？」

「え……つと、十八歳ですけど？」

「ふええ？ そないに変わらん年齢としなん？ 大人っぽいねえ？」

「そう……ですか」

うん ♪      ウチ、十六歳 ♪      「

「はあ……」

「……………」

「……………」

ニコニコ ♪      ニコニコ ♪

「アリさん？」

「え？」

「せやから、その鎧へアリさんくがモデルなん？」

「ゴメンなさい、さつきから何を言ってるか解らないんですけど？」

「何で？」

「いや、小首コクンと『何で？』って……あの、とりあえず、その無垢

顔やめて下さい」

「……………」



「ウチ、陽ノ咲モモカ」言うねんよ？」

「いえ、それは先程聞きました……」

「その前に！ 他人へ質問するなら、まず自分の名前から名乗りなさいよ！」

リンちゃん、強気や。

初対面なのに強気や。

「あ、スミマセン……私は、アルゴネア・リイズ・コーデス」という者です」

それを受けたリンちゃんは、ロングポニーをフワサアと鋤き流して絶対無敵な自尊を誇示。

「耳の穴かっぽじって、よく聞きなさい！ アタシは、リン」！  
銀暦有数の大企業へ星河コンツェルンの娘「天条リン」よ！ 可能なんて無いんだから！」

「……はあ」

虫娘さん、どう対応していいか分からへんといった感じや。

そりやそうやんな？

初対面で、いきなりこんな自己紹介を聞かされても困るだけやんな？

せや！

ウチ、アダ名を付けたげよう！

アダ名付けたら距離縮まるよ？

すぐに仲良うなれるよ？

「ほんなら、略して、アリコちゃん」や ♪ 「

「アアアアリコちゃん？」

「……黙ってろツツーの。脳味噌フレンドパーク娘」

リンちゃん、あんまりや。

「で？ その、アリコさん」が、初対面のアタシらに何の用だツツーのよ……」

「アリコじゃありません！」憤りに抗議したあと、深い溜め息に気持ち切り替えるアリコちゃん。「あの……この人を見ませんでした？」

そう言っパモ力を取り出すと、立体映像を投影する。

カードの上に立体化したミニチュアファイギュアを見るなり、リンちゃんは閉口へいこうにフリーズした。

巖いかについロボットの胸に大きな骸骨の意匠と、野牛のような角を生やしたスカルヘッド——ドクロさんやった。

「へドクロイガー」って言うんですけど——」

「アハハハハ」♪ 知らなくい★」

ウソつきはったよツ？

カワイコブリッコにしな繕つくろって、ウソつきおったよツ？

「ずっと探してるんですが……」

「ゴメ〜ン？ 知らなくい★」

「そうですか。結構な巨体だから目立つし、見た人もいるかと思っただんですけど……」

「見てなくい★」

「天条リン、これはへドクロイ——」

「——聞いた事もなくい★」

クルちゃんの指摘ていささえも遮しやったわ。

どうあつても黙殺する気やんね？ リンちゃん？

再び森の中をさまよう。

かれこれ三〇分歩き通しや。

先頭はリンちゃん。

次がウチ。

並んでクルちゃん。

ほんでもつて、最後尾がアリコちゃんや。

「つてか！ 何でアンタまで同行してんだツツーの！」

「スママセン。一人では何かと心細いもので……」

「ええやん？ リンちゃん？ ウチ、いっぱいの方が楽しい♪」

「……黙ってる、脳味噌西遊記娘」

リンちゃん、あんまりや。

と、不意にクルちゃんが会話に割り込んだ。

「アルゴネア・リーズ・コーデス、質問がある。その容貌からして、ア

ナタは〈ジアント〉だと推察した。その推測で間違いない？

「え？ あ、はい。私は〈ジアント〉ですが？」

「やはり」

納得するクルちゃん。

初耳用語に顔を見合わせるウチとリンちゃん。

「ジアント？ 何よ？ それ？」

「この惑星テネンスに生息する知的生命体種族。我々の次元で言えば〈蟻人間〉といったところ」

「ふくん？ って、アレ？」

「何？ 天条リン？」

「何でアンタ、そんな『他次元情報』にまで精通してんのよ？」

「……………」

「……………」

「V！」

「いや！ 無表情に『V』じゃないツツーの！」

クルちゃん、Vサイン出しはった。

何や？ 結構、茶目つ気あるやんな？

「私は〈ジアント〉の誇り高き戦士……。先日、集落<sup>コロニー</sup>を襲撃してきた〈ドクロイガー〉という者と一戦交えたものの逃がしてしまいました。彼の者のせいで集落<sup>コロニー</sup>も半壊の大打撃……。現状<sup>いま</sup>再襲撃されたら、今度こそ危ない。その前に見つけ出して決着をつけて、先手を打たないと……………」

「ふくん？ だから〈ドクロイガー〉を追って、さ迷ってた……………ってトコか」

「はい……………って、え？」

「何だツツーの？」

「いえ、先程〈ドクロイガー〉なんて知らない——と？」

「……………」

「……………」

「え〜？ アタシ、何も言ってなくい★」

「え？ だって、いま……………」

「ヤダア〜? 聞き違〜い★」

変わり身早ッ!

リンちゃん、変わり身早いよッ?

と、その時!

周囲の繁みから大勢の人影が姿を現した!

「な……何?」

狼狽<sup>うろた</sup>えるウチ!

いや、今回ばかりはウチだけやない!

リンちゃんも……アリコちゃんも……全員が狼狽<sup>うろた</sup>えた!

……クルちゃん以外は。

完全に包囲されとった!

それも、相手は「異形」や!

その容姿は、簡単に言えばスズメバチ怪人!

全身は黒光りするキチン質甲殻で、背中にはシャープな透明羽が四枚。

頭部は言わずもがな蜂ヘッド。半円形に吊り上がった巨大複眼や鋭利な鎌型牙が秘めたる攻撃性を窺<sup>うかが</sup>わせる。

せやけど、アリコちゃんとは違<sup>ちが</sup>うて、昆虫色が強い。

人間的要素は口元<sup>くちもと</sup>だけや。

薄い唇は女性的で……というか、全身的なフォルムがスレンダーで女性的やった。

うん、きつと「女性」や。

前腕部位には黒縞の黄色い生体籠手が付いとる。蜂の尻部を彷彿させる代物<sup>シロモン</sup>やった。

おそらく針が出るやんな……アレ。

「へアルワスプ〜!」

咄嗟<sup>とつさ</sup>に臨戦態勢を構えるアリコちゃん!

手の甲に有った小さな二対の鎌爪が、巨大に生え伸びて刃と化する!

「な……何だッつーの! コイツら〜!」

狼狽<sup>うろた</sup>えながらもヘリウム銃<sup>ガン</sup>を取り出すリンちゃんに、クルちゃんが無抑揚な解説を答えた。

「彼女達はへアルワस्प〜——この惑星テネンスに於いてへジアント〜と双壁となる高度知性種族」

「見つけたぞ！ アルゴネア・リイズ・コーデス！ 今日こそ、我々と共に来てもらおう！」

「性懲りもなく！」

アルワस्पの警告に、アリコちゃんは忌々しく齒噛みした！

そして、蟻型ヘルメット頭頂の複眼部位がガシヤツとスライドダウン！

人間的美観は口元くちもとだけになった。

つまり、包囲しているへアルワस्प〜と同じや。

コレでへ蟻かへ蜂かだけの差になった。

ってか、何や？

アレ、ヘルメットバイザーになるんや？

あれれ？ って事は、つまり——や？

ウチはトテテテツと手近なへアルワस्प〜さんに駆け寄った。

「こんにちは ♪」

「な……何だ！ 貴様は！」

「こんにちは ♪」

「何だと言っている！」

「こんにちは ♪」

「だから、貴様は——」

「挨拶、大事！」

「あ、はい……こんにちはは」

ウチがプンプンしたら、ようやく挨拶返してれた。

えへへ ♪

「あんな？ ウチ 陽ひノ咲さきモモカ”言うねんよ？”

「……で？」

「上がるん？」

「は？」

「せやから、その目のトコ。ガチャンって上がるん？」

「……上がるが？」





「……あの、すみません？」

「何？ アルゴネア・リーズ・コーデス？」

「あの娘、どういう娘なんです？」

「未知数……私も、よく把握しきれていない」

そして、ウチらは連行された。

多勢に無勢やった。

それ以前に、ウチが人質にされたからやねん……。

「ぎゃんー」

大広間へ投げ放り込まれて、ウチは無様にヘッドスライディング！  
蜂さん達の基地や。

大きな山があつて、その岸壁に吊るされる形で築きずかれたつた。  
蜂の巣の巨大版や。

ウチは改めて室内を見渡した。

内壁の素材は分らんけど、くすんだ茶色がミルフィーユみたいに  
濃淡の層を描いとる。おそらく「樹皮」や。それを積み重ねたもの  
やろね。

微かに甘い香りが、ウチの鼻腔をくすくす擦った。

部屋の奥には蜜蝋を固めたような太い支柱が数本立つとつて、大き  
な花卉質のヴェールが結界のように張つとる。

その内側に据えられとるんは、器用に枝を絡め作った装飾過多な椅  
子。

座つとるんは、豪華な風貌の蜂女さん。

他の蜂さんとは若干異なる。

女性の口元くちもとは同じやけど、他の蜂さんよりも少しゴージャスな外殻  
やった。柄も凝つてる上に、色彩の所々に金や銀も混じつとる。大き  
さも一回り大きい感じや。

周囲の蜂さん達はビシツと規律めいて直立不動。

たぶん「偉い人」やねんね？

「おそらく〈女王蜂〉ってトコか……」

「天条リン、その推測は正しい。アレは〈クイーン・アルワスプ〉——  
彼等にとって唯一無二の統治者」

「見りや判るツつーの。こんだけ〈蜂〉を模倣トレムスしたような連中ならね」

「……理解していない者もいる」

「はあ？ んなバカいるワケ——つて、モモツ？」

「こんにちは ♪」

ウチ、女王様の前までテクテク進んで、ニッコリ笑顔で挨拶したつた ♪

「何だ？ 貴様は？」

「あんな？ ウチ “陽ノ咲モモカ” 言うねんよ？」

「その “陽ノ咲モモカ” とやらが何用だ」

「ウチ “根暗な巫女さん” 探しとんねん。知らへん？」

「知らぬ」

「せやの？」

「知らぬ」

「……………」

「……………」

「あんな？」

「何だ？」

「此処、さつきから甘い匂いするねえ？ 何で？」

「それは、この宮殿が “アマリの樹” を基礎素材としているからだ」

「此処、宮殿やの？」

「そうだ」

「ふええ……………スゴいねえ？」

「……………」

「……………」

「あんな？」

「何だ？」

「さつきの “アマリの樹” って何？」

「我等 “アルワスプ” の主食にして、諸々の建築資材だ」

「木イ食べとるん？」

「樹皮ではない。蜜だ」

「おいしい？」

「美味だ」

「ウチ、食べてみたい ♪」

「嬉々と何を言っている？ 貴様は？」

「アカンの?」

「己わかまを弁えろ」

「自分を? あ! せやから、ウチ “陽ひノ咲さきモモカ” 言うねんよ? 覚えて?」

「……先刻聞いた」

「……………」

「……………」

「ほな、バイバ☆イ★」

「うむ、バイ……バイ?」

「リンちゃん、食べてみたいねえ?」

「質量倍イイ……ツ!」

「ぎゃん!」

叩かれたよ?

トテテってリンちゃんのトコへ駆け寄ったら、大きめのパモカハリセンで叩かれたよ?

けたたましい破裂音に、居合わせた蜂さん達がビクウと色めきはつた。

「うう……リンちゃん、痛いよ?」

「……今回は、もうツツコまないかんね」

イヤや! 放置はイヤや!

「久しいな、アルゴネア・リイズ・コーデス」

静かな威圧感でアリコちゃんに注視を傾ける女王蜂さん。

「……ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ビースウオームIV 世!」

キツと睨み返すアリコちゃん。

長い名前やんね?

あ、せや!

「ほんなら “ハツちゃん” でええ?」

「……ならぬ」

小首コクンと提案したら、無下に却下されたわ。

「皆の者、下がれ。我われは、この者達と直接に話がしたい」

「なりません！ ハーチェス様！ その身に万ヶ一の事があつては！」

「案ずるでない。我は「ハーチェス・エルダナ・フォフォン・アルラワ  
スプ・ビーソームIV世」——」

「噛んだねえ？」

「噛み倒したねえ？」

「——実力にて「アルワスプ」の頂点に君臨する者だ。飾り物ではな  
い」

「し……しかし！」

「くどい！ 我こそは「ハーチェス」なるぞ！」  
略したねえ？

「噛むのを回避するために略しはつたねえ？」

「凜然とした威風を当てられた配下達は、渋々と一斉に退室していき  
はる。」

「軋む大扉が重い閉鎖音を鳴いた。」

「静寂——。」

「緊迫した空気が、室内を緩やかに攪拌する。」

「やして……」

「女王蜂は玉座から立つと、悠々とウチらに歩んで来た！」

「どうやらターゲットは——アリコちゃんや！」

「何やら因縁があるのやろね。」

「さっきの一幕を見るに……」

「明らかな焦燥を美貌に孕み、アリコちゃんは少し後退った。」

「クウ！ ハーチェス・エルダナ・フォン・アルワスピ・ビーヌウォー  
ムIV世！」

「軽く噛んだよ？」

「女王は歩を止めへん。」

「そして、アリコちゃんの眼前で立ち止まった！」

「フッフッフ……アルゴネア・リイズ・コーデス、会いたかった……」

「実に会いたかったぞ？ この瞬間を、どれほど待ち侘びた事か」

「私は会いたくなどありませんでした！」

「さて、どうしてくれようか……クッククック」

「ち……近付くな！ いや……いやあああ……ッ！」

アリコちゃんの悲鳴が木霊した！

抱き締められて、頬擦りスリスリされたから！

うん、スリスリや！

美少女抱き枕みたいにスリスリハグや！

「ああん ♪ もうアルってば、会いたかった会いたかった会いたかったくん ♡」

「やめ……うひゃう！ やめろ！ 放せ！ うひゃああ！」

「うふふ ♡ うふふ ♡ うふふふ ♡ アルウくん ♡」

悲鳴と恍惚が入り交じつとる。

コレ“地獄絵図”でええのん？

「……何だツツーの？ この光景？」

リンちゃんが醒めながらに困惑。

「コ……コイツは……うひい！ 私の幼馴染みで……ひいい！ 昔から……ふひゃあ！ こういう性格なのだけありあ！ だ……だから、私は会いたくな……イヤア！」

「ふくん？」

「平然と見てないで助けて下さい！」

「ま、頑張れや ♪」

「そんな爽やか笑顔で見捨てないで！」

「アルアルアルウくん ♡」

「やめひゃはりやあへりひいーっ！」

何語？ アリコちゃん？ ハウゼン語？

「ったく、何かと思えば……アホらしくて付き合ってられるかツツーの」

「……あんな？ リンちゃん？」

「は？ 何よ？」

「撫で撫でして？」

「はあ？」

「ウチも撫で撫でしてもらいたなっただ！」

「触発されんなツツーの！ この甘えん坊！」

「ふぐう……イヤや！ ウチ、リンちゃんに撫で撫でしてほしいの！」  
ウチ、涙目で駄々コネた。

それを見たリンちゃんは「……つたく」と、眉間を押さえて嘆息たんそくや。  
ほんでもな？

「ほれ、いいいいいい……コレでいい？」

頭、撫で撫でしてくれた ♪

「えへへ ♪ もつと ♪」

「はあ？ つたく、面倒なの触発してくれたわね……。ほれ、いいいい  
いいいいいいいい……！」

「えへへ ♪」

撫で撫で撫で撫で――。

「アルアルアルウゥン ♡」

「イヤアアアーツ？」

スリスリスリスリ――。

「いいいいいいいいいいいいいいいい……！」

「えへへへへ ♪」

「アルアルアルアルアルウゥン ♡」

「うひやらはあーツ？」

撫で撫で撫で撫でスリスリスリスリ――。

「……カオス？」

クルちゃんが無感情に纏まとめはった。

玉座の背後を抜けると、開放的なテラスがあった。

そこでテーブルを囲って、ウチらは建設的会合や。

少なくともハツちゃんが「悪い人」やないって判ったし。

真ん中へ出されたお茶うけは、ハツちゃんからのアムリクツキー  
やった。

鼻先に持つてくるといい香りすんねん。

口に入れると優しい甘さが広がるねん。

「ふひやう ♪」

ウチ、味覚でとろけそうになった!

「至福や ♪ 天国や ♪ あの世逝きや ♪ 殺人兵

器や ♪」

「陽ノ咲モモカ、その比喩は誉め言葉に適さない」

クルちゃんから淡白に指摘されたわ。

「へえ? コレが〈アムリの蜜〉の味?」

リンちゃんは物珍しそうに観察しながらも、冷静に受け止めていた。

「クッキーに練り込んでいるから純度は多少落ちるがな」と、ハツちゃんは微かに誇らしげ。

せやね、地産が褒められるんは嬉しいもんや。

「もつと蜂蜜っぽいのかと思っただけど、この後引く濃厚且つクリアでまったりとしたとろみ感からすると原液は水飴っぽいのかしら? でも、ほのかに柑橘的な香りもするのよね……レモンテイー的な? 味には反映されていないけど……あ、でも、クエン酸が成分に入っているのは間違いないわね」

リンちゃん凄いなえ?

何で短時間で、そこまで分析できるん?

御先祖様に「神舌の新聞記者」でもいたん?

けど、ウチはおいしければええねん。

素直に「おいしい」で、ええやん?

食べ物に『おいしい』か『おいしくない』か『ふつう』やよ?

星何個とかも意味不明やから要らへんねん。

評価サイトとかも要らへんねん。

自分が『好き』なら、それでええねん。

ウチとリンちゃんがアムリクッキーを堪能している傍らで、アリコちゃんはクルちゃんからの説明を受けとった。

「では『根暗な巫女』ではなく〈ネクラナミコン〉だったのですか?」

「そう」と、クルコクや。

「せやから、そう言ってたやん?」



「……いえ、言つてませんけど」

言つてたよ？

「そう言えば〈ドクロイガー〉が、そのような事を口走くちほしつていたような？ あの時、半月刀を振り回しながら『根暗な子いねがー！』と聞こえたので、何処の方言かと思いましたが……」

……〈宇宙の帝王〉諦めて『ナマハゲ』に転職したん？

「そもそも、その〈ネクラナミコン〉とは如何いかなる物なのだ？」

軽い興味に口を挟くちむハツちゃん。

「コレ」と、クルちゃんは卓上へ現物を置いた。

「この石板が〈ネクラナミコン〉ですか」

「フム？ やはり知らぬな？ して、この〈ネクラナミコン〉とやらは何なのだ？」

「コミュ障の話し相手」

「サイン入りの明石焼きやねん」

「違う」

リンちゃんとウチの見解を、クルちゃんが淡々とバツサリ全面否定。

「コレは、ある種の〈アカシツクレコード〉——つまり『宇宙の真理そのものを内在させた記録媒体』になる」

「はあ……とんでもない代物ですね」

軽く驚嘆を浮かべながらも、アリコちゃんはピンと来とらん感じやった。

そりやそうやんな？

ウチかてピンと来てないもん。

「ふむ？ そなた達は、コレを集めている……と？ して、集めると、どうなるのだ？」

「クラゲ漁解禁」

「毎日、抹茶パフェやねん」

「違う」

クルちゃん、またもバツサリ全面否定しはった。

「この〈ネクラナミコン〉を集めた者は、神の如ちからき力を得ると云われて

いる」

「か……神の如き……ですか?」

「とてつもない物であるな!」

今度は二人揃って素直な驚嘆や。

やっぱりドエライモンやのん?

「だからこそ、よこしま邪な者へ渡してはならない……。知らない?」と、クルコクン。

「スミマセン、あいにく生憎……」

「うむ、我も初見だ」

二人の反応を承けたクルちゃんは、口元へ手を当てて「ふむ?」と軽い一顧いっこを刻む。

「これだけ散策して片鱗も反応も無く、有力情報も無いとなると……」  
「そりや惑星全体の中から『特定の石コロ』なんて見つけられないでしよーよ」

皮肉気味に肩を竦めるリンちゃん。

軽く投げ遣りや。

「事情は解りました」と、アリコちゃんが決意めいて頷く。「そういう事でしたら、この『アルゴネア・リイズ・コーデス』——協力致します!」

「ふむ? アルが乗り気であるというなら、我も助力しようではないか」

「有り難う、アルゴネア・リイズ・コーデス。そして、ハツちゃん」

「……ハツちゃん言うな」

と、不意にウチは引つ掛かっていた事を思い出した。

「あ、せや! あんな? アリコちゃん? ウチ、ちよつと訊ききたい事あんねんよ?」

「何ですか? モモカさん?」

「アリコちゃんとハツちゃんは、何でケンカしとるん?」

「え?」

「さっき言うと思ったやん? 会いたくなかった……って?」

「……それは」

「もー♪ アルってばツンデレなんだからあ♡」  
「違います」

モジモジ嬉しそうに照れるハツちゃんを、間髪入れずに冷蔑否定。  
そして、アリコちゃんは、真剣味を孕む憂いに溢し始めた。

「話せば、少々長くなるんですが……」

「ほんなら、ええわ ♪」

「うん、アタシも別に興味ない」

「聞いてくれませんか？」

「そもそも、私達〈ジアント〉と〈アルワस्प〉は、同一の源泉種族から枝分かれ進化した種族なんです」

「でしようねえ？」と、アムリクツキーを摘まみ食いしながら関心薄く受け入れるリンちゃん。

「リンちゃん？ 何で知つとるん？」

「そりゃ、これだけ〈蜂〉と〈蟻〉を模倣<sup>トレース</sup>してりや、然<sup>さ</sup>して驚きもしないツツーの。そもそも〈蜂〉と〈蟻〉が、そうだもん。ルーツは〈蜂〉の方で、その内、陸棲に適性特化したのが〈蟻〉——進化とも退化とも取れる変質として羽根が無くなったのよ」

「ふええ？ 蜂さんと蟻さんって、兄弟やったん？」

「……いや、兄弟じゃないツツーの」

「せやったら、アリコちゃんとハツちゃんも姉妹やん？ ケンカはアカンよ？」

「イヤですよツ？ こんなのと姉妹なんてツ！」

アリコちゃん、必死になつて全否定や。

よつぽどイヤなんね？

「うむ、苦しゆうないぞ！ モモカとやらー！」

ハツちゃん、とりあえず鼻血拭こうねえ？

ボツタンボツタン垂れてるの拭こうねえ？

「まあ、確かにヤダけどね？ こんなのと一緒なんて」

「貴様、この、ハーチェス・エルダナ・フオフオフォン・アルラスぶぐつスオームIV 世<sup>Ⅳ</sup>に対して無礼なるぞ！」

「いまの『ぶぐつ』て何だ！ 自分の名前を噛み倒してんじやないわよ！」

「……噛んでおらぬ」

「いや、噛んだじゃん」

「噛んでおらぬと言っている！ ねー？ アルー♪ 私、噛ん

でないよねー?」

「まあ、それはともかく——」

ハツちゃん、黙殺されたツ!

「——それまでの両種族は、持ちつ持たれつの関係でした。ジアントが地上の恩恵を見つければアルワスパへも情報提供し、対してアルワスパも空中から発見した有益情報を我々に教えてくれた」

冷ややかに一蹴されて、床に『の』の字を書き始めるハツちゃん。半ベソで。

誰かフォローしたってえ!

女王様が体育座りでイジけてんねんよ!

「ふくん? つまり地上担当と空中担当で、上手に住み分けてたってワケね」

「アリコちゃんとハツちゃんも? 仲良かったん?」

「まあ、その頃は……幼少期から一緒に遊んでいた幼馴染みですし」

「んで? それが何で犬猿になったワケ?」

「このバカのせいですツ!」

キツと振り向き睨むアリコちゃん!

睨め付けを受けたハツちゃんは「イヤ〜ン ♡」と照れて……いや、ハツちゃん?

「イヤ〜ン ♡」やあらへんねん。

熱い視線<sup>ちや</sup>違うねん。

ラブコールやないねん。

遺恨を浴びせられとるねん。

帯びとる熱<sup>ちや</sup>さの質が違うねん。

「このバカが! 事もあろうに! 異種族結婚などを公言するから!」

「ファル、いひやい……いひやい……いひやい……」

ハツちゃんのほつぺたを憤<sup>ふんが</sup>慨任せにグニグニ引つ張りはった。

そやけど、ハツちゃん嬉しそやからええか?

「異種族結婚って……アルワスパとジアントの?」

「そうです!」

リンちゃんへ振り向き応えるついでに、ハッちゃんへ後頭部ピンタバチーン！

「ぎゃん！ アル、痛いよ？」

ハッちゃん！ それ、ウチの！

「確かに異種族結婚なんて大問題ではあるけどさ……」

「いえ、そこは問題ではありません。両種族共、寛容に受け入れました。私とて、そうです。そもそも両種族は同一祖先から枝分かれた種族ですし、深い信頼と共感に在った存在。特に怨嗟も不信感もありませんから。我が母「グイーン・ジアント」も容認ですし」

「そなの？ つて、うん？ ちよ……ちよつと待って！ 母親？ つて事は、アンタまさか？」

「……ええ」

含羞んだ憂いをリンちゃんへ返すアリコちゃん。

「あ、母子家庭なん？」

「違うわああーッ！」

「ぎゃん！」

ハリセンスパーンや！

こないなツツコミパターンもあんの？

「女王が母親つて事は「姫」だツツの！ コイツ！」

リンちゃん、お姫様相手に「コイツ」言うてるよ？

ビシイと顔面を指差して言うてるよ？

「まだ王位は継承していませんよ。いまは修行中の身です」

リンちゃんの動揺に、アリコちゃんはクスツと肩を竦めた。

「せやけど「戦士」言うてたやん？」

「ええ、まだ修行中の身ですから」

またまた優しい微笑。

うん？

どういう意味やろ？

と、徐にクルちゃんが理解を示す。

「成程。つまり、王位を継ぐまでは武者修行中の身という事……」

「そつち……ッ？」

さすがにリンちゃんと一緒に突っ込んだわ！

「普通は『花嫁修業』とか違うの？」

「そうよ！ 或いは『政治学』とか『地政学』とか、百歩譲って『帝王学』だっつーの！」

「先程、ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワスプ・ビースウォームIV世は言っていた——『実力にて〈アルワスプ〉の頂点に君臨する者』と……。身体能力や戦闘技能に長けた者が実力誇示にてヒエラルキーで優遇される生態系は、自然界でも定石の事象。だとすれば、種族の頂点たる王位継承者が戦闘技能を要求されても不思議ではない」

「うむ、その通りだ」

クルちゃんの解説を追い風に、揚々と自己顕示をしだすハツちゃん。

立ち直り早いねえ？

「我が〈アルワスプ〉と〈ジアント〉の長は、代々種族随一の戦闘技能が要求されてきた。故に現世代で最強なのは、この私。『ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワスプ・ビースウォームIV世』とアルなのだ」

「ふええ？ ハツちゃん、スゴいねえ？」

「フツ……モモカとやら、苦しゅうないぞ」

「今度は噛めずに言えたやん？」

「かかか噛んでおらぬ！」

「噛んだよ？ さつき？」

「黙れ！ 無礼な！ 我を誰だと思っている！ 我こそは『ハーチエス・エルダニヤツ！』」

「……………」

「……………」

悄々と顔を背けはった。

沈黙に視線が集中する中、一向にコツチ見ようとせえへん。

ハツちゃん、たぶん舌噛んだねえ？

「でも、だったら別にいいじゃん？ 両種族容認なら、アンタがヤキモチ妬く必要ないじゃん？」

「や……妬く？」

「そ。コイツが誰と結婚しようとする自由なんだし？ 親友が離れていく寂しさは分からなくもないけどさ、ヤキモチは見苦しいだけだツツーの」

「……私です」

「は？」

「このバカが結婚相手に指名したのは、この私なんです！」

「……………」

一同、閉口や。

気まずいヘビー情報に閉口や。

重い沈黙が漂う中、ハツちゃんだけが「うふふふ ♡ 」と身悶えにクネつとる。

「異種族婚なら、まだ寛容に受け入れましょう……ですが、同性婚なら話は別です！ 況して、自分が……このバカと！」

「えっと……まあ、頑張れ？ うん」

「結婚式には呼んだってな？」

「……宇宙的に異種族結婚と同性結婚の兼任は前例が無いけれど、アナタ達が風習起点となるかもしれない」

「全員で諦めないで下さいますッ？」

ゴメン、アリコちゃん……。

ウチら、どないに処理してええか分からへんねん。

そこまで器用やあらへんねん。

「ねえ？ エルダニヤ？」

「エルダニヤ言うな！ リンとやら！」

「アンタの真意は何よ？ どうしてアリコと結婚なワケ？」

「そ……それは……」

全員の好奇心が注がれる中、恥じらい赤面にくねりつつ、床に『も』の字を書き始めた。

何で『も』なん？

「私がへ女王の座に就いてから、アルってば全然会ってくれないんですもん……そうでなくても、成長してからは会う機会も少なくなってきたのに……こんなんじや、二人がへ女王になったら全然会えなく



なるじやない……………」

「当然です！ 子供の頃とは違います！ 況して〈女王〉の座に就けば、双方責務に追われるのは明白でしょう！ それをいまから何を甘ったれた事を言っているのです！」

「だから……………いつそ結婚しちやえば万事解決なんだってば。両種族の政治も一括で処理できるし、私もアルも一緒にいれるし ♪  
ね？ ウインウイン ♪」

「何がウインウインですか！」

「だってえ、私はアルといっぱい一緒にいたいものお……………  
ハツちゃん、今度は『へ』の字を書き始めた。

……………『へのへのもへじ』？

もしかして『へのへのもへじ』を大量増産してはるの？

「なるほど……………ね。とりあえず事情は解ったわ」と、リンちゃんは一先ず納得。「要するに、エルダニヤは百合気質って事か」

「リンさん、何とか言ってみて下さい！」

「……………ねえ、アリコ？」

真剣な真顔を向けるリンちゃん。

「はいー！」

期待に満ちた表情を返すアリコちゃん。

「不運は、どうしようもない……………時には諦めも肝心だから  
「はい？」

「頑張れ ♪ うん ♪」

リンちゃん、につこり温顔で肩竦めはった。

「淡泊に見捨てないで下さいッ！」

あ、慌ててはる。

必死になつてはる。

「ええ〜？ んな事言つたつて、アタシ別に興味無いし？ 無関係  
だし？ 所詮は他人事だし？」

一転して無気力無関心。

リンちゃん、ホンマにどうでもよくなつてはるね？

「だったら何故、話題を拡張したんです！」

「ん？ 単なる好奇心 ♪ 」

「リンさーりんツ？」

アムリクツキーをポリポリ食べつつ見捨てはった。

「どちらがベースとなるにしろ、生まれてくる子孫は宇宙史初の混血体……」

クルちゃん、何やブツブツ考え込んでるねえ？

ほんでもって、アリコちゃんにクルコクン。

「へアルアント？ へジワस्प？ どっち？」

「クルロリさん！ 早々に次期種族名を模索しないでツ！」

孤軍奮闘の逆境を悟ったアリコちゃんは、強い目力めぢからをウチへ向けた。

何か期待されとるみたいやね？

「モ……モモカさん！ 何とか言ってやって下さい！」

何とか言えればいいん？

うーん……あ、せや！

「ハツちゃん？ ウチ、思うたんやけど……言うてええ？」

「そうです！ このバカにビシツと言ってあげて下さい！ 常識を！」

「ウチへアムリの樹」いうの見てみたいねん」

「モモカさーりんツ！」

ハッチちゃんに導かれ、ウチらは清涼な森林を歩き続けた。明るい緑のトンネルに、目映い木漏れ陽が光のカーテンと織り射しとる。

アルワスプ宮殿の、すぐ近くの森や。

御付きの部下とかは率いとらんねん。

そんだけ腕に自信あんのやろね？ ハッチちゃん？

それにアリコちゃんもおる。

ハッチちゃんは知らへんやろうけど、ウチらもそれなりに強力やしねえ？

「ほんでもスゴいねえ？ アリコちゃん？」

「何がです？ モモカさん？」

「相当強いんやね？ 生身でドクロイガーはん倒しはったんやから」

「ああ、そこは確かに驚嘆するわ。あの体軀差で、よく戦えたわよね？」

相手〈巨大ロボ〉よ？」

「いえ、それは私ではありません。いくら私でも、あんな巨大ロボットなんて倒せませんよ……って、え？」

「何よ？ アリコ？」

「いえ、確か〈ドクロイガー〉なんて知らないのでは？」

「……………」

「……………」

「やだあ？ うん、アタシ知らなくい★」

そのキャラ、まだやるんツ？ リンちゃん？

「何だ？ その〈ドクロナンタラ〉とやらは？」と、先導役のハッチちゃんが足を止めて振り向いた。

「あんな？ 大きいロボットやねん。ほんでな？ 何や〈宇宙の帝王〉を夢見てはるんやて」

「そーそー。その為<sup>ため</sup>に〈ネクラナミコン〉を集めてて……ま、ぶっちや

け競争相手ってトコかしら」

「やっぱり知ってるじゃないですか！ リンさん！」

「やだあ？ 神託くうー！」と、リンちゃんは人差し指フリフリ。

何で「どんだけくうえー！」みたいに言うてはるの？

「アル、まさか？」

ハツちゃん、急に深刻な面持ちで投げ掛けはった。

「ええ、大樹神さまが……」

「何よ？ その〈大樹神さま〉って？」

リンちゃんの疑問に、アリコちゃんは優しく諭すような抑揚で返す。

「我々の守護神ですよ。このテネンスに……いえ、大自然に仇為す邪あだな よこしまな者が現れし時、その巨体を奮って成敗して下さる——そうした伝説が、我々〈ジアント〉と〈アルワスプ〉の間では流布しているのです」

「へえ？ んじゃ、ソイツがドクロイガーを倒してくれたんだ？」

「せやの？ ウチ、てつきりアリコちゃんが倒したと思うとった」

「ふむ？」と、クルちゃんが不可解そうにクルコクン。「おかしい？ 私の知る限り、テネンスにそのような伝説は無かった」

「……あれ？」

「何？ 天条リン？」

「いや、何でアンタ、そんな事まで知ってるのよ？」

「……………」

「……………」

「神託うー……」と、御通夜テンションで指振り。

クルちゃん、そこはテンション上げてやんねんよ？

無感情無抑揚に御通夜テンションでやると、ダダ滑りすべするネタやねんよ？

「で、アルゴネア・リイズ・コーデス？ この伝説は、いつから？」

「あ、はい。このテネンスに〈大樹神さま〉が降臨だいいじゆしんされたのは、昨年からですが？」

「伝説違うじゃんツツ！」

リンちゃんに一票や！

それは見事なまでに瑞々しい大樹やった。  
辿り着いたのは、樹々に囲われ拓けた清涼的な空間。

一面は湖と広がり、一步踏み出せばドボン確定や。水深は解らへん。木漏れ陽を湖面が反射して一帯を青い光彩に染めあげ、神聖で厳肅な雰囲気は自然に演出しとる。

二〇メートル程度先には大きい樹が密集に生息し、そこだけ浮島みたいに孤立地帯化しとった。離れ密林や。

嗅覚に味わうのは、あのアムリ蜜の甘さ——せやけど、濃度が半端ない。蜜坪へ溺れたか思うたわ。

「アレが〈アムリの樹〉だ」と、ハッチちゃん。

せやろうね？

あそこから強烈に香つとるもん。

「ふくん？ 湖のド真ん中か……。でも、アレが食材や資材なんですよ？ 飛べる〈アルワस्प〉は苦も無いとして陸棲の〈ジアント〉は、どうやって採取してんのよ？」

「基本〈アルワस्प〉からの貿易ですね。自らで採取する場合は、舟ふねしかありません」

「持ちつ持たれつ……か。そりや両種族の共存関係は重要かもね」

「うむ、そうだ。だからといって、我々〈アルワस्प〉が独占する気など毛頭無いぞ？ そのような愚行に走れば、如何いかに〈ジアント〉が困窮するかは明白。我等は同源泉種族——共存関係を維持していかねばならぬ」

「へえ？ ちつとは〈女王〉らしいトコあんじゃん？」と、リンちゃんはクスツと苦笑。

「当然であろう、リンとやら。我は〈クイーン・アルワस्प〉なるぞ？

それに我個人われとしても、アルが困惑する事など……ハッ！」

「どうした？ エルダニヤ？」

「アルゴネア・リーズ・コーデス！ おとなしく我と結婚せよ！ さもなくば、この〈アムリの森〉は我々〈アルワस्प〉が独占——」



も十回でも百回でも！」

……そんな見たない。

「何なら千回でも一億回でも百億回でも！」

一気に新型拷問が完成したよッ？ ハツちゃん！

改めて間近で見ると、その圧巻な生命力に感嘆した。

「ふええ〜……コレが〈アマリの樹〉？ スゴいねえ？」

「当然であろう。これこそ、まさに『樹木の王者』よ。然もなくば、我等の主要として成り立つワケが——」

「あー！ アレ、一番大きいねえ？」

「——って、聞けイ！ トテテテテじゃなく！」

ウチ、少し奥に一際大きい樹を見つけたよ？

胴回りが五メートルぐらいやろか？

えへへ ♪ グルグルや ♪

樹の周り、軽く散歩や ♪

グルグルグルグル ♪

見上げるとな？

遙か頭上には深緑の傘が繁つとるねん。

密集に生まれた葉っぱの雲が日光遮つとんねん。

ほんでもグルグル回ると、重なる木漏れ日がいろんな表情を見せん

ねんよ？

あ、アレや！

色の無い万華鏡や！

あれ？

ずっと上のトコ、何や『顔』みたいになつとるねえ？

うん、ずっと高いトコや。

虚が絶妙に配置されて『埴輪顔』みたいになつとんねん。

自然ってスゴいねえ？

こういうの、たまに偶然出来るから面白いねんな ♪

……。

……。

.....。

ま、ええわ。

とりあえず樹の回りグルグルしてみるわ。

えへへ ♪

大きいねえ？

グルグルグルグル ♪

グルグルグルグル ♪

グルグルグルグル ……。

グ ……。

ウチ、いつの間にか傍観していたハツちゃんへ訴えた。

「あんな？ ハツちゃん？」

「……………」

「……飽きた」

「で、あろうな」

むんずと首根っこ掴まれて、ズルズルとスタート地点へと引き摺られたよ？

「樹の周りを延々と回って、何が楽しいか！ 我等へアルワस्पの子供としてせんわ！ 斯かよう様な奇妙な遊び！」

何やプリプリしてはる。

どないしたん？

「リンちゃん★ ただいま♪」

「おー……おかえりー……………」

パモカでイケメンドラマ鑑賞中で、顔すら上げてくれへん。

リンちゃん、ウチ見てえ！

「で、どーだったー？」

なげやりや！

「あんな？ つまんなかったよ？」

「…………そこに直れ、陽ひノ咲さきモモカ」

と、その時！

突然にして大爆風が吹き荒れた！



大振動と共に！

「ふぐう！ な……何？」

叩きつける風圧に抗いつつ、ウチらは視界を確保した。  
元凶は眼前の森林に聳え立つとった。

天を仰ぐような巨体！

太陽の光を照り返す宇宙金属の巨軀！

そして、胸に飾り吸えた大きなドクロ！

『フハハハハハッ！ 宇宙の帝王（予定）！ へドクロイガー』見参！』

あ、復活したんや？

おめでとねえ？

『フハハハハハッ！ 今度こそへネクラナミコン』を頂戴し……つて、ああーッ？ またしても出たな！ イルカ娘！ シヤチ娘！』

ウチへイルカ娘』違うよッ？

変な愛称付けんといてえ！

「ええ〜？ アタシ、アンタなんか知らなくい……」

露骨にウンザリゲンナリなテンションで、リンちゃんが例のキャラ設定続行。

っていうか、そのテンションやと別キャラやよ？

「ドクロイガー、ひとつ訊きたい」臆せずたずに普段通りの抑揚で訊ねるクルちゃん。「どうしてへネクラナミコンの欠片』が此処に有ると断定した？」

『き……貴様は？ そうか……さては、そのへイルカ娘』の仲間となったか！』

変なユニット名を付けられたわ。

『はっ！ そして、三人揃ってアイドルデビューか！ 人がドクロ』で悩んでいるというのに！ そこまでして人気欲しいか！』

知らへんよッ？

アイドルデビューなんて誰も言うてへんやん！

そこまで悩んでるならドクロ取ってえ！

「取りやいいじゃん、ドクロ」

『……はい?』

「取れ? ドクロ?」

『……………』『……………』『……………』

気まづい沈黙。

うわあ? リンちゃん、さざりと言いはった。

無敵や!

『小娘! 可愛いからって調子づくな! 人生薔薇色ウハウハか!』

「そうよ?」

『……はい?』

「だって、アタシ可愛いもん」

『……………』『……………』『……………』

絶対的な自信に一同絶句。

そして、リンちゃんはロングポニーをファサと鋤いた!

「可愛いなんて百も承知! アタシを誰だと思ってるの? 超絶級の

美少女にして銀暦有数の大企業へ星河コンツエルンの娘 天条リン

“よ! 不可能なんて無いんだから!”

無敵やツ!

と、クルちゃんがクルコクンに促す。

「二人共、コントもういい?」

『「コント違うわー!」』

リンちゃんとドクロイガーはん、仲良う抗議を吠えはった。

呉越同舟や。

っていうか、クルちゃんも大概やよ?

「で、何故? ドクロイガー?」

『フツ……フハハハハハツ! その様子だと、どうやら利はワシに

有るようだな! 教えてほしいか? ん? どーしよつかなく?

教えちやおうかなあ?」

嬉しそうに焦らしてはる。

後ろ手に爪先蹴りや。

……乙女なん?

『よし、いいだろう! 憐れだから特別に教えちやおう! ワシが作

りあげたへネクラナリーダー」なら、その波長から所在を半径約一〇メートルまで特定感知する事が可能なのだ!』

「そのわりには〈シアント〉の集落を襲った……何故?」

『当然だ! この惑星に降下した時点では完成していなかったのだから! だから、とりあえず「此処なら有るかなあ?」とな?』

……ただの場当たりやった。

「そ……そんな理由で、我が集落を?」

『そうだ! 山勘だ!』

誇示したらアカン!

それ、誇示したらアカンやつ!

「よ……よくも!」

フルフルと怒りを噛み締めるアリコちゃん。

ほら!

そんなんで襲撃されたら〈シアント〉も堪<sup>たま</sup>らへんよ?

そりやアリコちゃんかて怒るよ?

「フム?」と、クルちゃんは平静に黙考クルコクン。「つまり、無様に吹っ飛ばされて、その後に完成させた……と?」

「あ! あのズデーンと『犬●<sup>ち</sup>さん家』した後、復活して作りはったん? せやったら、ウチラがハツちゃんトコでお茶会しとった時やんね?」

『おおお茶会だと! 人がコツコツ地道にリーダー作成している時に、仲良く楽しくお茶会女子会していたのか!』

「うん ♪ アムリクツキー、おいしかったよ?」

『クククツキーだと? ワシがスイーツ好きと知りながら仲間外れか! どういう了見だ! 新しいイジメか!』

いや、知らへんよ?

ドクロイガーはんの嗜好とか知らへんよ?

初耳やよ?

『ブウ! いいもん!』

可愛く膨れはった。

乙女なん?



「Gモモー!」「Gリンー!」

滞空した二人はキュートな名乗りを飾る!

巨体戦に対処すべく〈Gフォルム〉になった!

『グスツ……グスツ……何で復活したばかりで、いきなりこんな目に……って、ああーッ? またしても巨大化したな! 〈イルカ娘S〉!』

「それ、やめてえ! ウチ、恥ずかしい!」

「ってかアンタ、いま泣いてなかった?」

『ななな泣いてないよッ? フハハハハハッ! この『宇宙の帝王になつてみたい男』が涙など見せるか! そのような懦弱さは、とうにブラックホールへ投げ捨てたわ! 笑止! 笑止笑止笑止ッ!』

笑止はええけど、さりげなく夢の規模が縮小してたよ?

『ねー? アリ娘? ワシ、泣いてないよねー?』

「私に振らないで頂けますッ?」

足下から、思いつきり傍迷惑そうな拒否が返ってきた。

「貴様! 気安く我のアルへと語り掛けるな!」

ハツちゃん、即座に嫉妬反応。

「ねー? アルは、私のだもんねー?」

「一ミリたりとも貴女のじゃありませんッツ!」

本家炸裂も、見事に撃沈で地面に『の』の字や……。

って言うか、何でドクロイガーはんも『の』の字書いてるんツ?

何で二人同調で膝抱えとるんツ?

「あー……もう、何だかな? この混沌?」

Gリンちゃん、こめかみ押さえとる。

せやけど、ウチも同感や。

「つたく、もーいいわ。ねえ、ドク郎?」

『変な呼び名を付けるなッ!』

……ウチには付けたクセに。

「アンタ、そのヘネクラナレーターとやらをよこして帰んなさいよ。」

『……とんでもない提案しだしたな、オマエ?』

「いいから、よこせ? そんなでもってゲツトバック! ハウス!」

Gリンちゃん、犬扱いや。

『ウキイイイーツ! 何だ、このアホ臭い展開は! もういい!』

ドクロイガーはん、キレはった。

何やる? この既視感?

『……みんな壊してやる』

寄せはった!

低い抑揚で凄んで「本家」に寄せはったよツ?

『喰らえええい! ドクロバアアス——』「アホか——ツ!」

『トオオオ——ーツ?』

力んだ発射体勢を構えた途端、Gリンちゃんからの顔面ハリセンス  
パーーン!

「何考えてんのよ! アンタ! 宇宙空間ならいざ知らず、こんな場  
所で撃ったら山火事大惨事だツツーの!」

『うう……グスツ……』

鼻頭押さえて泣いてはった。

ブラックホールへ投げ捨てたんやなかったの?

『だ……だったらへドクロブレードならいいですか?』

「よし、許す」

『ははあ! ありがとうございます!』

土下座謝辞や。

っていうか、何で〈敵〉に武器の使用許可求めてはるん?

何で「主従関係」みたいになつてはるのん?

『フハハハハッ! 行くぞ! ドクロブレエエード!』

半月刀を翳して決めポーズ構えはった。

ウチ、何や目頭熱うなつて拍手してたわ。

よかつたねえ?

『喰らえええい! イルカ娘エエエーツ!』



「ちよつと！ アンタ、人質なんてズルいわよ！」

『何とでも言うがいい！ シヤチ娘！』

「この卑怯者！」

『痛くも痒くも無いわ！』

「臆病者！ 卑劣！」

『平気 ♪ 平気 ♪ 』

「そんなんだからモテないのよ！」

『は〜い ♪ 生まれてこのかた、バレインタインチョコなんか

貰った事ありません ♪ 』

「ぐぬぬぬっ！ この！ 開き直りやがって！」

『フハハハハッ！ フハハハハハハハハハハッ！』

「まるで悪役みたいやんねえ？」

『……それはチョット傷付いた』

何で？

ウチ、小首コクンと素直な感想言うただけやよ？

『さあ、形勢逆転だ！ コイツらの安全が惜しいならば、おとなしくオ

マエ達が持つへネクラナミコンの欠片<sup>かけら</sup>を渡せ！』

もう持つとるよ？

その手の中にいるクルちゃんが持つとるよ？

『どうした！ さっさと渡せ！』

持つとるよ？

「くうう！ あんな石コロやるのは構わないけど、アイツに屈するのは腹が立つ！」

は腹が立つ！」

Gリンちゃん、重視すべき点が変わった。

「アンタなんか絶対渡すかア！」

『何だとオ！』

せやから、持つとるよ？

渡すも何も持つとるよ？

「悔しかったら実力で奪ってみなさい！ ベンベロベー！」

『この……意地悪がママ娘がア！』

事態ややこしなった！



起きとる展開は単純なのに、事態ややこしなった！  
巨大な子供のケンカなつた！

と、その時、ゴゴゴ……と地鳴りが轟いた！

「な……何や？」

慌てて周囲に元凶を追えば、それは一本のへアムリの樹が刻む振動やった！

アレ、ウチがグルグル回ったデツカイ樹や！

あの〴〵つまんなかった樹や！

そして、その大樹が動き出しはつた！

地面から引き抜いた根は脚！

掲げた枝を下ろせば腕！

ウチが見つけた虚は、そのまま顔や！

微々とした変形が示したのは、完全な人型ひとがたやった！

木製の巨人や！

その雄姿を見たアリコちゃんが驚愕に染まった！

「アレはへ大樹神アララカツラさま！」

見たらアカンもんを見たような名前やね？

大樹神さんは顔前で肘交差した両腕を、ゆっくりと上げ……上げ

……上げ……何も変わってへんかった。

てつきり〴〵荒々しい鬼神顔にでもなるんかと思つたけど〴〵埴輪ハニワ

顔のまんまやった。

あ、でも真つ赤にマイナーチェンジしてはるねえ？

一応、怒ってはるんや？

単に顔面だけ枯れたようにも見えるけど。

そして、ズシンズシンと重々しい歩を刻んでへドクroiガーはん

と対峙！

『キ……キサマは！』

動揺に構えるドクroiガーはん！

そういえばアリコちゃんトコ襲撃した時に、やられはつたんよね？

因縁や！

『現れたな！ 木偶人形！』

再戦前哨に睨みあう巨体と巨体！

『さつきは敗北を喫したが、今度はそうはいかんど！ このワシに勝てると思うなよ！』

いや、負けはったんやん？

『ただか木偶如きの攻撃が、全身へ宇宙合金コズミウム製のワシに通用すると思うか！』

通用したんよねえ？

『さあ、分かったらこのまま帰れ！ 帰るといふなら、止めはせん！  
ここは速やかに帰るが吉だ！ うん！』

何で高圧的に懇願してはるん？

『ハウス！』

さっそく使ったよツ？

『あ、そうだ！ フハハハハハッ！ それにコレを見よ！ 我が掌中には人質がおるのだ！ さあ、レッツ・Uターんごはあーっツ？』

アララカツラはんの顔面ストレートが、躊躇無く炸裂！

吹っ飛び倒れる衝撃に、クルちゃん達が放り出された！

「アカン！」

ウチ、咄嗟にヘリウムブースター全開や！

スライディング宜しくでクルちゃんを抱き搦う！

一方でGリンちゃんは、高々と放り上げられたアリコちゃんとハツちゃんを……って、アリコちゃん、ハツちゃんにぶら下げられて飛んどった。

せやねえ？

ハツちゃん、飛べたねえ？

「ああん♡ アルが全体重を掛けて、私をイヂメるくん ♪」

「誤解を招く言い方をしないで下さいッ！」

……仲良しや。

「あ」

「ふえ？ クルちゃん、どないしたん？」

「陽ノ咲モモカ、天条リン、たったいまへネクラナミコンの欠片」を見つけた」

「え？ ホンマ？」

「はあ？ このクソ忙しい時に！ 何処だツツーの？」

「アレ」

「は？」 「ふえ？」

「あの大神へアララカツラへネクラナミコンの欠片」と思われる」  
二人して眼前の木製埴輪を見て、言いようもない感情に暫し絶句と固まる。

『痛ッ！ ちよつと待っ……痛ッ！ 話を……痛いって！』

「オオオオオ……！」

森の樹々をリングマツトに変えて殴りあう巨人！

違うた……一方的に殴る巨人と、一方的に殴られる巨人！

ボコボコや！

これぞホンマのフルボッコや！

ド迫力やけど陰湿で地味や！

「私の所有するへネクラナミコンの欠片」が共鳴現象を起こしている。  
間違いない」

クルちゃん、淡々と確定してくれはった。

「石板じゃないじゃんッ！」

「そもそもへネクラナミコンは、擬似的な意思を宿している。もしかしたら自己防衛本能から別形態へ擬態変化した可能性も否めない」

「別形態？ ちよつとアンタ！ そんな情報言ってなかったじゃん  
！」

「私も初めて知った」

「そのへネクラナミコンの欠片」は、ドクロイガーはんをマウントフルボッコしてはるんやけどッ？ 大暴れしてるんやけどッ？」

「ぎけんなツツーの！ どうやって回収しろつてのよ！ アイツ、  
振り子殴りでイケイケじゃん！ オラオラオラ状態じゃん！」

「心配無用。高レベルエネルギーを用いて活動停止へと追い込めばいい」

「どゆ事？ クルちゃん？」

「倒せばいい」

……意外とシンプルやんね？

「倒せば……って」

軽く困惑を噛みつつ、Gリンちゃんは改めて戦況を見つめた。  
私刑、まだ続いてはる。

「つたく、ドクロイガーのヤツも使えないし！」

心の底から失望に苛立つGリンちゃん。

っていうか、使う気やったん？

「しゃーない！ こうなったら……モモ、やるわよ！」

「ふえ？ う……うん！」

指示を承けて、即座にフォーメーションを陣取る！

「エコロケーションホールド！」

花と開いた掌から〈高出力特殊超音波〉を照射！

拘束技が相手の自由を奪う！

アララカツラはん……と、ドクロイガーはんの。

「オオオオオオオオオ……？」

『グスツグスツ……って、ヌオオオツ？ コ……コレはツ？ 一度な

らず二度までも！』

足掻くアララカツラはん……と、ドクロイガーはん！

うん、今回はほんまにゴメンねえ？

「オオオオオオオオオ……！」

『ちよ……ちよつと待て！』

「タアアア……！」

「ヤアアア……！」

上空からはGリンちゃんのエネルギー脚槍が！

正面からはウチのエネルギー鉄拳が！

特攻の二重奏が同時に突き抜ける！

「Gクロスファイナル！」

二人の軌跡が十字架と輝いた！

「乙女の奇跡！」

大爆発！

『何でだああ……！』

彼方へと吹き飛ばされるドクロイガーはん。

その慣性から逃れるように、ドクロイガーはんの胸部からヒュルヒュルと何かが放物線を描いて落ちてきたよ？

Gリンちゃん、それを偶然的にポトンとキャッチ。

何やへコンパクトミラーみたいな物やね？

「コ……コレって？」

両手の中の現物を見たGリンちゃんは「フフ……フフ……フフ……フフ……」と、顔を伏せた笑みに浸り始めた。

怖いよ？ Gリンちゃん？

「よっしゃあーっ！へネクラナレーダー！ゲットよーっ！」

高々と勝利宣言を吠えはった。

「何で、それがへネクラナレーダーって判るん？」

「だって書いてあるもん」

あ、ホンマや。

裏面に『ねくらなれーだー』『どくろいがー』って、油性マジックで手書きしてある。

……ドクロイガーはん？

何で幼稚園児ばりに「ひらがな」なん？

「どうよ？ アタシこそ「天条リン」！ 銀暦有数の大企業へ星河コンツェルン」の娘「天条リン」なのよ！ 不可能なんて無いんだから！」

ロングポニーをファサと鋤いて、高らかに誇示や。

いや、Gリンちゃん？

コレ「大企業の娘」関係あらへんと思うよ？

ウチとリンちゃんはへGフォルムを解除して、みんなと合流する。

アララカツラはんの姿は光に掻き消え、その場所には手帳程度の石板——へネクラナミコンの欠片が転がり落ちとった。

それを回収して咄くクルちゃん。

「なるほど。どうやらへネクラナミコンの欠片は、自衛本能から別形態へと擬態進化を為すらしい。コレは初めて知った」

「って事は、どういう事よ？」

「それは、つまり——」

「つまり？」

「——これから先へネクラナミコンの欠片かけらと戦う展開もあり得るとい  
う事」

「はああ~~~~ツ？」

厄介な展開増えたわ！

もうじきタイムリミットや。

ぼちぼちへツエレークへ帰還せなアカン。

着陸待機しとるへ宇宙航行艇<sup>コスモクルーザー</sup>の傍<sup>かたわ</sup>らで、ウチ達はアリコちゃん達との別れを惜しんだ。

「もう行ってしまわれるのですか……出会って、あつ言う間でしたね」

「うん ♪ あんな？ アリコちゃん？ ウチ、楽しかった ♪

」

ホワホワとした笑顔を見せるウチに、アリコちゃんはクスツと微笑<sup>びしょう</sup>を返す。

「そうですか」

「結婚式には呼んだってな？」

「ま、百合つても人生なるようになるから」

「へアルアント？ へジワस्प？ どっち？」

「別れ間に爆弾落とさないで頂けますツツ？」

「せやけど、ハツちゃんクネツとるよ？」

「嬉<sup>みもた</sup>しそうに身悶えしとるよ？」

「けど、実際問題どうすんの？」

「そ……それは」

リンちゃんの指摘に口籠<sup>くちじも</sup>るアリコちゃん。

「もう、いつそ結婚しちやえ ♪ 」

「結婚式には呼んだってな？」

「どっちが『母親』で、どっちが『父親』？」

「ですから！ 別れ間にツ！」

ハツちゃん、ウネウネし過ぎて原型留めてへん。

何や『チンアナゴ』みたいになつとる。

アリコちゃんは「ハア」と嘆息<sup>たんそく</sup>の一言<sup>ひとま</sup>を置くと、軽い黙想を刻んだ。

「宇宙には、まだあのような者が多くいるのですか？」

「ん？ 誰の事よ？」

「いえ、あのへドクロイガー」のような「**猛者**」が……」

「**猛者**かどうかは知らないけど、バカは多いわね」

リンちゃん、ウチやないよね？

「アルゴネア・リーズ・コーデス、多次元構造宇宙へフラクタルブレーン」は無限に展開している。従って、上限も下限も無い。少なくとも、私は「宇宙規模でスゴいともない**友達**」を一人知っている」

クルちゃん、ウチやないよね？

「そう……ですか」軽い「**顧**」。「……武者修行には、いいかもしれませんね」

「アアールウウウ〜！ 行つちやヤダああ〜〜〜！」

耳にした**途端**、アリコちゃんの脚へと**縋**り付くハツちゃん。

鼻水流した号泣や。

女王様、それでええのん？

離婚言い渡されたダメ亭主みたいやんね？

「……このバカとも、距離を置けますし」

冷蔑を向けられて、ハツちゃん**ピキ**固まった！

氷結したみたいになった！

「うわあああああ〜〜〜ん！」

大泣きながら彼方へ走り去ったよツ？

土煙上げて爆走やよツ？

飛べるの失念しとるよツ？

「で、実際どうなの？」

「何がですか？ リンさん？」

「エルダニヤ、嫌いなもの？」

「そ……それは……」困惑に**眼差し**を伏せた。「嫌いなワケ……無いじゃないですか」

「結婚式には呼んだってな？」

「段階無視して飛躍し過ぎですツ！ モモカさんツ！」

そうなん？

え？



でも、そういう事違<sup>ちが</sup>うの？

「子供の頃から、大の仲良しですし……でも、そういう対象としては見  
ていませんでしたから」

そりやそりやんな？

そう見てたら、アリコちゃんの方に問題あるやんな？

「アルゴネア・リーズ・コーデス、心配無用。その方向性で自然体のま  
ま邁進<sup>まいしん</sup>している友達<sup>バカひとり</sup>を一人知っている」

……クルちゃん、それ誰？

さつきから出てくるけど、それ誰？

「ま、型を破るも善し！ 破らぬも善し！ 結局は……さ？」リンちや  
んはアリコちゃんの胸をコンと小突いた。「アンタのココ次第だか  
ら」

「……リンさん」

「周りの目なんかには遠慮<sup>うれ</sup>すんじゃないわよ？ そんな無責任な意見な  
んかクソ喰<sup>く</sup>らえなんだから！ いつでもへ自分<sup>自分</sup>だかんね？ 後悔だ  
けはすんな？」

明るく笑顔を添えるリンちゃん。

「……はい」と優しい憂<sup>うれ</sup>いが微笑<sup>ほほえ</sup>み返す。

ウチ、自分のココを触<sup>ふ</sup>つてみた。

……小さい。

ふぐう！

「いつか、私も行ってみたいですね……宇宙へ……私よりも強い相手  
に会うために……」

「アリコちゃん、赤いハチマキ要<sup>い</sup>る？」

「はい？」

みるみる青い惑星は離れていく。

数分前までは、あそこにおった。

数分前までは、あそこで『新しい友達』とおった。

何や不思議や。

『結局、アリコは来なかった……か』

ニユートリノ通信で感慨を零すリンちゃん。

「せやね」と、ウチは若干しんみりや。

『ま、選択としちゃ順当っしょ？ アリコはへ次期ジアント女王……  
いつ帰れるか判らない旅路なんかに出てられないわよ』

「せやね」

『……何よ？ モモ？ しんみりしちゃって？』

「あんな？ リンちゃん？ ウチ、ちよつと寂しい……」

『はあ？』

「せつかく『友達』なれたのに、もうこれで会えへんもん」

『つたく……このパートナー』

「ふぐう……せやかてえ〜！」

『また会いに来りやいいツツーの。幸いへツエレークにはへフラクタルブレーション航行』の性能が備わってるんだから』

「ええの？」

『いいわよ』

「せやけど、マリーは？」

『つたく……アタシを誰だと思ってるの？ 銀暦有数の大企業へ星河  
コンツエルン』の娘『天条リン』よ？ 不可能なんて無いんだから！  
そんな時は、アタシが説得してあげるツツーの！』

ウチ「にへへ」と笑うた。

「あんな？ ウチ、リンちゃん大好きや ♪」

『……し……知ってるツツーの』

聞き取れへんかった。

リンちゃん、急にゴニョゴニョなんやもん。

「あ、せやー！」

『何よ？ 急にテンション一転させて？』

「リンちゃん、もう一回アレ言うて？」

『何よ？ アレって？』

「ドクロイガーはんから庇った時、言うてたやん——『アタシのモモに  
何すんだーッ！』って？」



「パンパカパーン★ サプライズ登場♪」

「……………」

さすがに面食らったわ。

揚々と飛び出したトコ悪いけど、こっちは思考停止で固まったわ。ウチも、リンちゃんも、クルちゃんも……。

帰還直後の整備中、ハツちゃんが姿を現した。

何故か「ドファイオン」の貨物倉庫から……。

あのちっこい空間から……。

「む？ さすがに虚を突かれたようだな？ いや、無理もなからう。

よもや、この「ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワルプ・ビーシヨシヨウオームIV世」が現れるとは、露程つゆほども思っておらんかったであらうからな……フッフ」

そうやよ？

優越感ふくに含み笑わらいを浮かべるとこ悪いけど、その通りやよ？

いろんな意味で……。

「さて……アルウ♡ 追って来ちやつたあ♡」

おらへんよ？

「アルが武者修行するなら、私も付いて行く♡」

「ドココ〜？」

おらへんよ？

「アホかああーッ！」

リンちゃんの後頭部ハリセンがスパーン！

格納庫内ドックに景気良く破裂音が反響した。

「どーすんのよ！ エルダニャー！ 既にすでへフラクタルブレインを離脱

航行中よー！」

「痛たた……フツ……愚かなり、天条リン！ 我われとアルはいちれんたくしやう一蓮托生！

切っても切れぬ運命の赤い糸なのだ！」

切れたよ？

「さ♪ アルはドコかなあ？」

「……………いないわよ」

「……………む？」

「だから、いないツツーの」

暫し、噛み砕く。

「いない？」

「うん」

黙考。

「え？ アル、いない？」

「うん」

沈黙。

「あんな？ やっぱ武者修行やめたんやって。このまま、テネンスで鍛えるらしいわ」

「……………」

ややあつて、血相変えはったわ。

「帰るぞー！」

「帰れるかああー！ツツー！」

今度は顔面ハリセンがスパーン響いた！

惑星テネンスから帰還して三日経った。

宇宙クラゲの形跡は、まだ無い。

クルちゃんのヘネクラナミコン＜反応も、まだ無い。

せやから、平和や。

平和にJKライフや。

ブレザー姿の雑踏に馴染んで、ウチも登校の流動に乗る。  
ほんでもって、芋洗いをキョロキョロキョロキョロ……………。

「あ、おったー！」

ウチ、トテテテテと目標のトコまで駆けてったわ。

「おはよう ♪ リンちゃん ♪」

「おー、おはようモモ」

まだ覇気無い。

毎朝の事や。

リンちゃん、低血圧やねん。

ホームルームにはエンジン掛かんねんな。

「ごきげんよう、モモカにリンよ」

挨拶を手土産に並び歩く美人さん。

涼しい眼差しに、通った鼻筋。

日射しを散らす長い金髪が、ふわりと微風に泳いだ。

物腰や滲み出る気品が、優麗な印象を漂わしとる。

「あ！ ハツちゃん、おはようさん ♪」

「あー、エルダニヤおはよう……」

「うむ、苦しゅうないぞ？」

「……………」

「……………」

「……………」

慌てて登校の波から外れたよツ？

並び歩いてるハツちゃんを首フツクで連れ去って！

眠気もブツ飛んだわ！

「ええい、苦しいわ！ 何をするか！ リンよ！」

「何をするか……ぢやないわよ！ 何で、しゃあしやあと並んでるんだツつーの！」

リンちゃん、路地裏で胸ぐら掴んでガクガクや！

傍目にかツアゲしとるみたいや！

「決まっておろう？ ツーコー」というヤツじゃ」

「ヤツじゃ……ぢやないツつーの！ アンタ、いつ転入した！ っ

か、羽根とか甲殻どうした！ ってか、初めて見たわよアンタの素顔

！」

「……質問の多いヤツであるな」

「つたり前だー……」

「天条リン、心配無用。転入手続きは、マリー・ハウゼンが処理しておいた」

「うひゃあおうツ？」

いきなり背後から浴びせられた声に、ウチとリンちゃんはビクウ驚

き跳ねる！

クルちゃんやった！

どこかの忍者かと思うたら、クルちゃんやった！

おんぎようじゆつ  
陰行術の達人やツ！

「ク……ククク……クル？ アンタ、いつからいたツ？」

「カツアゲ行為が始まった辺りから」

「失礼ねツ！」

「違った？」と、クルコクン。

ちや  
違うよ？

ウチにもそう見えたけど、違うよ？

そもそもリンちゃん、お小遣いに困らへんよ？

「ちなみに、ハーチエス・フォン・エルダナ・アルワスプ・ピースウオー  
ムIV世の羽根や容姿は、パモカの擬態アプリによる変身」

「は？ 擬態アプリ？ そんなんパモカにあった？」

「公式には存在しない。私が独自作成した物になる」

「何に使う気だった！ そんな需要皆無なアプリ！」

「需要」と、ハツちゃん指した。

「……うん、そうね。役に立ったわね」

リンちゃん、意気消沈で引き下がりはったわ。

せやけど、コレはしゃあないよ？

現物、居るもんねえ？

「ともあれ、これからは共に学校生活を送る事になる。陽ノ咲モモカ、

天条リン、ヨロシク頼む」

「コレとか！ コイツとか！」

「うむ、光栄に思え？」

「……何で上から目線だ、アンタ」

「とは言え、我とて『てーぴーおー』というヤツは弁えておる。学校  
では『ふつうのじょしこーせー』として接するがよい」

「……だから、何で上から目線だ」

それよりも全部『ひらがな発声』の方が、ウチ気になんねん。  
ハツちゃん、ホンマに理解しとるん？







リンちゃんと惑星レトロナ  
リンちゃんと惑星レトロナ Fractal. 1

『レエエトロオオナ……フアアアイブツ！』

天空に立つ鋼鉄の巨人が、雄々しくポーズを決めはった！

「アカン……リンちゃああああ……ん！ 帰って来てええ……ッ！」

ウチは叫んだ！

哀しなって……空むなしなって……必死の懇願こんがんを叫んだ！

さかのぼる事、約三日前——。

『ツエレーク、空間転移完了——量子波動安定化——現フラクタルブ  
レーン座標照合、3 f \ 2 b 次元、マイナスコンマ0003誤  
差修正——滞在可能推定時間、七十二時間四十五分リミット——  
——』

空間転移が終わった。

「今回はエライ滞在可能時間長いねえ？ 約三日やん？」

イザーナの操縦席コックピットで転移報告を聞いたウチは、率直な感想を洩もらした。

『ま、そういう事もあるっしょ』と、ミヴィークの操縦席コックピットからリンちゃん  
のモニター通信。

淡泊に切り捨てて、テキパキと発進準備を進めとる。

『んで、クル？ 今回は、どんな感じの惑星よ？』

リンちゃんの質問に答えるべく、反対側のモニターにクルちゃんが  
映った。

『今回の目的地は〈惑星レトロナ〉——あなた達の地球に似通った惑  
星』

「ふえ？　ウチらの〈地球〉に似とる惑星なん？」

『とは言っても、旧暦——それも“昭和”と呼ばれた時代に酷似している』

「ふわあ？　ウチ、楽しみや　♪　旧暦、体験した事無いわあ　♪

」

『……いや、そりやそうでしょうよ』

「リンちゃん、ある？」

『あるか！　アンタ、アタシを何歳だとカウントしてるツ？』

「えへへ　♪　ウチと同年　♪　」

『……嬉しそうにニコニコしないで、少しはアタシの意図を汲め』

「楽しみやね？　リンちゃん　♪　クルちゃん　♪　」

『うむ、実に楽しみであるな』

「ほら、ハツちゃんも楽しみやつて……」

『……………』

『……………』

ウチとリンちゃん、とんでもない予感に泡食ったよ？

第三の通信相手に面喰らったよツ？

『エエエ……エルダニヤ？　まさかアンタも降下する気なのツ？』

『騒がしいのう、リン。当然であろう？　オマエ達が降下するのであ

れば、我<sup>われ</sup>とて降下するは道理！』

『どうしてだッ！　そもそもアンタ〈宇宙航行艇〉は、どうしたッ！』

『フツ……抜かり無いわ！　我<sup>われ</sup>を誰だと思っておる！』

「ハツちゃん」『エルダニヤ』『痛いアルワスプ』

『違うわッ！』

合ってるやんな？

『さあ、心して見るが良い……我が愛機の勇姿を！』

自信满满ぶりに続けて、普段使わへん“第四ブロック十三型六六六番格納庫”がゴウンゴウンとシャッターを開け始めた。

此処、普段は閉鎖されとんねん。

不吉な番号の羅列やし、夜間整備しているとラップ音とかオーブとか騒乱<sup>おふだ</sup>しはるし、シャッターとか御札だらけやし。

ほんでもって重々しい逆光を浴びつつ、初見の〈宇宙航行艇〉が姿を現してきはった。

ハッチャン専用機やから、きつと〈蜂型〉……やない!

何故か〈魚類型〉や!

ウチの〈エイザーナ〉やリンちゃんの〈ミヴィーク〉に似たフォルムやけど、二回りデカイ!

しかも、何処となく凶暴な面構えや!

ウチ、あんなん古い映画で観た事ある!

確か〈モササウルス〉いうヤツや!

『何で〈モササウルス〉だーッ?』

リンちゃん、ウチの代弁を叫んでくれはった。

有難うねえ?

『む? コレはへもささうるす』というのか? 実は我も、何がモチーフに良いか日夜検索しておったのだ。いやはや苦労したぞ……主らに合わせたモチーフでなければ『てーぴーおー』というものが成り立たんでな』

ハッチャン、もしかして『DVD』を『でーぶいでー』言うタイプ?

『そんな中で、斯様に雄々しい生物を見つけたのだ。見よ、この勇猛さ! そして、王者の貫禄! 実に相応しいではないか?』

『いや、まあ……アンタの気位なら、そういう基準にもなるか……』

『私のアルにー♡』

『基準そつちかーッ!』

『だつてえくん ♪ アルつてば、カツコイイじゃない? 凜々しいじゃない? 胸、大きいじゃない?』

最後の関係あらへん。

『あんな? ハッチャン?』

『うふふ♡ アルアルアル♡ ♪ コレで一緒に新婚旅行♡』

『あんな? ハッチャン? 鼻血流してクネクネなってるトコ悪いけど……ちよつとええ?』

『アルアルアル〜ン♡ 私のアル〜ン♡』

「おらへんよ?」

『うわ〜〜〜ん!』

号泣しだしはった。

感情忙しいねえ?

『うぐつ……グスツ……して、訊きたい事は何だ? モモカよ?』

凜と上から目線や。

ハツちゃん、情緒不安定?

「あんな? それ、誰が造ったのん?」

『そうよ! そんな〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉なんて、おいそれと急造できる物

じゃないでしょ! まさか、またマリーとか言うんじゃないでしょう

ね!』

『私じゃないわよ』

また新たな通信モニターが開いて、困惑気味の眼鏡美女が映った。

表マリーや。

操縦席内、モニター乱立で忙せわしくガチャガチャなってきたわ。

軽くパーリー状況や。

『マリーが造ったんじゃないの? じゃあ、誰だツツーのよ?』

『う〜ん、私じゃないんだけど……何処となく見た記憶があるのよね、

それ』

『フツ……やれやれ。どうにも御主達おぬしたちは、救すくい難がたい無頓着むとんちやくのようであ

るな? 斯様かように素晴らしき機体を失念しておったとは……勿体無もったいない

!』

ハツちゃん、優越感めいて勝ち誇つてはる。

『コレは、あの倉庫に眠っていた機体である! それをへもささされ

す〜へとフォルム改修して新生させたのだ!』

噛んだよ?。

『あの倉庫って……まさか 第四ブロック十三型六六番格納庫ドックの

事ツ? エルダニヤ?』

『左様さようじゃ、リン』

『んなワケあるかツツーの! あそこ、ずっと封印されてんのよツ?』

封印言いはったねえ？

リンちゃん、閉鎖やなく封印言いはったねえ？

『思い出したわ！』と、突然マリーが声を上げた。『あの倉庫に眠ってたのはヘイザーナ』と『ミヴィーク』の試作機体——つまり『プロトタイプ』よ！』

『は？ アタシらのプロトタイプ？ それが『モササウルス』って……色気無えー』

『いいえ。別に『モササウルス』じゃなかったわ。かといって『イルカ』でも『シヤチ』でもない』

『んじや、何だったのよ？』

『何でも無いわよ。単に外装無しの剥き出し機体……骨組みと基礎設計メカニズムだけ。機体も、ここまで大きくなかったわ。せいぜい『ヘイザーナ』『ミヴィーク』の1・3倍程度……』

『だから、言うておろう？ 我われが『へもささうれす』へと改修した——と』

噛んだよ？

『んで？ 何で、そんなのが封……放置されてたワケ？』

また『封印』言い掛けたねえ？

『……死んだのよ』

『は？』『ふえ？』

『当時、その機体開発を担当していた整備員がね……その格納庫ドッグで睡眠薬自殺したの』

陰惨な黒歴史が炙り出てきた！

臍おぼろげ気に予想してたけど、オカルト入って来た！

アカン！ この作品『SF』なくなっちゃった！

『相当思い詰めていたみたいね……生真面目過ぎる性格だったから……けれど、誰も彼女の胸中に気付かなかった』

ウチとリンちゃんは、ゴクリと生唾なまつば飲み込んだ。

『それって、開発に行き詰まった……とかなん？』

『あ……或あるいは、過労死？』

『いいえ』と、深刻な面持ちで真相を告げるマリー。『彼氏と別れたら

しいのよ』

『開発秘話、関係ないじゃんツ!』

リンちゃん、間髪入れずに突っ込んだ!

『来る日も来る日も缶詰状態で、しかも完成の目処メドが付かない。クリスマスも誕生日も返上で、ひたすらに開発へ孤軍奮闘——。そんな長距離恋愛で関係が冷え込み、彼氏から別れの連絡が………』

『よくある話じゃん! 死ぬ程ほどの事ないじゃん! 男なんて掃いて捨てるほどいるんだから!』

「ふぐう……その人、可哀想やあ〜」

『……何で潤々うるうるしてんだ、脳味噌スウィーツ娘』

リンちゃん、あんまりや!

『頬を伝う乾いた涙は何だか可笑しく、明日からの生き甲斐を模索するのも面倒になってきていた』

クルちゃん? いきなり何をブツ込んできたん?

誰も読んでへんよ? それ?

『しかし、それにしても、なかなか見事な腕前であるな? 正直、我われも感嘆し——いやいや、謙遜けんそんするでない——フッフ、左様であったか』

……ハツちゃん? 誰と話しとるのん?

点つついてないサブモニター相手に、誰と話しとるのん?

『僅わずか数週間で、このように完璧な機体を完成させるとは——何を言うか、見事である! 可能であれば特別報酬を授けたいところであるが、生憎あいにくと現状いまの我われは——ふむ? そうか? 何と無欲な——うむ、構わぬ。申してみよ——なるほどのう?』

見えへん人と話してはるツ!

ハツちゃん! 帰ってきてえ〜ツ!

『うむ、善かろう! 今日より、我われの専属エンジニアにしてやろう!』

ドエライ人を採用しはった!

ほんでもって、噛んだ!

『ホホホ……苦しゅうないぞ?』

オーブ飛び始めた!

ハッチちゃんの周り、無数の発光体が喜び飛んではる！

『では、改めて紹介しよう。リン、モモカ、クルロリよ、此処に居るが、我が専属の——』

『行ってきまーすツツツ！』

半ば強引に「ヘイザーナ」と「ミヴィーク」は出動した！

格納庫扉をミサイルでブチ破って！



リンちゃんとか惑星レトロナ Fractal. 2

白い滞留が僅かな間だけ真つ赤な世界に染まると、青く広がる清涼へと抜け出た。

『此処が〈惑星レトロナ〉か』

一望に感想を漏らすリンちゃん。

雄大な満ち引きが入江に浸食を食い止められ、波打ち際の境界付近は灰色に拓かれた人工地が利便の支配を誇示しとる。

その先端には、結構、大規模な敷地を使うた建築物が物々しく聳えとつた。

おそらく、アレを造る為だけに開拓したねんな？

だって、周辺を囲うように森林は手付かずやもん。

「ホンマや！ 旧曆そっくりや！ あ、東京タワー在る！ スカイツリーや！ ほんでもって、通天閣も在る！」

『待て待て待て！』

『ね？』

『クル！ コクンと「ね？」じゃないツツーの！ どうして全国名所が一緒くたに乱立してるツ？』

『……………』

『……………』

『ね？』

『クルコクンで「ね？」して誤魔化すな！』

せやねん。

あの建築物の敷地内、世界名所だらけやねん。

大きさは均衡化しとるようやけど。

ほんでもって、どれも、おそらく元祖より巨大や。

「あ、奈良の大仏様や！ 自由の女神や！ エッフェル塔や！ スフィンクスや！ お台場ガ ● ダムもある！」

『カオス増やすなーッ！』

『天条リン、旧暦通り』

『なワケあるかーッ！ 世界各国の国境無視じゃないのよ！』

『おかしい？ 旧暦では、世界名所は一ヶ所へ集つどっているはず？』

『どんな誤認よ！ 世界名所は、世界各國に在あってこそその『世界名所  
“でしょ！”』

「あ！ ウチ、それ知ってるよ？ 旧暦アーカイブで見た事あんねん

♪ 「」

『そう、それ』

『はあ？』

『東武ワールドス ● ウエア』 ♪ 『』

『ハモるなーッ！』

リンちゃん、プリプリや。

何で、そないにカリカリしてんのん？

ええやんな？

世界の名所、一網打尽や ♪

と、突然、けたたましいサイレンが辺り一面へ鳴り響いた！

コレ、明らかに非常事態警報やんな？

ウチでも解るよ？

えへへ ♪

『な……何よ？ コレ？』

狼うろた狽えるリンちゃん。

出所を求めると、どうやら眼前の名所地帯からや。

するとへ奈良の大仏とへ自由の女神とへお台場ガ ● ダムが

マトリョーシカみたいに前後へ割れ開き、中から三機の戦闘機が垂直  
に飛び立った。

……格納庫だったん？

つていうか、最後のええのん？

戦闘機は、こちらに向かつて来る。

あの世界名所敷地はへ東京タワーへスカイツリーへ通天閣の尖  
先からピンク色のエネルギー光を放出し、それをバリアと張り巡ら  
せた。

『現れたな！ レトロナ星人！』

尾翼に『1』書かれてると赤いジェットマシンが、外部スピーカーで叫びはった。

ウチ、ワクワクして周囲を探したよ？

「宇宙人？ ドコ？」

『はい』

無抑揚に手を挙げるクルちゃん。

「ふええ？ クルちゃん〈宇宙人〉やったの？ ウチ、気付いへんかつ

た♪」

『陽ノ咲モモカ、私だけではない。宇宙そのものに判断基準を据えれば、アナタも立派に〈宇宙人〉という定義になる』

「ウチも？」

『そう』

「違うよ？ ウチ〈宇宙人〉違うよ？ あんな？ 宇宙人は、もつとこ

う……変やねん♪ 地球人と違うねん♪ 肌色やなく

て、青とか緑とか銀やねんよ♪」

クルちゃんに教えたつた♪

ウチ、物知りさんや♪

えへへ♪

『陽ノ咲モモカ、アナタは“変”』

淡白に返されたよツ？

ウチ“変”違うよ？

ふぐう！

『……その定義はともかくとして、どうやらイツらが指しているのはアタシ達のようなね』

リンちゃんは緊迫した面持ちで、接近して来る戦闘機を睨み据えとつた。

『天条リン、交戦するの？』

『場合によっては……ね。アイツらの出方次第』

『……了解した』

クルちゃんは、軽く一顧を刻む。

『天条リン、その前に解決しなければならぬ問題が出来た』

『はあ？ つたく、アンタは……どうして毎回、切羽詰まった局面で新たなトラブルを提示するかな？ 何よ！ そのトラブルって？』

『あれ』

『うん？ ……って、モモローツ？』

ウチ、相手の隣に並び飛んだ。

ほんでもって、外部スピーカーで挨拶した ♪

「こんにちは★」

『な……何ツ？ こちらの間に詰めただとツ？』

『気を付けろ！ ケイン！ どうやらソイツは〈瞬間移動能力〉を持っているようだぜ！』

主翼に『2』書かれたジェット機から忠告が向けられた。

『ああ、分かっている！ ジョニー！』

持ってへんよ？

ウチの〈ヘイザーナ〉に、そんな性能スペックあらへんよ？

普通に近付いて並んだよ？

「あんな？ ウチ 陽ひノ咲さきモモカ”言うねんよ？”

『な……何ツ？ 少女……だと？』

『気を付けろ！ ケイン！ どうやら、ソイツは“少女”に化けて隙を突く作戦のようだぜ！』

『ああ、分かっている！ ジョニー！』

『フツ……しっかりとしてくれよ？ リーダーさんよ？』

化けとらへんよ？

ウチ、正真正銘の“少女”だよ？

「えへへ ♪ 1号機はん、名前“ケイン”言うの？」

『な……何ツ？ どうして、俺の名をツ？』

……言うてはったやん。

散々“ケイン”“ジョニー”言うてはったやん？

『気を付けろ！ ケイン！ おそらく〈テレパシー〉……それも、機体外からの介入だ！ どうやらソイツは、とんでもない〈超能力者サイキツカ〉のようだぜ！』







『ケルルルルルルッ!』

グス……グス……あ、リンちゃん?

リンちゃんとへミヴィークが、怒り心頭で特攻して来た!

『何ッ? 増援……だとッ?』

『気を付けろ! ケイン! どうやら——』

『やかましいイイイイッッッ!』

『グハアアアアアッ?』

問答無用の全砲門攻撃!

そのまま高音速で巨大ロボの足下を突き抜け、衝撃波の槍と化した

!

螺旋に墜ちて行く鋼鉄の巨体。

『グアアアア……何イイイッ? 墜イイイ落……だあああとおおおーッ?』

『グアアアア……気を付けえええろ! ケイイイイン! どう

やあああら——』

水飛沫上がった。

海面に「押すなよ? 絶対に押すなよ? ……押せよッ!」みたいな

水飛沫上がった。

「グス……グス……ふぐう……リンちゃん……」

『まったく、アンタは! だから、ヒヨイヒヨイ行くなッの!』

「せやかて、ウチ お友達”なれるか思うたんよ?」

『この脳味噌よいこのえほん娘! 少しは警戒心を持って!』

「ふぐう……ごめんなさい」

『……反省、した?』

「……うん」

『よし! そんなら許す!』

「あ、あんな? リンちゃん?」

『何よ?』

「えへへ ♪ ありがとね?」

『べ……別に御礼なんか、いいッの』



リンちゃん、視線逸らしたよ？  
何故か、ほっぺ真っ赤やよ？  
何で？

「あ、ほんでな？ リンちゃん？」

『な……ななな何よ？』

「ウチ ッレトロナさん」やないよ？」

『……知ってるツツーの』

今度は苦虫顔された。

リンちゃん、百面相忙いそがしや ♪

何やかんやあつたけど誤解は解けた。

うん、あの後、和解してん。

え？ 具体的には……って？

色々★

ええやん？

ウチ、細々したの嫌いやねん。

せやからな？

例の「ケインはん」と「ジョニーはん」に導かれ、ウチらは基地に招待されてん。

機体格納は通天閣や。

せやけど、たぶん本物よりデカイよ？

展望台に当たる所が開くと、格納庫ドックになつてはるもん。

ウチらの「宇宙航行艇」コスモクルーザーを回収しはったもん。

懐古的外見の割に、中身は如何いかにもハイテクな基地やってん。

ちなみに「レトロナナンタラ」は分離して、発進してきた格納庫ドックへと回収された。

せやよ？

あの「奈良の大仏」と「自由の女神」と「お台場ガ」●「ダム」や。

つまり、この通天閣格納庫ドックは、ウチらのような「来客用」やねんな？

……っていうか、やっぱりええのん？ 最後の？

「ったく！ ただじゃおかない！ 文句言つてやる！」

格納された「ミヴィーク」から降りるなり、リンちゃんプリプリや。

「リンちゃん、何でそないにカリカリしとんの？」

ツカツカとエレベーターへ向かう後ろ姿に追いついて、ウチは訊たずねた。

「はあ？ 当事者が何をのほほんとしてんだツツーの！ 聞く耳持た

ずで、よってたかつて女の子をイジめるなんて、大の男がやる事か！  
女ナメンなツツーの！」

「……原因、ウチ？」

「……アンタじゃない」

「せやかて、ウチのせいでリンちゃんカリカリしてるん違ちやうの？」

「アンタは何も悪くない！」

……やっぱりウチや。

何や悲しなった。

ウチ、明るいリンちゃんがええ。

怒ったリンちゃん、イヤや。

悲しなった。

すごく悲しなったよ？

せやから……。

「ふぐうー！」

「アダダダダーツ？」

えへへ ♪

思いつきり後うしろからハグしたった ♪

ギユツとしたら温かいねん ♪

イライラ無くなるよ？

「痛いツツーの！ 放せ！ モモ！」

あれ？

イライラ収まらへんねえ？

もつとや！

「ふぐうううー！」

「アダダダダダダダツ！」

「陽ひノ咲さきモモカ、そのまま後方へと投げ捨てれば、天条リンは気絶す

る。そうなれば報復行動は起こせない。とりあえずは問題解決」

「せやの？ クルちゃん？」

ウチの確認にクルコク肯定。

「上手くいけば記憶もトぶ……」いっせせせごちまう「石いし二に丁ぢょう」

「せやったら……せーの！」

「何が『せーの!』だあああー!」

「ふぐう!」

後頭部ハリセンスパーン来たよ?

リンちゃん、えらい焦って無理矢理振りほどいたよ?

「うう……リンちゃん、痛いよ?」

「潤々しながら『痛いよ?』じゃないツツの! 忘れた頃に懐かしいパターンを再活用すんな! この脳味噌スポ根バカ娘!」

リンちゃん、あんまりや!

「せやかて! ウチ、リンちゃん怒るのイヤや!」

「だからって、いきなり〈ブレーンバスター〉かますバカが何処にいる! 気絶どころか死ぬわ!」

「天条リン、それは誤解」

「何がだ! クル!」

「陽ノ咲モモカが実践しようとしていた技は〈バックドロップ〉——よく誤認されているけど〈ブレーンバスター〉ではない。ちなみに解放せずにホールド体勢を維持したのが〈スープレックス〉と呼ばれる技で——」

「知るかーッ!」

カリカリ増した……不思議や!

「やれやれ……その元気じゃ、どうやら大丈夫そうだな?」

不意に男の人が声を掛けて来はった。

別なエレベーターからや。

聞き覚えあるよ?

「ああん?」

ギンツと殺気紛いに振り向くリンちゃん。

目エ怖いよ?

不良みたいやよ? 大企業の御嬢様?

格納庫片隅からコツリコツリと歩き出て来た人は、精悍で誠実そうな青年やった。

凛々しく太い眉毛に、真っ直ぐ澄んだ瞳。

黒い髪は、快活さと清潔感を印象付ける。

真つ赤な〈PHW〉には、胸に黄色い『V』の字があしらってはつた。

ウチ、自分の〈PHW〉を見比べた。

あんまし好きやないけど……アレの恥ずかしさよりはマシやんな？

「さつきは済まなかったな？ 俺の名は“ケイン”——レトロナマシン

ン1号機〈レトロナギユギューン〉のパイロット“神谷ケイン”だ」

ああ、やっぱり“ケインはん”や……っていうか、機体名ツ！

それ、変えた方がええよツ？

まだ〈ハウゼン語〉の方がマシやよツ？

リンちゃんは相手を見据えて固まったままやった。

たぶん食って掛かるタイミングを見計らつとるんやね？

これ、あんま良くないねえ？

せやから、ウチは明るい自己紹介で流れを変えようと思った。

「こんにちは★ ウチ“陽ノ咲モモカ”言うねんよ？」

「な……何イ？ き……君が“陽ノ咲モモカ”だっただとオ！」

……またブルートーン入った。

……世界が青く染まった。

超能力？

「私は“グルロリ”でいい」

「な……何イ？」

「それは要らない」

ブルートーンが打ち消された。

クルちゃんの醒めた淡白で。

超能力対決でも繰り広げられとったん？

ウチが気付けへんだけで？

「それで？ そつちの君が……？」

「……………」

関心に移されるも、リンちゃんは答えへん。

固まったままや。

まだ攻撃心が軟化しとらへんようやね？

う〜ん、どないしたらええんやろ？

「あの……君？」

「天条リンです♡」

一転してキャピルン挨拶や！

握り拳を口元へ添えて、片足跳ねや！

リンちゃん？ まさか！

「気軽に“リン”って呼んで下さ〜い ♪」

「あ……ああ……え？」

「あ、でもでもお〜？ アタシだけ“さん付け”じゃ他人行儀よね？

それってば、不・公・平♡ だからだからあ〜？ アタシも“ケ・

イ・ン♡”って呼んじやおつかない？ ダメエ？」

人差し指を唇に添えて、甘えん坊の上目遣いや！

これ、アカン！

「あ、いや……構わないが？」

「ヤ〜ン ♪ アタシってばラツキー♡」

跳ねとる！

ピヨンピヨン小兎アピール入った！

「……陽ノ咲モモカ？ 天条リンがおかしい？ どうした？ 何か悪

い物でも拾い食いした？」

「……イケメン好きやねん」

「ふむ？」

不可解とばかりにクルコクン。

「せやねん……リンちゃん、イケメン大好きやねん！ 惚れると、ああ

なんねん！ ほんでもって、実は惚れ易いねーん！」

ややこし展開の確約に、ウチは頭抱えて大絶叫！

一方で、クルちゃんは平静に纏めはった。

「やはり“変”なキャラクターだった」

司令室へ案内された。

一際物々しい自動扉が開くと、計測器やコンピューターが並ぶ機能美的な大部屋やった。

四方は硝子張りガラスばに見晴らしも良く、海原や森林が豊かな息吹を視覚に伝えとる。

つていうか……リンちゃん、ケインはんにベツタリや！

強引に腕組みや！

ウチ、おもしろない！

胸中プンプンや！

「それはそうと、さつきは悪かったな？ モモカくん？」

「全然気にしてないですう〜♡」

ウチやないよ？

ウチの台詞やないよ？

このキャピルンは、リンちゃんや。

「いや、しかし……」

「ケガとかしてないんでえ ♪ 気にしないで下さ〜い ♪

」

リンちゃん、あんまりや！

それ、ホンマのあんまりや！

「だが、男としてあるまじき……」

「間違いなんて誰にもありますからあ♡ ノー・プ・ロ・ブ・レ・ム

♪ ー

人差し指でケインはんの唇へ「シツ」と触れた。

ウチ、数分前に戻りたい！

ふぐう！

「それで、神谷ケイン？ あのロボットは何？」

クルちゃんが平然とした抑揚に質問する。

一人だけ通常運転やね？

他人事やね？

「アレは〈超リニアロボ・レトロナ V〉——この惑星レトロナを防衛する為ために造られた超科学の結晶だ」

「防衛？」

怪訝けげんそうなクルちゃん。

「ああ……〈レトロナ V〉は、レトロナ星からやって来たレトロナ星

人が送り込んで来る「レトロロナ獣」と戦う為に造られたのさ」  
うん？

何や、ややこしい事を言い始めたよ？

「あんな？ ちよつとええ？」

「何だい？ モモカくん？」

「この惑星は、何て言うん？」

「惑星レトロロナだ」

「あのロボットは？」

「レトロロナ Vだ」

「……敵は？」

「レトロロナ星人だ」

「……どつから来てん？」

「レトロロナ星だ」

「……………何と戦ってるん？」

「レトロロナ獣だ」

全部「レトロロナ」や！

何故か全部「レトロロナ」や！

説明されたフォーマットは単純なんに、ややこししてる原因それや  
！

「ちなみに、此処は惑星レトロロナの防衛を一手に担う最新鋭基地「レトロロナベース」だ」

「また出た！」

思わず声が漏れたわ！

ウチが驚愕した直後、自動扉が開いて誰かが入って来た。  
小柄やけど恰幅のいい髭オジサンや。

白衣姿にヨレヨレのズボン。そして、下駄履き。

鼻を発端に顔は真っ赤で、腰から濁酒ぶら下げとる。  
要するに「だらしのない酔っ払い」やね？

「あ、博士」

「博士なんツ？」

またまた声漏れたわ！



どっからか不審者が入り込んだ思うたよ!

「みんな、紹介しよう。この基地の最高責任者 // 四ツ乙女谷博士だ」

……スゴい名前を紹介された。

「博士、彼女達は——」

「うるせーッ! さっさと酒持って来ーッーい!」

博士、酒乱やよツ?

重度のアル中やよツ?

「呑んでも尽きない養老乃瀧……呑んでも尽きない養老乃瀧

……」

プルプル手を震わせて、何を言うてんの?

「アルコールプルプルひやつほーッーう!」

何を吠えてんのんツ?

惑星レトロナ、壊滅秒読みやん!

何とも言い難い<sup>がた</sup>気まずさが沈黙に漂う中、クルちゃんが「ふむ?」と一顧<sup>いっこ</sup>を刻む。

「困った。これでは会話が成立しない。有益な情報を引き出す事も不可能」

そして、物怖じせずに博士へと歩き進んだ。

「神谷<sup>かみや</sup>ケイン、少しばかり四ツ乙女<sup>おとめや</sup>谷博士を借りる。マンツーマンで話がしたい」

「ああ、それはいいが……」

「感謝する」

「うるせー! 公園はみんなの物だ! 住んで何が悪いーッ!」

そのままズルズルと酔っ払……博士を連れて、オートドアの外へ出る。

閉まった。

「……ねえ? ケイン?」

「何だい? リン?」

「あの博士、公園に居たの?」

「ああ。出会ったのは偶然だったが、話してみれば、なかなか聡明な人でね。ああ見えて、人生哲学等にも精通しているんだ」

「……へえ」

「家族と別れてから人生観の探究にも余念が無いようでね。博士曰く『家族とは、血の繋がった他人の共同生活環境』に過ぎない』『人間、死ねば所詮、万人塵芥』だそうだ。あまりにも高尚過ぎて、俺には把握しきれないが……実に深い理念だと思わないか？」

「……そーなんだー」

リンちゃん、醒めとるねえ？

醒めとるけど、ケインはんの手前、いつものツツコミが出来へんでいるねえ？

「……酔ってた？」

「はははっ！ 博士がシラフなところなんて、まず見た事が無いよ」

「……へえー」

それ、ただの酔っ払いやん！

おそらく人生転落した酔っ払いがクダ巻いとっただけやん！

——ビビビツ！

「ハウッ！」

ウチら全員ビクウなった！

ドアの外で短い悲鳴と電気音が聞こえたから！

あ、ドア開いた。

帰って来た。

並んで帰って来た。

ほんでもって、クルちゃんの手には、まだチリチリと帯電してるパ

モカ。

「ふむ？ それで、君達は何者なのかね？」

爽やかに語り出したよツ？

博士、スツキリした顔しとるよツ？

せやけど瞳孔開いとるよツ？

クルちゃん、何したんツ？

「へネクラナミコンへねえ？」

ウチらから事情説明を受けた博士は、軽く思索を巡らせた。

「博士、何か知っていますか？」

ケインはんの質問に、重々しく首を振る。

「仮に、そのような物を知っているならばへレトロナ<sup>ファイブ</sup>Vの強化に役立てておるよ」

「博士、具体的には？」

「……………」

急に黙りはった。

「具体的には？」

「それは……アレだよ」

「アレとは？」

追い詰められた。

「……………き……君の考えている通りだ、ケイン」

「何ですって！ そいつはすごい！ 百<sup>ひやくにんりき</sup>人力だぜ！」

ええのん？ それで？

「おかしい？」と、水を差すクルコクン。

「どないしたん？ クルちゃん？」

ウチの問い掛けに、パモカへと視線を落としたまま答える。

「このへネクラナレーダーの反応では、確かに、この基地内にへネクラナミコンは存在する」

「ネクラナレーダー……って、ドクロイガーはんから手に入れたヤツ？」

「そう」

「せやけど、それパモカやん？」

「私が作ったアプリ。ニュートリノブロードバンドを用いてへネクラナレーダー本体とリンクさせてある。そうでもしなければ、彼のサイズ基準では巨大過ぎるので活用には不向き」

「せやつたら、本体は？」

「ツエレークの内部機構として組み込んである。そして、それ故にツエレーク自体にもへネクラナレーダーの機能が新規実装された」

「ふええ？ いつの間にか大改造されてんねんな？」

「それって、確か半径約一〇〇メートルまで特定感知する事が可能な

「のよね?」

「そのはず。ドクロイガーの技術力が確かならば……」

「じゃあ、ダメじゃん」

リンちゃん、決めつけはった。

微塵も信用しとらんねえ?

「ふむ?」と、納得いかんクルコクン。「陽ノ咲モモカ、天条リン……」

暫く、私は別行動を取る」

「はあ? 何しようってのよ?」

「この基地内を隈無く捜してみようと思う」

医療室を出て来たケインはんの様子は、浮かない顔やった。

「ケイン……：ジョニーの様子は？」

リンちゃんの質問に、悲痛な表情が首を振る。

「しばらくは安静が必要だ。いまは、誰にも会いたくないそうだ……」

「そんな？」

「右腕の腱鞘炎けんしやうえんは深刻だ。当面は愛機〈レトロナトビマス〉にさえ乗れないだろう」

2号機の名前ツ！

「クソツ……何故、こんな事に！ まさか……：まさか俺の腱鞘炎けんしやうえんが完治したと思つたら、今度はジョニーが発症するなんて！」

苦悩のままにチタン壁を殴るケインはん！

何故つて // ジェ ● ガ // やよ？

「レトロナ Vファイフは、レトロナマシン三機が揃わなければ合体出来ない！

こんな状況で、もしも〈レトロナ獣じゆう〉が襲撃してきたら……」

何で、三機なん？

そしたら // Vファイフ // は何なん？

「俺とジョニー……：二人が揃わなければ……」

何で、二人なん？

そしたら、三機目のパイロットは誰なん？

「最悪時は、俺おれひとり一人で……：残りの〈レトロナマシン〉は「オートAI」で出撃してしまう事になる」

それで、ええやん！

何だつたら、全機それでええやん！

「このままでは、五大武器の真価すら発揮出来ない！」

ここに来て // Vファイフ // の意味が明かされた！

まさかの武器数やった！

少なッ！

「こんな事になるのなら、命懸けで止めるべきだったんだ！ ジェ

● ガを！」

その通りやよ？

命懸けかどうかは別として、その通りやよ？

「せめて……せめて臨時のパイロットさえいれば！」と言った後、数秒リンちゃんを注視した。

ほんでもって、再び壁に向かって弱音を吐露しはる。

「いまだけ……いまだけでいい！ 臨時のパイロットさえいれば！」

また数秒、リンちゃんをジッと注視した。

ねだつてはる？

「え……つとお？」

困惑を浮かべるリンちゃん。

そりやそうやんな？

「ひとつだけ……ひとつだけ打開策はある！ だが……いや、ダメだダメだ！ こんな事をリンに頼めるはずがない！ まさかヘレトロナトビマスくちに乗ってくれなんて！」

露骨に口にし始めたわ。

「あ……うん、それはチョット……」

「さっきの戦闘で確信した……確かにリンはパイロットくちとして卓越した腕前を持っている！ 俺とリンなら、相性はバツチりだろう！

そう、俺とリンなら！ だが、リンの気持ちを無視して、俺のエゴを通すなんて出来るワケが——」

「やるッ♡」

リンちゃん、嬉々と快諾しはったよッ？

「え？ いいのか？ リンくん？」

「イヤ♡♡ リン♡って、呼♡ん♡で ♪」

ツボ、そこやった！

呼び捨て連呼や！

リンちゃん、意外とチョロかった！

「だつてえく？ ケインがそんなに困ってるなら、ほつとけないしい？ そこまで頼りにされたら、期待に応えたいしい？ 確かにアタシ

とケインなら相性バツチりだしイ？」

何言うてんの？

乙女眼おとめまなこの上目遣いうわめづかで何言うてんの？

出会ってから数時間しか経ってへんよ？

相性も何も、ほぼ初対面やよ？

「ありがとう！ リン！」

「うふふ ♪ ケ・イ・ン♡ ならんで、イヤソン♡」

「アカーンツツッ！」

ウチ、見つめ合う二人の間へ割って入った！

血相変えて割って入った！

「リンちゃん！ そしたらへネクラナミコン＜どないすんの！ クルちゃんとの約束は、どないすんの！」

「あ、それならいい考えがあるから。とりあえずへドクロイガー＜泳がせてえ……収集させといてえ……揃ったところで強奪フルボッコ

♪」

「山賊の考え方やんツ！」

「ええ………？ 効率いーじやくん？」

完全に萎なえとる！

やる気喪失しとる！

「せやったらへクラゲ＜は！ あのへ宇宙クラゲ＜は、どないすんの！」

「大丈夫よ？ 読者だつて、そろそろ忘れてたから ♪」

「それ、言うたらアカンとこーツツ！」

このままやったら、リンちゃんへレトロナファイブV＜のパイロットになつてまう！

作品タイトルも『G—M—O—M—O—ぎんれきしょうじよ銀暦少女モモ』から『超リニア

ロボ レトロナファイブV』になつてまう！

ウチ、ケインはんへと直訴した！

「せや！ 博士乗つけたら、ええやん！ 博士ならへレトロナファイブV＜に精通しとるやん！」

「あんなアル中、乗つけられるか……ツツ！」

……ハツキリ言いはった。

……躊躇ちゆうちゆう無く言いはった。

「俺だって……俺だって、まだ死にたくないんだ！」

何言うてんの？ この人？

失意の拳を金属壁へと叩き込みながら、シリアスモードで何をぶつちやけてんの？

「ケイン、大丈夫よ……私、お酒飲まないわ……未成年だから」

そつと慈しみに寄り添って慰めるリンちゃん。

何言うてんの？

リンちゃんはリンちゃん、何言うてんの？

「リン……」

「ケイン……」

見つめあう瞳と瞳……つて、それアカン！

そのフレーズが生まれる状況はアカン！

ホンマに『超リニアロボ』の世界観になりつつある！

「じゃあ、早速特訓だ！」

「はい♡」

そそくさとケインはんについてった！

ルンルン気分気分に浮足立つとる！

「リンちゃんーん！」

ウチ、心の底から声張ったよ？

だって……だって、こんなん認められへんもん！

「せやったら……せやったら、あの子は……へみヴィークは、どないすんのー……」

琴線しんせんに触れたんか、リンちゃんはピクリと立ち止まった。

「だって、イケメンなんだもん……熱苦しいけど」

「リンちゃんーん！」

「……下の名前呼んでくれるんだもん」

「リンちゃんってば！」

「ヴァーチャルとかゲームとかじゃないんだもん！」

断腸だんちやうのような吐露とろを残して、その背中は通路の奥へと歩み去った……。



操縦室内で、ウチは膝抱えとった。

へイザーナ〈や〉ない。

へミヴィーク〈の〉……や。

あれから一日経った。

リンちゃん、新しい搭乗機に慣れるんに特訓してはる。

今日も……や。

「……あんな？ ミヴィーク？」

『……ケル』

気のせいかな、気落ちしたかのようなテンションやった。

きつと、この子なりに何かは感じ取っておるんかもしれへん。

賢いねん。

この子、寡黙やけど賢いねん。

だから、言わずとも悟ったんやろね。

リンちゃん、この子の整備にも来えへんし。

……いや、違うか。

この子とリンちゃんには“絆”がある。

ウチとへイザーナ〈の〉ように……。

言葉、要らへん。

「あんな？」

『……』

何て切り出してええか分からへん。

せやからウチ、コンソールを優しく撫でとった。

「心配要らへんよ？ リンちゃん、いまは酔っとなるだけやねん。イケ

メン好きやねんから」

『……ケル』

「あはは……せやねえ？ ホンマ、困った性格やねえ？」

『……』

「……あんな？ ミヴィーク？」

『ケル？』

「大丈夫……帰ってくるよ？ ウチらのトコ……」

『……ケルル』

にへつと砕けたウチの笑顔は、きつと情けなかったんやと思う。  
それが自覚できたから、ウチの心の仮面は綻んだ。  
顔、膝に埋めとった。

「ふぐつ……え……ふええ……」

『……ケルル……ケル……』

慰められた。

ゴメンね？ ミヴィーク？

これじゃ、どっちが励ましに来たんか分からへんね……。  
ゴメンね……。

滞在、二日経った。

青空には並列飛行の機影が白い尾を引いとる。

ウチ、その光景を司令室から空しく眺めとった。

『リン！ 高度が低いぞー！』

『ゴメン、ケイン！ いま合わせるわー！』

通信スピーカーから聞こえる会話は、もうすっかり馴染んだパート  
ナー同士や。

「スゴいな……彼女は」

「ああ、こんなに早くこのレベルとは……ジョニーさんと同レベル  
じゃないか」

観測結果に驚嘆を交わす白衣の所員達。

その言葉すら、ウチには虚しい旋律や。

(リンちゃん、このまま帰って来なかったら……ウチ……ウチ、どうし  
よう?)

寂しい未来予想図を噛み締める。

「……陽ノ咲モモカ」

背後からの呼び掛けに、虚無感に乾いた心境が少し清水を潤した。

「あ……クルちゃん？」

「状況が呑み込めない。説明を頼む」

「説明？」

小柄な肢体が一步踏み出して並んだ。

無感情に眺めるのは、大空を舞う二機の戦闘機。

「何故、天条リンがアレへ搭乗している?」

「何故……って……」

せやね。

あの展開になったんは、クルちゃんと別れてからやねんね。

せやから、ウチが説明せんと分からへんよね?

ウチが……説明せんと……。

「ふええ……クルちやくん!」

説明しよう思うて口を開いたら、一緒に涙腺弛るいせんゆるなった。

ウチ、小さな肩に頭預けて泣いとった。

「ふむ?」

感情乏しい困惑は、それでも撫で撫でしてくれた。

「よしよし」

なんか、すごく柔らかくて温かかった。

「なるほど……状況は把握した」

人目につかない非常階段に腰掛けて、ウチとクルちゃんは詳細を話し込んだ。

隣に座る存在感は小柄なのに、何や頼り甲斐に溢れとるようにも感じる。

「クルちゃん……ウチ、どうしよう?」

「どうしたい?」

「え?」

自然体で向けられた言葉に、心の奥が何故か小波さざなみを生んだ。

改めてクルちゃんを見れば、愛らしくも涼しい童顔がジツとウチを見つめとる。

その瞳は、特に示唆しそくも鼓舞こぶも孕はらんどらへん。

ただ、返事を待った。

「ウチ……ウチ……」

口隠くちごもった。

頭ん中グルグルして、上手く考えが纏まらへん。

「ふぐう」

膝抱えたわ。

我ながら頭悪いのんが、情けななつた。

クルちゃんは「ふむ？」と独り納得したかのように、正面の虚空を正視する。

「少し昔の話をする」

「ふえ？ クルちゃんの？」

「そう」

ちよつと驚いたわ。

クルちゃん、自分の事は全然語らんに……。

「バカがいた」

導入ッ！

唐突に導入がオカシイよツ？

「どてつもなバカだった。手のつけられないバカだった。救いようのないド級バカ。おそらく宇宙規模のバカ——」

いきなり何をデイスつとんの？

誰をデイスつとんの？

ウチ、消沈中断で何を聞かされとんの？

「そのバカが、私の最初の友達……」

まさかの「友達」をデイスつとつたーッ！

それも大事なんのをーッ！

「そのバカにも、大切な親友がいた。常に一緒にいるような間柄だった。丁度、アナタと天条リンのように……」

「ウチとリンちゃんに？」

「そう」

「似とるん？」

「個々の性格差異はあるけれど、関係性は酷似している」

「……そうなんや」

不思議や。

何や、ちよつと気持ちがあわつとした。

会った事はないけど、温かい親近感が湧いとった。

「あとは、アナタが天条リンの胸を崇め揉むのを日課とするだけ」

「揉まへんし崇めへんよツ？」

一気に数百光年彼方へ遠ざかったわ。

どないな人なんツ？

「ある日、彼女が戦っている〈侵略宇宙人軍団〉によって、その親友が拐われた」

……うん？

いま、変な事を言うたねえ？

「侵略宇宙人？」

「そう」

「戦ってたん？」

「そう」

「それは〈火星〉や〈木星〉の移民？」

「違う。外宇宙生命体」

「その人〈銀邦軍〉とか〈惑星防衛軍〉とかに所属してはったん？」

「一般女子高生」

状況解らへんツ！

あまりに特異な状況過ぎて、ウチの脳内キャンバスは絵具ひっくり返したみたいになったよツ？

「大好きな親友と引き離された彼女は、どうしたと思う？」

「……あ」

クルちゃんの正視が、ウチに何を伝えんとしているかを物語つとつた。

もしかして……その人も、現状のウチと同じ心境やったん？

クルちゃん、その時の事をヒントにしてくれるつもりやったん？

「とりあえず敵要塞へと殴り込んで、親友の胸を揉みまくった」

ヒントならへんツ！

参考にも御手本にも、ならへんツ！

「その結果、敵勢力は無力化して地球が救われた」

何でツ？

そないな要素無かったよツ？

宇宙人の巣窟そうくつに、胸揉もみ行っただけやよツ？

その女子高生はんツ！

「つまりは、そういう事」

どういう事ツ？

「彼女は、やりたい事へと邁進まいしんするだけ……自分の心に素直に従って。そう、ただそれだけ。けれど、それが状況を打開する原動力にも成り得る」

「あ……」

「陽ひノ咲さきモモカ、どうしたい？」

改めてウチを見つめる瞳。

「ウチ……ウチは……」

正直、まだ分からへん。

けれど、ひとつだけ……ひとつだけ確かなんがある！

「ウチ、リンちゃんと一緒にがええ！ ずっと一緒にがええ！」

「……そう」

あれ？

クルちゃん、いま微笑わろうた？

錯覚？

その時やった！

基地内に鳴り響く警報！

染めては引く赤灯から、非常事態なんはウチにも解った！

「な……何や？」

ウチに答えるワケやあらへんけど、至る箇所のスピーカーから所員の状況報告が流れる！

『緊急事態発令！ 緊急事態発令！ 上空より未確認飛行物体接近中！  
ヘレトロナマシン』は、速やかに迎撃へ出撃せよ！ 繰り返す――』

「クルちゃん！」

「どうやらヘレトロナ星人の襲撃……かもしれない？」  
クルコクン。

「……何で疑問形？」

「確定要素が無い。ただし、ひとつだけ確定要素がある。天条リンは〈レトロナトビマス〉で出撃する」

「せやった！」

「陽ノ咲モモカ、私は引き続き〈ネクラナミコン〉捜索を継続する為にサポートが出来ない。即時、天条リンを引き止める事を忠告しておく」

「うん！ 急いで格納庫行かんと！」

「そう、急がないと天条リンは……滅茶苦茶カッコ悪い機体で活躍する事になる」

「そつち違うよツ？」

一足遅かった。

格納庫へと向かっている最中、通路の窓には飛行機雲を描いて飛び立つふたつの機影——〈レトロナマシン〉や。

せやけど、ウチは足を止めない！

待機している〈宇宙航行艇〉目指してまっしぐらや！

止められへんかったら、追う！

ウチ、リンちゃん追う！

よくやく格納庫へ着いた！

息を切らしたウチを見つけるなり、イザーナが声を掛けて来る。

『キューー！ キューー！ キューー！』

急げ言うてた。

以心伝心で、ウチの出撃決意を感受したからや。

ウチは「えへへ」と碎けて、その鼓舞へと応える。

「あんな？ ごめんねイザーナ？ 今回は……今回だけは違うねん」

『キューー！』

そして、ウチは決意を込めた顔で、今回の搭乗機を見つめた。

「……行こう！ ミヴィーク！」

『ケルツ？』

『すまないな、リン』

「何が？ ケイン？」

『いや、君の〈PHW〉の用意が間に合わなくて……』

「あ……ああ〜 ♪ いいのいいの ♪ 気にしないで？」

ケインってば、レデイへの気遣いが出来てるわね。

長所 ♪

でも、ゴメン。

たぶん、絶対、間違いなく、着ないわ。

そのミニスカピンクヴァージョンだから……。

『それから、君は〈レトロナマシン〉では初戦闘だ！ 決して無茶をするなよ！』

「ええ、分かったわ！ ケイン！」

モニター越しの忠告に、アタシは快活な返事を向ける。

もう、ケインってば……優しいんだから♡

頼もしい声にも艶があるし？

長所 ♪

『一機でも失えば 〈レトロナ V〉<sup>ファイフ</sup>に合体出来なくなる！』

「……え？ ああ、うん……そっちね」

うん、そうよね？

惑星防衛の使命と責任があるものね？

当然よね？

うん、そうよ！

ケインってば正義感が強いだよ！

いまどき、いないわ！

こんなにも実直な人！

長所ツ！

と、レーダー反応が著しい反応を示した！



敵機が近い！

「ケイン！ 敵が急接近中よ！」

『ああ、分かっている！ リン！』

嗚呼、コレよ ♪

みんな聞いた？

「ジョニー」じゃなくて「リン」よ？

いま無二のパートナーとして呼ばれているの、アタシよ？

必要とされてるなあ……ア・タ・シ♡

『来るぞ！ リン！』

「へ？ ああ、うん！」

いけない、いけない。

数秒、幸福脳内麻薬にトリップしてたわ。

ヨダレ拭くの映ってなかったでしようね？

やがて雲海の腹に巨大な機影が孕み映る。

『ホー……ホッホッ！ ホー……ホッホッ！』

如何にも「悪の幹部」らしい高笑いを響かせて……三流感バリバ

リだわ。

流行りの「悪役令嬢」気取りかつつの。

フン、鼻で笑うわ ♪

アタシは「天条リン」！

銀暦有数の大企業へ星河コンツエルン<sup>ぎんれき</sup>の娘「天条リン」なのよ！

そんじよそこらの「エセ令嬢」とは格が違うのよ！

来るなら来なさいよ？

二度と逆らえないぐらい、グチャグチャのギタギタのメタメタにポ

イ捨てしてやるわ！

雲間を裂いて、重々しく降下してくる機体！

つてか……何？ この物々しい音楽は？

勇猛でけたたましい音楽は？

クラシックの『ワルキューレ騎行』よね？

何かけてんの？ コイツ？

何で外部スピーカーから轟かせてんの？ コイツ？

え？ 威厳の自己演出？

サブいんですけど？

そうこうしている内に、やがて敵機が全貌を晒け出す！

それを視認した瞬間、アタシは信じ難い現実に驚愕硬直！

おぞましさに血の気が引いた！

『出たな！ レトロナ獣！』

「いや、まあ……何つーか……」

そつないコメントを模索したわ。

だってへモササウルスなんだもん。

『だが！ オレ達が……へレトロナV』ファイブがいる限り、オマエ達の好きにはさせない！』

「うん、あのね？ うん……とね？」

どう説明しよう？

ってか、エルダニヤ！

アンタがへモササウルスなんか選ぶからだ！

どう見ても悪役然とした狂暴外見じゃない！

『ホホホホ……御初に御目に掛かるな、惑星レトロナに住まう下々の者達よ。我こそは、ハーチェス・エルダナ・フォン・アルラワスあぐつビースウオームIV世』——またの名をへクイーン・アルワスプなり！ 存分に歓迎するが善い！よ そして、我が威光に平伏すが善いぞ！よ フフフフ……アーハツハツハツ！』

うおい！

毅然と悪役印象を示すな！

外部スピーカーからの大音声で、周囲一帯へ誇示すんな！

事態ややこしくなるツツーの！

そんでもって「あぐつ」って何だ！

噛むな！ 此処一番の見栄で！

『クツ……何て自信に満ちてやがる！ まさか？ ボス級か？』

うん、まあ……ボス級は、ボス級だけどね？

ただしへレトロナ星人じゃなくてへアルワスプの。

ついでに言えばへ宇宙規模バカの。

『やるぞ！ リン！ あんなヤツの好きにさせて堪るか！』

「ちよちよちよ……ちよつと待って！ ケイン！」

『どうした？ リン？』

「いや、その……アレへレトロナ獣<small>じゅう>じゃないツつーか……何つーか……」

『何ツ？ へレトロナ獣<small>じゅう>じゃない……だと？』

御家芸のブルートーン入ったわ。

アタシだつて入れたいわ……あのアホのせいだ。

『リン、君は何か知っているのか？』

「うん、まあ……知ってるツつーか……知らないツつーか……知り合  
いたくなかったツつーか……」

『……もしかして “友達” なのか？』

「うん、まあ……」

ばつ悪くアタシは認めた。

『何……だとツ？』

あれ？

またブルートーン入ったわ？

『何て事だ！ リン、まさか君が……レトロナ星からの逃亡者だった  
なんて！』

「違うしツ？」

あらぬ設定を付け加えられたわよ！

エルダニヤ！ アンタのせいだ！

！  
アタシの気持ちを逆撫できるように、ピーピーと鳴る電子シグナル

うっさい！

いま、それどころじゃないわよ！

アタシの沽券<small>こけん>、地の底まで墮ちてんの！

それを耳障りにピーピーピーピーと思索集中の邪魔して……って、  
うん？

え？ ウソ？

リーダーに別な機影？

って事は……まさか今度こそへレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉ってヤツ？

新たに降下して来た襲来者は、またも雲間を裂いて姿を現し——  
『フハハハハハーッ！ 宇宙の海はオレの海！ オレの果てしない  
へ宇宙の帝王へへの憧れ！ へドクロイガーへ見参ッ！』——アンタ  
かアアアアアッ！ 今度はアンタかアアアアアッ！

『な……何だ？ アイツは？』

「ケイン！ へレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉よ！」

間髪入れずに畳み掛けたわ！

『え？ いや、しかし……』

「へレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉よ！」

『だがへレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉なら、既に……』

「……へレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉よ」

『しかし、ヤツはへドクロイガーと名乗っ——』

「ううん★へレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉♪」

温顔ニツコリ★

ケインつてば、意外なトコで頑固ね？

うしッ！ しやーない！

アタシは特攻を仕掛けた！

「現れたわね！ へレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉！」

『ごはぁーッ？』

ロボットアームの鉄拳が、ドク郎の横つ面をブン殴ったわ！

あのへレトロナ<sup>ファイブ</sup>Vとかいふ「木偶<sup>デック</sup>の坊」の腕ね。

『いきなり何を……というか、その声！ シヤチ娘ではないが  
はぁぁぁーッ？』

すぐさま二発目！

余計な事を言わせるか！ コンニヤロー！

アンタは、おとなしくへレトロナ獣〈<sup>じゅう</sup>〉として散りなさいッツツ！

『痛ッ……ちよつと待つ……ゴフッ！ 待つて言うにカハア！』

殴打！

殴打殴打殴打！

殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打

打殴打殴打殴打殴打！

デツカイ腕を生やした戦闘機が、鉄巨人をタコ殴る！

「よくもアタシの仲間を洗脳したわね！ このこのこの！」

『何ツ？ じゃあ、さっきのヘレトロナ獣<sup>じゅう</sup>は……まさか！』

「そうよ！ ケイン！ コイツに洗脳されたのよ！」

『何て……何て卑劣な手をオオオ……ッ！』

正義感が憤怒を吼えた！

うしッ！ 責任転嫁成功！

『何と！ それに乗っておるは、リンか？』

ようやく気付いたか、エルダニヤ。

『して、リンよ……そなたの知り合いが洗脳されたと申すのだな？

何と卑劣な！ それは、どいつじゃ？』

黙ってる、アンタだ。

『許せねえ……許せねえぜ！』

怒りを噛み締めるケイン。

んもう、どこまでも熱血正義漢なんだから★

長所 ♪

『こうなったら……リン！ レトロナ合体だ！』

何が「こうなったら」なのかは知らないけど、分かったわ ♪

いよいよケインと、合・体 ♪

いや〜ん★

『行くぞ！ レエエツツ！』

「……………」

『リン？』

「え？」

『戦闘中にボーツとするな！ 合体だ！』

「え？ ああ、うん」

『行くぞ！ レエエツツ！』

「……………」

『……リン？』

「え？」

『え？ じゃない！ 合体キーワードを叫べ！』

「あ、うん……って、合体キーワード？」

初耳なんですけど？

「何て叫べばいいの？」

『何でもいい！』

ああ、そう……何でもいいんだ？

……要る？ それ？

『行くぞ！ レエエツツ！ レトロイイイーン！』

「星河プリズムパワー・メイクアップ！」

あ、発動した。

合体シークエンスがオート起動した。

機体から発せられた電磁波が互いを繋ぎ合わせ、重々しい誘導に変形合体を展開していく！

『ファイブ！ (ゴー！ ゴー！)』

ファイブ！ (ゴー！ ゴー！)

ファイブ！ (ゴー！ ゴー！)

フアアアアアーイブ！

宇宙の平和を乱す悪魔を〜♪

(ダンダダン！ ダンダダン！)

許しはしない 俺は戦う〜♪

(ダンダダン！ ダンダダン！)

燃やせ！ 正義の魂を！

吼えろ！ 勝利の雄叫びを！

鋼の巨体が悪を討つ〜♪

三つの力がひとつになって〜♪

二人の心が無敵となって〜♪

正義を呼ぶのさ！

奇跡を呼ぶのさ！

叫べ 燃えろ

ボクらの〜♪

レ・ト・ロ・ナ・フアアーイブウウウー♪

フアーイーブウウー♪』

……何コレ？

全スピーカーから変な主題歌が流れてきたんだけど？

水木 ● 郎みたいいな歌声で、文字数を喰ったんだけど？

『ズエエエエー……』

ズエツト言つたしツ！

魂の決めシャウトしたしツツツ！

『レエエトロオオナ……フアアアイブツ！』

鋼鉄の巨大守護神が、雄々しくポーズをキメた！

ってか、いいわね？ ノリノリで？

アタシなんか「乙女の奇跡！」とかやりたくないんですけど？

やマジで。

『さあ、いくぞ！ 宇宙の平和を乱す悪魔め！』

『いや……別に宇宙の平和とかは乱してないんですけど……』

ビシイと熱血に指差されて、ドク郎が困惑していた。

今回は、ちよつと可哀想な気もする……いや、いいか？

コイツだし。

『黙れ！ 善良な“あぐつさん”を洗脳し、尖兵と利用するとは……』

その卑劣さ、断じて許せん！』

『あぐつさん？ 誰じゃ？』

アンタだ、エルダニヤ。

『行くぞ！ 超リニアアアアメンコオオー……』

腹部スリットから飛び出したカードを空中キャッチ！

電磁波を帯びたそれを、ドク郎の横っ面へ叩き付ける！

『ふげふうツ？』

ただの渾身ビンタにしか見えないわ。

生活指導体罰みたいだわ。

ってか、何でハイテク武器が“メンコ”なワケツ？

『超リニアアア……<sup>キュウ</sup>Qウウウツ！』

五指先から射出される黒い連弾！

それはドク郎の各部位へ付着して……チリチリと煙を上げ始めた。  
『熱ッ？ 熱熱熱熱ッ？』

小躍りに悶えてるし。

どうやら“全身灸”のようだわ。

地味な攻撃！

ってか、リニア関係ないじゃん！

『グスッ……何でワシが、いきなりこんな目に……』

メソメソ泣くなドク郎。

えづら 絵面的にキモいから。

『ただ「あ、綺麗な自然がある ♪ 「って、森林浴に降下しただけ  
なのに……グスッ』

へネクラナミコン＜じゃなかったーッ！

まさかのへネクラナミコン＜じゃなかったーッ！

そこは何かゴメーン！

『グスッ……もういい、みんな壊してやる』

あれ？

聞き慣れたフレーズ言い出したわね？

『喰らええええい！ ドクロバースー』『超リニアメン  
コオオオーーッ！』『——トふげふううーッ？』

させるかツツーの！

横っ面ひっぱたいてやったわ！ アタシが！

ケインから操縦系統を一時奪って！

メンコは出さなかったから、それこそ“教育的指導ビンタ”でしか  
ないけれど。

うん、いいのよ？

どうせコイツだし？

何よりも、アタシは“天条リン”なんだから ♪

ドク郎がキレた。

んなモンだから、剣劇が始まる。

大空を舞台に『レトロナ V ファイブ 対ドクロイガー』が展開する。



とは言っても、ぶっちゃけアタシに出来る事なんか無い。だって、合体後の操縦系統はケインに一任だし？

武器だってケインの意思ひとつだし？

……暇ひまよね、合体ロボのサブパイロットって。

『フハハハッ！ どうしたどうした？ レトロナ Vファイブよ！』

半月刀へドクロブレードの猛攻を、腿脇から取り出した両刃剣へレトロナブレードで弾さばき捌さばく！

ってか、ドク郎？

いまのアンタ、完全に「悪役」の言動だかんね？

『クウー！ なんてパワーだ！ まるで体格差から違うみたいだぜ！』と、焦燥のケイン。

いや、違うわよ？

ドク郎は全高約八〇メートル。

対してへレトロナ Vファイブは約六〇メートルですもの。

格闘家と高校生ぐらいの差は、あるわよ？

でも、まあ、それが「強さ」には直結しないけどね？

だって、アタシとモモのへGフォルムは、約四〇メートルですもの。

そんでもって、毎回完勝してるもの。

んッ？

って事は……ぶっちゃけ、アタシらの方がへレトロナ Vファイブより強く  
ない？

……………。

いや、そつと胸の内に仕舞っておこう。

さすがに、何か悪いわ……ケインにも……ドク郎にも。

『フハハハ！ どうした！ どうしたどうしたどうしたアアアアアッ  
！』

『クソッ！ 圧おされているッ？ こ……このままでは！』

「ポチツとな」

『熱ウウウーッ？』

暇だから手近なボタンを押したら、腰のバックル部からへ超リニア

キョウ  
Qとかが言うのが射出されたわ。

ドク郎が全身炎に悶え踊ったわ。

さつきと出る場所が違うけど、もういいわ。

『リン、何をやっているんだ!』

「え? ああ……その……マズかった?」

そっか!

残弾数の都合もあるものね!

『武器を繰り出す時は、高らかに叫べ!』

「あ、そっか……音声認識か……って、アレ? 出ただけ? 武器?」

『そうじゃない!』

「うん?」

『……それが礼儀だ』

「……………」

礼儀なんだツ?

いままで礼儀で“使用武器紹介”してたんだツ?

まだ「乙女の奇跡!」の方が意味あるんですけどツ?

アレ、一応へ起爆コードへなっているもの!

『ヌウウ……相変わらずの天敵ぶりだなへシャチ娘へ! いやさへ腕娘へ!』

イヤな呼び名つけんな! コンニャロー!

『だいたいキサマ! いつもものへシャチへは、どうした! 相棒のへイ

ルカ娘へは!』

ビシイと指差し糾弾されたわ。

ドク郎風情に。

でも……アレ?

何かイラツとした。

……ドク郎風情が偉そうに構えたからだ!

アタシは“天条リン”!

アンタなんかとは格が違うんだからね!

『リンよ、聞こえるか?』

今度はエルダニヤからの緊急通信——つてか、どうやってヘレトロ  
ファイブの通信回線を割り出し……ああ、パモカからか。

ま、どっちでもいいけど。

「つたく、何……よう？」

一瞬……それはパモカを耳元へと添えた一瞬だった……ふと琴線  
が白く揺れた。

いや、何で唐突に浮かんだ？

いつもの雑談の感覚——。

たまに……寝る前に交わす長話——。

たいした中身も無いバカ話——。

あのユルツユルでホワホワした声音——。

つて、現状は戦闘中！

しつかりしろ！ 天条リン！

トリップしてる状況か！

アタシは軽く両頬を叩く！

「何だツツーの！ エルダニヤ！」

『上じや』

「はあ？」

『強大なエネルギー反応が近づいておる』

「敵機接近つて？ そんな嬉しくない情報を、何で閑雅なゆとりで伝

えてんだ！ アンタは！」

『敵かどうかは……ズズツ……生憎、我にも判らん』

オイ？ いまの『ズズツ』て何だ！

さては紅茶とか啜ってるだろ、アンタ！

「まさか……今度こそヘレトロナ獣とかいうヤツじゃないでしょう

ね！」

焦燥にレーダー機器を操作する。

未だ反応は無い……が、エルダニヤが感知した以上、それは確かだ

ろう。

母体がプロトタイプとはいえヘツエレーク艦載の宇宙航行艇——  
つまりはヘスパークルザーだ。

その性能を疑う余地は無い。

と、すれば……性能的に信用度が低いのはコツチ。

あ、ようやく映った。

どんだけポンコツだ！

惑星レトロナの守護神！

「確かに降下して来ている。だけど……」

エネルギー値が大きい。

この場に居合わす誰よりも……。

存在を認識しながらも、現状で為せる事前策は無い。

その「正体」が判別できない以上は……。

脅威接近の情報を共有した全員が警戒に構える。

そして、ようやく雲を押し崩して姿を露にした！

「嘘……でしよ？」

その全貌を視認し、今度こそアタシは驚愕に固まる！

真の驚愕に！

それは——ソイツは——その異形は！

アタシ達が追い求めていた怪異……巨大なヘクラゲだった！

——ヤツは言った。

『惑星レトロナノ民ニ告グ。タダチニ科学技術ノ向上開発ヲ停止セヨ』

——ヤツは言った。

『現段階ノ科学レベルヲ以テシテモ、オマエ達ニハ過ギタル技術……分ヲ弁エヌ技術保有ハ、宇宙摂理ニトツテ害悪デシカナイトイウ事ヲ心セヨ。然モナクバ、実力行使ニテ放棄サセザル得ナイ』

——ヤツは言った。

『警告トシテ、軽ク我が実力差ヲ知ラシ示ス事トスル』

そして、大猛攻が始まる！

無数の触手から破壊光線を発射し、無差別に爆炎を生む！

眼下の海面は瞬間的な蒸発に潮騒の表皮を浅く失った！

陸地の緑は次々と火の手に貪られ、固い大地とアスファルトは粉碎に崩れる！

防衛基地へレトロナベースは建固たる光子バリアで保ち堪えているものの、はたして、それがいつまで維持できるか！

乱雑に踊る危険な光を、アタシ達は避かし続ける！

レトロナ V も！

エルダニヤも！

ドク郎も！

当たればシャレにならない事は、重々確信できた！

『クツ？ 何だ！ コイツは！』

さすがのケインにも、眼前の猛威がへレトロナ獣とかいう三下とは格違いという事実は肌で直感できたらしい。

『ヌウウ……我が障害となる者が、此所にも居ったか！』

忌々しく歯噛みするドク郎！

その野望実現に脅威となる存在とは認めようだ。

『ええい！ 不覚！ まさかへエ ● ゼルパイ〜とかいう美味を忘れて来るとは！』

……状況を把握できていないバカが、一人ひとりいたわ。

ともかく、無差別に荒れ狂う大災厄は鎮まる兆しも無い！

「ケイン！ 何か武器は無いの？」

『ヘレトロナブレードもへ超リニアメンコも至近戦用だ！ 懐ふところへ潜

り込まなければ使えない！』

「銃とか飛び道具は無いの？」

「あいにくへ超リニアQキユウしかない」

……さすがに使えないわよ、あのへ全身灸いは。

「じゃあ、他に手段は？」

『……ひとつだけ有る』

「だったら、それを使えば！」

『あまり気は進まないが……』

「出し惜しみしている余裕なんか無いわよ！」

『……分かった！』

苦渋の決断を噛み締めると、ケインは高らかに叫んだ！

『超リニアアアア……シャイイイン・自爆ジバアアアークツ！』

「ちよつと待つてー……ツ！」

慌てて制止したわよ！

「何よ！ それツ？」

『シャイン・自爆——全超リニアパワーをへレトロナVファイブに結集させ

て、膨大なエネルギー弾と化して突っ込む特攻技だ』

「ちゃんと脱出するのよね？ ギリで離脱とかするのよね？」

『馬鹿を言うな！ 漢おかしは常に真つ向真剣勝負……小細工などしない

！』

してツ？ そこは！

『ヌウウウ……森林浴を妨害された挙げ句、よもや、このような不埒者が現れるとは……ああ、鳥さん達が！ 鹿さんが！ おのれえええい！ このツイジメつこがあああ！』

燃え盛る森から逃げ惑う動物達を見て、ドク郎が憤慨ふんがいしていた。何

故か。

スウィーツ嗜好やら動物愛玩やら……アンタ、意外とメルヘン思考ね？

『こうなったら思い知らせてくれる！ 喰らえええい！ ドクロバー………』

アタシを見た。

何か言いたそうに、アタシを見た。

『いいですか？』

何がだ。

『喰らえええい！ ドクロバーストオオオ………』

ドク郎の全身から一斉に開放される射撃武装！

夥おびただしい程ほどの自動追尾ミサイルが、ピラニアの如ごとくへ宇宙クラゲへと噛み付いていく！

爆発！

爆発ツツ！

爆発ツツツ！

轟爆と黒煙の狂騒が、神秘にして不気味な軟体を呑み込んだ！

が——『何だとツ！』——沈静しんじやうに引いていく破壊のヴェールからは、まったく堪こたえていない怪物の姿が！

「どんだけ強固きやうこよ！ アイツ！」

『リンよ、聞こえるか？』

「エルダニヤ？」

パモカ通信だった。

『我われに妙案があるのだが……御主おぬしの見解けんげを仰あおぎたい』

「……何か閃ひらいたの？」

『うむ』

そして、エルダニヤの提案は、さすがの私も耳を疑うものだった。

『このレモンティーをクーラーボックスで凍こらせれば、簡易的な菓子になると思うが……レモンティーにレモンティー味のアイスクャンデーはアリかのう？』

「知るかアアア………ツ！」





『ケル……ケルル！ ケルケル！』

「……アンタ達？」

分かんない。

分かんないけど……感傷が占めた。

その瞬間、両機の狭間に光撃が放たれる！

思考を巡らせる隙も無く距離が引き離された！

『クラゲさん、アカン言うたやん！ いい加減にせんと、ウチ怒るよツ？』

牽制に敵の周囲を旋回するへミヴィーク！

つたく、何だツツーのよ。

何で、そこまで「リンちゃん」「リンちゃん」って……。

いつも、のほほんとして頼りないクセに……。

いつもホワホワ笑ってばかりで……考えなしで……泣き虫で……

決断力も無いクセに……。

何で、今回は臆してないのよ？

『天条リン』

パモカからの通信。

クルだ。

『ようやくへネクラナミコンの欠片かけらを見つけた』

そう。

でも、関係無いわ。

いまは頭に入らない。

『それから、私は泣かせていない』

「え？」

『陽ひノ咲さきモモカは、泣いていた』

「ツ！」

『……私は泣かせていない』

何よ、それ？

唐突に……意味不明だツツーの。

意味不明だけど、何故かアタシはドキリとした。

何故？

『うひゃうっ!』

「モモ!」

目障りな纏わりを鬱陶しく感じたか、クラゲは標的を完全にへミ  
ヴィークへと定めていた!

捕縛しようとする無数の触手が揺らぎ迫り、撃ち落とさんと光撃が襲う

!

『う…………ぐう! ミヴィーク、もつと早う!』

『…………ケル!』

モモの苦悶を気遣いながらも、ミヴィークは加速した!

『ふぐう!』

『ケルツ?』

『え…………へへ ♪ ……平気やよ?』

「…………んなワケないじゃない」

アタシは歯痒さを覚えつつ吐き捨てた。

現状は辛うじて高機動性依存に回避は続けている…………が、紙一重な  
危なっかしいものだ。

況してや、搭乗者はアタシじゃない。限界はある。

各愛機は、専属パイロットに合わせたカスタム調整が為されている  
からだ。

つまりアタシが乗ってこそへミヴィークは真価を発揮できる!

『うきやう!』『ケルツ!』

「モモ! ミヴィーク!」

触手に弾き叩かれた!

直線進路上を予測しての先手だ!

荒く回転を躍りながらも滞空制止!

おそらくへミヴィークの自己制御だ!

墜落は避けた!

けれど、その沈黙を狙う敵意!

幾多もの触手が迫り来る!

「すぐ離脱して! そのままブースター全開! モモッ!」

『……………』

「モモ！」

反応が無い？

まさか衝撃で気を失った？

下手をしたら、直前までのGが困憊こんばいの負荷を掛けていた可能性もある！

「モモッ！」

『ドクロブレエエード！ 乱舞滅多斬り！』

「え？ ドク郎？」

割って入った半月刀が、総ての触手を斬り払った。

何で、アンタがモモを庇かばってんのよ。

何で、アタシじゃなくアンタがそこにいるのよ。

そして何故、こんなにイラッとしてんだろう……アタシ。

『見損なつたぞ！ シヤチ娘！』

ビシイとアタシを指差して説教垂れ始めたわ……生意気に。

『如何なる理由があるかは知らん！ 興味も無いわ！ だが！ キサマ達は常にワンセットではなかったのか！ それを何だ！ そんなガラクタに鞍替えしおつて！』

何よ、ワンセットって。

『ワシはな……ワシは……オマエら二人に仕返しせねば気が済まんのだ！ 少しでもなければ、ワシはこれまで顔面ハリセンの浴びせられ損ではないか！』

知るか……アンタの固執理由なんか。

『尻軽！』

……殺すわよ。

『口くちだけ女！』

……うっさい。

『ああ、そうかそうですか！ キサマのような腑ふ抜ぬけには、そのポンコツガラクタがお似合いだ！ ヤーイ！ オシリペンペン！』

……小学生か。

『どうだ？ 悔くしいか？ 悔くしいだろう？』

……別に。



白い脳裏を、いつもの弛い笑顔が占めた。

まったく……どうして、アンタはそんなにフワフワだ。

どうして、警戒心ゼロだ。

どうして、いつも考え無しだ。

心配で仕方ないじゃない。

アタシが傍にいないと……。

なのに、アタシは……アタシは何やってんだ？

熱に浮かされて……。

酔って……。

ミヴィークを不安にさせて……。

モモを泣かせて……。

『しまった！ 捕まっ……グアア！』

『リン、どうした！ 懐へ飛び込むぞ！』

『うっさいって……言ってるのよ……っ！』

ブチキレにフロントキャノピーを蹴破ってやったわよ！

どいつもコイツも知るかつつの！

アタシは「天条リン」！

思うがままに行動するだけよ！

「ミヴィイイーーーっ！」

！  
破碎に刻まれた開放からへりウムブースターへ任せに飛び出した

アタシの呼び声に呼応してへ宇宙航行艇が覚醒する！

そのまま抱く巨腕をスルリと抜け出して、アタシと踊るかのよう

に天空高々と泳いだ！

「G フォルム・メタモルアップ！」

髪止め型のへシンククロコネクターに嵌め込まれた青いクリスタル

へトランスコアが起動の輝きを息吹いた！

そして——「Gリン！」——アタシは、アタシを名乗った！

運命の王子様つてのに憧れた。

少女漫画を読み漁るようになった。

それもこれも窮屈な家庭環境のせいだ。

物心ついた頃から、やれ許嫁やら、やれ名門家柄とのお見合いだとか……ウンザリだ。

だから全部、破談へと持ち込んでやった。

ある時は〈宇宙航行艇〉の超高速ツーリングでビビらせ、またある時は運動神経の雲泥差を誇示して気後れさせてやったわ。

何が「いつ見ても御美しいですね、天条さん」だ。

所詮「家柄に操られた人形」じゃない。

どいつもコイツも名門温室育ちの御坊っちゃんだから、少しばかり箱庭から引き摺り出せば簡単にドン引く。

次第に親も根負けして、何も強くなかった。

うん、それで善し！

アタシは「天条リン」——自分の人生は「自分」で決める！

以前にも増して、少女漫画を読み漁るようになった。

イケメンドラマを観るようになった。

ヴァーチャル恋愛ゲームも、必ず新作チェック。

ハア……ラブロマンスかあ。

こんな「燃えるような大恋愛」を体験したいものだわ。

いつの日かアタシにも現れるわよね？

運命の王子様つてヤツが……。

「うう……」

モモが意識を取り戻した。

アタシの両掌の内側。



アタシはヘリウムブースターで上昇すると、閑雅かんがに傍観している  
へモササウルスへと隣接する！

「エルダニヤ！ モモ御願ごんい！」

『フム？ 相分あいわかった』

「リンちゃん？ ウチもやるよ？ イザーナ、すぐ呼ぶよ？」

「パータリン！ ダメージ回復してないのに、何言っいてんだツツの  
！」

「ふぐう！」

「……しつかり休んでおきなさい？」

「せやけど！ 今回の相手はへ宇宙クラゲやねんよ？」

「アタシを誰だと思っいてんの？ アタシは“リン”——“天条リン”  
よ？ 不可能なんて無いんだから★」

波打なみに伸びる触手の槍！

おびただ  
夥おびしいそれを、アタシはヘリウムブースターの微々たる滞空推移で  
回避する！

紙一重！

大きく旋回なんかしない！

直進を兼ねているからだ！

本体へ近付かなければ何も始まらない！

また来る！

しつこい！

「ドク郎らうッ！」

『ドクロブレエエエード！ 乱舞滅多斬り！』

呼ばれて飛び出て、下僕が触手の群を斬り払った！

「よし、よくやった！ そのまま引き付ける！」

『アイアイサー……って、チト待てえええーい！ 何故、ワシがオマ  
エに命令されなきゃならんのだ！』

「うっさい！ アタシに口応くちうたえすんな！」

『ワガママかッ！』

接近！





『我が身に一撃を加えた結果は、素直に驚嘆に値する。あのような結果は、我がへラプラス・コンプレックスには演算されていなかった』  
何だへラプラス・コンプレックスって！

シンプルにへ未来予測って言え、コンニャロー！  
一聞に把握しづらい横文字へ置き換えれば、自分を高尚に見せれるとか思ってたんなら大間違いだかんね？

そんな安っぽいオタ房発想www

『しかし、だからこそ立証された——やはりオマエ達』フラクタル 3 f 1  
ブレンディメンション  
b 次 元の人類は、危険な成長速度を内包している』

シンプルにへ可能性って言え！ このストトコドツコイ！

厚顔無恥な白痴政治家か！ アンター！

『その反面、精神的成長は未熟。このアンバランス性は、宇宙全体にとって害悪となる事を憂慮せねばならない。やはり現状から活動領域を拡張させるべきではないと判断……』

「知るかつつの」

『……何？』

「そもそも『籠の鳥』なんて真つ平ゴメンだツつの！ そんなんで納得するぐらいなら、とつくに縁談だつて快諾してるわ！」

『……何を言っている？』

「フツ……分かんないなら教えてあげるわ」

そして、アタシはロングポニーをフワサと鋤すき流した！

「アタシは『リン』！ 『天条リン』よ！ いつでもどこでも、自分の思った通りにやる！ 誰の指図も受けないんだから ♪」

『……ああ、やっぱり』

オイ？

その「やっぱり」って何だ？ ドク郎？

『慢心と奢り……だから、危険だと言う』

「フン……『自信』と『可能性』っていうのよ！ そーいうの！」

『害悪の危険性は、この場で少しでも排斥する』

「ヤダア★ 奇遇うく？ 同感く ♪」

アタシの挑発を皮切りに第2ラウンド！

「またも襲い来る無数の触手！」

「つたく、ウネウネと！ アタシはエロアニメのヒロインじゃないつてのー！」

『イヤアアア！』

……アンタの恥態ちたいなんて見たくないわよ、ドク郎。

「クツ……ソ！ せめて、触手の動きさえ止められれば！」歯噛みの中で、ふと妙案が脳裏なうらを過る。「やってみるか」

そして、アタシは両りょうてのひら掌を花と開いた！

「エコロケーションホールド！」

放たれる超音波拘束！

クラゲの動きが愚鈍に染まる！

……けど！

「クウ？ や……やっぱり独りひとじゃ不充分……か？」

クラゲのヤツ、まだ動ける！

そもそもはモモとの相乗効果で、膨大な拘束力を領域形成する連携技だ。

アタシ独りひとからの圧だけでは、そりや不充分に決まっている。

況ましてや相手は、あの「宇宙クラゲ」——難敵もいいとこだ！

「うらああああー……ッ！」

だつたら振り絞る！

持てる渾身を限界まで！

宇宙の平和？

人類の存亡？

カンケーない！

単に……アタシは負けたくない！

何故なら、アタシは天条リンだから！

『愚かな……仮に力業ちからわざで抑え込んだとて、その後はどう攻撃へ転ずる？』

「グウウ……オ……オイシイ見せ場は……譲ゆずってあげるわよ！」

不本意ながらに、攻撃担当への任命を叫ぶ！

「ドク郎！」

『イヤーン！ 破廉恥な！』

「触手宙吊りにTトOLラOVEブってんじゃないわよーッ！ この大事いちだいじにーッ！」

ホントに使えないわね！ コイツ！

『いいや、リン！ 一瞬でも動きを止められれば充分だ！』

え？ この頼もしい声……ケイン？

肩越しに振り向けば、いつの間にか間合いを詰めていたレトロナファイブVの勇姿が！

そうか！ 完全に蚊帳の外だったから、失念のままノーマークになっっていたのね！

『行くぞおおおーッ！ 超リニア剣ーッ！』

胸部に据えられていた深紅のシンボル『Vファイ型エンブレム』が、刀身と柄を伸ばして両刃もろはの巨剣に……って、違った！

アレ『Vファイ型エンブレム』じゃなくて『レの字』だーッ！

カタカナの『レ』だったーッ！

微妙な傾斜に据えていたから誤魔化されてたわ！

『ハアアアーッ！』

高々と巨剣を振りかざすと、頭上には雷雲が集積していく！

……何で？

何で、いきなり局地的天候変化？

もしかして、例の〈ブルートーン効果〉の応用？

とか胸中でツツコミを巡らせていた直後、神々しいほどの落雷！

膨大な電気エネルギーが両刃もろはに帯電蓄積される！

そんでもって、煤すすけた！

レトロナファイブV、機体色が少し黒くろずんだ！

絶縁処理ハンパだった！

落雷受けた瞬間、軽くビクウって痙攣けいれんしたし！

『超リニア剣……スピン斬りイイーッ！』

強大なエネルギーを攻撃力へと転じ、鋼鉄の巨体が高速回転！

刃を水平に伸ばして……。

てつきりへドリル回転かと予想してたら、まさかの〈独楽回転コマ〉だっ



閑雅に泳ぐ銀色の長髪。端正で線の細い美貌には、憂いを帯びながらも冷やかな眼差し。まるで聖女のような高潔さを感じさせながらも、得体知れない恐怖感をゾツと抱かせる。

「我が名は〈ニヨロロトテップ〉……」  
それが〈クラゲ〉の正体だった。

「んじや、コレがへネクラナミコン&ltgtだったの?」  
「そう」

夕日に萌える格納庫で、リンちゃんはクルちゃんが見つけた物に呆れとった。

無理もあらへん。

ウチかて同じ心境や。

ハツちゃんは軽い好奇心だけを注いどったけど。

クルちゃんが探し出したへネクラナミコン&ltgtは……博士の  
濁酒徳利&ltgtやった。

「四ツ乙女谷博士は言っていた——『呑んでも尽きない養老乃瀧……  
呑んでも尽きない養老乃瀧……』と」

「……ああ、アレ『アル中の幻覚症状』じゃないんだ」

「奇怪な現象ではあるけど、これがへネクラナミコンの擬態&ltgtならば納得はできる」

できへんよ?.

「ふむ? 理には叶っておるな?」

叶ってへんよ?.

「ま、何にせよ目的は達成したし滞在リミットもドンピシャ……そろそろへツエレーク&ltgtへと帰りますか」と、リンちゃんは伸びに砕ける。

ウチ……やっぱり凹んだ。

なんや空元気に見えた。

「あんな? リンちゃん?」

「うん? 何よ? 神妙な顔しちやって?」

「ゴメンね?」

「……はあ?」

「ウチのせいで、リンちゃんの恋愛を台無しにしてもうた」  
「……………」

「あんな？　ウチな？　リンちゃんと一緒にええねん！　ずっと一緒にええねん！　せやけど……そのせいで、リンちゃんにイヤな思ひさせた」

「……………」

「ウチ……ウチ……ごめんなさい！　ふぐつ……ウチ……ふえ……リンちゃ……リンちゃんに嫌われた……ない……ふええ……」

「えい★」

「ふぐう！」

ほつぺムニされたよツ？

いきなり両手で、ほつぺ引つ張られたよツ？

「ふひい……フィンふあん？　ふあひひほんほ？」

「アハハハハ★　面白ーい　♪　大福顔ー　♪　」

リンちゃん、笑た。

心の底から大笑いしとった。

何で？

「別にアンタのせいじゃないっての！　笑つとけ笑つとけ★」

「リンちゃん？　でも……」

「アンタは笑つてりやいいのよ。いつもみたいにフワフワトロトロのパータリンぶりで　♪　」

「リンちゃん！　あんまりや！」

「アハハハハ★」

「そう……事の発端は、天条リンの尻軽にある」

「黙れ！　クル！」

ギンツと睨め付けるジャレ合い。

そのワンクツションの後、リンちゃんはウチに向かってボソボソ口隠りっぽく言うた。

「んでもって、アタシの傍にいなさいよね？　アタシがフラフラしちやっても……その……懲りずに……」

「……ええの？」

「いいに決まってるでしょ！」

「せやけど、また迷惑かけてまうかもしれへん……」



「フツ……アタシを誰だと思ってるの？」いつもと変わらない自信が、  
フアサとロングポニーを鋤き泳がせた。「アタシは『リン』……銀曆  
有数の大企業へ星河コンツエルン〳の娘『天条リン』よ！不可能な  
んで無いんだから！ 迷惑の百や二百、ドンと来い！ 片っ端からク  
リアしてやるわよ！ 難無くね！」

「うむ、頼もしい事よ。では、今後も世話になるぞ？」

「いや……アンタは別口だ、エルダニャ」

あ、本気でゲンナリしとる。

せやけど、なんやいつも通りの雰囲気なった。

せやから、ウチ嬉しゆうなつて「えへへ」と笑とつたねん。

「ギユウウウ ♪ ♪」

「アダダダダー……ッ？ コラ！ 痛いつての！ モモ！ 放せ  
！」

ハグやねん。

嬉しゆうなつたらハグやねん。

ギユツとしたら、もつと仲良うなれるよ？

「リンちゃん ♪ 大好きや ♪ ギユウ ♪」

「アダダダダダダー……ッ？」

「あ」

「ふえ？ どないしたん？ クルちゃん？」

「陽ノ咲モモカ……その体勢は、前回不発だったバックドロップを再  
行使する絶好のチャンス」

「せやの？」

「頑張れ、陽ノ咲モモカ。アナタの可能性を、私は応援する」

「うん！ ウチ、頑張る！ セーの！」

「何が『セーの！』だああ……ッ！」

「ふぐう！」

後頭部ハリセンスパーン来たよ？

リンちゃん、血相変えて振りほどいたよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないツツの！ この脳味噌火サス娘

！ 今回の間違はなく殺意だかんね！ 殺意無き殺意だかんね！」  
「やれやれ、相変わらずの仲の良さだな？」

格納庫ドックの奥から、男の人が姿を現した。

ケインはんや。

軽くデジャヴやね？

「ケイン……」

リンちゃん、さすがにバツ悪そうやった……。

せやね。

そう簡単に割り切れへんよね。

さっきのリンちゃんの言葉は、嘘やあらへんやろうけど……。

「オレの安直な身勝手さで、いろいろと迷惑を掛けちまったな……リン」

「迷惑って……そんな……」

「……ほら」

差し出された手を躊躇ためらいつつ、ややあつてリンちゃんはサヨナラの握手を交わす。

「でも、ゴメンね？ やっぱアタシにヘレトロナ Vファイブは無理だわ」

「だな」と、ケインはんはウチを覗き見た。「君には君の居場所がある

……それが一番だ」

「……うん」

「フツ……いいムードのところを邪魔するが、オレにも別れの見送りをさせてもらえるかい？」

今度は聞き慣れた斜に構えた口調が聞こえた。

ジョニーはんやね？

コツリコツリと靴音が近付いて来る。

そして、姿を現すあらわジョニーはん……と思うたら、女の人やった！

ウエスタンススタイルの金髪ボインのお姉さんや！

「え？ 誰？」

リンちゃんが戸惑うかたわ傍らで、ケインはんが断定した。

「ジョニーー！」

「ジョニーイイー……ッ？」

驚愕するウチとリンちゃん！

「ジョ……ジョジョジョ……ジョニーって、女だったのツ？」

リンちゃんの混乱に、ジョニーはんの眉尻がピクリと不快を示した。

「歯を喰いしばれえええー！ ツ！」

「ぐふうー！」

殴られた！

いきなり殴られた！

ケインはんが！

質問したの、リンちゃんやのに！

「『ジョニー』が女の名前で何が悪いんだ！ オレは女だよ！」

「ああ、判ってる！ ジョニー！」と、爽快サムズアップ。

……何なん？ このやりとり？

「だが、その調子なら、もう大丈夫そうだな？」

「フツ……いつまでもけんしょうえん腱鞘炎なんかで寝込んでいられるか」

せやね？

普通、寝込みはせえへんね？

「えつと……ちよつと待って？ つまりジョニーは、最初から『女』

で？ レトロナ Vファイブは二人乗りで？ 実質、男女相乗タンデムり状態で？ え

？ え？」

リンちゃん、軽くパニックや。

「あんな？ 二人は恋人同士やの？」

「……あ」「……う」

目え逸そらした。

恥じらいながら、目え逸そらした。

それ、答になつとるよ？

「ガッデー……ムツ！」

叫んだ！

リンちゃん、明後日あさってへ向かって絶叫した！

ラブロマンス御破算になった！

いろんな要素で！

「神谷ケイン……我々は、そろそろ帰還する。今後、アナタ達へレトロナVの善戦を祈っている」

「ああ、有難う！ クルロリくん！ 今回の実戦経験は、実に貴重な体験となった！ 初戦は必ず勝利してみせるさ！」

……うん？

いま、変な事を言わへんかった？

「あんな？ ちよつとええ？」

「何だい？ モモカくん？」

「確かへレトロナVはへレトロナ星から来たへレトロナ星人が送り込んで来るへレトロナ獣からへ惑星レトロナの平和を守ってるんよねえ？」

「ああ、そうだよ？」

「これまで何回戦ったん？」

「ハハハ……まだ戦ってないさ」

「ふえ？」「は？」「……………」

「だが、ヤツラは必ず攻めて来る！ 恐るべき軍団を率いて！ その時は……必ず野望を砕いてみせる！ 俺達へレトロナVが！」

グツと拳を握り締め、まつすぐな正義感を夕陽へと投げるケインはん。

無言の同調に「フツ」と含羞むジヨニーはん。

いや、何言うてんの？

ええ感じに纏めながら、何を「実の無い正義」を誇示しとんの？

「神谷ケイン、ひとつ訊きたい。その事前情報は、何処から得た？」と、クルコクン。

「決まってるじゃないか、博士だよ」

「あのヤロオオオオ……ツツツ！」

リンちゃん、猛ダツシユヤ！

大爆走で基地内へ駆け戻っていった！

アカン！

早く止めんと恐ろしい惨劇が起こる！

この作品へSFやなくてへスプラッタホラーなってしまう！



「えへへへへ♪」

『何よ？ 急にニヤけて？』

「あんな？ リンちゃん？ そしたら、ウチ“友達”なってええ？」

『はああッ？』

「ウチ、ニヨロちゃんと“友達”になりたいねん♪」

『この脳味噌キクラゲ娘！ なれるか！』

「イヤや！ になりたいねん！」

『まったく、もう……………クスツ♪』

「どないしたん？ リンちゃん？」

『いや、アンタらしいなあ……………って』

「？」

『可能性……………か』

「??？」

天条リン達からの報告を受け、マリー・ハウゼンはへ宇宙クラゲへに関するデータを更新した。

薄暗くも雑多に散らかった自室に、キーパンチの音がカタカタと鳴り続ける。

「ニヨロトテップ……………か」

とりあえず更新を一気に済ませると、背凭せもたれて軽い考察に囚われた。

「宇宙クラゲ……………ニヨロトテップ……………ネクラナミコン……………クルロリ……………」

感慨も無く羅列していくキーワード。

此処に来て、総ての異端要素が因果関係を繋つないだようにも思えたのだ。

持て余す“非現実的現実”を直視し、脳内整理に務める。

そして、誰に言うともなく洩らすのであった。

「……………私、この作品に何かしら？」

ゴメン！ マリー！

もうちよつと……もうちよつと待つて！  
どうにか出番を増やすから！

「お掃除や ♪ キレイキレイや ♪」

「何をそんなに浮かれてんだツツーの？」

並んで格納庫ドックへ向かう中、リンちゃんが呆あきれながらに訊たずねてきた。

「えへへ ♪ せやかて、今日は『キレイキレイの日』やもん ♪

あの子達、喜ぶよ？ へイザーナもへミヴィークも喜ぶよ？

それ想像したら、ウチも何か嬉しいねん ♪」

せやねん。

今日は月一回〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉を徹底整備する日やねん。

難しいのは整備士メカニックはん達に任せるけど、ウチとリンちゃんはキレイ

キレイに清掃してあげるねん ♪

「ま、惑星レトロナではへミヴィークを不安にさせちゃったし……今日

日は念入りに洗ってやるか」

「うん★へミヴィーク頑張ったよ？」

そして、格納庫ドックの扉が開いた。

……ピカピカやった。

へイザーナもへミヴィークも、新品ばりにピカピカやった。

「ど……どういう事？ コレ？」

さすがにリンちゃんも困惑する。

せやね？

こんなん初めてやんね？

「うむ、ようやく来たか？ モモカにリンよ」

ハツちゃんや。

格納庫ドックの奥から、清掃道具を携えたハツちゃんが出迎えに来た。

ウチ、とりあえずピカピカになったへイザーナの体を撫で……あれ

？

この子、怯えとるよ？

心がカタカタ震えとるよ？

「エルダニヤ？ これ、アンタが？」

「フツ……礼には及ばぬぞ、リン。単にヘリヒアークの整備のついでじゃ」

「ヘリヒアーク？」

「我が愛機の名じゃ」

ああ、モササウルスや。

名前決まったんや？

よかつたねえ？

「あんな？ ハツちゃん？ それ、何て意味の『ハウゼン語』なん？」

「その『ハウゼン語』なるものは知らん。が、いい感じに“いんすぴれーしょん”が降りたのでのう」

「ふえ？ いいアイデアが閃いたん？」

「うむ。文字盤の上で滑るコインの連鎖で決めた」

それ『コックリさん』や！

この人『コックリさん』で名前決めはった！

「に、しても——」改めてへミヴィークの光沢へと見入るリンちゃん。

「——よく一人で両機を整備できたわね……って、あれ？ この子、震えてる？」

へミヴィークも？

おかしいねえ？

その子、肝座つとるのにねえ？

「フツ……我一人で、これだけの数を整備できるワケもなからう？」

「ふえ？ せやったら？」

「さあ、感嘆せよ！ 我が“専属整備員”の腕前の素晴らしさを！」

オーブ飛び始めた！

ハツちゃんの周りに無数のオーブ飛び始めた！

この人、機体整備にへ幽霊使役しはった！

「モモカよ、リンよ、改めて紹介しよう！ 此処に居るが、我が専属の——」

「マリー！ 今日の授業、質問があるんだけど——ツ！」

二人揃って猛ダツシュ！

恐々猛ダツシュで格納庫を後にした！



「ふむ？ 何じや……忙しい奴等よのう？ せっかく我が「専属整備員」の有能さを示してやろうと思うたに……む？ おお！ そこに居るわ、クルではないか？」

「……何？」

「整備か？」

「そう」

「ふむ？ では、僭越ながら手伝ってやろう。何、ものの数分で完璧じゃ。フフフ……驚くがいいぞ？ 我が「専属整備員」の有能さを！」

「要らない」

「……………」

この後、格納庫ドックの片隅で膝を抱えるハツちゃんの姿があったんやて。

チタン床に、いっぱい『のの字』を書いて……。

クルちゃん惑星ジェルダ  
クルちゃんと惑星ジェルダFractal. 1

「ふうん？ 今回の目的地は、アレ？」

「そう……アレが〈惑星ジェルダ〉」

リンちゃんとクルちゃんは、徐々に大きくなってくる緑の惑星へと見入ってしまった。

ツエレークのブリッジや。

次空座標は、 $2 f \setminus 1 b$  フラクタル  
ブレンディメンション 次元やて。

何や？

今回は「お隣さん」やんね？

それぐらいウチでも解わかるよ？

えへへ ♪ ウチ「賢かしこさん」や ♪

「んで？ どんな惑星よ？」

「豊かな自然に恵まれた惑星……種々様々な原生生物が共生している」

「ふくん？ つまりは〈惑星テネンス〉のような？」

「大別的には同類型。ただし、微々たる差あも在る」

「例えば？」

「文明レベルは低く、高度知性体も存在しない。加えて、原生生物の種類は雑多。危険レベルも高い」

「要するに？」

「もつと原始的」

「なるほど」

「あ、そういえば……クルちゃん？ あんな？ 〈ネクラナミコン〉つて、全部で何個あるん？」

「あ、そういえばそうよね。いままで漠然と集めてたけど……」

「全部で六つ」

「って事は、現状アタシらが持っているのは三つだから……あと三つか。丁度、半分じゃん？」

「天条リン、そうではない。ドクロイガーが、ひとつ所有しているの  
で、あと二つ」

「アンニャロー！ しれつと持ってたか！」

簡潔な補足説明を紡ぎ終えると、クルちゃんはジツと惑星へ見入った。

いつもと同じ無感情やけど、ウチにはそう見えたねん。

何や感傷的に浸つとるような……。

「天条リン、陽ノ咲モモカ……」ややあつて振り向いたクルちゃんは、ウチとリンちゃんに静かなる決心を告げた。「今回は、私一人で行く」

「ザケんなツツーの！」

惑星降下しての第一声が、リンちゃんの憤慨やった。

深い森林に〈宇宙航行艇〉を着陸させると、ウチとリンちゃんは緑草の浅瀬に脚を沈める。

結構、乱雑に生い茂つとるねえ？

この辺、説明通りや。

ハツちゃんの故郷〈惑星テネンス〉が「拓けた自然」やとしたら、此処〈惑星ジェルダ〉は「未開のジャングル」いう感じやった。

見渡す限りの樹々は巨大に育ち、蛇を思わせる蔦が洩れなくブラ下がつとる。南国植物のように厚い葉がカーテンのように日照を邪魔立てて、森の中は少々薄暗い。

一番イヤなものは、地熱が隠って蒸し暑い事やった。

せやから、ウチとリンちゃんはベルトバックルに据えたパモカを操作して〈PHW〉の『体感温度調整機能』をオンにする。

これで常時快適や ♪ えへへ ♪

「ったく！ 何が『今回は、私一人で行く』だ！ ワンマンプレイにも程があるツツーの！」

「えへへ ♪」

「な……何よ?」

「リンちゃん、やっぱり優しいねえ?」

「はああ?」

「クルちゃんの事、心配やんね? セヤから追って来たんやもん ♪

」

「ち……ちち違うツツーの! 別に、あんながどーなっても、アタシには関係無いしー!」

「せやの?」

「そうよ!」

「せやったら、何で?」

「う……」リンちゃん、目え背<sup>そむ</sup>けて眩<sup>つふや</sup>いた。「で……でつかいマンゴー食いたかった」

「ギユウウウ ♪」

「アダダダダーーッ?」

ハグや★

仲良しハグやねん★

「リンちゃん、照れ屋さんや★」

「イダッ……違つ……イダダダダッ?」

「ギユウウウ……御褒美に、もつとギユウウウや★」

「イダダダ……つて、それ以前に暑苦しいわアアアアアッ!」

「ぎゃん?」

叩かれたよ?

パモカハリセンで後頭部スパーン叩かれたよ?

「うう……リンちゃん、痛いよ?」

「潤々<sup>うるうる</sup>ヘタリ座つて『痛いよ?』じゃないツツーの! せつかくの『体感温度調整機能』が無意味になるわ!」

と、ガサガサと繁<sup>しげ</sup>みの草が動く気配!

誰かが来た!

すかさずへりウム銃<sup>ガン</sup>を引き抜いて、警戒に身構えるリンちゃん  
!

「モモ、気を付けなさいよ……どんな危険なヤツか判<sup>わか</sup>らないから」

「危険？」

「クルの説明だと、この惑星に『高度知性体』はいない……とすれば、原生生物よ！」

「せやの？」

ウチ、繁<sup>しげ</sup>みをジツと眺めた。

あ、ガサガサ揺れんのが大きくなってきたねえ？

もうすぐ出て来るよ？

「ウホオオオオー……ッ！」

誇らしげな咆哮<sup>ほうこう</sup>に姿を現したんは『六本腕のゴリラ』やった！

大きい！

2メートルは越えとる！

「こんにちは★」

「ウホ？」

「つて、モモ……ッ？」

ウチ、テクテク近付いて挨拶したった。

「あんな？ ウチ『陽<sup>ひ</sup>ノ咲<sup>さき</sup>モモカ』言うねんよ？」

「ウホ……」

「ほんでな？ クルちゃん知らへん？」

「ウホオ？」

「違<sup>ちが</sup>うねん。小さい女の子やねん」

「ウホオ……ウホ？」

「せやの？」

「ウホ！」

「うん、分かった！ ありがとねえ？ ほんなら、バイバイ♪

」

「ウホホーイ★」

六本腕に手を振られて、トテテテとリンちゃんの下へ駆け戻る。

「リンちゃん、知らへんって♪」

「何で会話が成立してんだツツーのオオオツ！」

「ぎゃん！」

後頭部スパーン言ったよ？

パモカハリセン、連続二発目やよ？

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「黙れ！ この『脳味噌ターザン娘』！」

「ほんでな？ ウチ、いっぱいいっぱいやってん」

「ウホ？」

「違ちがうねん。そういう事やないねん」

「ウホホ？ ウホ！」

「せやよ？ ウチは、そっちがええねんよ？」

「ウホオ……ウホウホ」

「あ、わかる？」

「ウホ！」

「アハハハハ★」

「ウホホホホ★」

「いや……まあ、何つつーかさあ」

ウチとゴリラさんの会話を聞き流し、リンちゃんはウンザリ顔やった。

何で？

見た事もない植物が雑多に繁しげる深緑を、ウチとリンちゃんはゴリラさんに肩担かたかぎされて進む。右肩にウチ、左肩にリンちゃん。六本腕やから安定感バツグンや。

「ウホホ、ウホ」

「うくん？ どうなんやろ？ あ、リンちゃんはどう思う？」

「知るかッ！」

何で？

「ええやん！ 答えてあげたつたら、ええやん！」

「ウホオ……」

「ほらあ！ ロツポちゃん、落ち込んでもうたやん！」

「そもそも何を言ってるのか解わからないツつーの！ ってか『ロツポ』って誰だ！」

「えへへ、この子や ♪ 腕が六本あるから “ロツポちゃん” やねん★」

「アンタ、ネーミングセンスをどうにか……いや、もういいわ……うん」リンちゃんは深い溜め息に沈むと、気持ちを切り替えた。「んで？ 何でアンタは、コイツの言葉が解んのよ？」

「解らへんよ？」

「はああ？」

「ほんでもな？ 何か、こう……言いたい事は解んねん ♪

伝

わんねん★」

「“可能性”にも、程があるわツ！」

怒られた……。

何で？

「つたく……で？ その “ロツポゴリラ” の質問って何よ？」

「ウホ！ ウホウホ！」

「 “ロツポゴリラ” 違う！ “ロツポちゃん” やねん！」

「どつちでもいいツツーの！」

「ウホ！」

「黙れゴリラ！ アンタなんか、本来 “ゲテモノゴリラゴリラゴリラ” で充分なんだからね！ それをわざわざ “ロツポ” って付けてやってんだから！ それも、このアタシが！ モモに免じて！ 感謝しなさいよね！」

「ウ……ウツホ……ウウ……ウホホホホ……ウホッン！ ウホッン！」

「メソメソ泣くな！ 空いた手で顔を覆って！ どんだけシユールな絵面だ！ 両肩に美少女担いだ六本腕ゴリラがメソメソ乙女泣きするジャングルって！」

「リンちゃん！ 意地悪アカン！」

「いいのよ、ゴリラだし」

「女の子に、そないなキツイ事を言うたらアカン！」

「女の子だったーッ！ まさかの “女の子” だったーッ！ そこは何かゴメーン！」

せやから、ウチ「ロツポちゃん」言うてたやんな？

泣き止んだロツポちゃんは、気を取り直して歩き出した。

のっそのっそ……両肩にウチとリンちゃん担いで、のっそのっそや  
♪

これ、楽しいね？

えへへ★

「んで？ ゴリ……ロツポ？ アンタ、アタシ達を何処へ連れて行く  
うっての？」

「ウホ！」

リンちゃん、困惑顔をウチへ向けた。

あ、あの目……すが縋つとる。

「モモ、通訳」

「知らへんよ？」

「肝心なトコでえええーツ？」

「せやから、会話やないねん。フィーリングやねん」

「さつき会話してたじゃん！」

「違ちやうねん。何となく『好き嫌い』とか『コツチがいいアツチがいい』  
みたいなんは感じんねん。せやけど言葉は解わからへんねん」

「クルの事を訊きいてたじゃん！ アレ、会話だったじゃん！」

「あん時は分かったねん ♪」

「そのフィーリングを、もう一度オオオーツ！」

リンちゃん、うるさいよ？

周りの樹からカラフルな鳥さんが、いつせいに飛び立ったよ？

と、急にロツポちゃんが歩くのを止やめた。

何や一転して雰囲気が凄味を帯びとるねえ？

そんでもって、ウチとリンちゃんを静かに降ろすと、この場所を指  
差した。

「……ウホ」

「うん、わかった」

「ウホ」



「リンちゃん、危ないから此処から動くなって」

「……いや、いま会話」

何？

そして、ロツポちゃんは目の前の樹林へと向き直ると、六本腕で胸を叩き乱した！

「ウホホホホホホーッ！」

ドラミングや！

ドラミングの乱打や！

「ウホホホホホホーッ！　ウホホホ！　ウホ！　ウホホホホ

ホホーッ！——ゲホゲホ！」

……噎むせた。

そりやそうやんな？

叩き過ぎや。

それも六本腕の高速乱打やもん。

息継ぐ暇ひまなんて、あらへんもん。

威嚇いかくに呼応するかのようには、見据える繁しげみがガサゴソ動いた！

そこから出て来た人は、不思議な生き物やった！

プヨプヨプルプルのゼリーや！

ピンク色の水饅頭みずまんじゅうや！

せやけど、大きい！

ウチとリンちゃんの腰丈ぐらいはある！

「イチゴゼリーや！」

「へプロブ〜だ！」

「せやの？　リンちゃん？」

「あんなデツカいイチゴゼリーがあるか！　しかも、密林に！　ってか、そもそも生きてるか！」

「リンちゃん、たくさん言うたねえ？　賢かしこさんや♪」

「うっさい！　ホワホワ笑ってんな！　この非常事態に！」

「あんな？　リンちゃん？」

「何だツッーの！」

「そのへプロブ〜って、何？」

あ、引っくり返った……。

「アンタ、ホントに銀暦世代か！」

「せやかて、知らへんモンは知らへんもん」

「ったく……要するにへブロボツツっののは、宇宙単細胞生物よ！ 生態や特徴もへアメーバに酷似しているけど、見ての通り人間サイズに巨大。厄介なのは、捕食本能が食欲って事。そして、切っても殴っても効果が無いって事。つまり——」

「ごんちは★ あんな？ ウチ 陽ノ咲モモカ 言うねんよ？」

「——って、モモローツツ？」 「ウホローツツ？」

えへへ★

ウチ、テクテク近付いてへブロボはんへに挨拶したった ♪

ウチ、捕まった……。

ポヨンポヨンや ♪

ブロボはん、ウチを頭だけ出して包み込むと、そのまま跳ねて逃げ出した。

連続ジャンプで森の中を駆け抜けとんねん。

せやから、ポヨンポヨンや ♪

ポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——視界が上がったり下がったりで過ぎ去って行く。

ほんでもって、結構快調や。

えへへ★ 何や、コレ楽しいねえ？

遊園地みたいや ♪

「モモ————ッ！」「ウホ————ッ！」

あ、リンちゃんや。

リンちゃんとロッボちゃんが、全力疾走で追い掛けて来とる。

せやけど繁る草や蔦が障害になって、思うように進めへんみたいや。

掻き分け、足取られ、それでも必死になって駆けて来る。

一方で、ウチはポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——楽しい

♪

あ、そつか！

跳ねとるから早いんやねえ？

足取られへんもん。

ポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨン——あはは★

「止まれ！ このイチゴ蒟蒻！ モモ返せ！」

リンちゃん、やつと並走に追い付いた。

葉屑まみれにポロポロや。

ブロボはんは御構い無しに、ポヨン——ピヨン——ポヨン——ピヨ

ン——リンちゃんと一緒やから、ウチもつと楽しかった★

「つてか、モモ！ アンタも抵抗するなり何なりしなさいよ！ 何をのほほんニコニコしてんだツツーの！」

「あんな、リンちゃん？ コレ、楽しいよ？」

「無垢顔コクンと『楽しいよ？』じゃないツツーの！ さっさと脱出しないとエライ事になるわよ！」

「延長料金？」

「違うわツ！ 溶かされるって言ってるのよ！」

「何で？」

「この状況で無垢顔コクンやめろ！ 誰のために爆走してると思ってるのよ！ 腹立つ！ このへブロボブってのは、獲物を溶解捕食すんの！」

「せやのツ？ それ、大変やん！」

「そう言ってる！」

「ウチ、裸にされてまう！ 森の中を裸で跳ねてるトコ、みんなに見られたくない！ ふぐう！」

「そっち違うわー！ ツー！」

「あんな？ ポヨコちゃん？」

「……誰だ『ポヨコちゃん』って」

「えへへ★ この子や ♪ ポヨンピヨンポヨンピヨン跳ねるから『ポヨコちゃん』やねん ♪」

「せめてウサギに付けろ！ <宇宙怪物>にファンシーネーム付けるヤツなんか見た事ないわよ！」

「あんな、ポヨコちゃん？ 溶かさんといて？」

「原始生物に通じるか！」

「……あんな？ リンちゃん？」

「ハア……ハア……何だツツーの！」

「わかった——って」

「ここでもさかのフィーリンググー！ ツー！」

ポヨコちゃん、跳ねる勢い増した。

「ああ？ 待ってツツーの！ このイチゴゼリー！」  
また引き離されるリンちゃん。

ほんでもって、やがて拓けた原っぱに着いた。

周囲を樹々に囲われた形で、天然の柵みために領域を覆われとる。敷き広がる草は足首までに短くなるとって、森の中とは違うて見るからに過ごし易い感じや。

そこに、たくさん、ポヨコちゃんの色違いが居る。

「ゼエ……ハア……」「ウホ……ウホ……」

あ、リンちゃんとロツポちゃんや。

ようやく追い付いた。

「オイ、コラー！ イチゴゼリー！ ココ何処だ！ ってか、モモ返せ！」

「ウホー！」

「あんな？ どうやらポヨコちゃんの村やて」

「アンタも馴染んでんじゃないツツーの！ さっさと抵抗しろ！」

「何で？」

ウチが小首コクンと訊ねた途端、何やリンちゃんから「プチッ！」いう音が聞こえた……気がした。

「フ……フフ……フフフ……」

沈めた顔に薄ら笑いを浮かべて、ユラユラと近づいて来たよ？

「そーかそーか……この期に及んで『何で？』と来たか……」

不穏なオーラに、ドン引き後ずさるロツポちゃん。

リンちゃん、魔力とか発動したん？

「いいから、とつとと出るオオオー……ッ！」

「イタタタッ！ リンちゃん、イタイ！ ウチ、イタイのイヤやあ！」

こめかみグリグリされた！

ゲンコツでグリグリされたよツ？

渾身の力でグリグリされたよツ？

埋もれとるから抵抗できへん！

なすがままの拷問や！

ウチ、ポヨコちゃんから出た……半ベソで。  
ふぐう！

「んで？ 此処がコイツの村って？」周囲を見渡して、リンちゃんが分析。「つてか『村』つて呼ぶより『集落』か」

「せやの？」

「でしょーよ？ 家屋とかの建築物も無いし……。ま、原始的生物じゃ、そんな『知恵』は無いけどさ」

リンちゃんが見下した傍らで、ウチとロッポちゃんは番茶貫うとつた。

「ありがとうねえ？ ポヨコちゃん？」「ウホホ……」

「まさかの『おもてなし精神』あつたーーツ？」

ポヨコちゃん、器用や。

体の一部を触手に変えて、それを腕みたいにして急須をコポコポ……。ほんでもって、スツと湯呑みを差し出した。

「いや、さも『はい、どうぞ』みたいに差し出されても困るんですけど……」

リンちゃん、困惑や。

「飲んだつたら、ええやん？」「ウホオ……」

「まったく馴染むな、常識皆無×2」

毒突きながらも、ズズツと片手啜りかたてすすで状況観察を滑らせる。

広い原っぱには、青や緑や黄色のポヨコちゃんが思い思いにピョンピョン動き回つとつた。

ウチには何をしとるか分からへんけど、きっとコレがポヨコちゃん達の生活光景なんやろね？

「……警戒心はゼロか。アタシらに敵意を向けるでもなくガン無視つて？」

「友達やからやらないの？」「ウホホオ？」

「樂觀に溺れてんな、天然パースケ×2」

暫し黙考を巡らせた後、リンちゃんはポヨコちゃんへと振り向く。「オイ、イチゴゼリー？ アンタ、何でアタシ達を此処へ連れて来た？」

プルプルプル！ プルルン！ プルン！

「……そーだった、コイツ喋れないんだった」

ガクリと膝ついて落胆や。

リンちゃん、うっかりさんや ♪

「モモ！ フィーリング発動！」

「無理や★」

「アタシに嫌がらせしてんのかーッ！ その異能力はーッ！  
！」

リンちゃんが憤慨した直後、場の雰囲気<sup>ふんが</sup>が急変する！

絶叫に驚いたワケやなさそうや。

みんなプルプルが小刻みになって、その場に固まるとる。

ふと見れば、ポヨコちゃんもや！

「ポヨコちゃん？ どないしたん？」

返事無い。

まるで緊張しているみたいや。

何となく……何となくやけど、みんなの意識は正面の繁み<sup>しげ</sup>へと傾けられとる気がした。

せやからウチとリンちゃんも、そこを注視する。

そこだけは鬱蒼感<sup>うつそうかん</sup>が色濃い。

一際<sup>ひときわ</sup>厳しい樹々が逞しい生命力を誇示し、互いの威嚇と協力を織り成す暗がりのベールや。

樹林のトンネルは深い闇に視線を吸い込み、それは数メートルどころか延々と底無しに瞳を持って行くかと思える暗さやった。

ガサガサと繁みが乱される。

何か<sup>なにか</sup>が現れようとした。

近付いて来る気配に緊迫感が強調され、リンちゃんはヘリウムガンへと手を掛ける。

そして、姿を現した！

……メイドさんやった。

文字通りそのままの「メイドさん」やよ？

見た目には、ウチらと同じぐらいの年頃やるか？

緑色の髪をしとって、大きなピンク色のリボンでうなじから一房<sup>ひとつかげ</sup>に纏めとる。特徴的なのは揉み上げで、そこだけはストレートロングへ

アみたいに長く伸ばしとった。

円つぶらな瞳がクリツとしてて、柔らかそうなほっぺたの真ん中に小鼻チヨコンや。

印象は可愛らしい童顔なのに、何故か“大人びた落ち着き”を感じさせる。

「どういう事よ？ クルの説明だと、この惑星ほしに高度知性体はいない……つまり“人間”なんていないはずよ」

「あ、せやねえ？ そないな事、言うてたねえ？」

「……何者よ？ アイツ？」

「訊きいてみるね？」

「うん、お願い……って、モモーツ？ 違ちがーう！」

ウチ、テクテク近づいて挨拶したった ♪

「こんにちは★」

「……どなたです？」

「あんな？ ウチ 陽ひノ咲さきモモカ”言うねんよ？”

「……はあ」

「誰？」

「はい？」

「せやから、誰？」

「何がですか？」

「教えて？」

「何をですか？」

「名前や」

「私わたくしの……ですか？」

「せや ♪ メイ子ちゃんの名前や ♪」

「……いえ、いま“メイ子ちゃん”と御呼びになりましたわよね？」

「せや★ メイドさんやから“メイ子ちゃん”やねん★」

「……センスが」

「ほんでな？」

「……」

「ウチ、何て呼んだらええのん？」



「無限ループッ?」

と、はたと何か<sup>に</sup>気付いたかのように、メイ子ちゃんはウチの顔をマジマジ凝視し始めはった。

「え? ウソ? そんな? まさか!」

何が?

「ヒメカアアア〜くん♡」

「うひゃあああ〜〜〜ツツ?」

抱き着かれた!

いきなり抱き着かれたよツ?

恍惚に頬擦りスリスリや!

「うふふ♡ ヒメカ♡ 会いたかったですわ♡」

「ふぐう! ウチ「モモカ」や! 「ヒメカ」<sup>ちや</sup>違う!」

「うふふ♡ ヒ・メ・カ♡ うふふふ♡」

聞いてくれへん!

幸福トリップで聞いてくれへん!

「ふぐううう!」

引き離そう思うて抵抗するも、ガツチリハグが離れへん!

どれだけ力<sup>ちから</sup>あるのん?

このメイドはん!

「嗚呼、<sup>わたくし</sup>私のヒメカ♡ もう放しませんわ ♪」

この人、怖い!

ウチ、この人怖いよツ?

「ふぐ……ふぐう……ふえええ……リンちや〜くん! うわ〜くん

!」

「アタシ<sup>……</sup>のモモから離れるー……ッ!」

土煙の猛爆走でリンちゃんが迫って来た!

その勢い任せに、力<sup>ちから</sup>尽くでウチを抱き寄せる!

奪還や!

えへへ ♪ リンちゃんに奪還された ♪

「ああん! 何ですの? アナタは?」

「うっさい! アタシのモモを怖がらせてんじやないわよ!」

「……アナタの？」

「そうよ！」

「ア・ナ・タ・の？」

「うー！」

リンちゃん？

何で言い淀むん？

「ううううっさいわね！ この子は “みんなのモモ” なのよ！ みんなのつて事は、アタシのつて事なんだからね！」

何か身に覚えない格上げされた！

ほんでもつて、どつかで聞いた『ガキ大将理論』出た！

「あら？ でしたら、私わたくしのもの……という事でもありますわね？」

「うっ？」

温顔ニツコリで言いくるめられた。

うん、そうなるやんな？

リンちゃん、もう少し考えて言うて？

「ううううっさい！ アンタのものはアタシのもの、アタシのものはアタシのものよ！」

徹底した！

徹底して『ガキ大将理論』継承した！

そんなしてたら、また近場の繁しげみがガサゴソした。

どうやら、新たな参入者の登場や。

「騒がしいと思ったら、やはり来ていた」

クルちゃんやった。

宴が始まった。

歓迎の宴や。

ウチとリンちゃんの。

原っぱへと座り込むウチとリンちゃん……と、クルちゃん。

その背後にドデンと座るロツポちゃん。

各々の前には皿代わりの葉っぱが敷かれとって、その上にはフルーツやら肉やらの質素な御馳走や。

うん？

肉、どないして焼いたん？

ま、ええわ★

コレ、おいしい ♪

ほんでもって、目の前では数匹のちっこいポヨコちゃんがりズミカルにポヨコンポヨコン跳ねとる。

どうやら歓迎のダンスみたいやね？

と、ややあつてクルちゃんが質問してきた。

「陽ノ咲モモカ、天条リン、何で追って来た？」

「いつも通りヘイザーナ」とへミヴィークで追って来たよ？」

「違う」

「違わへんよ？」

「宣言したはず——今回は、私一人で行く——と」

「リンちゃんや ♪ リンちゃんが行こう言うたねん」

「ふむ？」

ジイー……と、リンちゃんを傾視する。

その視線に堪えきれなくなったんか、リンちゃんはしどろもどろに言い訳を取り繕った。

「ア……アアア……アタシは別にアンタなんか、どーでもいいんだから！ ただ、フレッシュなパイパイ食べたかっただけで……」

「マンゴーやないの？」

「……うー！」

言葉詰まったよ？

気まずそうに詰まったよ？

何で？

「そんな事より！ アンタこそ、どーいう事よ！ この惑星ほしに高度知性体はいないんじゃないの！ 何よ、アイツ？」

ビシイ指差すのは、向こうの草原でポヨコちゃん達に指示を出しているメイ子ちゃん。

あんなん見てると、たぶん偉い人やね？

あ、コツチ気付いた。

ニツコリ笑顔で、ウチに掌てのひらを振ってはる。

ほんでもって、隣のリンちゃんを軽く見て……小馬鹿にした蔑笑べつしょう飾った。

「ムツツツカアーツ！ 何よ、アイツ！」

「彼女は〈プロブベガ〉の“ラムス”——この惑星ジェルダに生息する〈プロブ〉達の女王」

「ハツちゃんみたいなもん？」

「陽ひノ咲さきモモカ、並列に考えてはラムスに失礼」

それ、ハツちゃんには失礼やないの？

「だくかくら！ その〈プロブベガ〉って何だツツーのよ！ 高度知性体じゃん！ アイツ！」

「彼女は特異例。そして〈ベガ〉とは、正式には〈ベムガール〉の略。〈宇宙怪物〉と遺伝子レベルで融合して人間形態へと新生した“宇宙怪物少女”の総称」

「宇宙人とは違うの？」

「異星間交流が確立していなかった旧暦ならいざ知らず、この銀暦ぎんれきに於おいては生態的差別化定義は不可能と考えていい。両者の定義差は、偏ひしえに発生プロセスの分類概念にのみ依存している。よって、同義と考かんがえても支障は無い」

「ハツちゃんみたいなもん？」

「陽ノ咲モモカ、同義に分類してはラムスが不憫過ぎる」

ハツちゃんは可哀想やないのん？ それ？

「でもさ？ 〈ブロボベガ〉とか言いつつも、アイツ “人間” じゃん？

〈ブロボ〉の要素ゼロじゃん？」

「天条リン、あの形態は “地球人” をベースとした “擬態” に過ぎない。本来の彼女は “人型フォルム” を形成した〈ブロボ〉そのもの」  
「ふうん？ 要するに〈変身〉ってか？」

「あ！ そう言えば、ウチの事 “ヒメカ” 言うてたけど……誰と勘違いしてはったん？」

「日向ヒメカ”とは、旧暦時代に彼女が溺愛していた地球人。共に “家族” として生活していた」

「地球にいたん？」

「そう」

「旧暦に？」

「そう」

「何歳だツツーの！ アイツ！」

「天条リン、そもそも〈ベガ〉は “地球外生命体” に分類される。よつて “地球種子型人類” の寿命概念は適用されない」

「その “ヒメカ” いう人、そないにウチと似てたん？」

「似ていない」

「ふえ？」「は？」

「ただし潜在的雰囲気は似通っていなくもない」

「潜在的な雰囲気って、よく “芸能人オーラ” とか呼ぶアレの事なん？」

「そう」

「んで？ アイツってば、ずっとあんな性癖なワケ？」

「そうではない。確かに素地としては “日向ヒメカへの異常な溺愛感情” を抱いていたものの、誰彼構わずではないし、あそこまで壊れ……過剰ではなかった」

「……アンタ、いま “壊れて” って言い掛けたわよね？」

「言っていない」

「せやったら何で、あんなに過剰になったん？」

「断定は出来ないけれど、人恋ひとこいしかつたのかもしれない」

「ふえ？ ラムスちゃん、寂しいん？」

「旧暦時代、彼女は地球で『家族』となっていた。銀曆ぎんれきに於おいて古郷コングタクト（惑星ジェルダ）の女王と従事しているものの、高度知性体との交流接触は喪失している。永い歳月を鑑かんみれば、ホームシックにも似た虚無感が萌芽もがしていても不思議ではない」

「そっか……寂しいねや」

そんなん聞いたら、ウチらかて同情涌く。

孤独つらなんは辛いよ？

心の風船パンパンなって苦しいよ？

「そういうワケで……陽ひノ咲さきモモカ、今後は彼女の為なすがままになつてあげて欲しい」

「絶対イヤやー！」

無垢な瞳でクルコクンして何言うてんの？

それとコレとは別問題や！

「御話おはなしが弾はんでますわね？」

ややあつて、ラムスちゃんが合流してきた。

「どうですか？ モモカ様？ 私わたくしの作った『北欧風デミグラスソース煮込みハンバーグ』は？ 御口おくちに合いました？」

「うん、コレおいしい ♪」

「ああん ♪ 幸せですわ ♪」

「ま、未開の惑星にしちゃ、予想外の御馳走よね」

「少し黙もくっていて頂たまげます？ そのモブ女？」

「はあ？ フ……フフ……主役のアタシに向かって『モブ女』とは……いい度胸どくちゆうしてんじやない！ アンタ！」

主役、ウチ……。

「上等だーッ！ 殺やつてやろうじやないのよ！」

リンちゃんの勝ち気に火が着いた！

おまけにフリガナ違ちがう！

アカン！

相当、頭に血イ昇ってる！

そんな殺伐としたん『闇 ●』だけで充分や！

「リンちゃん、ケンカはアカン！」

「ウチ、慌てて腰を抱き押しえた！」

「はくなくせッ！ モモッ！」

「ふぐう！ アゝカゝンッ！」

「陽ノ咲モモカ、そのまま投げ捨てればへフロントスープレックスへ  
と発展する。意識を果てさせるのに効果は抜群」

「せやの？ せやったら、せーの！」

「何が『せーの！』だーーーーッ！」

「ふぐうッ？」

ハリセンバチーンや！

「うう……リンちゃん、痛いよ？」

「潤々しながら『痛いよ？』じゃないッつの！ この脳ミソ新日娘！

「だいたい、クルもだ！ 妙な提案すんな！ このアーパー、すぐ  
鵜呑みにすんだから！」

リンちゃん、あんまりや！

と、不意に「よよよ」と泣き噎る声。

……ラムスちゃんやった。

どないしたん？ 急に？

「ひ……卑怯ですわよ！」

「は？」「ふえ？」

「モモカ様に抱きつかれる様を見せてつけて、仲の良さを誇示するなん  
て！ 初対面の私が不利なのは明白ですわ……グスッ」

「……アンタ、いまの流れ見てた？」

「ハッ！ そうですわ！ 全身へ液状体質の私ならば、投げ捨てられ  
ても平気……何度、脳天から叩き落とされてもノープロブレムですわ  
！ 抱きつかれ放題ですわ！」

変な着地した。

ほんでもって、聖母のような慈しみでウチへと両手を広げた。

「さあ、モモカ様♡ 思う存分、私にへフロントナンタラを仕掛

けて下さいませ♡」

「イヤヤ」

「グス……ううう……」

「殺人技回避したのに、地べたに泣き崩れてんなツツーの！」

ウチ、この人少し苦手かもしれへん……。

「ところでラムス、アナタと話がしたい」

顔色ひとつ変えんと、クルちゃんが切り出した。

それを受け、ラムスちゃんの雰囲気スツと引き締まる。

「ま、そうでしょうね。わざわざ貴女がいらしたという事は……。よもや懐かしい顔に、こんな形で再会するとは思ってもいませんでしたけれど」

「何よ？ アンタ達、古くからの知り合いなの？」

リンちゃんの質問に、ラムスちゃんの温顔がニツコリと回答。

「ええ、そうですわよ？ モブ女？」

……毒吐きよった。

「上等だーっ！ このスライムメイドーっ！」

「ふぐう！ リンちゃん、あくかくんくっ！」

「放せーっ！ モモーっ！」

「うう……あんまりですわ……また抱きつかれる様を見せつけるなんて……ううう」

「このカオス、エンドレス？」

クルちゃん、そう思うなら何とかして！

呑気にクルコクンしとらへんで何とかして！

「では、私とラムスは対話の為ために席を外はずす」

「何よ？ 此処ですりゃいーじゃん？」

「天条リン、その申し出は却下。生憎あいにく、今回はラムスとマン・ツツー・マ  
ンで話がしたい」

「はああ？ アタシらに聞かれたくない秘密事ってか！」

「そう」

「……迷い無く肯定したわね、アンタ」



「え……ええやん、リンちゃん？ 久しぶりの再会で、きつと積る話もあんねんよ？」

「無い」

クルちゃん、淡白に否定した。

ウチ、庇かばつてあげたねんよ？

「モモカ様？ 私わたくしがない間、寂しいでしょうけれど、少しだけ御待ちになっていて下さいませ？ すぐに戻りますから ♪ 」  
別に寂しいよ？

と、これ見よがしにウチの肩を抱き寄せるリンちゃん。

「ほれ？ さつきと行けっつーの？ シッ！ シッ！」

野良犬扱いに払いはった。

「私わたくしのモモカ様から、その雑菌まみれの手を御離しなさい！」

「へへくん ♪ アタシとモモは一緒にシエア食いとかしたり

する仲間だもんねー ♪ アツカンベロベロベー★」

「な……何ですって！ 不潔！ 不潔ですわ！ もしも私わたくしのモモカ様が、変な感染症に掛かったりしたら……ッ！ モモカ様、この性悪バイ菌女と御別れになるべきです！ いますぐ！ そして、パートナーには私わたくしを！」

「イヤや」

「……うう……あんな雑菌バイ菌モブ女に負けるなんて！」

ラムスちゃん、また泣き崩れはった。

「カオスは、もういい」

醒さめて纏まとめるクルちゃん。

「という事で……陽ひノ咲さモモカ、面倒を起おこさないで、おとなしくしているように御願ごんいする」

「はーい★ うん？ 何で、ウチだけなん？」

「天条リン、陽ひノ咲さモモカが面倒を起おこさせないで、おとなしくしているように監視を御願ごんいする」

「あー……まあ、尽力はしてみるわ。うん」

「何で、ウチだけなん？」

そんなんしてたら、またまた近くの繁みがガサゴソ。

全員がハッと注視した。

このパターンは、また誰か来る。

「今度は何よ？ 何か引き寄せる電波でも出てるワケ？ この集落！」

「失礼ですわね、モブ女。私の村に、そのような怪しい仕掛けはございません」

「どうかしらねー？ 何たってへ女王様」が「変態」だし？ 『類は友を——』で、変人呼び寄せてるんじゃないのー？ ア・ン・タ・ガ！」

「あら？ でしたら、貴女も「変人」という事になりますわよね？」

「フ……フフフフ……」

「ウフフフフフ ♪」

リンちゃんとラムスちゃんが静かなる火花を散らす中、低木を掻き分けて問題の相手が現れた。

「ようやく追いついたぞー！ リンにモモカよー！」

……ハツちゃんやった。

「我を置いて行こうとしても無駄な事！ そう、このハーチあぐつ！」

囓んだ！

遂に、そこまで囓んだ！

どんどん堕ちていく！

こっちのへ女王様」！

「カオスは、もういい」

クルちゃんの醒めた本音には、ウチとリンちゃんも同感やった。

クルちゃんとラムスちゃんは、宣言通りに席を外した。

残されたんは、ウチとリンちゃんとロツポちゃん……それにハツちゃんや。

「んで？ わざわざ追って来るって、何だツツーのよ？ エルダニヤ？」

「うむ、どうしても伝えるべき事があってのう」

「お笑い芸人になる決心でもした？」「ハツちゃん、年末芸人大会に出るのん？」

「違うわッ！」

「何や？ 違うのん？」

「コレじゃ！ コレを伝えに来たのじゃ！」

揚々と「カラフルな立方体」を取り出すハツちゃん。

「我が愛機へリヒーク専用ドツゲの格納庫から、斯かよう様な物が発掘されてのう」

「何なん？ これ？」

「各方面が色違いな立方体じゃん？」

「フフフ……コレは単なる立方体ではないぞ？」

「そう言われても、見た目には単なるオブジェにしか……って、まさか！」

「どないしたん？ リンちゃん？」

「だいじゆしんへ大樹神どぶろくとつくりへ濁酒徳利——これまでも、予想外の物体に擬態していたわ」

「ええ？ せやったら、コレが今回のへネクラナ——」

「そう！ コレこそが旧暦に大ヒットしたアイテムへロービツクキューブなり也！」

甲高い破裂音がスパーン！

間髪入れずにハリセンアプリが叩き込まれた……ハツちゃんの顔

面に。

「わざわざ旧暦玩具の立体パズル見せに来たってか？ ああん？」

ハリセンをパシパシとメトロノーム刻みにしつつ、ハッチャンを威圧に見下すリンちゃんの殺気。

怖ッ！

「揃そろえたのじゃ！ 自力じりきで揃そろえたのじゃ！」

「だったら、何だ！」

「うむ、見て欲しい」

悪びれずに言うた。

この人、めげへん！

「フフフ……では、我が腕前わを披露ひろうしてやるとするか」

自己満足に進めたよ？

見る言うてへんよ？

「モモカよ、コレをグチャグチャに掻き混ぜるが善よい」

手渡された立方体は、一面辺り九立方体にパーツ分割されとる仕様や。それをガチャガチャ回すと、各面が雑多な入れ代わりに細かいラダムカラーを構成する。

「やったよ？」

「うむ、御苦労。フフフ……驚おどろくでないぞ？ まずは、各パーツをバラしてだな」

「のっけからプレイスタイルが違うわー！ツ！」

フルスイングハリセン、スパーン！

女王様の顔面、クリーンヒット……。

「回すの！ コレは回して揃そろえるんだツつーの！」

「何と！ そうであったか！ では、無理じゃな？」  
投げた！

一考いっこうも無く、淡白に投げた！

「ウホホー★」

「ロツポちゃん揃そろえた！ ものの数秒で揃そろえた！ 六本腕むを使うて！  
スゴい！」

「うむ、見事である！」

「……ゴリラに知恵で負けんな、エルダニヤ」

と、リンちゃんは忘れていた事に気がついたようや。

「そういえば、ロッポ？ アンタ、アタシ達を何処へ連れて行こうとしてたワケ？」

「ウホホ、ウホ、ウホホホホ！」

リンちゃん、また表情曇った。

「モモ！」

「解らへんよ？」

「やつぱり、このオチかー！ツ！」

「フム？ なるほどのう？」

「つて、エルダニヤ？ アンタ、言葉解るの？」

「何じや？ リンよ、解らんのか？」

「解るか！ つてか、アンタは何故解るツ？」

「通訳が居るからのう？」

「は？ 通訳？」

誰？

ハツちゃん、妙な事を言い出したねえ？

此処に居るの、ウチとリンちゃんとロッポちゃん……それから、ハツちゃん自身だけやん？

「何処にいののよ？ 通訳なんて？」

「先程から居るではないか？」

「だくかくらく！ 何処に……つて……」

リンちゃん、言葉失った。

ウチも失った。

ロッポちゃんもドン引きしとる。

ハツちゃんの周り、オーブ飛び始めた！

この人、霊界通信で通訳してはった！

「どうじや！ 我が専属整備士の有能さは！ 実に多才！ 実に有能

！ 今回ばかりは、御主達も認めざる——つて、何処へ行くツ？」

草むらや！

草むらへ脱兎や！

全員、恐怖に避難や！

ひとまず落ち着いて、ハツちゃんの話聞いた。

オーブはんには席を外してもらおうとして……。

「つまりじゃな？ こやつの集落に、我等われらと同じへ人型生命体おが居るので会わせようとしたらしいのう？」

「は？ アタシら以外に？」

「うむ」

「……どういう事？」

親指を噛んで思索するリンちゃん。

「この惑星ほしに〈高度知性体〉は、原則としていない……あの『ラムス』とかいう『イケズブリブリ毒舌ビツチスライムメイド（くたばれ）』は特異例……」

何気にエラくデイスつとるよ？

「だとすれば、考えられるのは……アタシ達と同じへ来訪者きせうしやって事か？」

「ウチら以外に？ どないな人やろ？」

「う……ん、確認してみたいけど……クルから面倒起おこすなって言われてるし、動くワケにも……」

「わかった！ せやったら、ウチが確認して来る！ リンちゃんは此処で待つとって？ ロツポちゃん、行こう！」

「ウホー！」

「うん、御願ごんい……って、モモーツ？ 違ちがう！ 一番動うごいちゃいけないの、アンターーツ！」

何やリンちゃんが叫こゑんどったけど聞こえへん。

とつくに後方や。

ロツポちゃん、意外と駆けんの速いねん。

「此処がロツポちゃんの集落？」

「ウホー！」

やっぱり森の中に拓ひらけた場所やった。

せやけど、ポヨコちゃんトコと違ちがうて鬱蒼うつそうとしている。

周囲を樹林に囲われとると、そもそも敷地面積が狭いからやろね？

ポヨコちゃんトコが「草原の周囲に樹々が囲つとる」と形容するなら、ロツポちゃんトコは「密林の中を切り拓いた」という感じや。ほんでもつて、やっぱりロツポちゃん達がウロウロしとる。

「ふええ？　こんなにたくさんさんのロツポちゃんが居たら、ウチ判らへんようなるよ？」

「ウホウ？」

「あ、せや！　ウチ、閃いた！」

「ウホ？」

ウチ、ロツポちゃんの頭に赤いリボンを結んだった。

「えへへ　♪　コレで判るよ？」

ロツポちゃんは、しばらく不思議そうに眺め——「ウホ　♪　——

——満足そうな様子や。

そんなしてたら、いきなり大きな音が掻き鳴らされた。

コレ、銅鑼やんな？

誰が作ったん？

一転して周囲が慌ただしくなる。

全員が作業中断に集まり、集落中央に据えられた大きい切り株へと畏まった。

「何が始まんのか？」

「ウホホ、ウホ、ウホホホホ」

「さつき言つとつた“人”が出て来んの？」

「ウホ！」

「その人、偉い人なん？」

「ウホホ」

「ふうん？　ある日現れて、そのまま“女王”になったんや？」

「ウホ……」

「それ、ロツポちゃん達が決めたんやなくて、その人が勝手に名乗ったん？」

「……ウホ」

「そうなんや？ 迷惑な話やんね？」

「ウホウ……ウホホウホウホ」

「ほんでもって、毎日の惑星探索を義務化されて報告せなアカンの？」  
「ウホ……」

「地脈エネルギー値が高いトコなん？ 何探しとんのやろ？」

「ウホウ？」

「それは判らへんのや？」

「ウホ！」

「そんなんで、ポヨコちゃんの種族とも反目したん？ あ！ せやか  
ら森の中で遭遇した時、二人共とも喧嘩腰やったんやねえ？」

「ウホウ！ ウホウホ！」

「うくん……せやけど、そりやロツポちゃん達がアカンよ？ 勝手に  
縄張り荒らされたら、ポヨコちゃん達かて面白くないよ？ ウチかて、  
勝手に自分の部屋に入られたらイヤやもん」

「ウホホ……ウウ」

「逆らったら、お仕置きされるん？ アカンやん！ そんなん、イジ  
メっこや！」

「ウホウ……」

「うん、ウチは分かったよ？ ホントはロツポちゃん達かて、したくな  
いねんな？ 言われたから、しゃーなくや」

「ウホホホ……ウホ？」

「説得？ ウチ『もう自由にしたって』って言えばええのん？」

「ウホ……」

ロツポちゃん、申し訳なきさそうに沈んだ。  
せやねえ？

いままで大自然で仲良うやってきたのに、いきなり身に覚えの無い  
王権制度を強要されたら堪らんねえ？

コレ、可哀想やんな？

「うん、分かった★ ウチ、お願いしてみる ♪」

「ウホ？」

「ええよ？ 友達やもん」



ややあつて、切り株ステージに〈女王様〉が現れた。  
べっぴんさんや。

全体的に華奢で繊細な印象やねん。フワリと銀色の長髪が泳ぎ、繊細でスレンダーな肢体を白い〈PHW〉で包んだる。

「……あれ？ この人、どっかで見た事あるね？ ドコでやる？ うん？」

ウチが記憶を手繰るとると、謎の女王様は眼前に畏まっているロツポちゃんの集団へ向かつて揚々と名乗り始めた。

「聞け、忠実なる私兵共よ！ 我が名は〈ニヨロロトテ〉——」

「ああ！ せや！ やっぱりニヨロちゃんや！」

「——誰だ、オマエは？」

怪訝そうな表情へと染まるニヨロちゃん。

ウチ、一団の最後列からトテテと近寄った。

「また会えたねえ？ えへへ♪」

「……誰だと訊いている」

「ウチや★ 陽ノ咲モモカ」や★

「何処かで遭遇したか？」

「覚えてへんの？」

「知らぬ」

「ふぐう……ヒドイやん！ アレやん！ 惑星レトロナで会うとるやん！」

「覚えは無い」

「ウチへミヴィークで戦ったよ？」

「ミヴィーク？」

「もう！ シヤチ型宇宙航行艇の事やん！」

ウチ、プリプリや！

激オコぶんぶんや！

ニヨロちゃんは、暫く脳内記憶を反芻して——「ああ、アレか——  
——ようやく思い出したみたいやった。

えへへ♪

ウチ、捕まった……。

私——クルロリは、彼女と共に草原へと腰を下ろした。

小高い丘陵だ。

とはいえ、此処まで緩やかな勾配が続いていたので、そこそこ標高は高い。

眼下には森の深緑が息吹き、見渡すに山々が青の清涼に霞む。

二人して、その景色に意識を流した。

風がそよぐ。

草は泳ぐ。

「正直、驚きましたわね。まさか、このような再会になるとは」

「そうでもない」私は必然を生じるプロセスを示す。「少なくとも、私とアナタは『地球人類種子』と寿命が違う。太陽系銀河に於ける活動範囲を局地的に限定した場合、その尺度如何では再会する確率は高くなる」

「……相変わらず理屈臭いですわね」

少々辟易とした様子だった。

何故かは特定できない。

ブロブベガの「ラムス」——彼女とは旧知の間柄となる。

再会は久しぶり。

「それで？ 今回は、どのような面倒事を追っていますの？」

「ラムス、私が特異状況に在ると何故断定できた？」

「貴女が拘わって、面倒事ではなかった試しなどありませんわよ」

「ふむ？」

「……思いつきり理解不能な顔でクルコクンをしないで頂けます？」

苦虫顔で詰め寄られた。

そうか。

また私は「クルコクン」と呼ばれる仕草をしていたのか。

自覚は無い。

「コレを搜索収集している」

簡潔に納得を促す手段として、私はへネクラナミコンの欠片を提示した。

「石板？」

「コレはへネクラナミコンの欠片……現在は次元宇宙に散在してしまっている」

「ネクラナ……？ 何ですか？ その思いっきりパチモノみたいな名前のコレは？」

「アカシックレコード」

「ふうん？」彼女は意味深に微笑を含んだ。「いつから嘘をつけるようになりましたの？」

少し驚いた。

どうやら易々と看破されたようだ。

「ラムス、質問がある。どうして嘘だと断定できた？」

「あら？ やはり嘘でしたの？」

「ふむ？」

「鎌掛けですわよ。貴女が、そうそう秘事を露呈するはずがありませんから」

「ふむ？」

さすがにラムスだ。

既知の古さも推測材料にあっただろうが、それ以前に彼女自身が推理能力に長けている。

「で、何ですか？」

「いまは伏せておく」

「そうですね」

意外とあっさり引き下がった。

「追求はしない？」

「いまさらですわよ」

どういう意味だろう？

私には汲み取れない。

「それで？ あの子達は、何ですか？」

「陽ノ咲モモカと、天条リン——彼女達と保護者マリー・ハウゼンには  
〈ネクラナミコン〉の搜索収集の協力体制を依頼した」

「……それだけですの？」

「そう」

「本当に？」

「そう」

「……本当に？」

「ジイと私の瞳を見据えるラムス。

もしかして、コレが『値踏み』というヤツだろうか？

しかしながら、この項目に関しては、私も〈嘘〉はついていない。

マリー・ハウゼンとは『ネクラナミコンを目的とした協力体制』で  
あり、陽ノ咲モモカと天条リンとは『現地搜索を目的としたチームメ  
イト』だ。

それ以上で以下でもない。

……何故だろうか？

彼女達を想起すると、少し精神状態が揺らぎを見せる。

イヤな感覚ではない。

旧暦時代にも体験した『温かさ』だ。

この『ラムス』と共に……。

ふむ？

「では、最後のは何ですか？」

「最後の？」

「あの〈蜂女〉ですわ」

「アレはバカ」

「……シンプルながらも辛辣な猛毒を吐きましたわね」

「そうなのだろうか？」

「私は真実を告げただけ。

誹謗中傷の自覚は無い。

「では、この惑星ジェルダには、その搜索へ？」

「主目的は、そう。副次的目的は、違う」

「副次的目的？ 何ですか？ それは？」

「それは――」

口にしようとした瞬間、明後日の方角で大爆発が生じた。

森の一角だ。

そして、濛々と煙が上がる。

微かに流れて来るのは、けたたましい喧騒。

大方、予測通り。

「アレは……〈アリログ〉の集落が在る方角？」

ラムスが焦燥に腰を浮かせた。

彼女が言う〈アリログ〉とは、この惑星に原生する六本腕のゴリラ

――つまり陽ノ咲モモカが「ロッパちゃん」と呼んでいる種族の事だ。

「いったい何事が？」

何事でも無い。

予測確率九十六%で、確定している。

程無くして、巨大少女が樹海の波間から飛翔した。

滞空に眼下を見据えて叫ぶ。

「この！・モモを返しなさいよ！」

やはり。

天条リンだ。

いや、訂正しておこう。

あの形態は〈Gフォルム〉に巨大化しているから〈Gリン〉と呼ぶべきだ。

そして、この展開になったという事は、おの自ずと原因も判明する。

一応、釘を刺しておいたが、それも無駄であったようだ。

かと言って、特に悲嘆も動揺も無い。

予測通りなのだから。

望む望まないに拘わらず。

「なッ？ 何ですか？ アレは！」

ラムスにしては珍しく、思いつきり驚愕していた。

ああ、そうか。

それが、普通の反応か。

彼女は初見だった。

「何故、あのモブ女が巨大化していますの！」

「そういう特性だから」

「フアジーな説明で片付けしないで下さいますッ？」

ふむ？

私は無駄を省いて要点だけを押さえたつもりだったが、どうやら彼女の要求にはそぐわなかったようだ。

とりあえず現状に於いて、それはいい。

それよりも気になるのは「誰と事を構えているか」だ。

そう、一般的に最重要視される「何が原因で、こうなったか」という要因すら、あの二人には無意味だ。

何故なら、何が要因であろうと、あの二人ならこうなる。

「ふむ？」と、私は気になった判断材料を一顧。「おかしい？ 陽ノ咲

モモカがいない？」

「え？ モモカ様？ モモカ様が、どうか致しまして？」

「通常なら、あの二人はワンセット。天条リンが巨大化したのならば、当然のように陽ノ咲モモカも巨大化して傍にいる」

「……いま、何と仰いました？」

「陽ノ咲モモカも巨大化する」

「そちらではございませんわ！」

では、どちらだろう？

「あの二人はワンセットで、当然のように傍にいる……ですって？」

「原則として、そう」

「フ……フフフ……フフフフフ……」

麩？

「ゆ……ゆゆゆ……」

湯？

「許せませんわ……ッ！」

唐突に絶叫した。

声量にはビックリしたが、言動自体に驚きはしない。

極稀に、彼女はこうなる。



「もう少し待ってれば、何か起きますの？ あのモブ女が爆死しますの？」

何故、そこまで天条リンを敵視するのだろうか？

親近嫌悪というヤツであろうか？

「たぶん、もうひとつの構成要素が生じる。そして、いつも通りの展開となる」

「もうひとつの構成要素？」

彼女が怪訝けげんを浮かべた直後、雲間を抜けて鋼鉄の巨人が降下してきた。

『フハハハハハッ！ 宇宙の帝王まで、あと100ポイント！ ドクロイガー参上！』

予想通りへドクロイガーが現れた。

そして、何故かポイント制になっていた。

彼が介入する展開は、かなりの高確率で予見出来た。

ただしポイント制については、まったくの予想外。

「帰れ」

『又オオ？ 取り付く島も無しにッ？』

間髪入れずに、Gリンの冷蔑冷遇れいべつれいぐう。

この展開も予測通りだ。

「さて……」私はベルトバックル部からパモカを取り外し、指令を口くちにした。「来て、ドフィオン」

彼方中空に煌めききりが一条。

それは、すぐさまへ宇宙航行艇コスモクルーザーとして飛来する。

「な……何ですの？ この巨大なエイは？」

「私の愛機へドフィオン」

「愛機？」暫く言葉しばらを呑んで見入るラムス。「あのへドリル軽パンは、どうしましたの？」

「……ラムス」

「はい？」

「コチラの読者が、アチラを読んでいるとは限らない。その辺りのTPOは弁わきまえてほしい」



「……貴女でもメタツツコミとかしますのね」

何故、苦虫顔を向けられるのだろうか？

まったく心当たりが無い。

ふむ？

と、後方から見知った顔が飛来した。

「おお！ クル！ 此処に居ったか！」

ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ビースウオームIV世だ。

些か興奮気味にも見える。

「ハツちゃん、何？」

「クルコクンで“ハツちゃん”言うな」

ふむ？

おかしい？

陽ノ咲モモカに準じたのだが？

「そんな事より！ そなたに伝えるべき事が出来たのじゃー！」

「状況が一転したのは、こちらでも視認した。いったい、何があつた？」

「うむ、コレじゃー！」

掌サイズのカラフル立方体を見せてきた。

確か旧暦時代の立体パズル玩具「ロービツクキューブ」というヤツだ。

「……ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ビースウオームIV世？ コレが何？」

「うむ、自力で揃えられるようになった！」

「では、加勢に行つて来る」

私はラムスへと簡潔に告げ、愛機「ヘドフィオン」を発進させた。

彼女の傍らには、消沈したハーチエス・エルダナ・フォン・アルワस्प・ビースウオームIV世がガクリと膝をついていた。

ぞんざいな無視に傷ついたようだ。

「揃えたのじゃー！ 自力で揃えたのじゃー！ ！」

聞こえない。  
聞こえない。  
地表から嘆き声が聞こえたけれど、聞こえない。  
カオスは、もういい。

交戦は続いている。

いや、乱戦と言うべきか。

Gリン――

ドクロイガー――

そして、正体未確認の敵――。

いつも通りだ。

問題点があるとすれば、依然正体不明の敵は森林に潜んでいるという事。

そこから放たれる光線攻撃を、滞空するGリンが回避する。

そして、ドクロイガーがちよっかいを出し……ハリセンの制裁で返される。

あ、また泣いた。

ともかく専用宇宙航行艇コスモクルーザーへドフィオンへに搭乗した私は、ようやく前線へと合流した。

「クル？ 何処行つてたんだツツーの！」

「天条リン、陽ひノ咲さきモモカは？」

「……う」

ばつ悪そうに言葉を呑んだ。

ふむ、やはり予想通り。

この状況の原因は、陽ひノ咲さきモモカだ。

私は眼下へと視線を落とす。

敵の姿は深緑の雲に潜んでいて、凝らしても視認出来ない。

という事は、少なくとも小型対象という事だ。

背後からドクロイガーが襲撃してきたので、尻尾部の電磁鞭でんじムチへテールビュートで叩き払う。

……また顔面押さえて泣いていた。

「天条リン、ひとつ確認したい。誰と交戦している？」

「ニヨロロトテップだツツーの！ アイツ、モモを拉致しやがった！」  
どうやらへ惑星レトロナで遭遇したというアレのようだ。

私自身は事後報告のみで遭遇していない。

問題は、何故へニヨロロトテップが、此処にいたか……その目的だ。

過去のデータによると、相手の目的意識は「高度発展した科学文明に対する活動規模縮小を目的意図とした警告、及び、武力制裁」であつたはず。

しかし、このへ惑星ジェルダの文明レベルは原始的であり、対象条件としては外れている。

ふむ？

私が再び眼下を注視していると、攻撃地点から人間サイズの影が飛び出してきた。

銀色の長髪を靡かせる美少女——なるほど、アレがへニヨロロトテップか。

確かに「通常の人間」ならば、Gリンを相手取って対峙する際に滞空浮遊などしない。

「3 f フラクタル \ 1 b ブレンディングメンション 次 元の少女よ——いや「天条リン」と呼ぶべきか。何故、オマエはつくづく邪魔をする？」

「ハア？ 知るかツツーの！ アンタなんか！ 自惚れてんじやないわよ！ さっさとモモ返せ！」

「返してやってもいい。ただし、交換条件だ」

「何だツツーの！」

「オマエ達が収集しているへネクラナミコンを渡せ」

「……はあッ？」

どうやら彼女の目的もへネクラナミコンらしい。

何が目的かは判らないが、少なくともへ私へドクロイガーへニヨロロトテップの三つ巴相関は確定した。

「何でアンタがへネクラナミコンを知ってるんだツツーの！」

「アレは、そもそも私が保持すべき物だからだ」

なるほど……そういう事か。



迫るニヨロトテップを前にして、歯噛みながらに尻込むドクロイガー。

『どつちもがんばれー？ 負けんなー？』

Gリン、その覇気の無い声援は他人事気分と捉えてもいい？

『ええい！ 頭に乗るなよ！ 小娘共が！ ワシとて伊達に<sup>だて</sup>“髑髏”<sup>ドクロ</sup>をやっていたワケではない！ イヤイヤながらのプライドがあるわ！』

意味不明。

『いまこそ見せてやろう！ ネットオークションで高額落札した秘密兵器を！』

ドクロイガー、それは“秘密”とは呼べない。

オークション参加者全員が認知している。

『フライング・ダッチマーラーン！』

拳を天空に振り上げ、エネルギー波を解き放った。

……五分経過。

……一〇分経過。

……十五分経過。

あ、何か飛来した。

どうやら日本の小型木船をモチーフとした<sup>コスモクルーザー</sup>宇宙航行艇<sup>ザイ</sup>のようだ。ただし“骨”のデイトールでパーツ構成されている。

とはいえ、実際には宇宙合金製だろう。

そうでなければ<sup>コスモクルーザー</sup>宇宙航行艇<sup>ザイ</sup>としては機能しない。

しかしながら、この経過時間では実戦活用には向かないと思える。

それにしても独特の自己主張をした<sup>コスモクルーザー</sup>宇宙航行艇<sup>ザイ</sup>だ。

甲板上には複数の<sup>ガイコツ</sup>骸骨型アンドロイド<sup>ザイ</sup>が整列し、何故か全員でオールを漕いでいた。

この雰囲気は、何処かで見た事がある。

旧暦データベースで……だ。

はて？ 何だっただろう？

考察材料の一環<sup>いっかん</sup>になるかは解らないが、骸骨達は低く震える声音で『柄杓<sup>ひしゃく</sup>をくれえく……柄杓<sup>ひしゃく</sup>をくれえく……』と呻<sup>うめ</sup>いている。

ふむ？

「〈舟幽霊〉じゃん！」

ああ、そうだ。

Gリン、指摘をありがとう。

確か〈妖怪〉とかいう不吉な空想娯楽だ。

自ら「恐怖」の対象を生み出して楽しむのだから、人間というものは理解に苦しむ。

『失敬な事を言うな！ アレは〈フライング・ダッチマン〉だ！』

ドクロイガー、それは〈幽霊船〉——広義的に〈妖怪〉に分類される。

『柄杓をくれえ〜……柄杓をくれえ〜……』

『柄杓をくれえ〜……柄杓をくれえ〜……』

『言つても〈ダッチマン〉だ！』

『柄杓をくれえ〜……柄杓をくれえ〜……』

『妖怪じゃん！ 認めなさいよ！』

『……〈フライング・ダッチマン〉だもん』

この下り、要るだろうか？

ドクロイガーの上空で待機旋回を描く舟幽霊。

どうやら指令待ち……という事は人工知能搭載の自律型だ。搭乗者はいない。おそらく、あの〈骸骨〉達がリモート別行動を担っているのだろう。

『いくぞー！ フォルードアップ！』

空中分解した〈舟幽霊〉が、追加アーマーと化して合体した。

準じてドクロイガーの外見が、ややゴチャゴチャとしたディテールへと昇華される。

『髑髏合体！ ドクロイガー！』

……ドクロが増えた。

腕部や脚部に小型のドクロパーツが増えた。

私の記憶が正しければ、彼は〈髑髏〉モチーフを辟易と嫌悪してはたはずだが？

ふむ？

「ドクロ増えてんじやん！」

Gリンが無遠慮に指摘した。

だが、この点は私も気になったので代弁に礼を言いたい。  
ありがとう。

『ううううるさい！ ワシだってイヤなんだからね！』

何故、ツンデレ口調くちようなのだろう？

『だって、仕方ないじゃない！ 髑髏ドクロだもの！』

意味不明。

相田み ● を風に言われても、まったく要点を得ない。

『ともかく！ この形態となったワシを易々と倒せるなどと思うなよ！ ニヨロトテテップとやらー！』

噛んだ。

ハーチエス・エルダナ・フォン・アルワсп・ブースウオームIV世  
ばりに噛んだ。

だが、これは致し方ない。

確かに彼女の名前は、呂律ろれつを殺す言いにくさだ。

基本『ら行』や『ふあ行』の羅列は言いにくい。

もつともハーチエス・エルダナ・フォン・アルワсп・ブースウオームIV世の場合は、少々病的ではある。

『喰らえええい！ ハイパードクロバーストオオオーツ！』

強化形態になっても、やる事は変わらなかった。

『グスグス……うう……』

数分後――。

私達の眼前には、ボロ負けして泣き濡れるドクロイガーがいた。

全高八〇メートルの巨体が、人間サイズの生身に負けた。

またも『独活ウダドの大木』を地で言っている。

「まったく！ 相変わらず使えないわね！ このドク郎！」

Gリン、またも代弁ありがとう。

『だって、仕方ないじゃない！ 髑髏ドクロだもの！』

こんな場面で「相田み ● を風」が活いきた。



「さて、ではオマエが所有するへネクラナミコンを渡してもらおうか？」

優勢の浮遊にニヨロトテップが迫る。

『……はい』

指先からのマジックアームで、悄悄と手渡した。

まるで従順な犬が、お手をするかのよう。

「渡すんかい！」

絶妙のタイミングでGリンがツツコミ。

この能力のポテンシャルに於いては、彼女こそが私の知己でナンバーワンかもしれない。

「コレで、ようやくひとつ……」

掌中のへネクラナミコンを見つめて、ほくそ笑むニヨロトテップ。

その僅かな隙を突き、Gリンが奇襲を仕掛けた！

ヘリウムブースター全開で特攻しつつ叫ぶ！

「セパレーション！」

プロテクターと化していたへミヴィークが分離！

巨大化が解除された！

等身大に戻った天条リンは、しなやかな脚線美でニヨロトテップの手を蹴り上げる！

宙に舞う石板！

すかさずヘリウムブースターの出力を上げ、上昇キャッチを試みる

！

が、右脚に触手が巻き付いた！

ニヨロトテップの右腕が変質したものだ！

「何ですって？ クラゲの触手？」

「言ったはずだ……この少女形態も、あのクラゲ形態もへ擬態だと。つまり臨機応変に変質できる」

「うわっとー！」

鞭拘束のように下界へと投げ捨てる！

「ヤバッ！ ミヴィーク！」

即座に〈宇宙航行艇〉<sup>コスモクルーザー</sup>が追う！

「G フォルム・メタモルアップ！ Gリン……あう！」

巨大な女体が樹々を滑り倒し、緑の雲海に土色の露道を刻んだ！  
とはいえ、この判断は正解だと言える。

巨大化する事で尺度修正が為され、せいぜい派手に転んだ程度のダメージへと緩和されたのだから。

人間サイズで墜落していたら致命傷——下手をすれば死んでいたかもしれない。

「みすみすくれてやると思うか？ 天条リンよ？」

悠然と見下したニョロロトテップは、頭上から降ってくるヘネクラナミコンへと手を伸ばす。

「そうはさせない。好機なのは、こちらと同じ」

私は牽制の威嚇射撃を繰り出した。

「チー！」

滞空維持の後方跳躍で、大きく間合いを開くニョロロトテップ。  
そもそも当てる気は無い。

尺度対比から言って、仮に〈宇宙航行艇〉の砲門であっても人間サイズには大口徑だ。掠っただけでも消し炭に死ぬ。

が、当てる気は無い。

ひとつだけ断言しておくが、当てる腕はある。

おそらく天条リンや陽ノ咲モモカでは不可能だろうが、生憎と私は射撃精度に自信がある。

が、当てる気は無い。

「天条リン」

「モチのロン！」

以心伝心とばかりにGリンが急上昇。

再びヘネクラナミコンへ目掛けて。

『それ、ワシのオオオー！』

ドクロイガーも奪取の動きを見せた。

「させるか！」

諦めの悪いニョロロトテップ。

ひとつの石板を巡って、三者が争奪戦へと飛び込む。

再び混戦の装丁を催した。

罪なアイテムである。

その時——「イ〜ヤ〜ヤ〜！」——眼下の樹海から大絶叫が聞こえてきた。

耳慣れた「銀曆イアスナク弁」で。

「イ〜ヤ〜ヤ〜！」

たぶん、おそらく、ほぼ確定的に、間違いなく、「陽ノ咲モモカ」だ。私の知人であり、尚且つ、現状況下で「銀暦イアスナク弁」を喋る少女は彼女しかいない。

あ、森から矢のように飛び出した。  
ヘリウムブースター全開で。

すぐさま超高速で飛来するイザーナ。

「G フォルム・メタモルアップ！ Gモモ！」

動画の倍速再生宜しく、僅か数秒で巨大化変身を完了。おそらく通常時の二倍速。

それだけ焦っていたという事だろう。

疑問は、いくつかある。

何故、そんなに焦っていたのだろうか？

何に對して、そんなに怯えていたのだろうか？

う？  
どうやってニョロトテップの拉致状況下から脱出したのだろうか？

そんな考察点を諸々浮かべていた直後、彼女を追って真犯人が姿を現した。

「うふふ♡ 逃しませんわ ♪ モモカ様♡」

森から跳躍に飛び上がったのは、よく見知ったメイドベガ。

視認と同時に疑問が一気に氷解した。

おそらくラムスが救出へ向かった――

その後、悪い性癖が発動――

陽ノ咲モモカは生理的嫌悪感のままに逃走するも、執拗に追われ、現状に至る――

大方、そんなところだろう。

「では、失礼致します」

「ぎゃん？」

ラムスが腕を引くと、連動したかのようにGモモが墜落した。

「ふぐう……う……動けへん？」

大の字で地面へと拘束されるGモモ。

「さて、それでは……いまこそ愛の抱擁を——♪　モモカ様——♡」

「イーヤーヤー——ッ——」

両手広げの偏愛に飛び込むメイド。

恐々と拒否を叫ぶ巨大少女。

ふむ？

なるほど、そういう事か。

ラムスはへプロブベガでであり、そもそも部位境界の概念は適用されない。

如何なる形状であろうとも、本体と繋がっている限りは彼女の一部分だ。そして、その性質や強度も変質自在。

おそらくGモモには紐形状で部位を結び付け、それを手繰り寄せた。

ついでに言えば、先程の「らしからぬ超跳躍力」も、陽ノ咲モモカへと結び付いて引つ張られていただけの事だろう。

そして、地面には自らの液状部位を撒いておき、トリモチの如くGモモを捕獲した。

彼女の粘着力と張力は極めて高い。

かつては飛翔せんとする巨大ロボットの地面に縫い付けた実績もある。

それはともかく……とりあえず尻尾部の電磁鞭（テールビュート）で叩き払っておいた。陽ノ咲モモカへの義理立てで。

「あうッ？」

落下した。土煙を上げて。

「ラムス、訊いておきたい事がある」

パモカを用いて、彼女へ直接連絡。  
心配無用。

彼女もへパモカを所有している。

『痛たたたた……何ですの！ 他人を叩き落としておいて平然と！』

「アナタは何をやっている？」

『あら？ 貴女にしては愚問ですわね？ 御覧の通り、モモカ様を救出しましたのよ。』

「その後」

『決まっているじゃありませんか？ その・後・は……ウッフ ♪』

何が「決まっている」かは知らないし「ウッフ」と言われても意味不明。

回答にはなっていない。

「助けてえ！ リンちゃん！ クルちゃん！」

詳細は解らないが、面倒事が増えたのは直感した。

ふむ？ どうしよう？

「アタシのモモに何してんだーッ！ この変態メイドーッ！」

GリンがUターンに突っ込んで来た。

『パブロフの犬』宜しくへネクラナミコンへそっちのけで。

そのままGモモの前へと隔たり立つ。

「あら？ そんなに出番が欲しいんですの？ モブ女？」

「うっさい！ このビチビチビツチメイド！ アタシのモモに何かし

たら、タダじゃおかないわよ！」

一触即発に対峙する似た者性癖。

ふむ？ やはりカオス化した。

こうなるとへネクラナミコンへ争奪戦は、ドクロイガーに賭けるしかない。

少なくともニョロロトテップへ渡すよりはマシだ。

改めて戦況へ振り返って見ると……あ、無様にやられてフツ飛んだ。

使えない。

「ようやく手に入れたぞ……我がへネクラナミコンへ」  
確保した石板へと至悦に見入る。

「天条リン、陽ノ咲モモカ、困った事になった。ドクロイガー―所有の  
ヘネクラナミコン」が、ニヨロトテツプに奪取された」

「ふえ？　ヘネクラナミコン」奪われたん？　大変や！」

事態の重大さを理解……してはいないかもしれないが、とりあえず  
Gモモは狼狽の色を浮かべた。

一方、Gリンは……。

「くれてやれ！　んなモン！」

ラムスを睨め付けたまま吐き捨てた。

完全に頭へ血が昇っている。

「アカン！　リンちゃん！　アレ、クルちゃんの大切な物やん！　一  
生懸命集めてる物やん！」

「石板の一個や二個知るか！　後で纏めて奪い返してやるわよ！　ア  
タシはアンタの方が百倍大事だツツーの！」

天条リンの言い分は分かる。

どちらを比重に置くか……天秤は陽ノ咲モモカだ。

……何故？

確かに天条リンにとっては「陽ノ咲モモカ」だろう。

それは承知している。

けれど、私にとつての最優先事項はヘネクラナミコン」だったはず  
だ。

なのに何故、私は同調の理解を抱くのだろうか？

ふむ？

「アカン！」

「アカンくない！」

「アカン！　ウチ、クルちゃん困らせたない！　クルちゃん泣くのイ  
ヤヤ！」

……別に泣かない。

が、どうやら陽ノ咲モモカの頑固が発動したようだ。

こうなった時の彼女は、周りを屈するまで軟化しない。

「ふぎぎぎぎ……っ！」

懸命に「ラムスホイホイ」を引き剥がそうと試みる。

たぶん無理。

ラムスが、ほどかない限りは。

というか、ラムス？

何故、ほどかない？

私を知る限り、アナタは聡明な人種に分類される。

というか、抜け目が無い。

というか、したたかだ。

場合によつては狡猾にも映る。

ただの辛辣キヤラではなかつたはず。

状況を把握できない程、愚かでもない。

ふむ？

そんな疑問を巡らせる最中、不意に彼女は人差し指をフルフルと立てた。

「そのへネクラナミコン」というのは、コレの事ですか？」

クンツと指を引くと、強引に石板が引き寄せられる。

「何ッ？」

ニヨロロトテップが動揺の色を染めるも、時既に遅し。

獲物は容易くラムスの手へと収まった。

「たぶんコレの事だと察して、先程〃糸〃を付着させて頂きましたわ。

私の〃糸〃は私自身……自在にコントロールできますの」

上空の敵へ向けて温顔ニツコリと挑発を投げ掛けた。

静かな敵意が反目する。

「惑星ジェルダの女王……キサマ、よくも！」

「あら？ 貴女に〃キサマ〃呼ばわりされる筋合いはありませんけれど？」

「……」

「……何故だ？」

「はい？」

「キサマはへネクラナミコンの争奪戦には無関心……部外者であつたはずだ」

「ですわね。正直、こんな石板どうでもいいですわ。役に立ちそうにもありませんし……コレでしたら漬物石の方が、まだ価値があります



わね」

「ならば、何故だ！」

「友達がコレクションしていますので ♪」

……ふむ？

「覚悟は出来ているのであろうな？ クイーン・ジェルダ！」

「あら、それはコチラの台詞ですわよ？ 無粋な暴君様？」

「何？」

「貴女がへアリログ達に強いた理不尽な狼藉……私が知らないとても？」

「ラムスちゃん、ロツポちゃん達の事を知ってたん？」

「ああん、モモカ様♡ もう一度『ラムスちゃん』と呼んで下さい

まし ♪」

「……イヤヤ」

「シクシク……そんな御無体な」

「っていうか、ほどいて〜！」

「それは却下致します ♪」

「何でツ？」

「モモカ様を危険な前線へ立たせたくはありませんから★」

「ふえ？ ウチの為……なん？」

「それ・に ♪ ジタバタと苦悶にもがくモモカ様の肢体を見て

いたら、何だか興奮してまいりましたの……うふふふ ♪♡」

「やっぱほどいてツ！」

ラムス、アナタは恍惚に何を口走っている？

「つてか！ だったら、何でほったらかしにしてたんだツツーの！」

「何かを探しているのは解っていましたが、それを手にしたタイミングで御破算へと貶める事が、何よりも御仕置きになると思いまして

♪

さすがにラムスだ。

その辺りのしたたかさは健在。

「キサマ達如きが、この私に勝てると思うか！」

「さて？ 勝率は判りませんが、勝てるんじゃないやありませんこと？」

「何？」

「えつと……何でしたかしら？　そうそう、確か——やってみなけりや分からない！　やるだけやったら、どうにかなる！　——でしたかしら？」

「何だ？　それは？」

「バカの格言」

私とラムスの断言が意図せず重なった。

「どうやら戦力差を分かっているようだな。私はその気になれば、こんな惑星など壊滅できるのだぞ！」

「でしたら、その惑星そのものを相手取って頂きましょうか？」

不敵な余裕を飾り、彼女は指笛を高らかに吹いた。

振動——。

惑星自体が震えているかのような微震——。

その力強さは次第に増大していき、宛ら大地震のように大気すら震わせた。

発生源は四方八方からの土煙。

それは大地の怒濤の如く、我々の——いや、ラムスの下へと押し寄せて来る！

生命であった。

この惑星ジェルダに棲まう生命達であった。

六本腕のゴリラへアリログ——。

三頭のサイへタングロス——。

蝙蝠の巨翼で羽ばたく大蜥蜴はへラプロドン——。

電光を纏うカラフルな蝶はへデンコチヨウ——。

そして、山の如き巨体に吠える直立型恐竜は、原始生命体の頂点へダイメラ——。

ありとあらゆる原生生物が、ラムスの指揮下へと集合した！

まるで〈惑星ジェルダの意思〉を、総意に代弁するかのよう！

「さて、では御相手して頂けます？　我々〈生命〉を？」

夕陽が温かみに射す草原で、ウチらは〈宇宙航行艇〉へ乗り込む手筈を調えた。

見送りに惑星ジェルダの動物達が集う。

『ウホ……』

代表するかののようにロツポちゃんが進み出た。

「ロツポちゃん、もうすぐバイバイや」

『ウホウ……』

シユンとせえへんといて？

ウチ、後ろ髪引かれてまうわ……。

せやから、無理矢理明るい笑顔を繕った。

「もうイジメっ子はおらへんから、みんな仲良うせなアカンよ？」

足下ではポココちゃんが嬉しそうに跳ねとる。

それ見たら、此処来たんも無駄やなかった思えるねん。

「ウホ」

「うん？ リボン？ 返さへんでええよ？」

「ウホ？」

「ロツポちゃんかて、女の子」なんやもん ♪ 少しはオシヤレ

した方がえええ★」

「……ウホ」

少し含羞んどった。

せやよ？

人間とかへアリログとか関係あらへんねん。

女の子は、みんな同じやねん。

「嗚呼、もう御帰りですのね……」別れの名残惜しさにラムスちゃんが

嘆いた。「……モモカ様」

名残惜しき、ウチ限定やった……。

早う帰りたいなつたよ？

「ラムス、今回は助力をしてくれて礼を言う」

相変わらず無抑揚なクルちゃんの謝辞に、ラムスちゃんは暫く素のままで見つめとった。

ほんでもって、髪を鋤いて皮肉めいた閑雅を飾る。

「別に礼を言われる筋はありませんわ。私は、無礼な来客を追い返しただけですし」

せやねん。

あの後、ニヨロちゃんは撤退したねん。

特に攻撃も抵抗も示さへんまま。

まるでラムスちゃん達へ惑星ジェルダの生命に気圧されるかのよう……。

そのままへネクラナミコンは、ラムスちゃんからクルちゃんへと譲渡された。

どうやら勝ったねんな？

正直、ウチには何が勝敗か分からへんけども……。

「それを引き寄せたのは、おそらく我々との間に確立した因果率。申し訳なく思っている」

「あら？ 貴女が拘わって、面倒事じゃなかった試しはありませんけれど？」

「そうか……自覚は無かった。ごめんなさい」

「で・す・か・ら！ 謝らないで下さいます？ まったく、調子が狂いますわよ……ブツブツ」

何や小声で唇を尖らせとる。

「ともかく！ 貴女に、そんな殊勝なキャラは似合いませんわ！ いつも通り、他人の迷惑そっちのけで構えていなさい」

「ふむ？ では、私が来たくなったら来訪もいいという事？」

「……何故、いまさら他人行儀ですの。別に、いいに決まっていますわよ。どれだけ永い付き合いだと思っっていますの？」

「またトラブルを持ち込む可能性は否めない」

「如何なる難儀であろうとも、私がクリア出来なかった試しがありませんか？ 私を誰だと思っっていますの？」

「ふむ？ 抜け目が無く、したたかで、場合によっては狡猾にも映る辛辣キャラの〈プロブベガ〉」

「……別れの際に、とんでもない毒を吐きましたわね」  
「ふむ？」

苦虫顔へクルコクン。

せやけど、仲ええねんな？

ラムスちゃん、毒舌やけど。

たぶん素直やないねん。

自分を表すの下手やねん。

そしたら、リンちゃんと似てはるのかもしれへん。

物腰は正反对やけど。

「あー、これでオサラバと思ったらせいせいしたわ！ とつとと帰るわよ！ モモ！ クル！」

「別に貴女は、どうでもいいですわよ。モブ女」

「あんだと！ この変態メイド！」

「ゴーホーム！ ハウス！」

「人様を犬扱いしてんじゃないわよ！ それ、この上なく失礼だかねー！」

リンちゃん？

以前、ドクロイガーはんにしてなかった？

リンちゃんはしかめっ面でラムスちゃんを睨み据え、ラムスちゃんは涼しい顔でピイツヤ。

そんな気まずい空気が支配する最中……。

「……パモカ出さないよ」

「はい？ どうして私が、パモカを差し出さなければなりませんの？」

「いいから出せツツーの！ アタシのパーソナルID、入れてやるつて言ってるのよ！」

「は？ 通信関係になる……と？ 貴女と？」

「か……かかか勘違いすんじゃないわよ！ アンタとは、まだ白黒ついてないんだかね！ その延長戦の為なんだから！」

ラムスちゃん、キョトンしはった。

ほんでもって——「クス」——軽く笑いはったんや。

三機の〈宇宙航行艇〉が帰還に浮上する。

垂直離陸の風圧が緑の海原を吹き撫でた。

見上げる動物達……そして、ラムスちゃん。

「ウホホー……ッ！」

ロツポちゃんが別れを雄叫んだ！

そして——ドドドドドドドド——眼下から響く重低音！

ドラミングや！

出航の景気付けに六本腕のドラミングを披露してくれた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……ッ！

ロツポちゃんに続けとばかりに〈アリログ〉達が一齐に叩き始める。

動物達が咆哮を奏で、ポヨコちゃん達は精一杯ピョンコピョンコ。

大合唱や。

見送りの大合唱や。

そんなん見てたら、ウチはじんわり思うた——来てよかった。

友達、仰山できた★

惑星ジェルダが小さなつてく。

『あ、そだ！』

『どないしたん？ リンちゃん？』

『結局、今回は惑星ジェルダの〈ネクラナミコン〉をゲットしてないじゃん！ ドク郎のは強奪したけど！』

……いま「強奪」言いはった。

『天条リン、心配無用。今回の〈ネクラナミコン〉は、既に私が回収してある』

『は？ いつよ？』

『アナタ達が降下して来る直前』

『だったら先に言えッつーの！ ったく！』

『ふむ？』

『……何を怒ってるの？』みたいなクルコクンすんな』

『そんなすぐに見つかったん？』

『今回は降下事前に大凡の見当は付けていた。よって降下後は、すぐに発見する事が可能だった』

『どのぐらい掛かったん?』

『一〇分弱』

早ッ!

『だったら、アタシらが降下する必要なかったじゃん!』

『天条リン。私は最初から、そう言っていた』

『……う!』

せやねえ?

後追いしよう言うたんは、リンちゃんやったねえ?

「あんな? クルちゃん?」

『何? 陽ノ咲モモカ?』

「もしかしたら、今回はへネクラナミコン以外の目的があつたん違う?」

『………』

「せやから、自由に行動できるよう単独降下を言うたん違う?」

『私にも分からない。けれど……』クルちゃんは、柔らかな眼差しで惑星ジェルダへと振り向いた。『……そうかもしれない』

『何よ? その別目的って?』

『……ただ、会いたかったのかもしれない』

『………』

「えへへ ♪」

『つたく、そうならそうと言いなさいよね! 最初から言ってるや、一緒に付き合ってたツツの!』

『アナタ達とラムスは面識も交流も無い。私の個人的に付き合わせるのには迷惑になる』

『なるかツツの!』

『天条リン?』

『アンタねえ! いつも無関心・無感情・無抑揚で、我道邁進唯我独尊だけど——』

リンちゃん、それエラくデイスつとるよ?

ラムスちゃん越えしとるよ？

『——少しは“自分”を見せなさいよね。友達なんだから』

『……天条リン』

えへへ♪

やっぱリンちゃん優しい♪

せやからうち、リンちゃん大好きやねん★

『では、その言葉に甘えて……ひとつ提示しておかなければならない事がある』

『は？ 何だツツーのよ？ 早速？』

『惑星ジェルダに引き返したい』

『はあ？ いきなり何言い出した？』

『忘れ物をした』

『忘れ物って……へネクラナミコンは回収したじゃん？』

『せやねえ？ 他に忘れ物あった？』

『……』

『エルダニヤーツ！』『ハツちやーン！』

慌ててUターンや！

ドエライモン置いてきた！

「見るがいい！ 惑星ジェルダの者共よ！ 我、極めりし！」

「いえ、猛々しくへロービツクキューブを翳して何を息巻いてますの……私の集落で」

「フツ……嫉妬か？ クイーン・ジェルダよ？ 同じへ女王として、

格の違いを思い知ったようじゃな？」

「な・ん・で・そうなりますのー！」

「フツフツ……驚嘆も無理からぬ。二〇秒じゃ！ 遂に全面揃えるのを、三〇秒切ったのじゃ！」

「……なるほど“ただのバカ”ですわね」

「だが、クイーン・ジェルダよ？ 我は器が違う！ 直々に御主へ指南してやろうぞ！ なあに、礼など要らぬぞ？ 同じへ女王として的好じゃ」





マリーと惑星ウイズエル  
マリーと惑星ウイズエル    F r a c t a l . 1

ツエレーク艦内を並び歩くウチとリンちゃん。

ヴィシウム合金製の通路は、抗菌的ながらも簡素な殺風景や。上部の角にはへハイLED<sup>エリイデー</sup>の照明が涼しい白で機能的に照らし、それが果てしない光のレーンと連なり続いとる。

「つたく、エルダニヤのせいでトンだ二度手間負ったわよ」

うんざりとした心労に、リンちゃんが愚痴った。

向かっとなるのは、マリーの部屋や。

さつき帰還したへ惑星ジェルダへに関する報告と、新たにゲットしたへネクラナミコンを届けに行く途中や。ついでに、これまでの解析進行具合も確認しに行くねん。

「これまでも惑星探索の事後処理としてやってきたルーティーンやねんよ？」

「せやけど、何やかんやでへネクラナミコン集まったねえ？」

「まあね」

「あと何個やっけ？」

「確かクルの話だと全部で六つ。で、惑星ジェルダでクルがひとつゲットしたし、ドク郎のも強奪したから……あとひとつか」

……リンちゃん、いま「強奪」言うた。

「全部集まったら、どないなるんやろ？」

「ん〜？ 当初、クルが言ってたのは『神の如き力<sup>ちから</sup>を得る』って事だったけど？」

「毎日、抹茶パフェやねんね？」

「……違うツツの」

リンちゃん、何で苦虫顔なん？

「全部集まったら、リンちゃんは何を実現するん？」

「え？ ア……アタシ？ そ……そりゃあ、その……」

急に振られたんで予想外だったのか、リンちゃんはしどろもどろになった。

せやからウチ、助け船出したったねん。

「毎日、イチゴパフェ？」

「違うわ！」

喰い気味に怒られた。

何で？

「でも——」リンちゃん、急に思索を紡ぎだした。「——ホントに、そんな力を与える代物かしら？」

「どして？」

「正直、かなり胡散臭い。仮に、そんな壮大な物だとしたら、チープ過ぎるわよ」

「クルちゃん、そう言うてたよ？」

「……嘘だとしたら？」

「嘘？ せやけど、クルちゃん言うてたよ？」

「そりやそうなんだけど……あの時は、出会ったばかり。何らかの意図で、虚偽を飾ったとしたら？」

「そんなんアカン！」

「……よね。やっぱ」

「クルちゃん疑ったらアカン！」

「そっち？」

「クルちゃん、嘘つくような子やあらへん！ 博士のサインも、きつと付いとる！」

「いや、それはないけど……」

「クルちゃん、友達や！ それやのに、クルちゃん嘘つき言うたら……リンちゃん……ふぐつ……リンちゃ……グス……ふえええ……そんなリンちゃんキライヤ……ウチ、そんなリンちゃん見たない……ふえええ……ん！」

「な……泣くなツツーの！ 仮に……の話よ！ 仮に……の！」  
「イ〜ヤ〜やあ〜！ ふえええ……ん！ うわ……ん！」

「わかった！ わかったツツーの！ もう言わないから！」

「グス……グス……ホンマ？」

「……たぶん」

「うわ……うん！」

「わかった！ わかったから！」

「グス……グス……クルちゃん、嘘つきやない？」

「う……ん」

「サイン付いとる？」

「いや、それはない」

「うわ……うん！」

「わかった！ 付いてる！ 付いてるから！」

「グス……グス……えへへ ♪      せやったら、ええねん ♪

せやからうち、リンちゃん大好きやねん★」

「あ……うん……」

「ほんなら、行こ？」

「は？ どうした？ 踵きびすを返して？」

「クルちゃんトコや」

「何で？」

「ごめんなさい言うて来よ？」

「唐突に謝られても怪訝けげんな顔されるわ！」

マリーの部屋に着いた。

「マ……りー、開ひらけよ★」

「小学生の『あ……そ……ぼ★』言うみたいに呼ぶな」

何で？

ええやんな？

「マ……りー！」

……返事無い。

「マ……りー！」

……やっぱり返事無い。

「おらへんね？」

「留守？ おかしいわね？」

「何で？」

「マリーのサイクルは把握してるもの。この時間は個人的な研究時間に割いているはず」

「毎回、時間通りとは限らんやん？」

「それを指摘されれば、何事もそうなんだけど……少なくとも、アタシ達が出会ってから狂った試しが無いわよ」

「ほんなら何処行つたんやろ？」

「さて……つて、あれ？ 電子ロック開いてる？」

「ドアの？」

「うん。変ね？ パス掛けないで出るなんて？」

そう怪訝けげんを置きつつも、リンちゃんは無遠慮にスタスタと室内へ入った。

ウチ、続いた。

「うわ〜お」

入るなりの第一声は、二人揃ふたりそろつての失望驚嘆。

メチャ散らかつてんねん。

衣服とか投げっぱなしグチャグチャやねん。

食べ掛けお菓子が湿気とんねん。

「いくら容姿端麗頭脳明晰ようしたんれいずのうめいせきでも、こりや百年の恋も醒さめるってモンだわ」

「レスリー長官でも？」

「いや、あのド腐れ変態は大丈夫っしょ？ 基本、乳さえあればいいから」

リンちゃん、銀曆ぎんれきトップにエライ言い様ようやんね？

腰に手を当てたリンちゃんは「ふむ？」と室内を見渡した。

ヒント探してんのやろね？

ウチ、邪魔にならないように、ソファに散らかった衣服の雪崩なだれを畳たたみ始める。

ん？ 何やコレ？

……ブラや！

特大丸豆腐の空容器が落ちてる思うたら、これブラや！  
デカツ！

「何か手掛かりになる物は……と」

リンちゃんのはのんびりと物色始めた。

気楽な態度からは、まったく焦燥が汲めへん。

まあ、マリーやからね？

別に大事件いう事もあらへんやろし。

「あれ？ 何だコレ？」

パソコンのデスクトップで足を止めた。

丁度、ウチも畳み終えたんで、トコトコと脇へ並ぶ。

一枚のメモ用紙や。

そこに書かれた一文を、ウチとリンちゃんは軽く読んだ。

——探さないで下さい。

「……………うんんんツツツ？」

予想外の非常事態に、ツエレーク管制室には主要人材が集った。

もちろん、ウチとリンちゃん……そして、クルちゃんも。

「なるほど……状況は把握した」

詳細説明を受けたクルちゃんが淡白に納得する。

この非常事態に在っても全然ブレへん辺り、さすがやねんね？

周囲の大人達は悲観と不安にオロオロしとんに、一番頼もしい  
ねえ？

「ああ、マリー艦長……いったい何処に？」

メインオペレーター「恒詠ナレミ」さんは、瞳を潤ませて、わなわ

など口元へと両手を添えた。

せやねん。

いつも「何 f \ 何 b 次元、滞在可能推定時間——」言うてん

の、この人やねんよ？

ショートポニーテールの似合う爽やか系お姉さんで、年齢は十八  
歳。

ウチとリンちゃんからしたら、マリーよりも年齢近いから、気さくに何でも話せるお姉ちゃん”という感じや。

「ナレミお姉ちゃん？ 落ち着いて？」

「で……でも、モモカちゃん！」

「大事おわごとやないねんから」

「大事おわごとだよツ？」

せやの？

「マリー艦長は、このへツエレーク∨の所有者であり、最高責任者であり、運行権限者……そして、あなた達へコスモウイズ・スクール∨の校長先生であり出資運営者！ つまり、この艦の総ては、マリー艦長そのものに依存している！ ううん、マリー艦長自身が、この艦そのものの言ってもいい！ このままじゃ……」

「えへへく 学校、おやすみや★」

「違うよツ？ その通りだけど違うよツ？」

どっちなん？

改めて見渡せば、みんな頭抱かかえて鎮しずんだり、激しい口調くちようで口論こうろんしたり……パニックパーリーや。

そんな不毛な混乱の中——「狼狽うろたえんなー……ッ！」——不意に一喝いつかつが場の支配権を根刮ねこそぎ奪った！

リンちゃんや！

腰へと両手を添えた仁王立ちに、威风満々の叱咤しったを向ける！

「大の大人そのろが揃そろいも揃そろって、オロオロと……みつともない！ アンタら、いままで何やってきた！ それでもへツエレーク∨運行スタツつか！」

「そ……それは……」「う……む……」

若冠じゃつかん十六歳の少女が、大人達を気迫に呑み込んどった。

この辺、さすが銀曆ぎんれき大企業の御嬢様や。  
堂に入った象徴性カリスマとリーダーシップやんね？

「リンちゃんの言う事は……分かるけど……」

弱音を零こぼすナレミさん。

せやせど、リンちゃんは自信に満ちてポニーテールを鋤すき流した。

「アタシを誰だと思ってるの？ アタシはへ星河コンツエルンへの娘、天条リン」よ！ 不可能なんて無いんだから！」

そして、キビキビと今後の指針を打ち出す。

「いい？ まずはいつも通り！ 各自が受け持つ役割を、しっかりと果たす！ 最高権限者とはいっても、マリーは統括的な判断を下すポジション！ 各機能を働かせてきたのは、アンタ達！ 通常運行なら問題無し！」

「そ……そうか」「うむ、そ……そうだよな？」

「けれど、非常事態が起きたら？」

「んなモン、早々は起きない！ もちろん断言はできないし、そのままにはしておけない……から、臨時代役を立てるわ」

「臨時代役？」

「そ。信頼できる人材を……ね。少なくとも大局的な指揮能力に於いては、信頼性に長けた人物を」

「相分かったーッ！」

ハッチちゃん入って来た！

この場に呼んどらへんハッチちゃんが、勢いよく飛び込んで来た！

「エエエエルダニヤ？ アンタ、どうして此処へ？」

「フツ……水臭いのう？ リンよ？ どうにも我を蚊帳の外にコソコソしていると思うたが、まさか我への『さぶらいざつぷ』とは……」

囁んだ……っていうか、軽くダイエツト計画入った。

「違うわッ！ ってか、誰だーッ！ コイツ呼んだの！ トンデモ非常事態そのものだから、一切秘密にして集合を掛けたのにーッ！」

「フツ……やはり気付いておらなんだか？」

「は？ 何がよ？」

「我が〈専属整備員〉を、御主達の尾行に使役していた事に！」

塩撒いた！

ウチとリンちゃん、恐々ダンスながらに塩で清めた！

「幽霊を発信器代わりに使うな！」

「へゅーれー」とやらではない！ 有能な〈専属整備員〉じゃ！ ただ



“姿が見えぬ”だけの〈専属整備員〉じゃ！ あとは“神仏を恐れる”  
“御経おきょうに苦しむ” “御札おふだに近付けぬ” “御香おこうを嫌がる”……”  
それを〈幽霊〉言うねんよ！

「さて、事情は分かった……任せよ、リンよ！ このハツちゃん、気高  
き〈女王〉の名に懸けて指揮能力を惜しみ無く奮ふるおうぞ！」

自分で“ハツちゃん”名乗りでした。

噛むの回避するために、自分から“ハツちゃん”名乗り始めた。

「沈ゆたむわ！ アンタに委ゆたねたら、ものの数秒で宇宙の藻屑もくずだわ！  
銀邦ぎんぽう最大の最新鋭艦が！」

「うむ！ それもまた、さぶらいざつぷー！」

「黙れ！」

……この艦、いまこの瞬間が一番『史上最大のピンチ』かもしれへん  
……。



リンちゃん、何でそないな事を知つとんのん？

「とにかく……大凡おおおよその事情は判った」

長官は起き上がった襟えりを正した。

「つまりマリー——」どきどき紛まぎれの呼び捨てに、リンちゃんギロリ。

「——ハウゼン博士の消息が見つかるまで、この私に〈ツエレーク〉の運営管理を一任いちにんしたいというのだね？」

「そ。アンタは、腐った〈銀邦軍長官ぎんぼうぐん〉なんだから〈大型宇宙船スベースシップ〉の運用には慣れている」

リンちゃん「腐った」言いはった。

自然体で「腐つても」やなく「腐った」言いはった。

「おまけに、こんなんでも一応は〈銀邦トップぎんぼう〉の一角いっかくなんだから、おそれと鷹派も〈ツエレーク〉には手出しできない——没収とかね」

「……何気にエラクデイスられていなかったかね？」

「していない。真実」

まさかのクルちゃんが割り込んだ！

「ま、そういう事で〈ツエレーク〉は、アンタに任せる。その間に、アタシ達はマリーを探し出す」

「うむ、それはいいが……手掛かりはあるのかね？」

「うくん、そこなのよねえ……」

「天条リン。その問題点なら多少は、どうにかなるかもしれない」

「は？ クル、アンタ何か知ってんの？」

「知ってはいない。ただし、幾いくつかは推測の糸口いとぐちとなりそうな要素が残されている」

「幾いくつか？ 例えいば？」

「まず、マリー・ハウゼンは〈ネクラナミコンの欠片〉を持ち出して失踪した。ただし、彼女が持ち出したのは〈惑星レトロナ〉時点での計三個——私達が〈惑星ジェルダ〉で収集した二個は、まだコチラにある」

「それが？ ……って、そうか！」

「そういう事」

何やリンちゃんとクルちゃんだけで納得しとった。

ウチには、さっぱりや。  
うくん？

あ！ せや！

「リンちゃん！」

「何よ？ 急に興奮して？」

「ウチ、判ったよ！ マリーの行先！」

「え？ ホ……ホントツ？」

「オモチャ屋や！」

「は？」

「きつと並んでんねん！ ゲーム欲しくて長蛇の列やねん！ マリー、よっぽど欲しかったんや！ 博士達のサイン入りゲームソフト！」

「……オイ」

「行こう！ リンちゃん！ ゲーム売場や！ ビックラカメラかアマタ電器へレッツゴーや！」

「待てええーい！」

駆け出そうとした瞬間、顔面ハリセンがスパーン来た！

鼻頭強打にスパーン室内反響した！

「ふぐう！ うう……痛いよ？ リンちゃん？」

「潤々して『痛いよ？』じゃないわ！ この脳みそ16ビット娘！ この銀暦ぎんれきで、そんなドラ ● エ世代がいるか！ ネット通販で一発いっぱつだわ！」

リンちゃん、あんまりや……。

「せやかて言うてたやん！ マリー、言うてたやん！ へネクラナミコンは『博士達のサイン入りゲームソフト』って！」

「違うわッ！」「違う」

リンちゃんとクルちゃん、二人同調ふたりシンクロに全面否定。

「ったく……いい？ これまで数々の惑星へと導かれたようにへネクラナミコンは『呼びあう性質』を宿している。そして、クルはへネクラナミコンの意思を感受できる。つまり——」

「あ！ 両方のへネクラナミコンをパモカ代わりにして、マリーと通

話すんねんな？」

「違うわッ！」「違う」

「違うの？ 何で？」

「この脳みそアーパー娘は……。つまりクルを通じて、マリィが持つて行ったへネクラナミコンを感じてる事が出来るの！」

「ふええ？ マリィの居場所解るん？ クルちゃん、スゴイねえ？」

「とはいえ、私が感知できるのは漠然とした広範囲のみ。その宙域内の何処に滞在しているかまでは特定できない。そこでへネクラナレィダーの恩恵が必要となる」

「あ、なぐる！ 臍氣に特定した宙域へ行つた後はへネクラナレィダーで更に絞り込むワケだ？」

「それでも大変な搜索活動になるんやないの？」

「陽ノ咲モモカ、その通り。だから、マリィ・ハウゼンが搭乗した〈宇宙航行艇〉の性能データから、その活動可能範囲を演算で割り出す」

「ふええ？ そんなん可能なん？」

「別に難しい事ではない。彼女が搭乗した〈宇宙航行艇〉の最高速度とエネルギー搭載総量、そして、これまでの経過時間を基礎条件に算出すれば、凡その離脱範囲は絞り込める」

「せやけど、どっち行つたかは判らへんやん？」

「だからへネクラナミコンだツツの！ この“呼びあう性質”なら、逆に方角だけは察知できる！」

「あとへ凡庸宇宙航行艇」というのは幸いだつた。総じて〈宇宙航行艇〉には、単機によるへフラクタルブレーション航法〉の性能は実装されていない。つまり、少なくともへツエレークと同一の現次元宇宙にしか出動できない」

「よし！ コマは揃つたわね！ 後は——」

「うむ！ ハウゼン博士が帰つて来た時に備えて、隠しカメラの設置位置だね！」

「それもまた、さぶらいざつぷ！」

「……黙れ、阿呆 × 2」

と、不意にハッちゃんが何かに気づいた。

「むっ。」

注ぐ視線は傍らの艦長席——つまりはマリー専用の座椅子シートや。

その手前に据えられたコンソールヘジツと見入つとる。

「どないしたん？ ハッちゃん？」

「いや……斯様な物が、ぞんざいに置かれていたのう？ 実際、どうでもいいアイテムではあろうが……それでも、マリー・ハウゼンの所有物であるのならば、そなた達が預かった方が善いと思うが？」

説明に取り上げた物を見て、ウチとリンちゃんの顔色がサアと変わる！

ハッちゃんが掛けて遊んどんのメガネや！

マリーのメガネや！

家出したんは「表マリー」やなくて「裏マリー」の方やった！

「マリーの所在特定急いでッ！ そこ！ 何やってんのーッ！」

リンちゃん、血相変えて指示出した！

「なるほど、これが『セ・ぶらいざつぷ』という事。」

クルちゃん、違うよ？

納得でクルコクン違うよ？

「う〜ん？ やっぱり、わたし専用の〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーも造っておくべきだったかなあ？ 主動力として〈LHC型エネルギー機関〉を搭載しているけど……何せ旧型だから遅いのよねえ？」

と、わたしこと「マリー・ハウゼン」は、現搭乗機のスペックに不満を覚えたのでした★

だってね？

正直、わたしは〈ツエレーク〉を愛機と捉えていたから〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーの必要性とか考慮していなかったもん。

毎回〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーを要する局面では、リンちゃんとモモちゃんに御願いしていたし……。

え？

その〈LHC〉って、何か……って？

つまり〈大型ハドロン衝突型加速器〉の事よ？

正式英名は〈Large Hadron Collider〉  
で〈LHC〉というのは略称。

要は「量子加速実験によって高エネルギーを生み出せる」という  
〈巨大粒子加速器〉の事なの。

ただし同時に、その弊害的副産物として〈マイクロブラックホール〉  
を発生させる危険性も孕んでいるけどね？

うん？ そんな危険エンジン搭載していいのか……って？

ダメだよお〜？

いくら銀暦ぎんれきでも危ないもの。

だからね？ コレ、違法なの。

内緒ね★

だってだってえ！

こうでもしないと〈ヘイザーナ〉や〈ミヴィーク〉には簡単に追い付  
かれちゃうモン！

ブウ！

「あ、そうだ！ バイパスを直結に簡素化したら、エネルギー抵抗値が少なくなる！ そうしたら、必然的に出力が上がるもんね？ あ、でも……十分な設備や工具も無いか。下手に暴走させたらへマイクロブラックホールを生み出しちゃうなあ……。うん、でも、きつと大丈夫★ わたしは『やればできる子』だもん ♪」  
閃いた妙案を実行しようとした矢先、通信システムがコールを奏でた。

レーダー反応を見れば、後方から追って来る機影が3機。

「あ、コレ……もしかして、もう見つかったやつた？ 航行スピードから見ても間違いないかな？」

とりあえず通信回線をオン ♪

『マリーー！ 見つけたわよ！』『待ってえ、マリーー！』

「えい★」

切っちゃった★

と、今度はパモカがブルルル。

「んく？ 出た方がいいのかなあ？ 出た方がいいんだらうけど……

絶対リンちゃんに怒られるよね？ うん？ どうしよっかなあ？

出ようかなあ？ やめようかなあ？ まだコール鳴ってる……コレ、出るまで止まらないなあ。あ、そうだ！ アミダクジで決めよう

！ 紙とペン！ 紙とペン……っどー！

『さっさと出なさいよ！ コールしてんでしょ！』

「ひゃうー！

ビツクリしたあ……。

出てないのに、リンちゃんから怒られた……。

「あのおう？ もしもし？」

『もしもし……じゃないっつーの！ 何無視してんのよ！ 通信シス

テム切るわ！ パモカには出ないわ！』

「あの、リンちゃん？ どうしてパモカをオンに出来たの？」

『ごっちはクルがいるんだかね！ 感情欠落にぬぼーっとして何

考えてるか判らないわりに、スゴいんだからコイツ！ マリーーほど

考えてるか判らないわりに、スゴいんだからコイツ！ マリーーほど



じゃなくても!』

『リンちゃん? 褒めとんの? デイスつとんの?』

「あ、そっか。クルちゃんが遠隔的にハッキングして、勝手に回線開いたってワケね?」

『マリィ・ハウゼン、その通り。アナタが通信を切った直後、天条リンがブツ壊れ——ブチキレて、私にパモカIDの解析を指示した。先程さきほどのコールは、僅かな間の回線情報を引き出す事を目的としたダミー工わざ作』

『……アンタ、いま「ブツ壊れて」って言い掛けたわよね?』

『言っていない』

『ってか、マリィ! これまで集めた「ネクラナミコン」持ち出して、何処へ行くこうってのよ! あの置き手紙は何だ!』

「あ、もう手紙を見つけちゃったんだ? サプライズだったのに……ぶうー!」

『『さぶらいざつぷ?』』

モモちゃん? クルちゃん?

それ何?

『何よ! サプライズって!』

あ、リンちゃんは言わないんだ?

「んく……どうしよっかなあ? 全部終わってから教えてあげる予定だったんだけどなあ?」

『いいから話せーっ!』

「ひゃうー!」

怒られた。

リンちゃんってば沸点低いのよね……もう!

「あのね? こんなメールが来たの★」

『は? メール?』

「うん★」

『……見せてみそ?』

「は〜い★」

わたしは彼女達のパモカへとメールを転送。

内容文は以下――。

『おめでとうございます。』

あなたの応募番号が当選致しました。

景品であるへネクラナミコンは、こちらで引き換えの手配を進めております。

つきましては、御手数ですがへ惑星ウイズエルまで受け取りに御越し頂きたく思います。

期日までに御来訪頂けない場合は、獲得権利が他の方へ譲渡される点を御憂慮下さい。

これは最後にして最大のチャンスです！

尚、受け取りには身分証明として、御所有のへネクラナミコンが必要となりますので、忘れずに御持参下さい』

『……………』

「えへへ ♪ ラッキーだよね★」

『……………マリー?』

「なあに? リンちゃん?」

『応募した? 何かに?』

「ううん? ひとつも★」

『いますぐ帰って来オオオーい!』

「ひゃう!」

ビックリしたあ!

いきなり大きい声出すんだもの!

ぶう!

『コレ詐欺! 旧暦からある古典的な詐欺! プレゼント当選詐欺

!』

「ええ? そうかなあ? スゴクラッキーだと思っただけだなあ

?」

『アンラッキー! 甘ったるいラッキーデコレーションの中身は、超絶ビターなアンラッキー!』

「他の人は、そうかもだけど……………わたしの場合は違うかもしれない

「じゃない?」

『同じ! 相手にしてみれば、よくいるカモ! 銀暦ぎんれきの才女が、格好のカモネギ!』

「それに、わたし騙だまされない自信があるもん★ 見抜ける自信あるもん★」

『一〇〇%引ひつ掛かるヤツの共有台詞ーッーッ!』

「だ……だけど、本当だったら一気にへネクラナミコンへ揃そろうんだよ?」

『一気に失う! 間違いなく失う! アタシ達の苦労がパーッ! これまでの小説展開がパーッッ! 作者の執筆労力がパーッッッ!』

「で……でもお」

『でも何だ!』

「わたしも〃見せ場〃欲しいの! 読者に『マリー、スゴイ!』『やっぱりマリー好き!』って言われたいの!」

『……トンでもない本音ぶっちゃけたわね、メタ表現で』

「人気欲しいの! ブウ!」

『ブウじゃない! フテンな! 二〇歳はたちの子供!』

「マリー、活躍したかったん?」

「うん★」

「……………」

『……………』

「……………」

『……………』

「……………」

『モモーッーッ?』『モモモ……モモチちゃん?』

ビックリした!

いつの間にか、わたしの隣にモモチちゃんがいた!

見つかるよ「えへへ♪」って、ホワホワ笑顔が含羞はにかんだ。

『モモ! アンタ、どうしてそこにいんのよ!』

「来たねんよ?」

『あっけらかんと「来たねんよ?」じゃないッっのオオオーッ!』  
「あ、そっか。会話中にイザーナで接近して、あとはへPHWの気密

性とヘリウムブースターで取り付いて……あれ？ モモちゃん？  
ハッチは、どうやって開けたの？」

「クルちゃんやねん。クルちゃんがウチのパモカにデジタルピッキングのデータ送ってくれたねんよ？」

『クル！ アンタもグルか！ この隠密作戦！ アタシにも内緒で！』

『さぶらいざつぷ』

『黙れ！』

『天条リン、どうやら誤解している様子。これは隠密作戦ではなく偶発的な展開』

『はあ？』

『アナタとマリィ・ハウゼンが問答に没頭する中でヘイザーナ＜がスルスルとマリィ機へ接近するのを視認した——至近状態で陽ノ咲モモカが機体外へヒョコヒョコ出てくるのが見えた——ハッチの前で「マリィ、開けろ」と何度も呼んでいたが気づかれなかった——次第に泣きそうになってきたので、可哀想だから私がピッキングデータを送付してあげた——そういう流れ』

『どういう流れだ——このややこしい状況で小学生レベルか——』

『陽ノ咲モモカにしてみれば、中 ● くん「磯 ● ! 野球しようぜ！」と同じ感覚』

『せやねん★』

『違うわ——』

『モモちゃん、遊びに来たの？』

『せやねんよ？ あ、せや……ほんでな、マリィ？ <ネクラナミコン』

『ドコ？』

「ん？ そのコンソールだよ？ 下部キャビネットに仕舞ってある」

「あ、ホンマや。コレ？」

「うん★」

「そしたら、コレ持ってくね？」

「うん、いいよ……って、ええーッ?」

モモちゃん、とんでもない事を言い出した!

悪びれない自然体で!

わたしは慌てて引き止める!

「ダメよ! ダメダメ!」

「懐かしいねえ? それ?」

『「何が?」』

リンちゃん共々、首を捻ひねったわ。

「モモちゃん、やつぱりリンちゃんに味方するの? わたしを騙だました

の? ひどいよ!」

「違ちがうよ? 半分だけ」

半分は合ってるんだ?

「ウチ、騙だましてへんねん。マリーの顔を見に来てん。せやけど、いま

さつきへネクラナミコン〳〵思い出したねんよ?」

どうやら、この子特有の場当たり行動パターンだったみたい。

「モモちゃん返して! それが無かったらへネクラナミコン〳〵貰えない

の!」

「貰わんでええやん?」

「どうして!」

「マリー、応募しとらんかったら貰う権利無いよ? そやのに貰った

ら「嘘」ついた事になる。そしたら「詐欺」やん?」

「うツ?」

「ウチ、そんなんイヤやねん。嬉しないねん」

「ううツ?」

年下のお母さんから、正論に嗜たしなめられました。

「あんな? それにな? ウチ、リンちゃん大好きやねん。せやから、

リンちゃん困こまらせたないねんよ?」

『……アンタ、これまでの章を読み返してみそ?』

当のリンちゃんは、何か言いたそうな不満感を出しているんだけど

?

「じゃあじゃあ! わたしは? わたしは、どうでもいいの?」

「そないな事あらへん！　ウチ、マリー大好きや！」  
「ホント？」

「せや★　マリー、ウチの『お母さん』や♪」  
そこは『お姉さん』って呼んで欲しいんだけど……。

「じゃあ……わたしとリンちゃん、どっちが好き？」

「えへへ……リンちゃん★」

うわあ、ハツキリ言った。

含羞はにかみながらハツキリ言った。

本人を目の前にして……。

この子、根っから『いいこ』なんだけど思慮しりよりよく力は大きく欠落しているのよね。

何気に結構な問題点。

「ふえええ〜ん！　ひどいよオ〜！　モモチや〜ん！」

「はわわ？　マリー、泣かんといてえ！」

「わたしだつて、モモチちゃん好きなのに……モモチちゃんもリンちゃんも、妹みたいに可愛く思っていたのに……順位つけられていたなんて！」

「訊きいたのマリーやん？」

……そうでした。

「関係無いもん！　わたし、傷ついたもん！　ふえええええ〜ん〜ん〜ん！」

「泣かんといてえ！　そないに泣かれたら、ウチどないしていいか分からへんなる！　そしたら——」

「グスツ……そしたら？」

そうしたら「やっぱりマリーの方が大好き」って言うってくれるかな？

ついでに「味方してあげる」とか言ってくれるかな？

ワクワク ♪　ドキドキ ♪

「——そしたら、ウチは置いて行くしかないねんな？」

なかなかトンデモドライな結論に着地しちゃった。

屈託のないキョトン顔で。



斯くして、わたしはへ惑星ウイズエルへの沿岸に不時着したのでした。モモちゃんとクルちゃん共々。

墜落にならなかつたのは、その身を呈してへイザーナとへドフィオンが落下速度を減衰させてくれたから。

とはいっても、墜落の圧を背負う形で抗ってくれたんだから、相当な負荷だったと思う。

イザーナなんか砂浜乗り上げに息を切らしているもの。

ドフィオンは感情下手で分からないけれど。

『ゼエキュウ……ゼエキュウ……』

「よしよし、ありがとうねえ？ イザーナ？」

グロッキーなペットを癒やすように、モモちゃんは鼻頭を撫でてあげていた。

わたしの〈宇宙航行艇〉コスモクルーザーはと言えば……完全にオシヤカ。

そしてへイザーナもへドフィオンも一人乗り。

うん、これは困ったぞ？

とりあえず景色を展望すると、見晴らしいっぱいに青が深呼吸している。

目の前に広がる水平線。

ザザーン……ザザーン……と潮騒の戯れ。たわむ

清々しいまでに済んだ空は、白綿を漂わせて癒しを謳う。うた

この場所自体は切り立った崖壁が囲う地形だったけれど、わたし達がいるのはサラサラ細やかな砂が敷き広がっている浜辺。

背後へと振り向けば、シダ植物の雑木林が「おいでおいで」と鮮やかな緑を自己主張していた。

うん、ちよつと南国リゾート気分 ♪

おまけにキラキラと日射しが眩くも暑くはないから快適 ♪

『へキュウ……へキュウ……』



「よしよし、もう少し休もうねえ？」

まだ続けている。

仲いいなあ。

「こういうのを見ると、造ってあげてよかつたって思えるの……えへへ」

「モモちゃん、イザーナ好き？」

「うん ♪ ウチ、イザーナ大好きや ♪ 仲よしやねん」

「♪」

『キュイ ♪ キューイ ♪』

えへ ♪ 何か嬉しいなあ……こういうの。

「どのぐらい？」

「リンちゃんの次 ♪」

うんうん ♪

……あれ？

「あの、モモちゃん？ 一番は？」

「リンちゃん★」

「二番は？」

「イザーナ★」

あれ？ あれれ？

「ヒドイよ！ モモちゃん！」

「何が？」

「わたしつてばへイザーナ<の次なの？ 宇宙航行艇コスモクルーザーよりも下なの？」

「違……違ちがうねん！ マリーー！」

「ふえ〜ん！ ヒドイヒドイヒドイ〜！」

「三番目はクルちゃんやねんよ？」

……まさかの回答が返ってきちゃった。

「陽ひノ咲さきモモカ、ありがとうございます」と、クルちゃんは深々頭を下げた御礼。

「いえいえ、とんでもありません」と、モモちゃんは深々頭を下げた返礼。

……何コレ？

当て付け？

新しいイジメ？

わたし、メツチャ侘しくなった。

「ふわ～ん！ ふわあああ～ん！」

「はわわ！ マリー、な……泣かんといてえ！」

わたしがイジけて泣きじやくる最中、驚くべき事態が発生！

突然、海面が隆起したわ！

すぐさまパモカアプリで計測すれば、数キロメートル沖の地点！

それは纏う海水を滝のように垂れ流しながら、みるみる育っていく

！  
遠目からでも把握できるほどに大きい！

「な……何？ まさか海底火山の噴火？」

「マリー・ハウゼン、その可能性は否めない」

「うわあー♪」

「ワクワクしとるけど、ウチ、そんな調査イヤやねんからね？」

「うー！ しれつと釘を刺された。」そ……そそそそうよね？ 惑星不時

着しておいて、調査とかも無いわよね？」

うん、そうよ！

いまはモモちゃん達との信頼関係を確立する方が大事！

大事。

大事……。

大事——。

「あのね？ モモちゃん？」

「何？」

「この惑星ウイズエルってね？ 此処数十年へプレートテクトニクス

現象は起こってなかったの」

「そのへグレートテケテケ運動」言うの、ウチ知らへんもん」

「ん～……簡単に言えば『地震の原理』かな？ つまり大規模に動いた

地盤が差し込みあって、陸地変動を起こす現象」

「ほんで？」

「この現象がへプレートテクトニクス現象だとすれば、惑星ウイズエ

ルのマントル層が近年活発化している証拠で、そうなれば今後は大陸地形が大胆に変形する可能性すらもあるの！　もしかしたら目の前のコレは、奇跡的な瞬間かもしれないのよ？　スゴイと思わない？」

「……せやから？」

「アカン！」

頑がんと拒否されたわ。

目の前に宝箱があるのに取り上げられた気分……シクシク。

そうこうしている内に洗い流す怒濤どとうを脱ぎ捨てて、隆起の核が姿を現あらわした！

それは超巨大な二枚貝にまいがい！

「スゴイスゴイ★　おそらく全幅三〇〇メートルはあるわ！」

「マリー・ハウゼン、おそらくアレは生物ではない」

「うん！　あの貝殻が放つ光沢からして、おそらくヘコズミウム合金製ね！」

あ、貝殻が開いた！

内部から現れたのは、物々しい科学施設！

中央に貝柱を彷彿させるが如く聳そびえるのは、多面方角視界のブリツジタワー！

その他にも多機能型格納庫といい、四方に向けた数門のエネルギー機銃といい……基地とも要塞ともとれる超巨大な機械とりでの砦とりで！

「スゴイスゴイスゴイ　♪　ね？　ね？　スゴいね？　モモちゃん？」

「うん、まあ……せやねえ？　大きい貝やねえ？」

醒めてた。

モモちゃん、醒めてた。

よし、わたしがスゴさを実感させてあげよう！  
「此処からでも解るわよ！　アレ、傍目はためにもスゴい科学設備なの！  
ムー帝国とかも発見できそうなくらい！」

「……それ、言うてええの？」

「よし！　それじゃレッツ・ゴー★」

「アカン言うてるでしよ！」

怒られた。

モモちゃん、わたしのお母さん？

そして、モモちゃんは徐おもむろにパモカを操作し始めた。

「モモちゃん？ 何処かに通信するの？」

「……リンちゃん」

「ええ〜ツ？」

「マリー、いい子にせえへんから言いつける！ 叱ってもらおう！」

モモちゃん、やっぱりお母さん？

「イヤア！ リンちゃん、怒ると超怖いんだもん！」

「アカン！」

プンスカプンと怒ったモモちゃんがパモカを耳に当てた時 だった。

全員が視界の隅で状況変化を捉える。

巨大二枚貝から、複数の飛行物体がコチラへ向かって来ていた。

「何や？ アレ？」

「うくん……何だろ？ 遠目には黒い点にしか見えないから判別は難

しいけど……」

「マリー・ハウゼン、パモカの望遠機能を推奨する」

「あ、そっか！ うん、それがあつた」

クルちゃんが言われるままにディスプレイを覗のぞき込む。

「うん ♪ 見える見える★」

「マリー・ハウゼン、数は？」

「六機。赤銅色の平たい金属盤が上下でくつついた形状で、挟まった部分には緑色に輝く光が幾何学ラインとして流動している。その中央ともに点る赤い光点は、おそらくカメラセンサーね。対比物が無いから大きさまでは特定できないけれど。形容するなら〈飛行円盤フライングディスク〉……と言つてあげたいところだけど、色形から〈どら焼き〉を連想させるのよね」

「ふむっ？」

クルちゃんが分析の一考ふくを含む間に、みるみる近付いて来る。

結構、快適に早かった。

そしてへどら焼き部隊は、わたし達の頭上で滞空制止。

こうして間近に視認すれば、直径八〇センチメートル程の円盤——  
成人男性の腰丈程度の大きさね。

赤い目が観察に見据えているのが直感で分かった。

「ヘフライングどら焼き」や！ この子達へフラ焼き」や！」

モモちゃん、混ぜちゃダメ。

語呂はいいけど混ぜちゃダメ。

知らない人が聞いたら「新種の銘菓」だと思っちゃうから。

「何なん？ この子達？」

「陽ノ咲モモカ、コレはへドローン」で間違いない」

抑揚の欠落した電子音声で、無感情な宣告を下した。

『目標捕捉——任務遂行——タダチニ捕獲へト移行スル』

底部中央が蓋と開いて、先端に極太チューブがスルスルと伸び生える。紐状なのにウネウネと動いている——って事は、中身はパイプ構造になっていて、複数のワイヤー筋で自在に動かせる人工触手か。その先っぽに付いているのは丸型のペンチハンド。

「何や？ アレ！ 変なんがビローン出てきた！」

「あ、モモちゃん？ もしかして、ドローンだけにビローン？」

「言うてる場合、違」う！」

怒られた。

無数の触手は、わたし達へと迫り……。

で、現在、わたし達は要塞員の内部にいたのでした★

ワクワク ♪

前後をへフラ焼き」……じゃなくてへ円盤型ドローン」に挟まれて、ベルトコンベアシステムの通路をウィーンと運ばれているのでした

★

ワクワク ♪

「ワクワクするトコ違」う！」

怒られた。

「ウチら、連行されとんねん！ 四方八方から手足掴まれて、強引に空中輸送されたねんよ！」

「んく……確かに歓待って印象ではないかな？」

三人揃って拘束されていた。

延々と続く無表情なチタン壁が、抗菌ライトブルーのトンネルと流れ過ぎていく。

わたし達は、ただ立っているだけで運ばれる。

その周囲を浮遊につきまとうのは、警護に困うへどら焼きドローン達。

と、ようやく運搬が終わった。

強制的な案内に辿り着いたのは、左右開き仕様のオートドア。

どうやら此処は特別っぽい。

だって、これまで通過してきたオートドアよりも大きめなもの。

こういう仕様の場合〈特別室〉と考えるのが定石。

『博士、捕獲対象ヲ御連レシマシタ』

ドローンの報告を合図に扉が開放されると、明るくも賑々しい室内が拓かれた。

壁一面に据えられた超大型モニターにはディスプレイウインドウが分割投影され、施設内のあらゆる場所を監視カメラが映し出している。多々据え置きされた大型コンソールには、複数の入力インターフェイスと数々の計器類。それらは諸々の多機能性を主張していて、この部屋が管制中枢を担う指令室だという事実を暗に示していた。

これだけ大掛かりな管制設備にも拘わらず、室内に居るのは怪しい感じの御老体だけ。

ボサボサの白髪は手入れの痕跡が無く、それどころか髪質が固いせいか逆立っていた。

どうやら身だしなみには無頓着みたい。

それはヨレヨレの白衣も物語っている。

険しい人相は豊かな髭と眉毛に飾られていて、深く潜んだ目つきは攻撃的に鋭い。特徴的な鷲鼻も相俟って猛禽類を想起させるお爺さんだった。



給事仕様のへフラ焼き〉……じやなかったへドローン〉が、室内に  
ティーセットを用意する。

無味乾燥なシステムチックを装飾する急造テーブルを囲うと、わたしは両手の内にカフェオレの温もりを広げつつ対話の席へと身を置いた。当然、モモちゃんとクルちゃんも同席。

「それにしても驚いたなあ……。お爺ちゃんは、わたしが幼い頃に亡くなつた——つて聞いていたから」

「亡くなつてはおらん。長い間へフラクターブレイン〉をさ迷つていただけじゃ」

「お爺ちゃん、次空を徘徊してたん？」

「語弊があるわ！ 似非関西弁娘！」

「ごめん、お爺ちゃん。」

わたしも、そう思った。

「に、しても——」お爺ちゃんはブラックコーヒーをズズツと啜り、値踏みめいた視線を送る。「——まさかオマエさんが、マリーと通じておつたとはのう……数奇なものじゃ」

「ウイリス・ハウゼン、久しぶり」

両手包みのカップスープを嗜好しつつ、相変わらずの平静にクルちゃんが応えた。

何故か顔見知り然とした挨拶。

「え？ お爺ちゃんとクルちゃん、知り合いなの？」

「知り合いというか何というか……。まずは順を追って説明するか。マリーも承知じやろうが——まだオマエが幼い頃に、ワシはある実験を試みた」

「うん、聞いている。確か『特殊相対論を覆す新航行プロセスの立証』だよね？」

「そうじゃ。まあ実験結果は散々じゃったが……。その副次的結果とし



て、ワシは偶然にもノン f フラクタル \ ノン b ブレーン次元シジョン 次元へと飛ばされた」

「そこから徘徊が始まったねんな？」

「語弊！ 似非関西弁娘！ 語弊！」

「違うねん。ウチ 銀暦イアスナク弁 やねんよ？」

「知らんわー！」

モモちゃん、意外な天敵ぶりを発揮。

「でも、お爺ちゃん？ わたし達にとって  $\langle 0 \text{ f } \rangle \setminus \langle 0 \text{ b } \rangle$  フラクタル ブレーン次元シジョン 次元つて、この次元宇宙だよ？」

「いやいや、そうではない。ワシが指しておるのは  $\langle \text{f } \rangle \setminus \langle \text{b } \rangle$  フラクタル ブレーン次元シジョン 次元つて  $\langle 0 \text{ f } \rangle \setminus \langle 0 \text{ b } \rangle$  フラクタル ブレーン次元シジョン 次元とは異なる」

「聞いた事無いけど……」

「マリー・ハウゼン、説明する」軽く困惑する私への助け船として、クルちゃんが講釈を挟み込んだ。「確かに  $\langle \text{f } \rangle \setminus \langle \text{b } \rangle$  フラクタルブレーン の基点解釈は各自の次元宇宙こそが  $\langle 0 \text{ f } \rangle \setminus \langle 0 \text{ b } \rangle$  フラクタル ブレーン次元シジョン 次元としてカウン트가始まる。しかし、ウイリス・ハウゼンが指しているのは 全フラクタルブレーンを俯瞰視した場合の起点次元 の事。つまり総ての  $\langle \text{f } \rangle \setminus \langle \text{b } \rangle$  フラクタルブレーン は、そこを起点として始まっている。言うなれば 始まりの宇宙 ——  $\langle \text{原初大宇宙} \rangle$  とでも呼ぶべき次元」

「それって各次元に存在する起源宇宙  $\langle \text{原初宇宙} \rangle$  でもなく？」

「マリー・ハウゼン、その解釈で正解。各原初宇宙すらも  $\langle \text{原初大宇宙} \rangle$  から始まっている」

苦味を味わう一呼吸を置いて、今度はお爺ちゃんが説明を再開。

「そこから脱出する際に助力を授けてくれたのが、その娘 クルロリ」というワケじゃ

「つまり……クルちゃん、お爺ちゃんを徘徊から保護したねんな？」

「じゃから！ ワシの読者印象を貶めたいのか！ 似非関西弁娘！」

「せやから違うねん！ ウチ 銀暦イアスナク弁 やねん！」

天敵発動。

わたしは苦手な喧騒を逸らすべく、改めて室内を見渡して話題を探した。

「にしても……こんな最新科学基地を、よく造れたね？ この惑星

ウイズエルには文明とは無縁の自然環境しか無いのにな？」

合金壁チタンの無叙情な部屋には、所狭ところせましと管理コンピュータやモニターディスプレイが囃はやしている。最新鋭のヘツエレークに及ばないのは当然としても、なかなかハイテク設備の展覧会。

改めてウイリスお爺ちゃんの人並み外れたスゴさを思い知った気がする。

「礎いしづえとなる素材は有ったでのう。幸いにもワシは大型宇宙船共々に不時着した。大破して航行不可能なスクラップと化してはおったが、視点を変えれば有益な高度素材の宝庫じゃ。それに少数ながら作業ドローンも搭載しておった。それ自身に同型ドローンを造らせればネスミヤン鼠算に増産させられる……放置にな。作業員の数さえ増やせば、大規模な改造作業も可能じゃ。不足している鉱物等は同じく掘削用ドローンを増産して、この惑星自体から採集させれば善よい。目的素材に達していなければ精製じゃ。労力と材料は、こうして補える。無論、司令塔たる頭脳はワシ自身。残す問題はへ時間じゃが、こればかりはどうしようもない。だから、いままで掛かった」

「理屈的には、そうなんだけど……スゴい……」

「そうかのう？ 至極、単純なプロセスじゃが？」

「知識や発想も去る事ながら、何と言っても行動力バイタリテイがスゴいわよ。わたしだってヘツエレークの建造そのものは、銀邦政府ギンポウに頼っている。しかも、自分自身で受け持ったのは設計と監修だけ……それも基礎設計構想はお爺ちゃんが残した物。わたしは、それをブラッシュアップしたに過ぎない。なのに、お爺ちゃんは単身裸はだかいつかん一貫でコレを……」

「実じつを得るならば行動あるのみじゃろう？」

それはそうだけど、やっぱリスゴいなあ……。

わたし自身もだから好奇心を抱いだいたものには実践するようになっているけれど、お爺ちゃんに比べたら、まだまだよね。

惑星探査の実働だって、モモちゃんとリンちゃんに頼りきっているし。

「せやねえ？ 手先動かすのは効果的らしいやんねえ？」

「ボケ防止で基地を造ったワケじゃないわ！ 似非エセ関西弁娘！」

「だから、違ちがうねん！ ウチ 銀曆ぎんれきイアスナク弁べん やねん！」

いいなあ、上手い事キャラ立ちして……。

人氣が欲しかったら、こういうところ見倣みなわなきや！

マリー、ガンバ！

「ウイリス・ハウゼン、質問がある。この基地は、あのために？」

「そうじゃ」

「ふむ？ 以前は存在しなかった」

「オマエさんを送り出した後じゃよ。あの時は、基地建造も初期着手段階だったじゃ……土台さえ完成したらなかったわい」

「成程、合点がいった」

……うん？

「送り出した？」

織り込まれていた疑問を眼差まなざしに乘せて、小首コクンとクルちゃんを見つめる。

「何か？」

無垢なクルコクンが返って来た。

本家が返って来た。

「いえいえいえ！ さらりと言っていたけど！ クルちゃん、お爺ちゃんと関わっていたのツ？」

「そう。ただし、この基地が建造される以前まで。だから、先刻では初観測だった」

「初耳だよ！」

「介護してたねんな？」

「似非エセ関西弁娘——ーツ！」

モモちゃん、少し黙っていようか？

お爺ちゃんが暴発する前に黙っていようか？

「だけど、お爺ちゃん？ 何故、こんな基地を？」

「ワシは此処へ、とても重要な物を集めておるのじゃよ」

「重要な物？」

「オマエさん達も躍起に集めている代物——つまりへネクラナミコンじゃ」



「コレは超エネルギーを極限圧縮する事によって造り出された『超エネルギー結晶』なんじゃよ」

「超エネルギーって……ちゃんと〈物質〉として存在してるけれど？」

「それがヤツの恐るべきスゴさなのじゃ。高圧縮エネルギーが結晶として物質化する——さすがの創造力と言ったところか」

うん？

ヤツ？

それって『介在者がいる』って事よね？

その人が作り出したって事かしら？

だとしたら、スゴい天才……。

「お爺ちゃん？ 誰なの？ その人って？」

「人ではない」

「……はい？」

「そやつの名は……いや、チト発声が難しいな……ダイレクトに思念での探り合いじゃったからのう……かなり強引に人語発声するならばへクツクトウル——我々『人間』の尺度で観念を把握するなら〈邪神〉とでも呼ぶべき強大無比な超常存在じゃ」

「邪……邪神ッ？」

驚いた！

ともすれば、わたしの科学者人生さえも覆しかねないトンデモ発言だった！

だけど、証言者はお爺ちゃんだ。

現実主義観点に懸けて、そこに虚偽は無い——ボケけていない限りはだけど。

……あれ？

っていうか、お爺ちゃん？

さつきへアカシクレコードを全面否定してなかったっけ？  
眉唾オカルトって一蹴してなかったっけ？

その舌の根も乾かない内から〈邪神〉って……大丈夫？

「テキサスのニワトリやねんな？」

「何でじゃー！」

モモちゃん、とりあえず黙っておこうか？

「まあ、厳密には〈精神生命体〉や〈高次生命体〉とか呼ばれている非物質生命体じゃがな」

「あんな？ その『ニワトリの真実』って何？」

「ワシが訊きたいわ！」

「陽ノ咲モモカ、英語で『コケコッコ』と言ったワケではない」  
「せやの？」

モモちゃん、とりあえず黙っておこうか？

一気に緊迫感を根刮ぎにするのやめようか？

「さて、では順を追って説明するかのう。先刻も話した通り、ワシは偶発事故によって〈原初大宇宙〉へと漂着した。そこで恐るべきものと遭遇したのじゃ！」

「それが〈クックトウル〉？」

「うむ。ワシが『その場面』に遭遇したのは、たまたま偶然じやろうが……ヤツは自身のエネルギーを結晶化させた〈ネクラナミコン〉を力点りきてんと使って〈次元門〉を発生させておった。貪欲なアレは他次元に活動域を広げるべく〈フラクタルブレン〉を越えようとしておつたのじゃな。そこでワシは、ありつたけの高出力エネルギーを力場りきば基点となる〈ネクラナミコン〉にブチ込んで破壊——未遂のままに〈次元門〉を崩壊させてやったのじゃよ」

「ええッ？ それって心中行為もいところじゃない！」

「そうじゃが？」

平然と返してくるけど……トンでもない事よ！ それ！

あ……でも、だからか。

「それだったんだね？ お爺ちゃんが帰って来なかつた真相は……。お爺ちゃんは、人知れず〈宇宙秩序〉を守っていたんだ」

少しだけ誇らしく思えた……この人の血に在る事が。

とか感慨かんがいを噛み締めた直後！

「マリー・ハウゼン、それは違う。ウイリス・ハウゼンは、単に実験失敗のフラストレーションを発散したかっただけ」

「それな！」

八つ当たりだった。

未知の高次生命体相手に八つ当たりだった。

少しだけ気まずく思えた……この人の孫娘に在る事が。

「で……でも、お爺ちゃん？ よく無事で帰って来れたわね？」

「実際は永い事〈虚無の混沌〉を漂流し続けてたわい。脱出法を模索す

る以前に宇宙船はスクラップ寸前、エネルギー残量も尽きようとしておる。さすがのワシも、万事休すの匙投げじやった……。クソツ！  
クツクトウルーめ！」

それは自業自得じゃないかなあ？

八つ当たりで、ありつただけの高出力エネルギーを浪費したからじゃないかなあ？

「ところが、ある時コイツが現れた」と、慧眼の視線で指し示す。

うん？

え？ クルちゃん？

え？ え？

どういう事？

「それって、クルちゃんの宇宙航行艇も〈原初大宇宙〉へと漂着したつて事？」

「いいや。いつの間にやら船内にいた。侵入形跡も密航痕跡も無く唐突に現れたという事じゃよ。恰も〈瞬間移動〉でもしたかのようにな」

ホントにどういう事ツ？

「ワシは直感で悟った——コイツ、只者ではない……と」

うん、そうでしょうね。

話を聞いている限りは、そうでしょうね。

だって、クルちゃん自体が〈超常現象〉ですもの。

「クルちゃん、いままでは気にしていなかった……。ううん、気にしないようにしてきた。あなたとも信頼関係を築きたかったから……。だけど、この流れでは無視出来ない！ あなた、本当は何者なの？」

「私は——」

「あ！ クルちゃん、忍者やねんな？」

「……………そう」

絶対ウソだ！

「私は〈胡蝶流忍者〉とは知り合い。だから、多少は陰行術も行使可能で……」



乗った！

モモちゃんのマッドパスに乗った！

とことん利用する気だ！

「ま、そんな事は、どうでもいいわい」

良くないよツ？

お爺ちゃん、怪奇現象の当事者だよツ？

「とりあえず、この「クルロリ」によって「ネクラナミコン」他諸々の事を教えてもらったわけじゃな。でなければ、ワシとて超常現象の詳細など把握出来んわい。そして、こやつに取引を持ち掛けられたのじゃ——『次元宇宙に散在してしまった「ネクラナミコン」を回収し欲しい』とな。対価は  $0 \text{ f} \setminus 0 \text{ b}$  ゼロフラクタル ゼロフレンジイメンション 次元への帰還……悪くはない交換条件じゃ」

「だけど、エネルギーも無いような状況で、どういう手段で？」

「マリー・ハウゼン、それに関してはアナタの方が熟知しているはず「え？」

「つまり『特異点排斥の法則』」

「あ！ そうか！」

「一次元層分だけ「フラクタルブレイン」を転移——そこでまた暫く漂流し、やはりまた一次元層分だけ転移——その繰り返しで、現宇宙へと帰還したわけじゃな。それでも結構な年月が掛かった……こうして孫娘が成人しとるのだからのう？」

「だけど……『特異点排斥の法則』は受動的事象だから、クルちゃんが介入しなくても戻れたんじゃないかしら？」

「マリー・ハウゼン、この法則にはアナタが見落としている鉄則がある」

「鉄則？」

「そう。つまり「特異点自身のエネルギー残量がゼロの場合は発動しない」という事。おそらく次元宇宙そのものが「行動も起こせない無害な存在」と看過してしまうため」

「ええツ？ そうなの？」

「そう」と、クルコク。「だから、それを誘発する程度のエネルギー補

給を交換条件とした」

「そっか……この学説の立証性だけは確信はしていたけど、総て仮想シミュレーションだけだったからなあ」

「脳内構想と実践経験では、何処かに『決定的な穴』があるという好例……実践は大切」

「う……ん」

「この二人ふたりが示している」

「好き好んで次元放浪していたワケじゃないわいッ！」

「ウチかてイヤイヤ『乙女の奇跡！』してんねんッ！」

お爺ちゃんとモモちゃん、珍しく意気投合の抗議。

「だけど、当のクルちゃんは『何か』と言わんばかりに疑問符クルコクン。

「っていうか、モモちゃんイヤイヤだったのッ？」

「せっかく『女の子らしく可愛い美少女戦士仕様』にしてあげていたのに！」

「ガーン！」

「ったく……で、この惑星に着いてからは自然排斥現象——オマエの言う『特異点排斥の法則』は生じなくなった。という事は、この次元宇宙こそがワシの次元宇宙——それこそ  $0 \text{ f} \setminus 0 \text{ b}$  ゼロフラクタル ゼロブレンディメンション 次元」と察せたワケじゃな。さて、そうとなれば次にやるべき事は見えた。即ちへネクラナミコンの回収じゃ。ワシに木っ端微塵こばみじんと破壊されたへネクラナミコンは欠片となって次空を越えた……が、廃棄物と化したワケではない。相変わらずクックトウルの超エネルギーは結晶集束されているままじゃ。ともすれば総てを集めてしまえば、また本来の姿へと戻ってしまう。もしも、コレが誰かの手へと渡って作為的にへ次元門ディメンゲイトを開かれでもしたら……」

「……クックトウルが、次空を越えて現れる」

「左様」

苦々しい沈思。

あのお爺ちゃんが自尊を折ってまで認める超常存在ちやうじやう——それだけでも『凄まじさ』は伝わってくる。

未見であつてもゾツとした感覚を覚える。

わたしは緊迫の生唾を呑み込んだ。

まさに全宇宙を脅威に晒す大災厄……。

こんな戦慄、初めて体験する。

「テキサスからニワトリ来んのん？」

「だから、何でじゃー！」

と、直後、耳障りに鳴り響くサイレンが基地内を染め上げた！

非常事態警報だ！

喧騒を連れた赤灯明滅が焦燥と緊迫を否応なく煽る！

「やれやれ、騒がしいのう」

お爺ちゃんは動ぜずにメインモニターを切り替えた。

改めて映し出されたのはコバルトブルーの大海原。

おそらく此処の周辺……っていうか、基地の真ん前。

でなければ非常事態警報なんて鳴らないもの。

警戒対象は上空からゆつくりと降下中！

白雲を突き抜けて来たそれは、大きな波飛沫を噴き上げて海原へと

着陸する！

巨大ロボだった！

全高八〇メートルはあろうかという巨大ロボットだった！

大角を生やした髑髏型頭部に、胸部一杯の髑髏意匠！

その巨体故に、荒れる潮は腿部までしか届かない！

あれ？ 何だろ？

初めて見るのに、初見の感じがしない？

はて？

「ドクROIガーはんやー！」

「ふむ、間違いない」

モモちゃんの驚愕とクルちゃんの確定。

ああ、だからか。

いつも報告書に書かれているものね？

リンちゃんの書き方だと『ドク郎が来たから、ブツ飛ばした。おし

まい！』って毎回簡潔に書かれているけれど……。

そのドク郎……じゃなくて、ドクロイガーはズシンズシンと鈍重な足取りで、この基地へと向き直った。

そして、正視に見据えると、徐おもむろに高笑う。

『フハハハハハッ！ 宇宙の帝王になりたい？ じゃあ、いつなるの？ ……ッすぐでしょ！ ドクロイガー見ぎ——』「帰って来たか」『——あ、博士。ただいま』

切られた。

気迫に溜めまくった口上くちじょうが、悄悄しおしおと「ただいま」に鎮まった。

……っというか、うん？

「少し待つとれ。いまハッチを開けてやる」

『は〜い』

「消毒はせえよ？ 何処の惑星で、どんなウイルス付けて来ておるか

判らんからの？」

『うがい・手洗い、毎回やってます！』

「結構」

『博士？ おやつは？』

「今日はパンケーキじゃ」

『やったア！ 明日は逆転三墨打だア★』

何？ この関係？

お母さんとヤンチャ小学生みたいなやり取りは？

「お爺さん、知り合いなん？」

醒さめぬ動揺のままに、モモちゃんが疑問を代弁。

「知り合いも何も、あのへドクロイガーを造ったのはワシじゃ  
うん？」

さざらりと返ってきた意外な違和感に、わたしは思わず再確認。

「お爺ちゃん？ いま何て？」

「だから、アイツを造ったのはワシじゃ」

「えええええ〜ッ？」

ここは声を揃えて驚いたわ！

モモちゃんとわたし、声を揃えて驚いた！

その様を見たクルちゃんは、平常心のままにサムズアップクルコク

ン。

「やぶららいぎっふっ。」

暫くして、浅黒い肌の女の子が入室して来た。

「ルンタツタ★ パ・ン・ケーキ ♪ パ・ン・ケーキ ♪

パパもコレならオツケーさ★」と、嬉々に浮き足立ったスキップで。

モモちゃん達ぐらいの年齢かな？

肌露出が高いビキニ仕様の（PHW）を着用しているけど、その反面、各所には制御メカが装飾めいた自己主張に付いている。

とりわけ「髑髏モチーフ」のデイトールは異色よね？

「手は洗ったか？」

「あ、博士！ もちろ……って、あああああ……ッ？ イルカ娘！」

モモちゃんを見つけるなりビツクリしていた。

当のモモちゃんはキョトンと返す。

「どちらさん？」

「ワシじゃ！ ドクロイガーじゃ！」

「「うん？」」

疑問符小首コクン。

わたしとモモちゃんとクルちゃん、全員揃って小首コクン。

「だくからー！ ワシは（ドクロイガー）じゃ！」

「ええええええ……ッ？」

理解したと同時に、わたしとモモちゃんは驚愕を叫んでいた！

「やぶららいぎっふっ。」

クルちゃん？

それ、そろそろ読者も飽きたと思うの……。

「ウチ、てつきり（ドクロイガー）はんは自律型ロボットかと思うてた！」

「そうじゃ！ この形態は（プリテンドフォーム）じゃ！」

「プリペイドフォーム？」

「プリテンドフォームツツ！ 何じゃ！ その「使いきり農地」って！」

「あ、なるほどね」「ふむ、納得がいった」

「何や？ マリーとクルちゃんは知つとんの？」

「その『プリテンド』っていうのは『成り済ます』とか『擬態』の意味なの。つまり、この形態は『人間に似せた仮想ボディ』ってところね？」

「うむ、その通りじゃ！ この形態は生体生成された転送用ボディじゃー！」

「どゆ事？」

「うくん？ モモちゃんに解るように説明するなら『分身体を使った人間変身』ってトコかな？ あくまでも本体はへ人格プログラムだから、入れ物であるボディさえあれば姿形は転送でどうにかなっちゃうのよ」

「せやけど『女の子』やん？」

「プログラムに『性別』の定義など意味が無いわ！ っていうか、そもそもワシは『男』などと一言も言うておらんぞ！」

「せやたつけ？」と、モモちゃんはパモカを操作して、何やら検索し始めた。

そして——「あ、あった！」——見つけたデータを、みんなのパモカにシェア。

え……つと、何々？

『Gモモ：ウチと惑星テネンス Fractal、7？』

『なな泣いてないよツ？ フハハハハッ！ この『宇宙の帝王』になってみたい男』が涙など見せるか！ そのような懦弱さは、とうにブラックホールへ投げ捨てたわ！ 笑止！ 笑止笑止笑止ッ！』

「言うてたよ？」

「言葉のアヤでした。ごめんなさい……」

モモちゃん！ 悪意無く追い詰めちゃダメ！

「ふむ？ 御主ら、顔見知りか？」

「いや、まあ……何というか……その……」

うん？

「気まずそうに濁したわね？」

「ウイリス・ハウゼン……その経緯については、私から説明する」

「ああ！ やめて！ 言わないで！」

「クルちゃんが申し出た途端とたんに、今度は血相変えたわね。

「なあなあ？ 言うてたよ？」

「状況読めえええ！ イルカ娘えええ——ッ！」

「モモちゃん！ これ以上、追い詰めちゃダメ！」

「一番ツライの、吐血号泣の作者さんだから！」

「……なるほどのう？」

「クルちゃんから説明を受け、お爺ちゃんは静かに納得。

「流れを整理すると、こういう事よね？ 最初の頃、お爺ちゃんはクルちゃんへ「ネクラナミコン」を預けて次元探索を一任いちにん……その為ために専用宇宙航行艇コスモクルーザーへドフィオン」まで授けた——クルちゃん出立後、今度は独自に次元探索を進めるべく自律型ロボット「ドクロイガー」を造り上げ、同様に「ネクラナミコン」を授けて長期の探索指令に送り出した——その両者が鉢合わせして「ドクロイガー」がクルちゃんの「ネクラナミコン」を奪おうと強襲——現状に至る」

「そして、その貴重な「ネクラナミコン」を失った……とな」

「お爺ちゃんのジロリとした睨め付けねに、褐色美少女が「うっ！」と気まずくたじろぐ。

「あの時は、ひどい目に遭った」というクルちゃんの追い討ちに、更に「ううっ！」とたじろぐ。

「さて……どういう事かろう？ ドクロイガー？」

「待って博士！ 話を聞いて！ これは——」

「ポチツとな」

「——ギヤアアアアアア——ッ！」

「御仕置きされた！」

「開口かいこう始めたのに、言い訳聞かずに御仕置きされた！」

「お爺ちゃんがパモカ操作すると、ドローンが呼び出されてシビビンいっせいほうでんの「一斉放電！」

「う……………ううう……………」

「さて……………どういう事かろう？ ドクロイガー？」  
リセットした！

何事も無かったかのように仕切り直した！  
プスプスと焦げ倒れた美少女を前に！







九枚目。

特別サービスで三枚追加。

孫娘<sup>マリイ</sup>、引いてます……。

「さて、説明してもらおうか？ ドクロイガー？」

「う……うう……だ……だ……だって、果てなき宇宙探索の旅に送り出されて……友は疎<sup>おろ</sup>か乗組員<sup>クルー</sup>さえいない独り旅……孤独<sup>ひと</sup>で辛<sup>つら</sup>くて虚<sup>むな</sup>しくて……」

ああ、そうか。

なまじつか〃人格〃を与えちゃったものね。

これが単なるへプログラムなら、不平不満も虚無感も覚えなかつただろうけど……。

そう考えると、わたし達へ科学者への在り方にも一石<sup>いっせき</sup>を投じる問題よね。

「フン！ だから、本体にへ髑髏<sup>ドクロ</sup>への意匠を据えてやったじやろうが！

一際目立つように！」

「要らないよツ？」

「ソイツをひけらかせば、否応なくオマエは目立つ！ 好奇対象として行く先々で人気者ウハウハじゃ！」

「最初に見るなり、みんな逃げたよツツ？」

「ちなみに、アレは絶対に外せん！」

「それ、もうへ呪いへだよツツ？」

お爺ちゃん、発想が……。

「そんな折、ワシはこんなのを見つけてましたとき……」

そう言つてパモカヘシエア転送されたのは、電子漫画のデータ。

あ、これつてユニバース大ヒットの冒険漫画『ニャンピース』だわ。熱血少年主人公が伝説のオーパーツへニャンピースを求めて、仲間達と大宇宙を航海するスペースオペラ——漫画に明るくないわたしでも知っている。

そして、ドクロイガーが示したページでは、主人公がこう叫んでいた——「宇宙の王者にオレはなる！」

うん？ まさか？





そのまま水没——って「うん?」

「どないしてん? マリー?」

「いえ……いまの何処かで見たような気が?」

「隕石ちや違うの?」

「うん? 隕石……ではないかな? 高速落下のいっしゅん一瞬だったから

「黒い影」にしか見えなかったけれど、不鮮明ながらに見覚えもあったのよね。もつと別な……こう……何だっけ?」

記憶を手繰たぐっていた数秒後、その正体が海面へと顔を出した!

負けん気任せに吠える巨大美少女が!

「ツプハア! ……の! このアタシを叩き落とすとは、いい度胸してんじやないのよ!」

「リンちゃんや!」

「成程。確かにGリンが宇宙圏で交戦していたのを忘れていた」

「ああ、道理で肌感覚に見覚えが生じたワケね」

「言うてる場合やあらへん!」

Gリンちゃんが睨み据える先には、上空で浮遊待機するサメ〈鮫型宇宙航行艇〉——その鼻頭へと立ちさげす蔑む謎の美少女!

確か「ニヨロロトテップ」とか名乗っていた子よね?

モモちゃん達の報告に書かれていた……。

「天条リン、しつこい女だ」

「アタシを「重い女」みたいに言うな! 腹立つ! だいたいアンタ

! そのサメ〈鮫型宇宙航行艇〉は、どうした!」

「これまでの勝敗——この私が、オマエ達のような下等存在に敗北を喫するなどラフラス・コンプレックス〈確定未来軸〉に有り得ぬ流れであった。その敗因を鑑みた結果、オマエ達に在って、私には無い要素に気がついた。故に、私も所有した——それだけの事」

それはいいけど、どうやって造ったんだらう? あの子?

素人が思い立って造れる代物シロモノじゃないけどなあ?

仮に設計技能に秀でていても、それを建造できる財力は必要となる。  
逆に財力が有り余っていても、それを設計できる頭脳が無ければガ

ラクタの増産。

しかも、わたし達の〈宇宙航行艇〉と同コンセプトのヤツ——つまりは〈超宇宙航行艇〉なんだから、一見に分析看破できるほど安くはない。

少なくとも基礎設計者であるウイリスお爺ちゃんか、その頭脳を受け継いだわたしでしか把握できないブラックボックス。

銀邦政府ですら構造を掌握しきれないっていうのには？

ふむむ？ 不思議……。

「ハントツ！ それがへミヴィークやへイザーナと同じ  
〈超宇宙航行艇〉って？」

「これもまた、かつてオマエが示唆していた〈可能性〉とやうだ」

「バカかアンタ！ 負けるとすぐさま『少女の容姿』を得て……今度は〈超宇宙航行艇〉を所有して……アンタがやってるのは『友達のオモチャを羨んで』『ママ〜！ 買って買ってえ〜！』言ってる駄々っ子  
”と同じだツツーの！”

「条件さえ対等であれば、オマエ如きに敗北する道理は無い」

「あんだと！」

プチツと沸点キレる音が聞こえた……かと思えた。幻聴で。

そして、Gリンちゃんへリウムブースターで上空浮上。

「このアタシに勝てると思ってるんじゃないわよ！ 百億光年早いわ！

アタシは『リン』！ 『天条リン』なんだからね！」

「相変わらずの根拠無き驕り、コレを見ても貫けるか？」

「何だ！ コレって！」

「G フォルム……メタモルアップ！」

「はああーッ？」「何やてツ？」「ふむ？」「ふわあ？ 驚いたあ……」

高々と垂直飛行する鮫型宇宙航行艇！

白雲漂う青々とした大空に、プリズム光彩の大きな輪が多数発生した！

間違いなくへオルゴネーションリングだわ！

それらが連なるリングトンネルを潜ると、ニョロトテップの肢体はみるみる巨大化！





便乗して逃げようとしたけれど、お爺ちゃんの加虐心は乗車拒否に許さなかった。

モモちゃんは彼女なりの一顧を刻むと、テクテクとウイリスお爺ちゃんの前へと歩み寄る。

「この子をヨロしゅう頼みます」

頭下げられたッ！

託児所に預けるみたいにな、わたしの事を御願いされたッ！

「ウチが帰ってくるまで、いい子にしとるんよ？」

釘刺されたッ！

子供預けて仕事へ出るお母さんみたいになッ！

モモちゃんは出撃した。

イザーナを呼び寄せて、すぐさまへG<sup>ギャラクシー</sup> フォルム・メタモルアップへした。

クルちゃんもへドファイオンへ一緒に出撃。

取り残されたわたしは、とりあえずへ仮想電子ディスプレイで戦況を見守る事にした。

お爺ちゃんの傍らでは、ドクちゃんの折檻継続中。

カフェオレを友に眺めれば、映し出されるのは教え子達の激戦奮闘。

「巨大化か」関心薄い態度で珈琲を啜るお爺ちゃん。「確かへG<sup>ギャラクシー</sup> フォルム」とか言うておったが……おそらくへOTF<sup>コスモマター</sup>じやな。宇宙量子へオルゴンを分子レベルで吸収融合し、質量変換した——といった感じかのう？」

「お爺ちゃん、よく解ったね？ 初めて見たのに？」

「まあな。つまりは『質量保存の法則』を強引に捻曲げたというワケさな」クッキーをポリポリしながら、取り立てた興味は無さそうにへG少女達の攻防を眺める。「オマエか？ マリー？」

「うん、わたしの独学理論の応用。だけど基礎的には、お爺ちゃんがへイザーナとへミヴィークの設計図に残してくれたへ小型ハドロン衝突型加速器の高出力とへ光子コンバーターのエネルギータン換

システム理論を併用したのよ？ 宇宙規模適正尺度を考慮すれば、巨体の方が利便性が高いから。惑星探索にしても、不測事態の対応にしろても」

「それだけか？」

「え？」

「単にその理由だけならば “人間を巨大化させる必要” も無かろう。ワシの〈ドクロイガー〉のような巨大ロボットでも造れば充分じゃ」「それな！」

「ポチつとな」

「ギャアアアアアアア！」

ドクちゃん…… 『雉も鳴かずば射たれまい』 って知ってる？

でも、正直驚いた。

お爺ちゃんが超科学知識に精通しているのは知っている。だけど、まさか、こんな観察眼まで卓越していたなんて。

「例えば……例えばじゃ。主体と置いていたものが副次的付随の場合もある。つまり “巨大化” ではなく別目的を主体として、結果ながらに “巨大化” が付いてきた——といったケースなどな」

「うう……」

鋭い値踏みが刺さる。

痛いよう。

「何よりも、そんなシステムを成立させるとするというのは……あの子達は、アレという事じやろうて」

「ち……違うの！ そうだけど、わたしはあの子達を実験台にしたワケじゃなくて！」

琴線を掻き乱されて、わたしはガタンと席を立っていた！

分かっている！

覚悟していた！

だけど、痛い……心が！

あの子達を想えば！

お爺ちゃんは、わたしの興奮を暫し観察した後——「ま、オマエの事だ。悪用目的ではあるまいよ——わざとらしく弛緩したテンション

ンに纏める。

「訊かないの？」

「聞かせたいのか？」

わたしは淡い苦笑に首を振る。

同時に、染み入って来ていた……不器用な愛情が。

「ああ、じゃが、ひとつだけ——オマエにとって、あの子達は何じゃ？」

「え？」

予想外の質問だった。

まさか此処に来て『科学論』じゃなく『対象のレゾンデーターを分析反映させたアイデンティティの再認識考察』とは。

到底〈科学者〉らしくない。

それは『哲学』だ。

……ううん、違うな。

そんなのじゃない。

だから、わたしは微笑んでいた。

心にそよぐ爽風のままに。

「家族だよ」

「家族？」

「そう……わたしの大切な家族」

「ふむ？」

お爺ちゃんはそれ以上追求せず、浸る苦味に軽く口角を上げる。

空気の仕切り直しにカフェオレを一口含めば、両手に包む温もりが

癒しに満たしてくれた。

モモちゃん達は、今日も精一杯頑張ってくれている。

「ニヨロちゃん！ ウチ、言うたよね！ イジメたらアカン！ みんな仲良うせなアカン！」

「……幼稚な」

ウチの突撃を、子供の駄々とはかりに軽くないなすニヨロちゃん。ひらりと体捌きに避<sup>か</sup>わすと、擦れ違い様に背中に手刀の一撃<sup>いちげき</sup>！

「ギョーン！」

不様につんのめり飛ばされながらも、ヘリウムブースターで空中を踏み留まった！

「天条リンならいざ知らず、オマエ程度では相手にもならん。所詮は巨大化した子供だ」

「ふぐう……」

その通りや。

その通りやけど……何か悔しい。

「アタシのモモに何すんだー……ツッ！」

憤<sup>ふんが</sup>慨<sup>がい</sup>任せにGリンちゃんの特攻！

渾<sup>こんしん</sup>身に繰り出されるストレートパンチ！

これも同様に避<sup>か</sup>わされ……と思ったら、刹那に蹴り飛ばしの追撃を織り込んだ！

さすがGリンちゃん！

運動神経も鋭いけど、根本的に抜け目が無い！

「クッ？」

危なつかしくも顎<sup>あご</sup>先を掠<sup>さら</sup>めながら、Gニヨロちゃんはバック転仰け反りに間合いを開いた！

すぐさま斜め後方からヘドフィオン<sup>ヘドフィオン</sup>の牽制射撃！

せやけど、これも後方跳躍を重ねて回避や！

「やはり私が最<sup>も</sup>も警戒すべき相手は、オマエのようだな……天条リン！」



何で？

座れ言うたの、リンちゃんやんな？

「クッククック……まあ、いい。どうやらへネクラナミコンは揃ったようだからな」

「はあ？ 何処に……って、まさか！ この惑星へ誘き寄せたのは、ア  
ンタかッ？」

「何の事だ？」

「とぼけんな！ マリーにキャッチメール送ってへネクラナミコンを持って来させたでしょ！」

「それは、私ではない……が、その者には感謝せねばなるまい。こうして、この場にへネクラナミコンは揃ったのだからな！ 労せず！」

「ハア……」と、Gリンちゃんは軽く呆れた溜め息。「御生憎様、揃っちゃいないッの！」

「いいや？」

Gニヨロちゃんは、頭上に警戒旋回しているドファイオンを眺めた。

「アレに二個。そして——」

そして、今度は眼下の巨大目を見据える。

「——あそこに三個」

「だくかくら！ 揃ってないッの！ まだ五個！ へネクラナミコンは、全部で六個でしょーが！ 算数も出来ないのかアンタ？」

「だから、揃ったと言う。残るひとつは……私自身なのだからな！」

「なッ？」「ふええ？」

さすがに面喰らった！

何や？

ニヨロちゃんへネクラナミコンやったん？  
「そうか！ 宇宙クラゲに少女形態——思うがままに擬態出来たのは、コイツ自身がへネクラナミコンだったから！」

「せやったら、あれやんね？ ニヨロちゃんはへ大樹神さまやへ濁酒徳利」と姉妹って事やんね？」

「……それは言ってるな」

何で？



ウチ、信用されてへん！

ふぐう！

「つたく、何が目的かは知らないけど……とりあえず追うわよ！ モ

モ！ クル！」

「う……うん！」

『了解した』

ウチとGリンちゃんは、すぐさま〈Gフォルム〉を解除すると、傍かたわらに再形成された〈エイザーナ〉〈ミヴィーク〉へと乗り込む！

この間、僅わずか数秒や。

追跡するなら〈宇宙航行艇コスモクルーザー〉の方が早いねん。

そして、三機の魚影は垂直に飛び立ち、大気圏を後にした。

惑星ウイズエルの近宙域——。

そこにGニョロちゃんはいた。

蒼いエネルギー奔流ほんりゅうを帯びた〈ネクラナミコン〉が、彼女の周りに円陣と従つとる。

「イア……イア……イア……」

瞑想するかのように、意味不明な単語を呟き続けるGニョロちゃん。  
瞼まぶたを綴とじて鎮まり囁ささやく所作は、まるで〈呪文詠唱の儀式〉でもしと

るようやった。

「させるかってのー！」

高速に強襲する〈ミヴィーク〉からヘリウム砲が発射される！

せやけど、拡散に弾かれた！

「ハア？」

予想外の展開に間抜けた声を洩らすリンちゃん。

バリアや！

まるでGニョロちゃんの邪魔はさせないとばかりに〈ネクラナミコン〉がエネルギーバリアを張った！

「結界つてワケか！ そんなら……Gフォルム・メタモルアップ！

Gリン！」



リンちゃんのメタモルアップ！

せやねん。

攻撃力特化に重きを置くならへGフォルムやねん。

「んにやるー！」

ヘリウムブースターの高速突進でストレートパンチを繰り出す！

またバリアや！

Gリンちゃんの拳が、エネルギー障壁の圧に押し止められる！

「ク……ウツ？」

それでも貫こうと踏ん張るGリンちゃん！

意地や！

リンちゃんの負けん気や！

「Gフォルム・メタモルアップ！ Gモモ！」

すぐさまウチも！

「タアアアア……ッ！」

Gリンちゃんの横からパンチを叩き込む！

パワー戦ではウチの方が、Gリンちゃんより向いてんねんよ？

『援護する』

クルちゃんのヘドファイオンも、ヒット&ウェイの砲撃に加勢！

せやけど……総て遮られる！

針の穴ひとつ貫通出来へん！

「イア……イア……イア……イア……イア……イア……イア……イア……」

ニョロちゃんの詠唱は続いとる。

そして！

「イア！ イア！ オオオオ……ッ！」

極まったかの如く雄叫んだ！

……つていうか、Gニョロちゃん？

そのまま「イチローさんの牧場」でも行くん？

そんな思うた直後、眼前の宙域が歪みに口を開いた！

「ブラックホールッ？」

『Gリン、それは違う。アレは〈次元門〉——即ち多次元宇宙と貫通したワームホールになる』

